

渋江遺跡

第4次発掘調査報告書

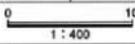
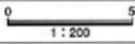
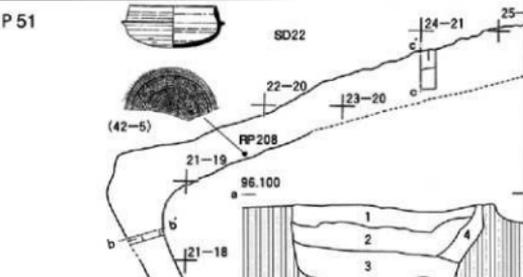
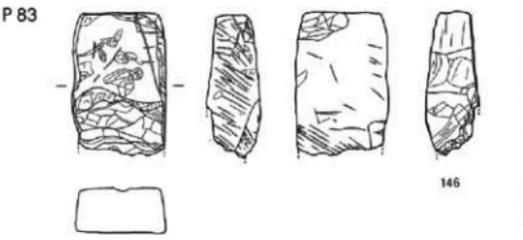
2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

正 誤 表

山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第106集

渋江遺跡第4次発掘調査報告書

頁	行 等	誤	正
98	145・素材	凝灰岩	凝灰岩質砂岩
113	中世・特記事項	…、礎板作業が…	…、礎板地業が…
5・6	スケール		
6	拡大図スケール		
51	断面スケール		
P 51			
P 83			

しぶ え
渋 江 遺 跡

第 4 次発掘調査報告書

平成14年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



渋江遺跡周辺航空写真（平成4年当時）





ST659覆土堆積前状況（東から）



SH108人骨出土状況（南から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、渋江遺跡の調査結果をまとめたものです。

渋江遺跡は、山形市北西部渋江地区にあり、立谷川扇状地の扇端部に位置しています。すぐ南には白川（馬見ヶ崎川）が西流し、北側には三条ノ目・灰塚の集落が広がっています。

この度、特定地方道山形羽入線改築事業に伴い、工事に先立ち渋江遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代中期を中心とする集落跡をはじめ中世の建物跡や総数170基ほどの近世・近代墓が発見され、その内部からは副葬品が発見されました。近年、近世考古学として江戸時代の発掘調査が注目されるようになりましたが、特に近世以降の埋葬儀礼を考える上で大変貴重な資料であると言えます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木村 宰

例 言

- 1 本書は、特定道路山形羽入線道路改築事業に係る「洪江遺跡第4次」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名	洪江遺跡	県遺跡番号	160
所 在 地	山形県山形市大字洪江字田中・寺小路		
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
調 査 期 間	平成13年4月1日～平成14年3月31日		
現 地 調 査	平成13年4月16日～平成13年9月14日		
調 査 担 当 者	調 査 第 二 課 長	尾 形 與 典	
	主任調査研究員	伊 藤 邦 弘	
	調 査 研 究 員	押 切 智 紀 (調査主任)	
	調 査 員	多 田 和 弘	
	副 調 査 員	西 田 明 日 香	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県村山総合支庁建設部道路課、山形市教育委員会、村山教育事務所、佐藤工業株式会社、株式会社荒井組、真福寺など関係機関の協力を得た。また、阿子高功、植松芳平、大橋康二、國井修、阪田育功、須藤英之、関根達人、田中則和、平田禎文、藤沢敦、堀江格、水澤幸一の各氏に御指導、御教示を頂いた。
- 5 本書の作成・執筆は、押切智紀、多田和弘、西田明日香が担当した。編集は佐竹弘嗣、須賀井新人が担当し、尾形與典が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	株式会社シン技術コンサルタント
理化学試料分析	バリノ・サーヴェイ株式会社
木製品の保存処理	株式会社吉田生物研究所
航空写真	株式会社バスコ
- 7 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

ST…堅穴住居跡	SB…掘立柱建物跡	SH…墓
SD…溝跡	SK…土坑	SE…井戸跡
SP…ピット	EL…カマド・炉跡	EP…遺構内柱穴
EK…遺構内土坑	EB…掘立柱	RP…登録土器・土製品
RQ…登録石製品	RM…登録金属製品	RW…登録木製品
P…土器	S…石	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺構概要図・遺構配置図・遺構平面図中の方位は磁北を示している。グリッドの南北軸は、 $N-40^{\circ}50'-W$ を測る。
- (2) 遺構実測図は1/20～1/400他の縮尺で採録し、各々スケールを付した。
- (3) 遺構実測図の中でカマド跡のない住居でも、割付けの関係で北壁が上にならない場合がある。
- (4) 遺構実測図、土層断面図中のスクリーントーンについては次のように表示した。
(): 炭化物、(): 焼土。なお上下面の焼土・炭化物が重なった場合は、特に別のスクリーントーンで示してある。
- (5) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3としたが、一部任意の縮尺とした。なお、実測図・断面図は、須恵器はベタ塗り、土師器・陶磁器等は白抜きで表わした。
- (6) 遺物実測図中の()は黒漆、()は朱漆を示す。
- (7) 遺物計測中の計測値の()は、復元による推定値または現存値を示している。
- (8) 本文中で遺物を扱う場合、挿図番号「第42図1番」を「42-1」と省略している。
- (9) 遺物図版については、任意の縮尺とした。
- (10) 遺物番号は、挿図・付表・図版ともに共通とした。
- (11) 土層断面図中の色調の記載は、1997年度版の農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 立地と環境	
地理的・歴史的環境	2
III 遺跡の概要	
1 遺跡の層序	4
2 遺構と遺物の分布	4
IV 遺構	
1 竪穴住居跡	9
2 掘立柱建物跡	48
3 溝跡	48
4 墓坑	52
5 井戸跡・土坑	65
V 遺物	
1 須恵器	67
2 土師器	67
3 陶磁器	75
4 その他の遺物	82
VI まとめ	107
報告書抄録	113
付編	巻末
「渋江遺跡の自然科学分析」	

表

表 1	豎穴住居跡觀察表(1)	10
表 2	豎穴住居跡觀察表(2)	11
表 3	E L 觀察表	11
表 4	墓坑觀察表(1)	61
表 5	墓坑觀察表(2)	62
表 6	墓坑觀察表(3)	63
表 7	出土土器觀察表(1)	94
表 8	出土土器觀察表(2)	95
表 9	出土土器觀察表(3)	96
表 10	出土陶磁器觀察表	97
表 11	出土石器・石製品・土製品・金屬製品・木製品觀察表	98
表 12	出土錢貨計測表(1)	99
表 13	出土錢貨計測表(2)	100
表 14	出土錢貨計測表(3)	101
表 15	出土錢貨計測表(4)	102
表 16	出土錢貨計測表(5)	103
表 17	出土錢貨計測表(6)	104
表 18	出土錢貨計測表(7)	105
表 19	出土錢貨計測表(8)	106
表 20	類型別土器出土狀況	109

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第33図 SB181・479	49
第2図 調査区概要図	3	第34図 SB581・600	50
第3図 渋江遺跡周辺字限図	3	第35図 SD22・87	51
第4図 遺構配置図(古墳時代その他)・ 基本層序	5	第36図 A～C区墓坑	53
第5図 遺構配置図(中世・近世・近代) ..	7	第37図 D区墓坑(1)	54
第6図 竪穴住居跡相関図	12	第38図 D区墓坑(2)	56
第7図 ST4・5・2・3	13	第39図 D区墓坑(3)	57
第8図 ST1・95・134	14	第40図 D区墓坑(4)	60
第9図 ST61	15	第41図 井戸跡・土坑	66
第10図 ST120・288・289・290・330 ..	18	第42図 出土遺物(1)	68
第11図 ST38・495・83・296	19	第43図 出土遺物(2)	69
第12図 ST146・295	20	第44図 出土遺物(3)	70
第13図 ST306・307	21	第45図 出土遺物(4)	71
第14図 ST105・891・369・474	25	第46図 出土遺物(5)	72
第15図 ST351・352・349・473・376 ..	26	第47図 出土遺物(6)	73
第16図 ST345・346・472・360・364 ..	27	第48図 出土遺物(7)	76
第17図 ST367・373・374	28	第49図 出土遺物(8)	77
第18図 ST480・471・490・475	29	第50図 出土遺物(9)	78
第19図 ST365・366・381・383	30	第51図 出土遺物(10)	79
第20図 ST368・382	33	第52図 出土遺物(11)	80
第21図 ST375・379	34	第53図 出土遺物(12)	81
第22図 ST385・378・488	35	第54図 出土遺物(13)	83
第23図 ST445・887	36	第55図 出土遺物(14)	84
第24図 ST119・492	37	第56図 出土遺物(15)	85
第25図 ST686・384	38	第57図 出土遺物(16)	88
第26図 ST684・727	41	第58図 出土遺物(17)	89
第27図 ST814・776・777	42	第59図 出土遺物(18)	90
第28図 ST544・545・708・608・619 ..	43	第60図 出土遺物(19)	91
第29図 ST659・816・820	44	第61図 出土遺物(20)	92
第30図 ST832	45	第62図 出土遺物(21)	93
第31図 ST747・748・615	46	第63図 土器分類図	108
第32図 ST664・789・745	47	第64図 墓坑相関図	110

図 版

- 巻頭図版 1 渋江遺跡周辺航空写真
巻頭図版 2 デジタルモザイク写真
巻頭図版 3 ST659覆土堆積前状況
巻頭図版 4 SH108人骨出土状況
- 図版 1 調査風景
図版 2 D区東壁基本層序他
図版 3 ST 5 EL断面他
図版 4 ST 1 断面他
図版 5 ST61遺物出土状況他
図版 6 ST120完掘状況他
図版 7 ST307断面他
図版 8 C区完掘状況他
図版 9 ST349遺物出土状況他
図版10 ST367遺物出土状況他
図版11 ST360覆土堆積前状況他
図版12 ST381遺物出土状況他
図版13 ST385覆土堆積前状況他
図版14 ST378完掘状況他
図版15 ST445覆土堆積前状況他
図版16 ST471・490完掘状況他
図版17 D区北側下面完掘状況他
図版18 D区全景他
図版19 ST776完掘状況他
図版20 ST659断面他
図版21 ST664遺物出土状況他
図版22 ST832EL周辺遺物出土状況他
図版23 SB181完掘状況他
図版24 SB581・600完掘状況他
図版25 SD22断面他
図版26 SH46木棺出土状況他
図版27 SH50木棺出土状況他
図版28 SH96木棺出土状況他
図版29 SH304木棺出土状況他
図版30 SH724木棺出土状況他
図版31 SH752木棺出土状況他
図版32 SH771木棺出土状況他
- 図版33 SH794木棺展開状況他
図版34 SH806木棺出土状況他
図版35 SH815木棺出土状況他
図版36 SH834木棺出土状況他
図版37 SH842木棺出土状況他
図版38 SH851木棺出土状況他
図版39 SH869木棺出土状況他
図版40 SH881木棺出土状況他
図版41 SE80完掘状況他
図版42 出土遺物(1)
図版43 出土遺物(2)
図版44 出土遺物(3)
図版45 出土遺物(4)
図版46 出土遺物(5)
図版47 出土遺物(6)
図版48 出土遺物(7)
図版49 出土遺物(8)
図版50 出土遺物(9)
図版51 出土遺物(10)
図版52 出土遺物(11)
図版53 出土遺物(12)
図版54 出土遺物(13)
図版55 出土遺物(14)
図版56 出土遺物(15)
図版57 出土遺物(16)
図版58 出土遺物(17)
図版59 出土遺物(18)
図版60 出土遺物(19)
図版61 出土遺物(20)
図版62 出土遺物(21)
図版63 出土遺物(22)
図版64 出土遺物(23)
図版65 出土遺物(24)
図版66 出土遺物(25)
図版67 出土遺物(26)
図版68 出土遺物(27)

I 調査の経過

1 調査に至る経過

渋江遺跡は、山形市の北西部明治地区に位置し、昭和53年県教育委員会発行の「山形県遺跡地図」には、No.160として登録されている。

平成11年6月に県教育庁文化財課が東北中央道と特定道路山形羽入線の事業区域内にかかる地域の試掘調査を行い、古墳時代の堅穴住居跡、土坑、溝跡を検出した。また、平成12年7月には特定道路山形羽入線の事業区域内にかかる地域の試掘調査を行い、古墳時代の堅穴状の遺構、土坑、近世墓などが確認されている。この結果を受けて、この部分については工事の実施にあたり遺跡の保存協議と文化財保護法の手続きが必要とされ、協議を経て発掘調査を実施することになった。また、平成12年12月に当該特定道路にアクセスする市道の歩道部分を文化財課が立会調査を行い、古墳時代の堅穴住居跡1棟、近世墓30基、土坑・溝跡等を調査している。当センターにおいても隣接する東北中央道にかかる発掘調査を平成11年・12年（第2・3次調査）に実施しており、古墳時代の集落跡を確認している。

なお、本線部分と南側歩道については工事による掘り下げにより遺跡が破壊されるため、記録による保存を目的とした発掘調査を行うこととされた。北側の歩道部分については盛土で整地されることで遺跡が守られるため現状保存されることになった。

2 調査の方法と経過

調査は、平成13年4月16日に始まり9月14日までの実質100日間行った。文化層が2面あることから調査対象面積は上下面で8,000平方mである。

便宜上、調査区を工事区分と引渡し時期から4区に分けている。市道千手堂線の歩道・下水道部分をA区、市道本線部分をB区、特定道路本線で市道を挟んで北側をC区、南側で寺院と隣接する区域をD区とした。A区とB区については6月20日に終了後引渡し、C区については7月24日に終了した。D区は市道工事の運搬路としたため他の区域とは別に6月21日から重機による掘削を行い、運搬路をD区において北から南に切り回しながら調査を進行した。

調査工程としてA・B区を優先的に調査し、面整理・遺構検出・遺構精査などの作業にあたった。順次C区そしてD区の方へ調査を進め、それぞれの区の完掘後に4回の空中撮影による写真実測を行った。

調査区を覆う座標は、平成11年度から12年度まで行われた東北中央道分の発掘調査の座標を東側に延長して、5m四方の方眼（グリッド）を設定した。東西軸（X軸）は、西から東に16～31まで、南北軸（Y軸）は南から北に6～37まで付番している。なおX-Y軸を「18-30」のように呼称した。方眼の南北軸は、N-40° 50'-Eを測る。8月31日に関係者を含め45名ほどの市民の参加を得て、現地説明会を開催し、9月14日に現場事務所の撤収を行い終了した。

II 立地と環境

地理的・歴史的環境

洪江遺跡は山形市北西部、明治地区の大字洪江字田中・寺小路に位置している。付近は南に白川（馬見ヶ崎川）が流れ、北は三条ノ目や灰塚などの集落が広がり、立谷川が流れている。そして東南方向には山形市街から雁戸・蔵王・龍山の山々を望むことができる。

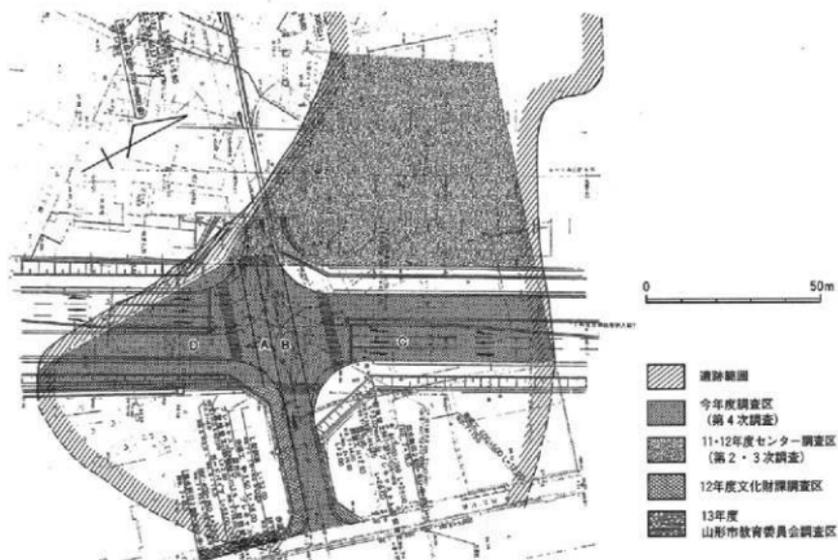
また本遺跡は河川の自然堤防上に立地しており、標高97mを測る。この自然堤防の幅は500～700mで幅広く連続しており、この堤防上に位置している遺跡は、他に向河原遺跡などがある。周辺は馬見ヶ崎川の約350年間の現河道（鈴川－成安河道）でもあり、また馬見ヶ川の外縁部にもあたる。礫層はなく、砂層が白川側にかけて厚く北側に向けて薄くなり、調査区北側で泥炭になる傾向が見られる。

本遺跡周辺の古墳時代の遺跡については、平成5年に調査された今塚遺跡や、平成11年度以降の東北中央道工事にかかる馬洗場B遺跡・藤治屋敷遺跡などの古墳時代前期を中心とした遺跡の発掘調査が行われている。また、洪江遺跡の主体となる古墳時代中期の遺跡として平成7年度に調査された下柳A遺跡が近在している。平成11年度から2年間、東北中央道工事に係って洪江遺跡の発掘調査が行われ、古墳時代前中期の多数の堅穴住居跡が検出された。また本調査において、調査区南側がかつて真福寺領だったことから、多数の近世墓が確認された。県内では近世墓の発掘例が少なく貴重な調査であると言える。

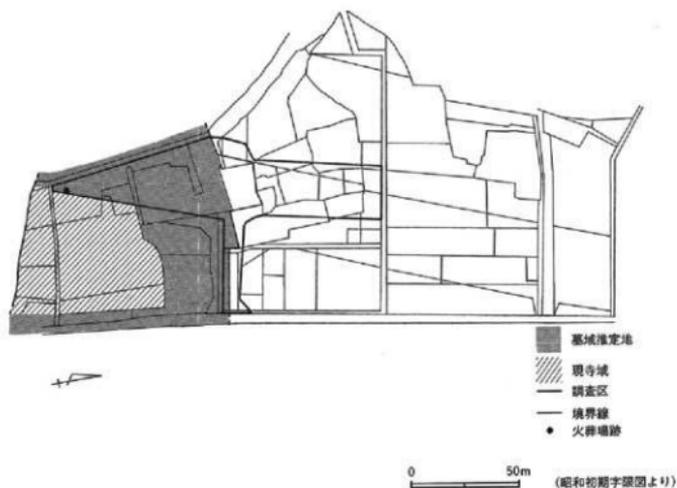


- 1 洪江遺跡（古墳・中世・近世） 2 向河原遺跡（古墳・平安） 3 馬洗場B遺跡（古墳～中世） 4 藤治屋敷遺跡（古墳～中世）
 5 中野池遺跡（鎌倉～室町） 6 高瀬江1遺跡（古墳） 7 高瀬南遺跡（古墳） 8 高瀬江2遺跡（縄文・古墳） 9 火久塚2号墳（古墳）
 10 火久塚1号墳（古墳） 11 浪山遺跡（古墳～平安） 12 兩字塚古墳群（古墳） 13 御守塚2号墳（古墳） 14 牟崎古墳群（古墳）
 15 梅ノ木遺跡（古墳・平安） 16 狐山2号墳（古墳） 17 狐山古墳（古墳） 18 埴田C遺跡（縄文～平安） 19 七浦遺跡（弥生・古墳）
 20 五反遺跡（古墳） 21 徳山長狭遺跡（古墳～平安） 22 北柳1遺跡（縄文・古墳） 23 菅柳新（中世） 24 中野遺跡（古墳）

第1図 遺跡位置図（国土地理院発行5万分の1地形図「山形北部」を使用）



第2図 調査区概要図 (S = 1 : 1,400)



第3図 法江遺跡周辺字限図 (S = 1 : 2,200)

Ⅲ 遺跡の概要

1 遺跡の層序

今年度の調査区は、遺跡の中心部を南北に調査範囲を設定した区域になっている。特に調査区北側には、旧表土直下に泥炭層が広がり、黒褐色粘土が堆積している。また、中心部及び南側には微砂層が広がり、安定した自然堤防上に集落が形成されている様子が窺える。

基本層序は、D区東側の一部を見ることとする（第4図）。Ⅰ層が黒褐色砂質シルトの現表土である。一部真福寺所有の畑が広がっていた。Ⅱ層は暗褐色粘質シルトの旧表土である。この層位から近世墓の遺構が検出される。Ⅰ・Ⅱ層は、地力で「乱場」と称される火葬場跡を示している。Ⅰ層は黒褐色砂質シルトで、多数の骨片が炭化物とともに混じっている。Ⅲ層に灰黄褐色粘質シルトが堆積している。この層位以降グライ化した層が見られる。Ⅳ層の黄褐色砂質シルトから古墳時代（上面）の遺構が検出され、Ⅲ層にも遺物の包蔵が認められる。Ⅳ層以降砂状の度合が強まる。Ⅴ層に古墳時代（下面）の遺構が検出された。その下層に泥炭層が広がっている。

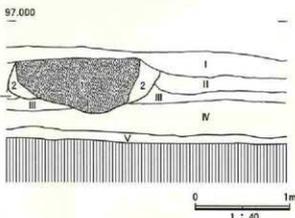
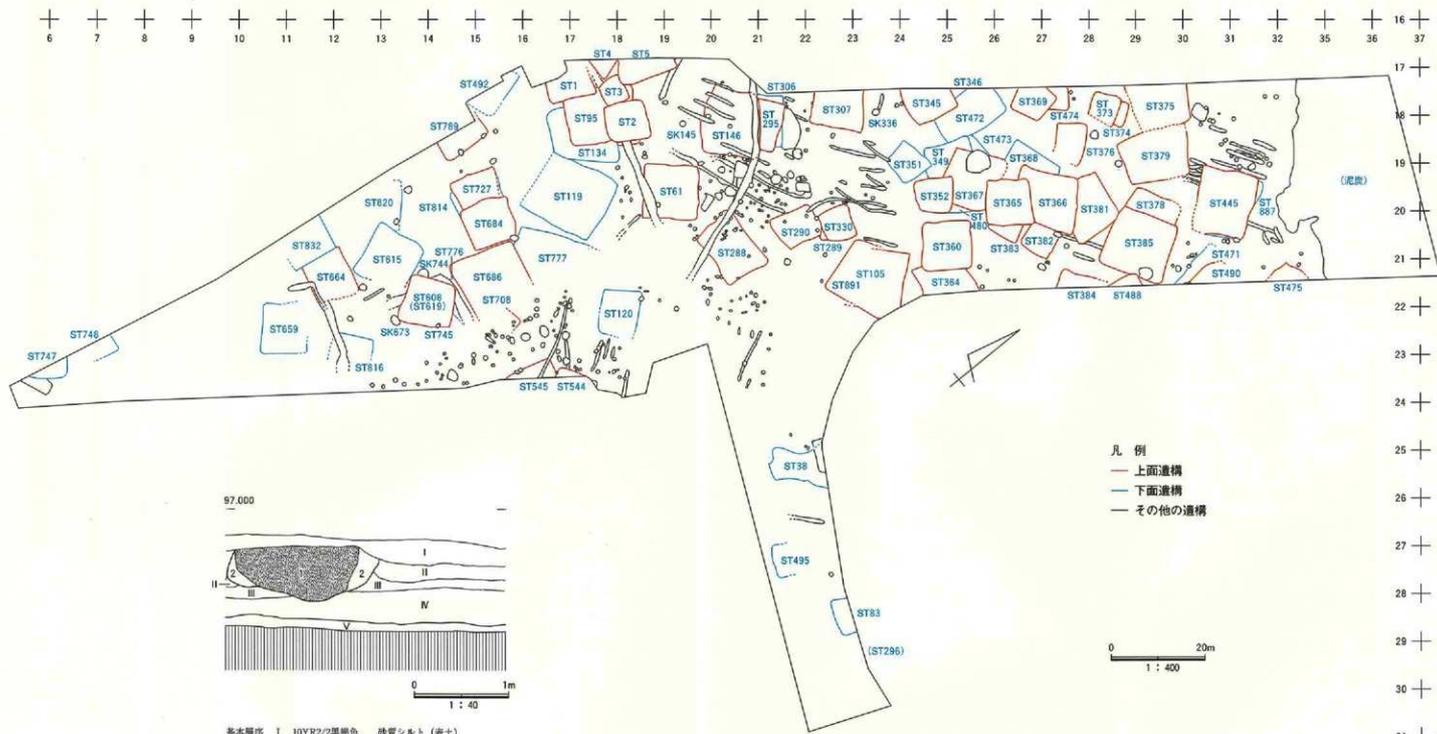
2 遺構と遺物の分布

調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡が上面50棟・下面28棟、掘立柱建物跡4棟、近世・近代墓169基、溝・畝状溝跡が114条、土坑43基、井戸跡4基、ピット354基等で、登録した遺構総数は890基を越える。これらの遺構は、古墳時代、中世、近世・近代に大別できる。

古墳時代の遺構は、住居跡が県道本線部分に集中して検出された。これは平成11・12年度に西側に隣接する調査区を設定した東北中央道関連の発掘調査（第2・3次調査）において、当該調査区寄りに住居跡を多数検出したことから、集落の中心部を確認できたと考えられる。また、住居跡がB区東側になると希薄になることから、集中域であることが理解できる。特に上面の遺構はD区北側からC区にかけて密集している。出土した遺物から、時期的に下面が土師器縄年で塩釜式期から南小泉式期古・中段階であり、上面が南小泉式期中段階と考えられる。なお、上面の住居跡からTK208～TK23形式並行の須恵器が出土していることから集落の所属時期の下限が5世紀末と推定できる。

中世の遺構は調査区の東寄りから検出されており、2条の大型区画溝を確認している。遺物は、溝跡出土のものであるが、SD87では14世紀代の青磁や15世紀後半の信楽焼壺が出土している。SD22は、時期産地不明の中世陶器が下層から出土していることから中世の区画溝であると考えられる。

近世墓は、D区を中心に検出されており、A～C区にかけて希薄に広がっている。所属年代は、出土品から江戸時代後半以降と考えられ、主体は幕末期であるようである。また半数以上の墓では六道銭が出土しているが、墓内に副葬品として入れる風習は新しい時期まで続けられている。なお、墓は東西に配置されながら墓域が北側へ拡大していく傾向が見られた。

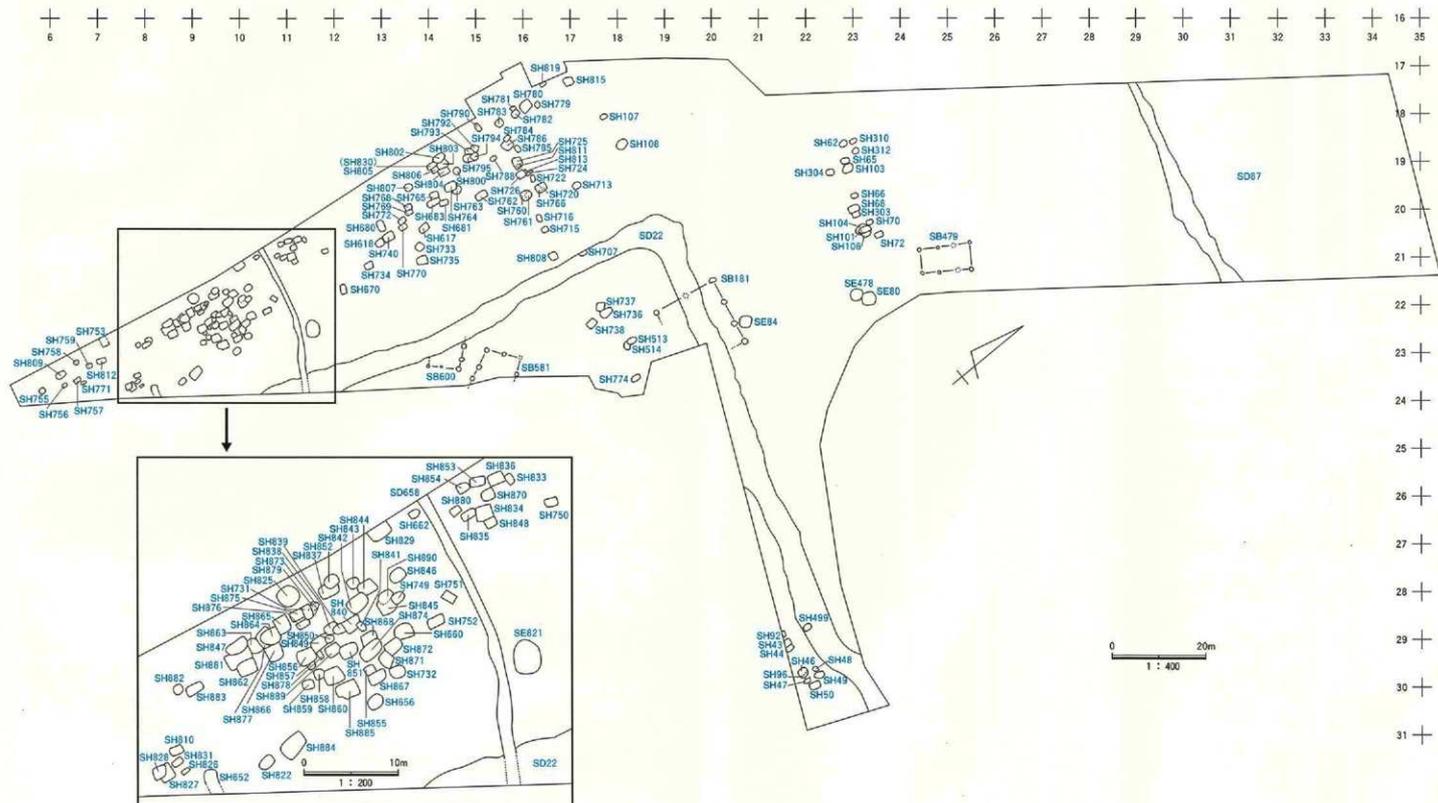


基本層序	I	II	III	IV	V	1	2
	10YR2/2黒褐色	10YR3/3暗褐色	10YR4/2灰黄褐色	2.5Y4/1黄褐色	2.5Y2/1黄褐色	10YR2/2黒褐色	10YR2/2黒褐色
	砂質シルト (粘土)	粘質シルト (旧表土)	粘質シルト	砂質シルト (上面)	砂質シルト (下面)	砂質シルト (炭化層)	粘質シルト

凡例
 — 上面遺構
 — 下面遺構
 — その他の遺構

0 20m
 1 : 400

第4図 遺構配置図 (古墳時代その他)、基本層序



第5図 遺構配置図(中世・近世・近代)

IV 遺構

1 竪穴住居跡

本調査区では、古墳時代の竪穴住居跡が上面で50棟、下面で28基確認されている。その中でも多数の焼失住居跡が検出された。なお、1棟ごとの詳細なデータは表1～3までにまとめている。また住居間の新旧関係は第6図に示した。

ST4・5・2・3（第7図）ST4はA区西側16-18Gで検出された。西側未確認のためST5との新旧関係が不明である。床面は直床で覆土の深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは急である。東側壁寄りに柱穴が1本確認されている。

ST5はA・B区西側16・17-19・20Gで検出された。西側未確認のため平面形は不明である。規模は南北軸6.0mで、東西軸の全長は不明である。主軸方向はN-112°-Eである。床面は直床で東側壁南寄りに焼土域が確認されている。位置的に壁寄りのためカマドと考えられる。覆土の深さは33cmを測り、立ち上がりが急である。出土遺物は土師器小片が20数点である。

ST2は、A区西側17・18-18・19Gで検出された。ST3東側を切る。平面形は隅丸方形で、規模は東西軸4.3m、南北軸4.2mを測る。長軸方向は、N-31°-Eである。床面は直床で、覆土の深さは16cmである。壁の立ち上がりは急で、壁面から等間隔に柱穴3本が確認された。出土遺物は、覆土内から僅かに外反する坏や甕の小破片30点以上と、遺構内土坑から中型甕1点が出土している。

ST3は、A区西側16・17-18・19Gで検出された。ST95北側を切る。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸2.9m、南北軸2.5mを測る。長軸方向は、N-80°-Wである。床面は直床で、覆土の深さは21cmである。壁の立ち上がりは急である。上層に炭化物が堆積していることから、上層に1棟切合っていた可能性がある。屈曲する口縁を持つ壺の口縁部など30点ほどの土師器小片が出土した。

これらは、上面の遺構である。

ST1・95・134（第8図）ST1はA・D区西側17-17・18Gで検出されている。上面の遺構である。ST95の西側を切る。平面形は西側が調査区外のため不明である。規模は南北軸4.7mで、東西軸の全長は不明である。床面は直床で、覆土の深さは7cmを測る。壁の立ち上がりは垂直である。柱穴が2本確認された。

ST95は、A・D区西側17・18-18・19Gで検出された。上面の遺構である。ST134北西側を切る。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.9m、東西軸6.1mを測る。長軸方向はN-36°-Eである。床面は貼床を敷き、覆土の深さは13cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。炭化物が堆積され、焼土域も中央から東壁寄りに広がる。焼土住居と思われる。出土遺物は、内湾する坏や砲弾形で無底の甎や中型の甕、線刻のある石製の紡錘車など50数点ほどである。

ST134はA・D区17・18-17-19Gで検出された。下面の遺構である。東側をST95に切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.8m、東西軸5.5mを測る。長軸方向はN-45°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは12cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。南壁寄り

表1 堅穴住居跡観察表(1)

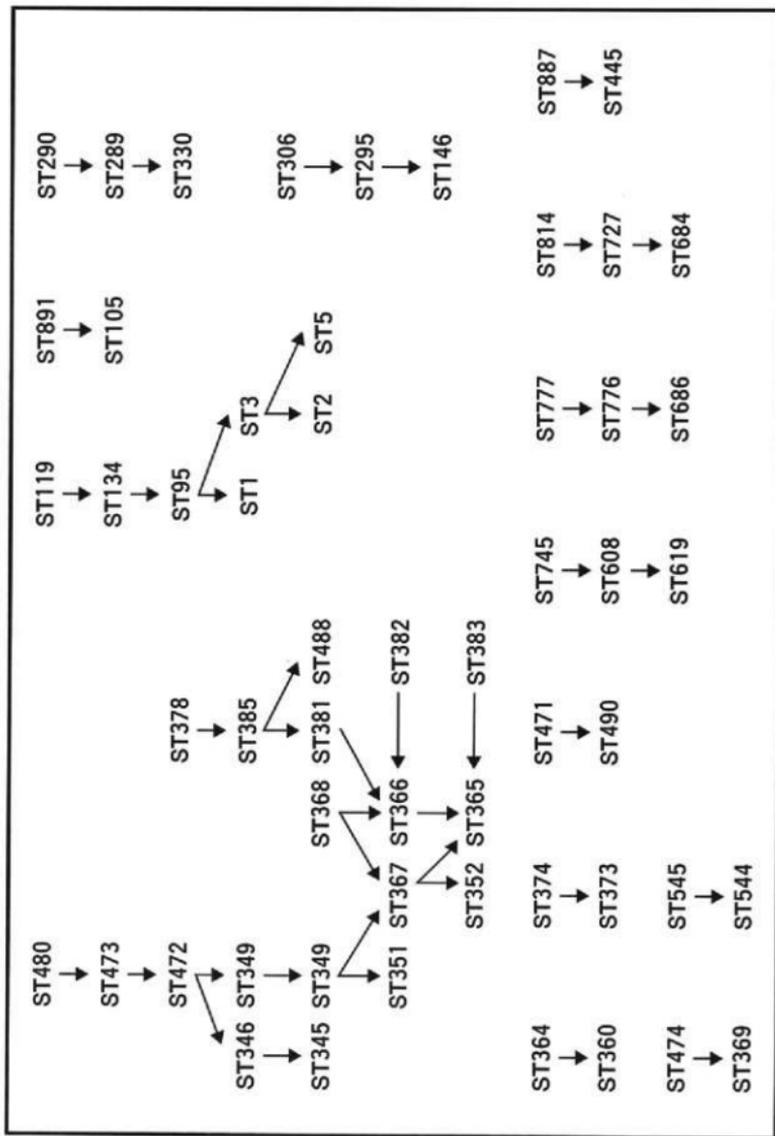
種別	遺構番号	グリッド	平面形	主軸方位(長軸)	規模(m)	高さ(cm)	壁	床面状況	遺構内遺構(ピット、貯蔵穴など)	炉カマド	備考
8	ST1	17-17-18	不明	不明	4.7×(1.8)	7	垂直	直床	東壁に柱穴2		
	ST2	17-18-18-19	隅丸方形	N-31°-E	4.3×4.2	16	急	直床	壁面から等間隔に柱穴3		
	ST3	16-17-18-19	隅丸長方形	N-80°-W	2.9×2.5	21	急	直床			2棟切り合いか?
7	ST4	16-18	不明	不明	(2.5)×(2.2)	40	急	直床	東壁に柱穴1		調査区外のため西側未調査
	ST5	16-17-19-20	不明	N-112°-E	6.0×(2.5)	33	急	直床	東壁に柱穴2 北西壁に柱穴1	東壁南寄り	調査区外のため西側未調査
11	ST38	25-22-23	不整形	N-41°-E	(5.7)×2.9	9	やや垂直	直床	柱穴4		焼失住居、調査区外のため北側未調査
9	ST61	19-19-20	方形	N-46°-E	5.7×5.6	26	急	貼床	南壁に柱穴2 北西壁に柱穴2	北壁東寄り	焼失住居
11	ST83	28-23	不明	不明	3.8×(1.8)	26	急	貼床	東壁に柱穴1		焼失住居、調査区外のため北側未調査
8	ST95	17-18-18-19	隅丸長方形	N-36°-E	6.9×6.1	13	やや急	貼床	壁面に沿って小柱穴4 南壁に柱穴2 西壁に柱穴1		焼失住居
14	ST105	20-21-24-25	不明	不明	6.7×(2.9)	26	やや急	貼床	壁面に沿って小柱穴4	北壁東寄り	焼失住居
24	ST119	18-20-17-18	隅丸長方形	N-71°-E	7.7×6.9	10	急	貼床	壁面から等間隔に柱穴3		
10	ST120	21-22-18-19	隅丸長方形	N-39°-W	4.7×4.0	8	やや急	直床	壁面から等間隔に柱穴3		
8	ST134	17-18-17-19	隅丸長方形	N-45°-E	6.8×5.5	12	やや急	貼床	壁面に沿って小柱穴11		
12	ST146	17-18-20-21	隅丸長方形	N-64°-E	6.9×6.0	18	やや急	貼床	やや急		焼失住居
10	ST288	20-21-20-21	隅丸長方形	N-88°-W	6.6×4.4	不明	上部前平	貼床			貼床破出
10	ST289	20-23	不明	不明	(1.4)×(0.8)	不明	上部前平	貼床			貼床破出
10	ST290	19-20-22-23	隅丸長方形	N-13°-E	5.2×3.4	不明	上部前平	貼床			貼床破出
12	ST295	17-18-21-22	隅丸長方形	N-135°-W	5.2×4.9	18	急	貼床	南壁に沿って小柱穴5 中央に柱穴2 北壁に柱穴2	南壁東寄り	焼失住居
11	ST296	28-29-30	不明	不明	不明	19	不明	直床			前面のみ検出
13	ST305	17-18-21-22	隅丸長方形	N-21°-W	5.1×4.1	8	やや垂直	直床	北西壁に柱穴4 西壁に貯蔵穴1		
	ST307	17-18-23-24	隅丸方形	N-38°-W	5.5×(4.2)	13	やや急	直床	東壁に柱穴1 西壁に柱穴2	西壁北寄り	焼失住居、調査区外のため西側未調査
10	ST330	20-22-23	隅丸長方形	N-68°-W	3.5×3.2	不明	上部前平	貼床			貼床破出
16	ST345	17-18-25	不明	不明	4.6×(4.1)	15	やや急	貼床	北壁に柱穴1 南壁に柱穴1		調査区外のため西側未調査 2棟切り合いか? 調査区外のため西側未調査
	ST346	17-26	不明	不明	(0.9)×-	12	やや急	貼床			
15	ST349	18-19-25-26	隅丸方形	N-30°-W	4.9×4.8	5	やや急	直床	柱穴5、溝1		南壁寄りに炭化物地層
15	ST351	18-19-24-25	隅丸長方形	N-87°-E	3.6×3.1	6	やや急	直床			
16	ST352	19-25	隅丸長方形	N-33°-E	3.7×3.4	20	やや垂直	直床	壁面から等間隔に柱穴3		
	ST360	20-21-25-26	隅丸方形	N-50°-W	5.2×5.1	22	急	貼床	壁面から等間隔に柱穴4		焼失住居?
	ST364	21-25-26	不明	不明	5.1×(3.1)	20	急	貼床	柱穴4		焼失住居? 調査区外のため東側未調査
19	ST385	19-20-26-27	隅丸方形	N-41°-E	4.8×4.7	28	急	貼床	北壁に柱穴3 東壁に柱穴1		焼失住居
	ST396	19-20-27-28	隅丸長方形	N-57°-E	6.2×5.4	32	ほぼ垂直	貼床	柱穴2		焼失住居?
17	ST397	18-19-26-27	不明	N-122°-W	5.9×(5.6)	14	ほぼ垂直	貼床	南西壁に柱穴1	南壁中央	焼失住居?
20	ST398	18-19-26-28	不明	不明	5.6×(5.0)	22	やや急	貼床	北壁に柱穴1 南壁に貯蔵穴1		焼失住居?
14	ST369	17-18-27-28	隅丸方形	N-17°-W	3.4×3.3	15	やや急	直床			調査区外のため西側未調査
17	ST373	17-18-28-29	隅丸方形	N-61°-E	3.0×2.9	15	緩やか	直床	南壁に柱穴2		
	ST374	17-18-29	不明	不明	2.6×(1.0)	4	やや急	直床	北壁に柱穴1		
21	ST375	17-18-29-30	不明	N-22°-E	5.9×(4.3)	14	急	貼床	小柱穴4		調査区外のため西側未調査 2棟切り合いか?
15	ST376	18-28	隅丸長方形	N-23°-W	4.1×3.0	20	やや急	貼床	南西壁に柱穴1		
22	ST378	19-20-29-30	不明	N-21°-E	5.4×(2.3)	16	やや急	貼床	西壁に柱穴1		
21	ST379	18-19-29-30	隅丸長方形	N-23°-E	6.0×5.2	22	やや急	貼床	壁面から等間隔に柱穴3 中央に柱穴2		
19	ST381	19-20-28-29	隅丸長方形	N-80°-W	5.7×5.3	19	やや急	貼床	南壁に柱穴1		
20	ST382	20-27-28	不明	不明	3.3×(3.2)	6	やや急	直床	壁面に沿って柱穴3		
19	ST383	20-26-27	不明	不明	3.4×(2.3)	27	急	貼床			
25	ST384	21-28	不明	不明	(3.8)×(2.1)	10	やや急	貼床	南西壁に柱穴1		調査区外のため東側未調査
22	ST385	20-21-29-30	隅丸方形	N-69°-E	6.8×6.5	17	やや急	貼床	壁面から等間隔に柱穴4 土塊3	北壁中央	焼失住居
23	ST445	19-20-31-32	不明	N-31°-W	7.0×(3.0)	15	上部前平	直床	壁面から等間隔に柱穴3	北壁北寄り	焼失住居
18	ST471	20-21-30-31	不明	不明	(4.6)×(3.2)	25	急	貼床			調査区外のため東側未調査
16	ST472	17-18-25-26	不明	不明	7.3×(2.5)	10	やや急	貼床	北壁東に柱穴1		
15	ST473	18-26	不明	不明	(2.5)×(1.1)	16	急	貼床			

表2 竪穴住居跡観察表(2)

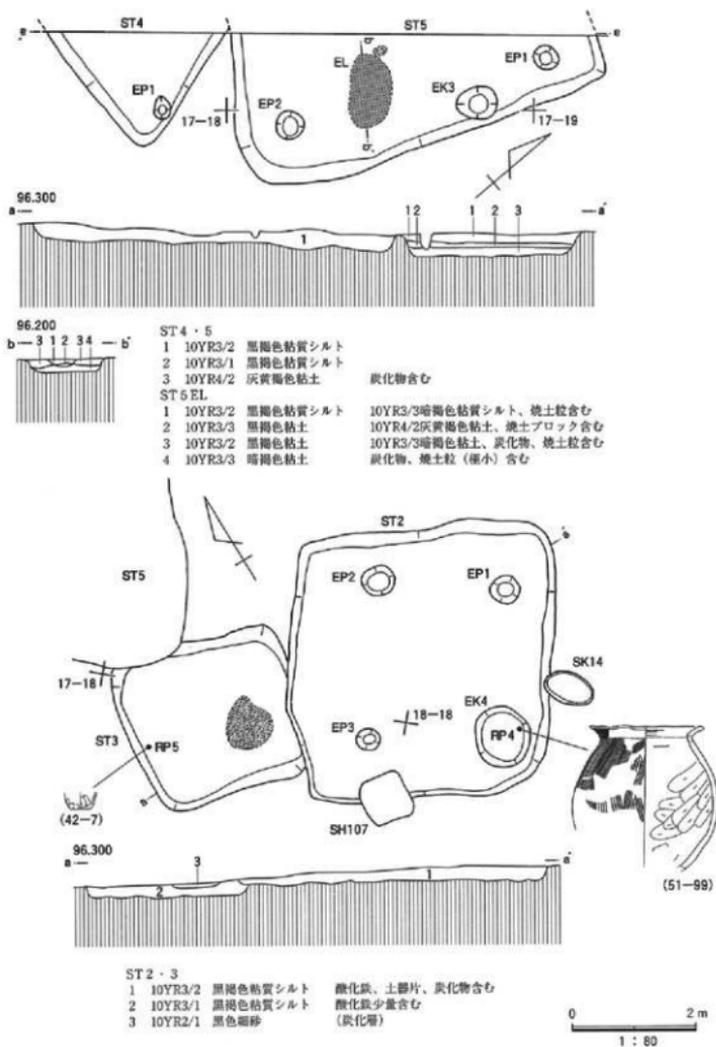
棟号	遺構番号	グリッド	平面形	主軸方位(長軸)	規模(m)	深さ(cm)	壁	床面状況	遺構内遺構(ピット、貯蔵穴など)	伊ノカマド	備考
14	ST474	17-28	不明	不明	(2.3)×(2.0)	15	やや急	貼床			調査区外のため西側未調査
18	ST475	21-32-33	不明	不明	(2.7)×(2.5)	6	やや緩やか	直床	南壁に柱穴1		調査区外のため東側未調査
	ST480	18-19-25-26	隅丸長方形	N-43°-W	6.4×4.8	18	やや緩やか	貼床	南壁に柱穴2		北西壁から炭化物抽出
22	ST488	21-29	不明	不明	(3.7)×(1.2)	不明	上部削平	貼床			貼床抽出、調査区外のため東側未調査
18	ST490	21-30-31	不明	不明	(3.4)×(2.2)	20	急	貼床		地床伊	焼失住居、調査区外のため東側未調査
24	ST492	17-15	不明	不明	(2.6)×-	27	やや急	貼床			調査区外のため西側未調査
11	ST495	26-27-22	不明	不明	3.4×(1.2)	10	やや急	貼床			焼失住居
	ST544	23-17-18	不明	不明	(2.6)×(1.2)	22	急	貼床			調査区外のため東側未調査
	ST545	23-16-17	不明	不明	(2.1)×(2.0)	23	やや緩やか	貼床			調査区外のため東側未調査
28	ST608	21-22-14-15	隅丸長方形	N-38°-W	5.4×5.0	28	やや垂直	貼床	壁面に沿って柱穴8 主柱穴はEP1・2・5・8か?		
	ST615	20-21-13-14	隅丸長方形	N-20°-W	5.9×5.6	30	やや垂直	貼床	壁面に沿って柱穴7		ほぼ全周に周溝がめぐる
28	ST619	21-22-14-15	不明	不明	不明	不明	上部削平	貼床	遺構内土坑1	地床伊?	
29	ST659	21-22-11-12	隅丸長方形	N-50°-W	5.2×4.6	35	急	貼床	柱穴10	西壁中央	焼失住居
32	ST664	20-21-12-13	隅丸長方形	N-72°-W	5.1×4.5	25	やや急	貼床	壁面に沿って柱穴7 主柱穴はEP1・2・3・6か?		
26	ST684	19-20-15-16	隅丸長方形	N-21°-E	5.0×4.6	25	急	貼床	壁面から等間隔に柱穴4		
25	ST685	20-21-15-16	不明	不明	7.0×(5.0)	20	やや緩やか	貼床	柱穴8		
28	ST708	22-16	不明	不明	(1.2)×(0.8)	20	急	貼床			
28	ST727	19-15-16	不明	N-69°-W	4.5×(3.1)	20	やや緩やか	貼床		西壁中央	
32	ST745	21-22-14-15	不明	不明	(3.8)×(3.2)	18	やや急	貼床			
31	ST747	23-5-7	不明	不明	(3.7)×(1.6)	39	急	直床			調査区外のため西側未調査
	ST748	22-8	不明	不明	(2.3)×(1.8)	22	急	直床	南壁に柱穴2		調査区外のため西側未調査
27	ST776	21-15-16	不明	不明	(4.2)×(4.0)	8	やや緩やか	貼床	北壁に柱穴1		
	ST777	20-21-16-18	不明	不明	(7.5)×(7.2)	7	急	貼床	北壁に柱穴1		
32	ST789	17-18-15-16	不明	不明	5.1×(1.8)	10	やや急	貼床	南壁に柱穴3		調査区外のため西側未調査
27	ST814	19-20-15-16	隅丸長方形	N-69°-E	6.5×4.7	不明	上部削平	貼床	壁面から等間隔に柱穴4		炭灰抽出
	ST816	22-13	不明	不明	(4.4)×(3.7)	19	急	貼床	北西壁に柱穴1		
29	ST830	19-14	不明	不明	(3.9)×-	8	-	直床			仮設道路により検出不可
23	ST832	20-12-13	不明	N-105°-E	5.0×(3.7)	19	急	貼床		東壁中央	焼失住居
23	ST887	19-20-31-32	隅丸長方形	N-31°-W	6.8×6.1	5	やや緩やか	貼床	柱穴6		
14	ST891	20-21-23-24	不明	不明	6.6×(3.0)	25	やや緩やか	貼床	柱穴4		焼失住居

表3 E L観察表

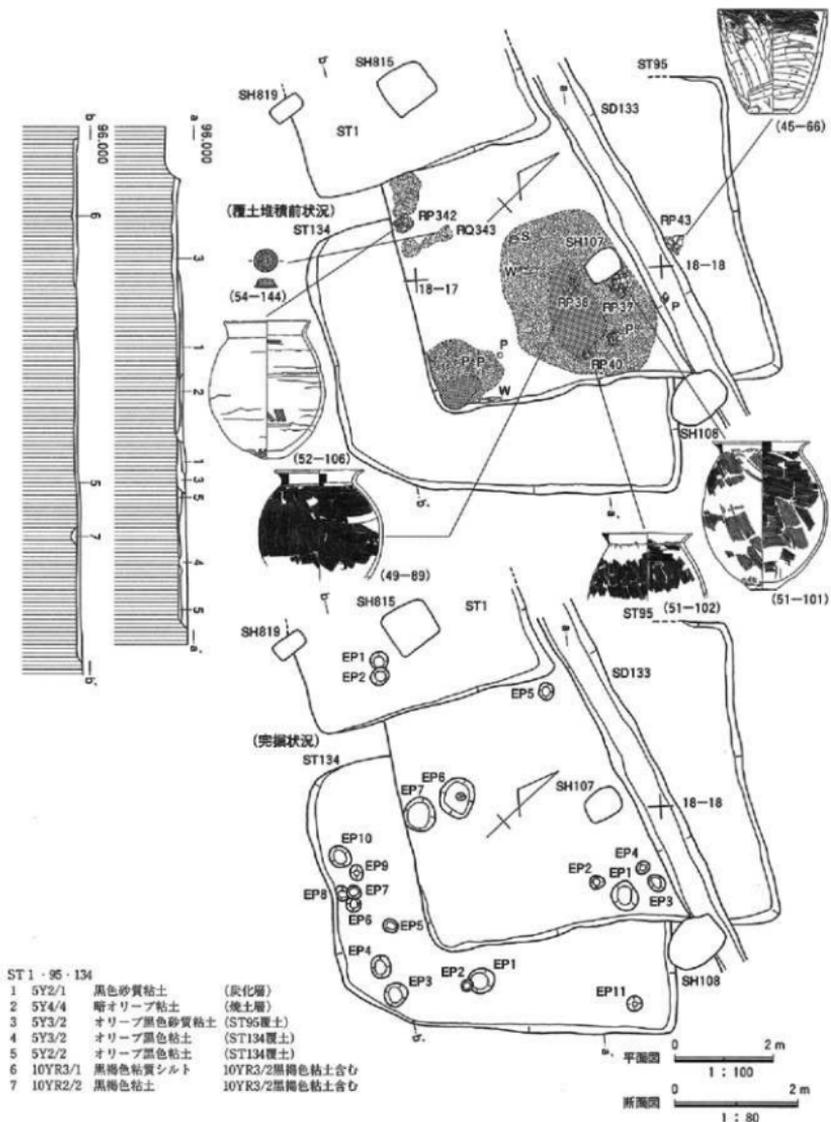
棟号	遺構番号	主軸方向	長さ(cm)	幅(cm)	現存高(cm)	袖部長(cm)	遺存状態	炭 焼 部	袖 部
7	ST5 EL	N-112°-E	118	67	20	-	不良		
9	ST61EL	N-46°-E	106	91	8	85	良好	土師器類を含む楕円形の焼土域を確認	狭く残存
14	ST106EL	N-35°-E	92	60	11	(92)	良好		
12	ST295EL	N-135°-W	70	70	28	-	不良	焼土塊散乱	
13	ST307EL	N-38°-W	70	142	19	68	不良	西側未調査	片袖のみ残存
17	ST367EL	N-136°-W	70	90	15	(50)	不良	焼土塊散乱	南側袖部のみ残存
22	ST386EL	N-66°-E	129	101	20	85	良好	土師器類・瓦を多量に含む焼土域を確認	良好な残存状態
23	ST445EL	N-31°-W	96	90	26	-	不良	焼土塊散乱	
18	ST490EL	N-85°-W	70	48	5	-	不良	焼土塊散乱(地床伊)	
28	ST619EL	N-153°-W	40	30	8	-	不良	焼土塊散乱(地床伊?)	
29	ST659EL	N-50°-W	63	125	15	-	不良	焼土塊散乱	
26	ST727EL	N-50°-W	130	96	8	103	良好	前面にて確認	狭く残存
30	ST832EL	N-71°-W	180	156	15	-	不良	土師器類・瓦を多量に含む焼土域を確認	



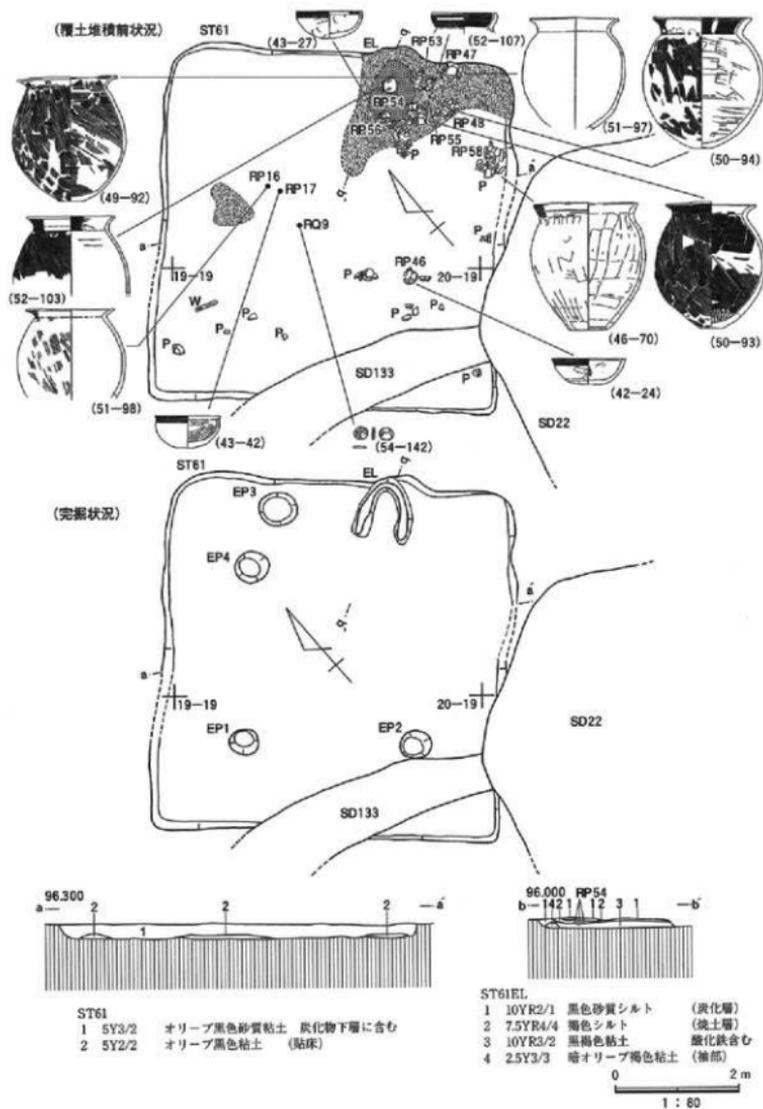
第6図 竪穴住居跡相関図（旧→新）



第7図 ST 4・5・2・3



第8図 ST 1・95・134



第9図 ST61

を中心に柱穴が11本確認された。

ST61（第9図）ST61は、A・B区中央19-19・20Gで検出された。上面の遺構である。東南壁をSD22・133から切られる。平面形は方形で、規模は南北軸5.7m、東西軸5.6mを測る。主軸方向はN-46°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは26cmを測り、立ち上がりは急である。炭化物が堆積しており、焼失した住居跡である。多数の土師器甕の直下に北壁にカマドが付設されている。出土遺物は、やや口縁部が外反する坏、やや長胴気味の甕、甕形で無底の甕、口縁部中に段のある中型壺、有孔円板などの石製模造品が出土した。破片資料を含めて100点を越す。

ST120・288・289・290・330（第10図）ST120はA・D区21・22-18・19Gで検出された。下面の遺構である。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸4.7m、東西軸4.0mを測る。また長軸方向はN-39°-Wである。床面は直床で覆土の深さは8cmを測る。壁の立ち上がりはやや緩やかである。柱穴は、壁面から等間隔に3本確認されている。

ST288は、B区中央20・21-20・21Gで検出された。上面の遺構である。SD286と多数の柱穴から切られている。上部削平のため貼床のみの検出である。平面形は隅丸長方形と思われる。規模は、東西軸6.6m、南北軸4.4mを測り、長軸方向はN-88°-Wである。出土遺物は、ミニチュアの坏や球胴形の体部を持つ甕など小破片40点余りである。

ST289は、C区南側20-23Gで検出された。上面の遺構である。ST290北側を切る。上部削平のため貼床のみの検出である。

ST290は、C区南側19・20-22・23Gで検出された。上面の遺構で、貼床のみの検出である。規模は南北軸5.2m、東西軸3.4mを測る。長軸方向はN-13°-Eである。出土遺物は、内湾する坏や中空の高坏脚部などの小破片が30点ほどである。

ST330は、C区南側20-22・23Gで検出された。上面の遺構で、ST289・290が北側を切る。上部が削平を受けており、貼床のみの検出である。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸3.5m、東西軸3.2mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。

ST38・495・83・296（第11図）ST38は、B区東側25-22・23Gで検出された。下面の遺構である。平面形は不整形であるが、周囲に攪乱等もあり長方形であったと思われる。北側は調査区外のため未調査である。規模は東西軸2.9mで、南北軸の全長は不明である。床面は直床で、覆土の深さは9cmを測り、立ち上がりはやや垂直である。炭化層が床面に広がっており焼失した住居跡と考えられる。小柱穴が確認されている。出土遺物は、口縁部が直線的に立つ中型甕など小破片を含めて30点ほどである。

ST495は、B区東側26・27-22Gで検出された。下面の遺構である。北側をSD22に切れ、床面は貼床である。規模は東西軸3.4mで、南北軸の全長は不明である。覆土の深さは10cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。床面直上に炭化層が堆積し、焼土が西側に散乱している。

ST83は、B区東側28-23Gで検出された。下面の遺構である。北側は調査区外のため未調査である。また断面にてST269から切られているのを確認した。床面は貼床である。規模は東西軸3.8mで南北軸の全長は不明である。覆土の深さは26cmを測り、壁の立ち上がりは急である。炭化層が床面直上で検出されたことから、焼失住居と考えられる。焼土域も南壁寄りで確認さ

れた。甕の破片が50点ほど出土している。

ST296は断面にて確認した。B区東側28・29-30Gで検出された。上面の遺構で、床面は直床である。覆土の深さは19cmを測るが、規模などは不明である。口縁部中に段が付く壺や甕の破片が60点ほど出土した。

ST146・295 (第12図) ST146は、B・C区西側17・18-20・21Gで検出された。上面の遺構である。ST295南側を切る。また南側を畝状遺構から切られている。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.9m、東西軸6.0mを測る。長軸方向は、N-64°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは18cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。南西側は上部が削平され貼床検出であるが、北側は炭化物塊とともに焼土が壁沿いに散乱している。焼失した住居と考えられる。直立気味の口縁部を持つ甕など小破片200点ほどが出土している。

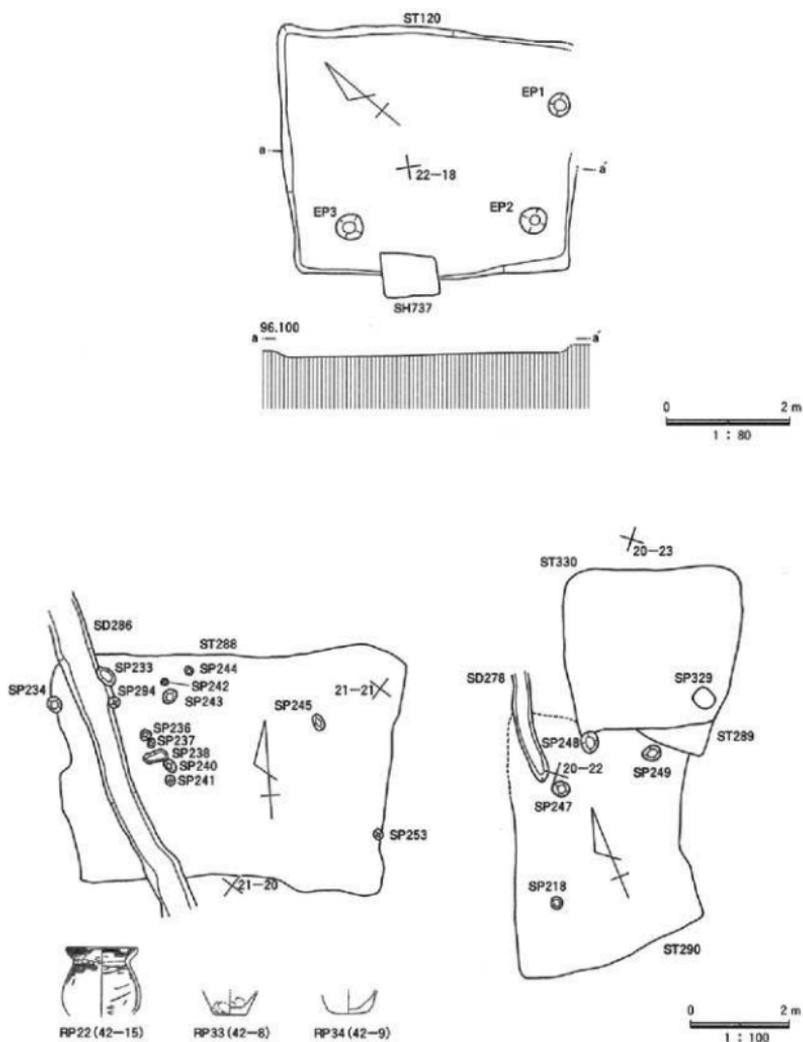
ST295は、B・C区西側17・18-21・22Gで検出された。上面の遺構である。ST146が南側を切っている。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸5.2m、東西軸4.9mを測る。主軸方向はN-135°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは18cmを測る。壁の立ち上がりは急である。南壁沿いを中心に柱穴が検出された。南壁の東寄りに焼土層及び火床を確認した。カマドの可能性が高い。炭化層が層状に堆積しており、焼土粒も散在している事から焼失した住居と考えられる。出土遺物は、体部の稜が消滅した高坏や折り返し口縁の甎など150点ほどである。

ST306・307 (第13図) ST306は、B・C区西側17・18-21・22Gで検出された。下面の遺構である。遺構中央を東西にSD286から切られる。その上面からST146・295が検出されている。平面形は、隅丸長方形で、規模は東西軸5.1m、南北軸4.1mを測る。長軸方向はN-21°-Wである。床面は直床で、覆土の深さは8cmを測る。壁の立ち上がりは、やや垂直である。南西壁沿いに遺構内土坑が検出され、高坏や甕など多数の遺物が出土した。出土遺物は体部が屈曲して立ち上がる高坏や折り返し口縁の鉢状単孔の甎、甕体部小破片30数点である。

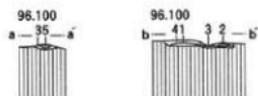
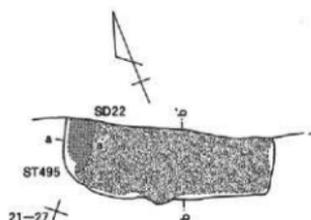
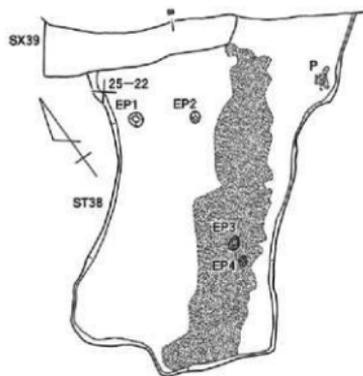
ST307は、C区南西側17・18-23・24Gで検出された。上面の遺構である。西側は調査区外のため未調査であるが、西壁北寄りにカマド袖が検出されている。平面形はおおよそ隅丸方形で、規模は南北軸5.5mで、東西軸の全長は不明である。主軸方向は、N-38°-Wである。床面は直床で、覆土の深さは13cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。柱穴が3本検出されている。覆土内と床面直上に炭化層を検出したため焼失住居である。出土遺物は、TK208形式並行の須恵器坏身や短く外反する口縁部を持つ坏、甕、無底の甎の小破片400点ほどである。

ST105・891・369・474 (第14図) ST105は、C区南東側20・21-24・25Gで検出された。上面の遺構である。ST891を切る。また東側を中世の2基の井戸跡から切られている。規模は南北軸6.7mで、東西軸の全長は不明である。床面は貼床で、覆土の深さは25cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。壁沿いに柱穴が巡る。カマドは北壁東寄りに付設されており、袖部と燃焼部が確認された。焼失住居と考えられる。カマドの南側を中心に多くの遺物が出土している。出土遺物は、丸底で内湾する体部を持つ坏、単孔の甎、やや長胴化した甕など小破片を含め200点を越える。

ST891は、C区南東側20・21-23・24Gで検出された。上面の遺構である。規模は南北軸6.6

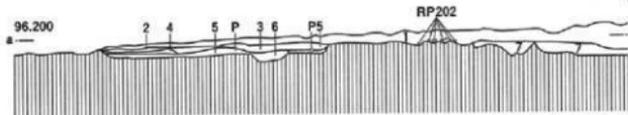
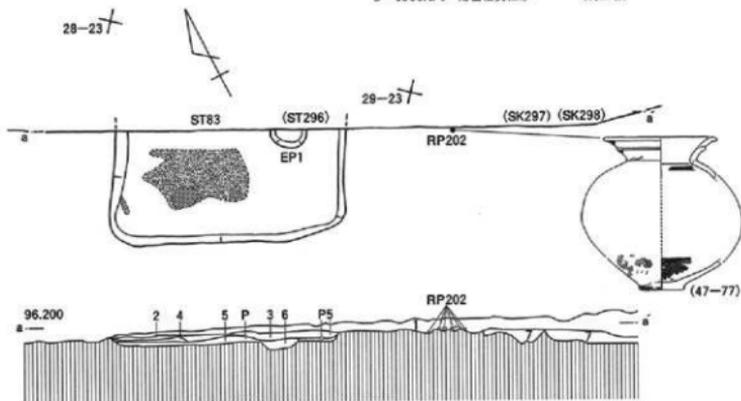


第10図 ST120・288・289・290・330



- ST38
- | | | | |
|---|---------|----------|-------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物含む (一部層状) |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | 10YR4/4褐色粘質シルト含む |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物含む |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | 10YR3/1黒褐色粘質シルト含む |
- ST495
- | | | | |
|---|---------|---------|-------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色砂質粘土 | 炭化物含む |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色砂質粘土 | |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色砂質粘土 | (炭化層) |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質微砂 | 炭化物含む |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色粘質細砂 | (焼土層) |

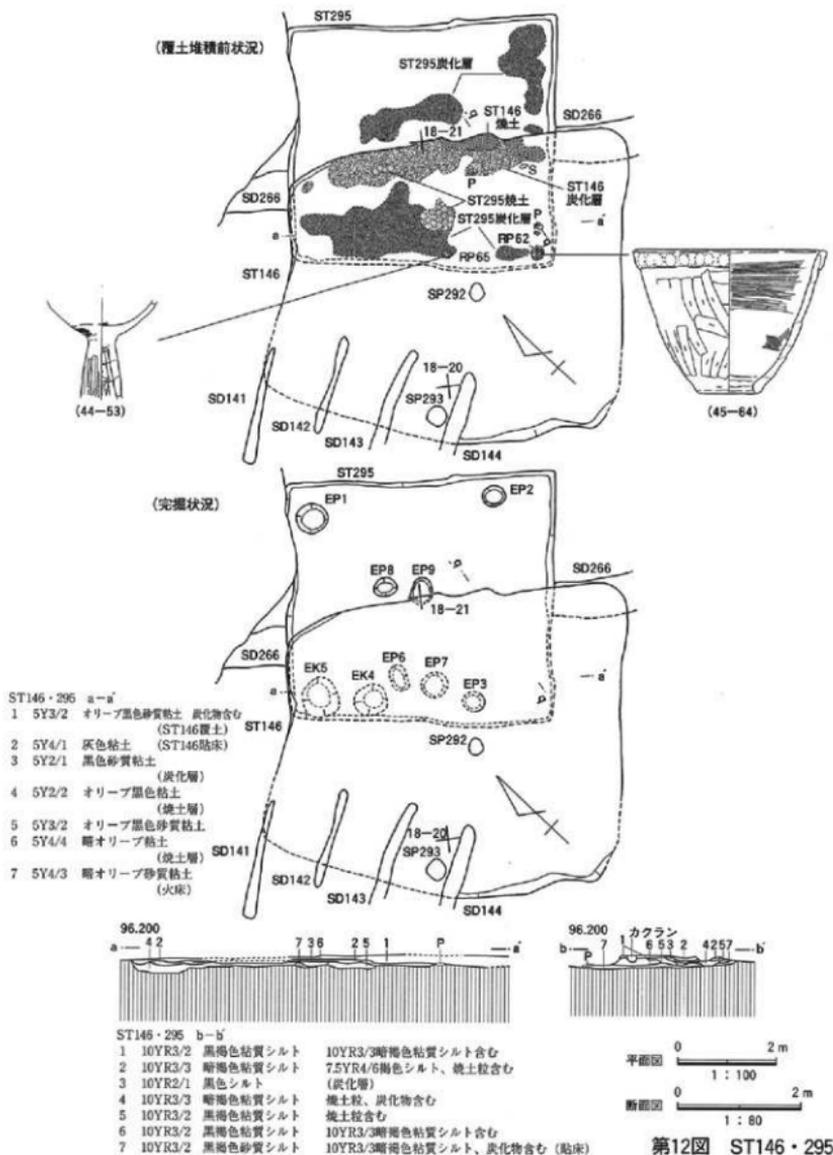
28-23

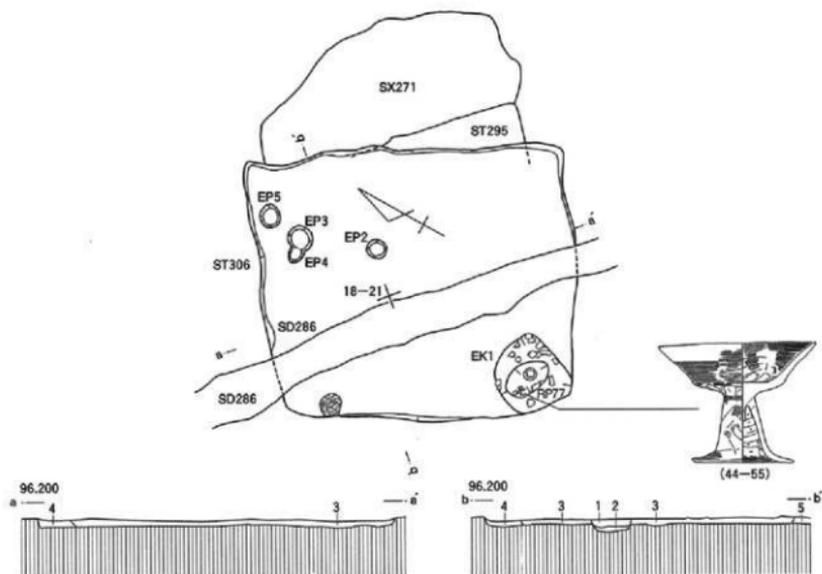


- ST83 (ST206・SK297・298)
- | | | | |
|---|---------|----------|-------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色砂質シルト | 炭化物含む (ST296覆土) |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色砂質シルト | 炭化物含む |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物含む |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | (下部に炭化物層状堆積) |
| 5 | 10YR3/1 | 黒褐色粘土 | 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト含む (貼床) |
| 6 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物含む |
| 7 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物、土器片含む (SK297・298覆土) |



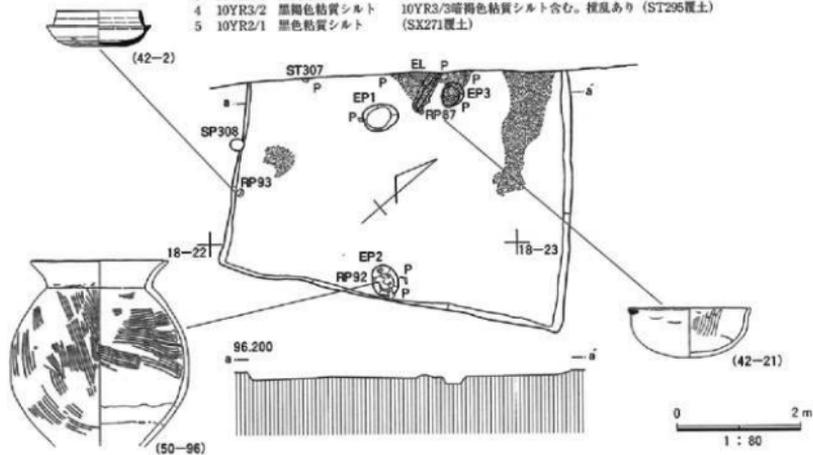
第11図 ST38・495・83・296





ST306

- | | | | |
|---|---------|----------|----------------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色砂質シルト | 焼土、炭化物含む |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | 10YR3/4暗褐色粘質シルト、焼土、炭化物含む |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色粘土 | 焼土、炭化物含む |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | 10YR3/3暗褐色粘質シルト含む。柱痕あり (ST295覆土) |
| 5 | 10YR2/1 | 黒色粘質シルト | (SX271覆土) |



第13図 ST306・307

mで、東西軸の全長は不明である。床面は貼床で、覆土の深さは25cmを測る。床面直上に炭化層が広がることから焼失住居と考えられる。

ST369は、C区西側17・18-27・28Gで検出された。上面の遺構である。西側は調査区外のため未調査である。ST474の南側を切る。平面形は隅丸方形で規模は南北軸3.4m、東西軸3.3mを測る。長軸方向はN-17°-Wである。床面は直床で覆土の深さは15cmを測る。やや急な壁の立ち上がりである。

ST474は、C区西側17-28Gで検出された。上面の遺構である。西側は調査区外のため未調査である。床面は貼床で覆土の深さは15cmで、壁の立ち上がりは、やや急である。

ST351・352・349・473・376（第15図）ST351はC区南側18・19-24・25Gで検出された。下面の遺構である。ST349の南側を切る。平面形は隅丸長方形で規模は東西軸3.6m、南北軸3.1mを測る。長軸方向はN-87°-Eである。床面は直床で覆土の深さは6cmを測る。やや急な壁の立ち上がりである。南側に炭化層が堆積している。出土遺物は、有段坏や口縁部直下に突帯のある壺の破片など小破片を含めて50点ほどである。

ST352はC区南側19-25Gで検出された。上面の遺構である。ST349東側を切る。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸3.7m、東西軸3.4mを測る。長軸方向はN-33°-Eである。床面は直床で、覆土の深さは20cmを測る。やや垂直な壁の立ち上がりである。壁面から等間隔に柱穴が3本検出された。出土遺物は丸底の坏の底部など小破片50点ほどである。

ST349はC区南側18・19-25・26Gで検出された。下面の遺構である。ST472・473南東側を切る。平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.9m、東西軸4.8mを測る。長軸方向はN-30°-Wである。床面は直床で、覆土の深さは5cmを測る。壁は、やや急に立ち上がる。北東角に炭化層が検出された。北側をSX350（近代以降の焼土遺構）から切られておりカマド施設などの存在を確認できなかった。出土遺物は肥厚する口縁部を持つ甕など小破片30点である。なお、流れ込みではあるが、アメリカ型石鍬が出土している。

ST473はC区南側18-26Gで検出された。下面の遺構である。南側をST472・349から切られている。床面は貼床で、覆土の深さは16cmを測る。壁の立ち上がりは急である。出土遺物は高坏の裾部など10点ほどである。

ST376はC区中央18-28Gで検出されている。上面の遺構である。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸4.1m、南北軸3.0mを測る。長軸方向は、N-23°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。南西壁側に柱穴が1本検出された。出土遺物は、丸底の坏の底部や肥厚する口縁部を持つ甕の小破片など30点である。

ST345・346・472・360・364（第16図）ST345はC区南側17・18-25Gで検出された。西側は調査区外のため未調査である。上面の遺構である。また北東側でST346・472を切っている。規模は東西軸4.6mで、南北軸の全長は不明である。床面は貼床で、覆土の深さは15cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。南北壁面近くに柱穴が2本検出された。土器片とともに南壁側から炭化層を確認している。2棟切り合いの可能性もある。出土遺物は脚部中空で下位に広がる高坏の脚部、やや胴張りの中型甕小破片など150点ほどである。

ST346はC区南側17・26Gで検出された。東壁の一部のみの検出である。下面の遺構である。床面は貼床で、覆土の深さは12cmを測る。立ち上がりは、やや急である。出土遺物は段の付く高坏の口縁部、下方に広がる中空の高坏脚部など30点ほどである。

ST472はC区南側17・18-25・26Gで検出された。下面の遺構である。南西側をST345、西側をST346から切られる。規模は南北軸7.3mで、東西軸の全長は不明である。床面は貼床で、覆土の深さは10cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。また、北東側に柱穴が1本検出されている。出土遺物は、器面調整の丁寧な高坏口縁部や壺体部など40点ほどである。

ST360は、C区南側20・21-25・26Gで検出された。上面の遺構である。東側でST364を切る。平面形は隅丸方形で、規模は東西軸5.2m、南北軸5.1mを測る。長軸方向はN-50°-Wである。床面は貼床で、深さは22cmを測る。壁の立ち上がりは急である。壁面から等間隔に柱穴が4本検出されている。炭化層を西側で検出し、炭化した木材を北東側で確認した。焼失住居の可能性はある。出土遺物は、ミニチュア高坏の脚部、中空で下位に広がる高坏の脚部、平底の坏の底部、壺の小破片200点ほどである。

ST364はC区南側21-25・26Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査で、北西側をST360に切られている。規模は南北軸5.1mで、東西軸の全長は不明である。床面は、貼床で覆土の深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは急である。柱穴は、南西側を中心に4本確認された。床面直上に炭化材が散乱し、焼失住居の可能性はある。出土遺物は、柱状中空の高坏の脚部や短く外反する口縁部を持つ坏など壺の小破片を含めて100点ほどである。

ST367・373・374 (第17図) ST367はC区南側18・19-26・27Gで検出された。上面の遺構である。南側と北側をそれぞれST352・365から切れ、北側でST368を切る。規模は、東西軸5.9mで、南北軸の全長は不明である。長軸方向はN-122°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは14cmを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。南西壁側に柱穴が1本検出されている。南壁中央にカマドを付設しており燃焼部と東側の袖部のみ確認している。住居中央を中心に南北に炭化層が広がり、焼失住居の可能性はある。出土遺物は、柱状中空の高坏の脚部や丸底の坏の底部など小破片を含め200点ほどである。

ST373は、C区中央17・18-28・29Gで検出された。上面の遺構でST374南側を切る。平面形は隅丸方形で、規模は南北軸3.0m、東西軸2.9mを測る。長軸方向はN-61°-Eである。床面は直床で、覆土の深さは15cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。南壁側に柱穴が2本確認されている。出土遺物は壺の底部などの小破片20点ほどである。

ST374はC区中央17・18-29Gで検出された。上面の遺構である。ST373から南側を切られる。床面は直床で、覆土の深さは4cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。北側に柱穴が1本確認されている。

ST480・471・490・475 (第18図) ST480は、C区南側18・19-25・26Gで検出されている。下面の遺構である。ST349・352・367から上層を切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸6.4m、南北軸4.8mを測る。長軸方向はN-43°-Wである。床面は貼床で覆土の深さは18cmを測る。壁は、やや緩やかに立ち上がる。南壁沿いに柱穴を2本確認した。また、北壁沿い

に炭化物塊と焼土塊を検出した。出土遺物は、甕・小型壺の小破片20点ほどである。

ST471はC区北側20・21-30・31Gで検出された。下面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。ST490、SD87からそれぞれ東側と北側を切られる。床面は貼床で覆土の深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは急である。上層にST490に関連する炭化物塊や炭化材が確認されている。出土遺物は、二重口縁下部に刻みのある壺や甕の口縁部などの小破片30点ほどである。

ST490はC区北側21-30・31Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。ST471を切りSD87から切られる。床面は貼床で覆土の深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは急である。住居中央寄りに炭化層と焼土層が確認された。焼土部は少し窪む。地床炉と考えられる。炭化材も多少検出され、焼失住居と考えられる。出土遺物は土師器片20点ほどである。

ST475はC区北側21-32・33Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。床面は直床で、覆土の深さは6cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。中小型の甕の破片30点が出土した。

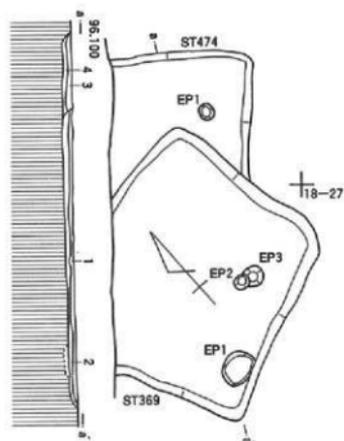
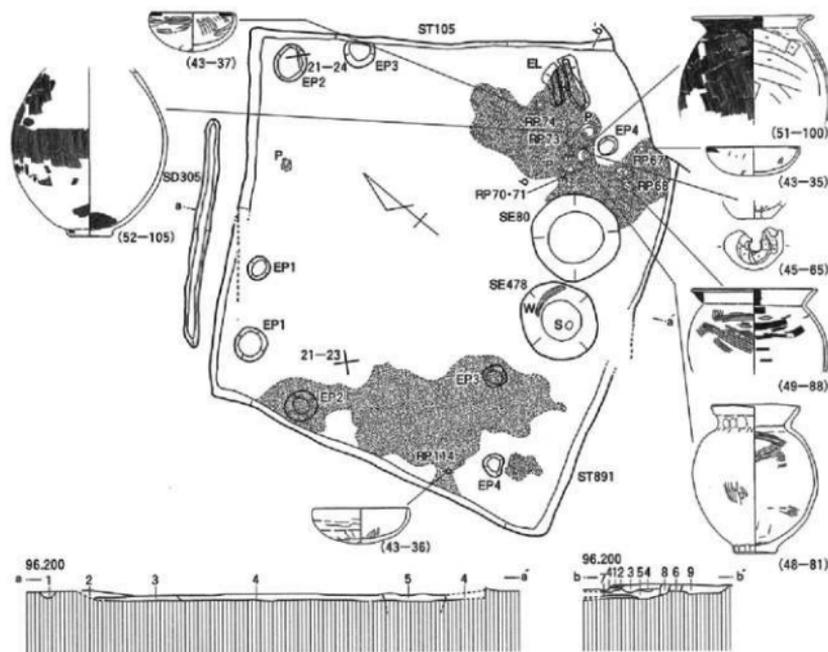
ST365・366・381・383 (第19図) ST365は、C区中央19・20-26・27Gで検出された。上面の遺構である。ST366・368・383を切る。平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.8m、東西4.7mを測る。長軸方向はN-41°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは28cmを測る。壁の立ち上がりは急である。柱穴は、北壁に3本、東壁沿いに1本確認した。南西側に炭化層を床面直上で検出し、広がりを見せている。焼失住居と考えられる。出土遺物は坏や中型甕の口縁部など200点ほどである。なお流れ込みで二重口縁下部に刻みのある壺の頸部が出土した。

ST366はC区中央19・20-27・28Gで検出された。上面の遺構で、ST368・381・382を切る。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.2m、東西軸5.4mを測る。長軸方向はN-57°-Eである。床面は貼床で覆土の深さは32cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。北側に柱穴を2本検出した。北壁沿いに炭化層が検出された。焼失住居の可能性はある。出土遺物は、須恵器では、TK208形式並行の坏蓋・TK23形式並行の坏身が出土しており、土師器では、脚部中空で下位に広がる高坏の脚部、ミニチュア坏や口縁部が短く外反する坏など併せて400点ほど出土している。

ST381は、C区中央19・20-28・29Gで検出された。上面の遺構である。ST366から切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸5.7m、東西軸5.3mを測る。床面は貼床で覆土の深さは19cmを測る。長軸方向はN-80°-Wである。壁の立ち上がりは、やや急である。出土遺物は脚部中空で下位に広がる高坏の脚部、丸底の坏、管玉など小破片を含め300点ほどである。

ST383はC区中央20-26・27Gで検出された。上面の遺構で、北西側をST365から切られる。規模は東西軸3.4mで、南北軸の全長は不明である。床面は貼床で覆土の深さは27cmを測る。壁の立ち上がりは急である。出土遺物は甕の口縁部など小破片20点ほどである。

ST368・382 (第20図) ST368はC区中央18・19-26-28Gで検出されている。下面の遺構で、ST365・366から切られる。規模は南北軸5.6mを測る。床面は貼床で、覆土の深さは22cm



ST105 a-a'

- | | | | |
|---|---------|-----------|-----------|
| 1 | 5Y3/2 | オリブ黒色砂質粘土 | (SD305覆土) |
| 2 | 5Y2/2 | オリブ砂質粘土 | 褐色粘土含む |
| 3 | 5Y3/2 | オリブ黒色粘土 | 灰色粘土含む |
| 4 | 5Y3/1 | オリブ黒色粘土 | 灰色微砂含む |
| 5 | 2.5Y2/1 | 黒色粘土 | 黒色・灰色粘土含む |

ST105 b-b'

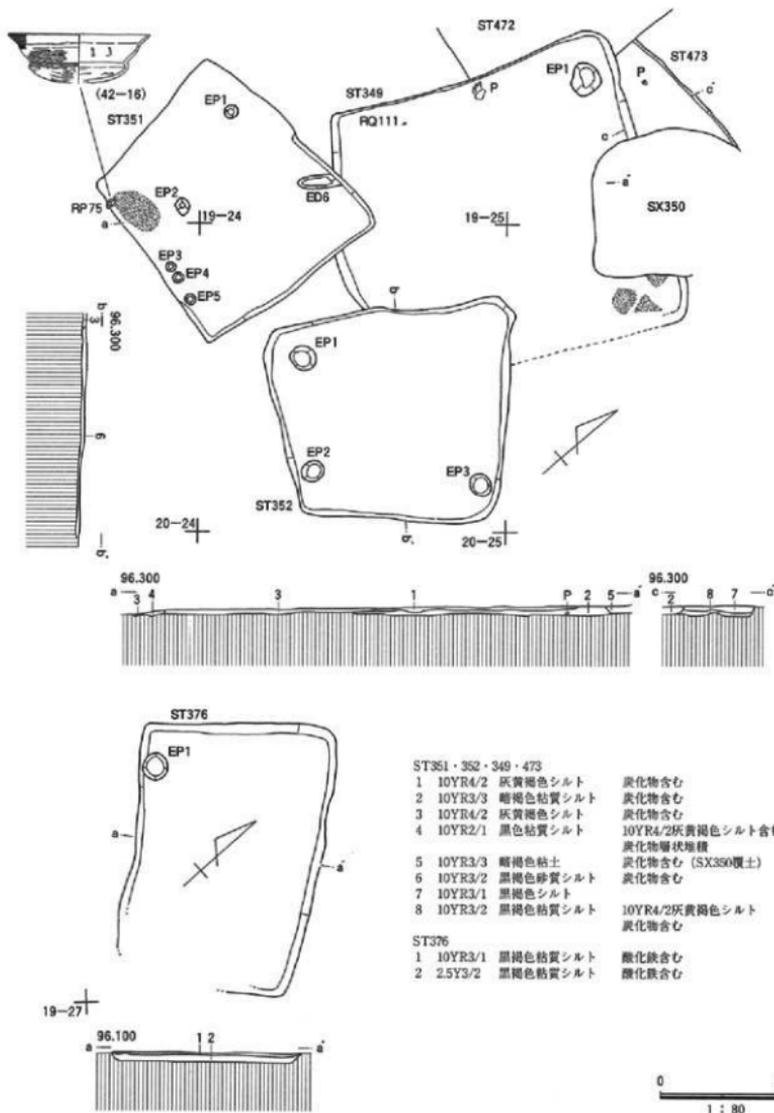
- | | | | |
|---|----------|-----------|-------------------|
| 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色細砂 | (焼土層) |
| 2 | 7.5YR4/6 | 褐色微砂 | 炭化物含む |
| 3 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質シルト | 焼土含む |
| 4 | 10YR2/1 | 黒色砂質シルト | 焼土含む |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 焼土含む |
| 6 | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | (カマド基部) |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色粘質シルト | 10YR3/4暗褐色粘質シルト含む |
| 8 | 10YR3/3 | 暗褐色砂質シルト | 焼土粒含む |
| 9 | 10YR2/2 | 黒褐色砂質シルト | |

ST369・474

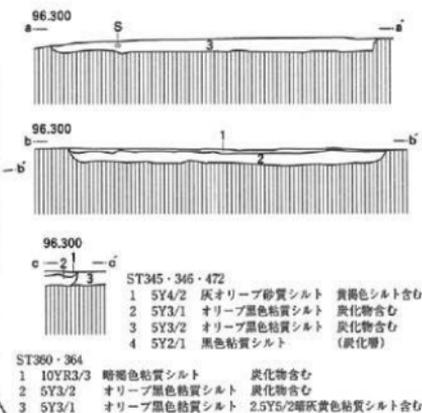
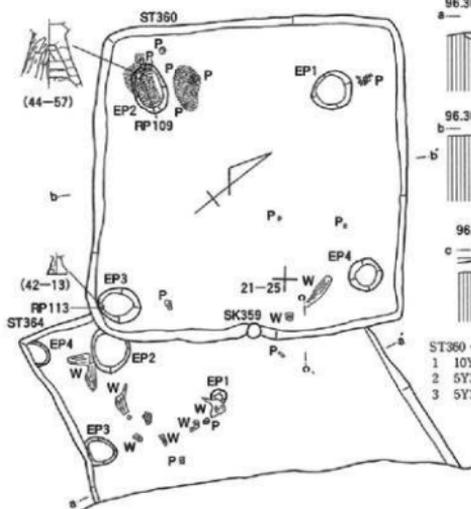
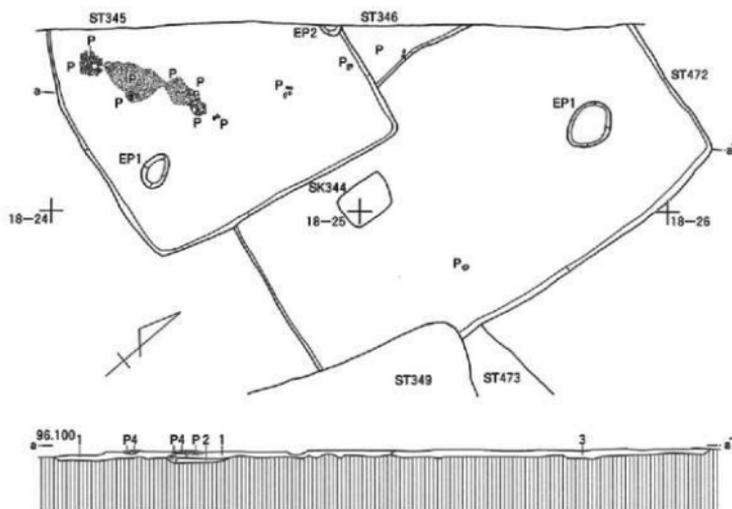
- | | | | |
|---|---------|----------|-------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト | 炭化物含む |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト | |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト | |



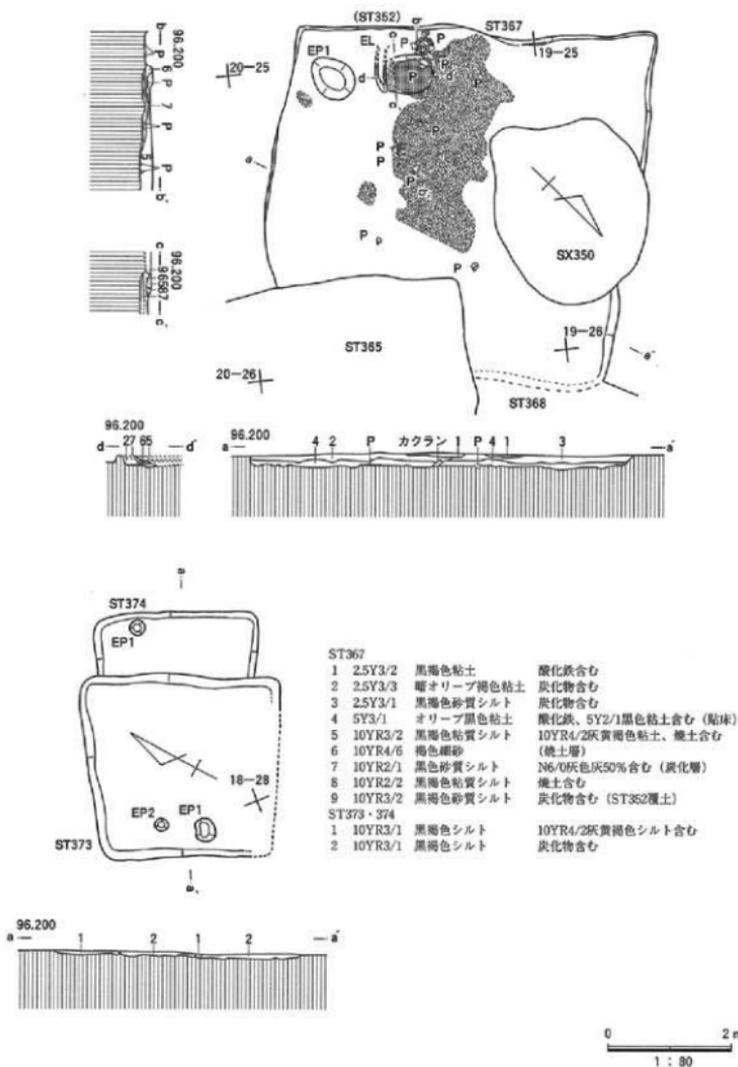
第14図 ST105・891・369・474



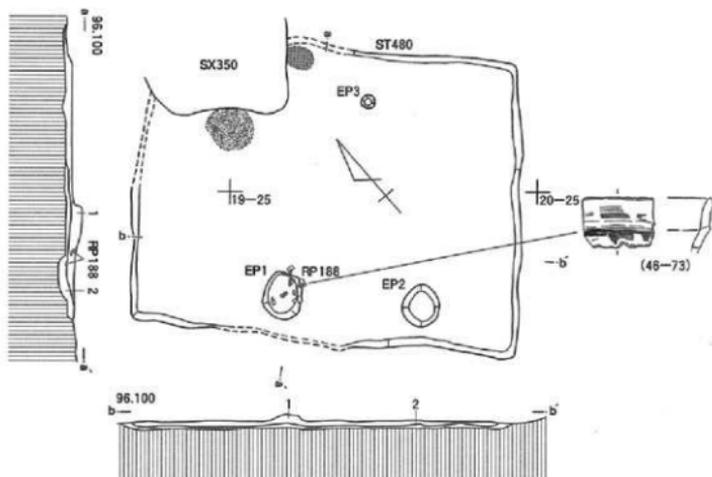
第15図 ST351・352・349・473・376



第16図 ST345・346・472・360・364

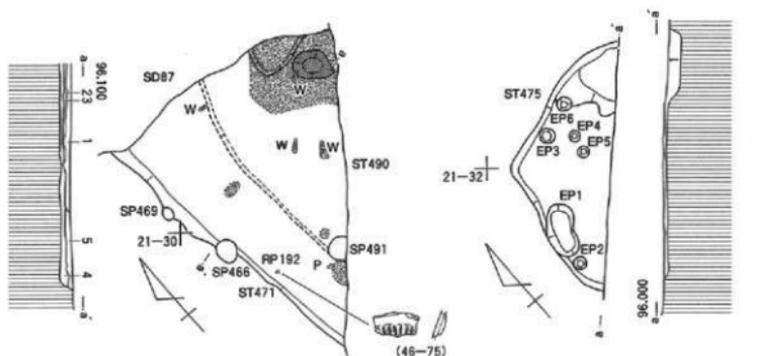


第17図 ST367・373・374



ST480

- | | | |
|---|-----------------|----------|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 | 炭化物含む |
| 2 | 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 | 焼土、炭化物含む |



ST471・490

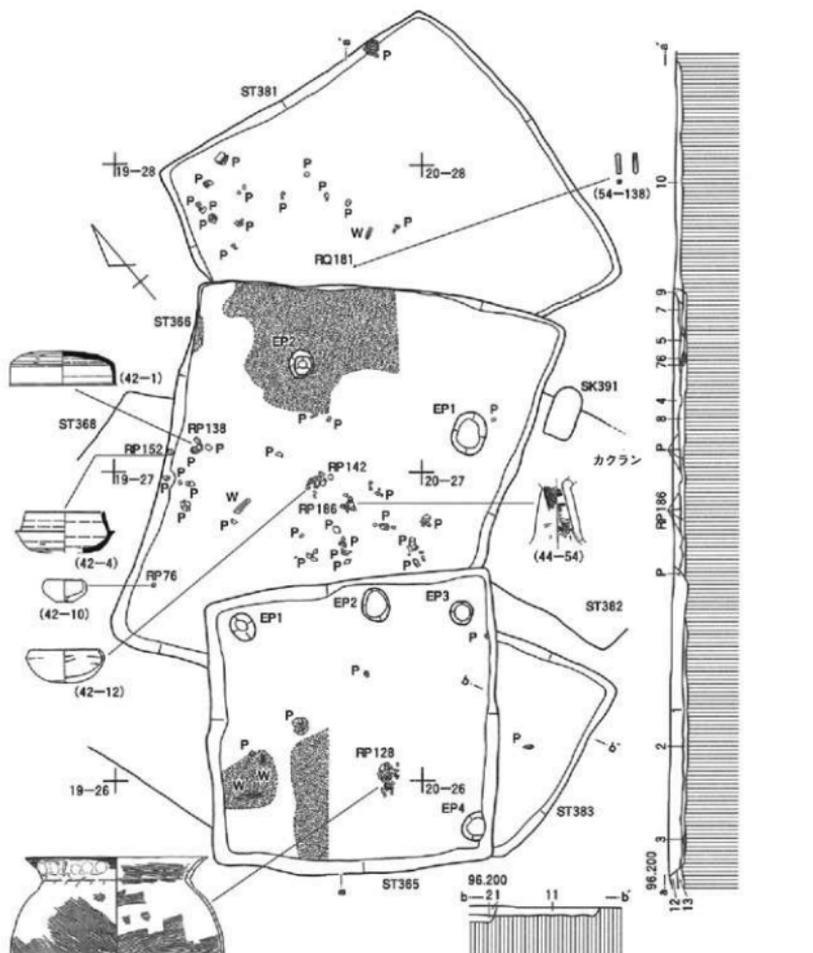
- | | | |
|---|----------------|----------------------|
| 1 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | 2.5Y4/1 黄灰色シルト、炭化物含む |
| 2 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | (炭化物) |
| 3 | 10YR3/2 黒褐色シルト | 2.5Y4/1 黄灰色シルト含む |
| 4 | 2.5Y4/1 黄灰色シルト | 2.5Y3/1 黒褐色シルト含む |
| 5 | 2.5Y4/1 黄灰色シルト | 炭化物含む |

ST475

- | | |
|------------------|---------------------|
| 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト | 2.5Y3/2 黒褐色微砂、炭化物含む |
|------------------|---------------------|

0 2 m
1 : 80

第18図 ST480・471・490・475



- ST365・366・381・383
- | | | | |
|----|---------|-------------|---------------------------------|
| 1 | 5Y3/2 | オリブ黒色粘土 | 5Y4/1黄灰色粘質シルト、炭化物含む (ST365覆土) |
| 2 | 5Y3/2 | オリブ黒色砂質シルト | 10YR4/4褐色砂質シルト含む (ST366陥床) |
| 3 | 10YR4/6 | 褐色砂質シルト | (酸化鉄層) |
| 4 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘質シルト | 10R4/6褐色粘質シルト、炭化物含む (ST366覆土) |
| 5 | 2.5Y2/1 | 黒色粘質シルト | 炭化物含む (ST366覆土) |
| 6 | 2.5Y3/1 | 黒褐色シルト | (ST366炭化層) |
| 7 | 2.5Y3/2 | 黒褐色砂質シルト | 10YR4/4褐色砂質シルト含む (ST366覆土) |
| 8 | 5Y2/2 | オリブ褐色粘土 | 10YR4/4褐色砂質シルト含む (ST366陥床) |
| 9 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物含む (ST366覆土) |
| 10 | 2.5Y3/3 | 暗オリブ褐色粘質シルト | 10YR4/4褐色粘質シルト、炭化物含む (ST381陥床中) |
| 11 | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘質シルト | 酸化鉄含む (ST383覆土) |
| 12 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘土 | 炭化物含む (ST367覆土) |
| 13 | 5Y3/1 | オリブ黒色粘土 | (ST367陥床) |

第19図 ST365・366・381・383

を測る。壁は、やや急に立ち上がる。北側に柱穴1本、南側に貯蔵穴を1基確認している。貯蔵穴周辺に炭化層が広がる。焼失住居の可能性はある。出土遺物は、円錐形の脚部を持つ高坏、二重口縁を持つ大型壺、甕の小破片200点ほどである。

ST382はC区中央20・27・28Gで検出された。上面の遺構である。西側をST366から切られている。規模は東西軸が3.3mを測る。床面は直床で、覆土の深さは6cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。壁面に沿って柱穴が3本検出された。出土遺物は、脚部柱状中空の高坏の脚部、甕の小破片50点ほどである。

ST375・379（第21図）ST375はC区北側17・18・29・30Gで検出された。上面の遺構で、西側の一部が調査区外のため未調査である。南側をSD87から切られている。平面形は不明であるが、規模は南北軸が5.9mで、東西軸の全長は不明である。長軸方向は、N-22°-Eである。床面は貼床で覆土の深さは14cmを測る。壁の立ち上がりは急である。小柱穴を4本確認した。上層から炭化層が検出されているため、焼失住居との切り合いの可能性はある。出土遺物は、中小型甕小破片など200点ほどである。

ST379はC区北側18・19・29・30Gで検出された。上面の遺構で、住居中央をSD87が切る。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.0m、東西軸5.2mで、長軸方向はN-23°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは22cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。柱穴は、壁から等間隔に3本、中央寄りに2本確認した。出土遺物は甕の小破片40点ほどである。

ST385・378・488（第22図）ST385はC区北側20・21・29・30Gで検出された。上面の遺構である。東側でST488から切られ、西側でST378を切っている。平面形は隅丸方形で、規模は南北軸6.8m、東西軸6.6mを測る。主軸方向はN-69°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは17cmを測る。壁はやや急に立ち上がる。壁から等間隔に柱穴を4本確認した。床面直上に炭化層を確認したため焼失住居と考えられる。

また、北側壁にカマドを付設している。両袖が残存しており、長さ85cmを測る。火床・燃焼部が円形または楕円形に残っている。煙道部のみ欠損している。火床下層に炭化層及びカマド覆土と思われる層位を確認したため、カマドの作り替えが行われた可能性がある。出土遺物としては次のようなものがある。須恵器は甕の口縁部で、TK208形式並行のものと考えられる。土師器は坏で、体部から内弯して立ち上がるもの、口縁部が外反するものが出土している。その他、無底で砲弾形の甕、やや長胴化した甕が出土している。また、SK489が住居の東側を切っている。規模は長軸160cm、短軸110cm、深さ35cmを測る。覆土内に炭化物が層状に含まれる。出土遺物はやや長胴化した甕など20点である。

ST378はC区北側19・20・29・30Gで検出された。上面の遺構である。東側でST385から切られる。規模は南北軸が5.4mで、東西軸の全長は不明である。長軸方向は、N-21°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは16cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。西側で柱穴が1本確認された。出土遺物は、ミニチュア坏や甕小破片など20点ほどである。

ST488はC区北側21・29Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。西側でST385を切る。上層が削平されており、貼床検出であった。北壁西寄りに焼土

域が検出された。出土遺物は、鉢形の坏や甔、中小型の甕など30点ほどである。

ST445・887(第23図) ST445は、C区北側19・20-31・32Gで検出された。上面の遺構で、南東側をSD87から切られ、真上からST887を切る。規模は、東西軸が7.0mで、南北軸の全長は不明である。主軸方向は、N-31°-Wである。床面は直床で、覆土の深さは15cmを測る。主柱穴ではないが、柱穴を3本確認した。また、床面直上に炭化層を確認したため、焼失住居と考えられる。西壁に90cm内外の不整形の焼土域を検出したが、この住居跡のカマド跡と推定される。坏は体部から内湾して立ち上がるもの、口縁部が外反するものが出土している。その他、中空の高坏の脚部や球胴形の甕など400点ほど出土している。

ST887はC区北側19・20-31・32Gで検出された。下面の遺構で、真上からST445に切られている。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸6.8m、東西軸6.1mを測る。また、長軸方向は、N-31°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは5cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。また、柱穴が6本検出されている。北西側と南東側の柱穴が、やや中央寄りに位置する。出土遺物は、脚部がハの字に開く高坏や器台の受部、やや粗製化した小型壺、二重口縁の壺の破片を含めて50点ほどである。

ST119・492(第24図) ST119は、A・D区18-20-17・18Gで検出された。下面の遺構で、平面形は隅丸長方形である。規模は東西軸7.7m、南北軸6.9mを測る。長軸方向はN-71°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは10cmを測る。壁の立ち上がりは急である。住居内より柱穴を3本確認している。

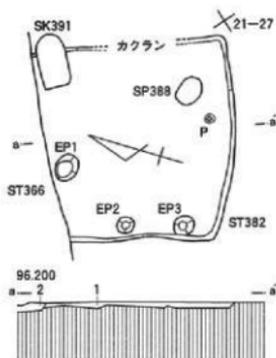
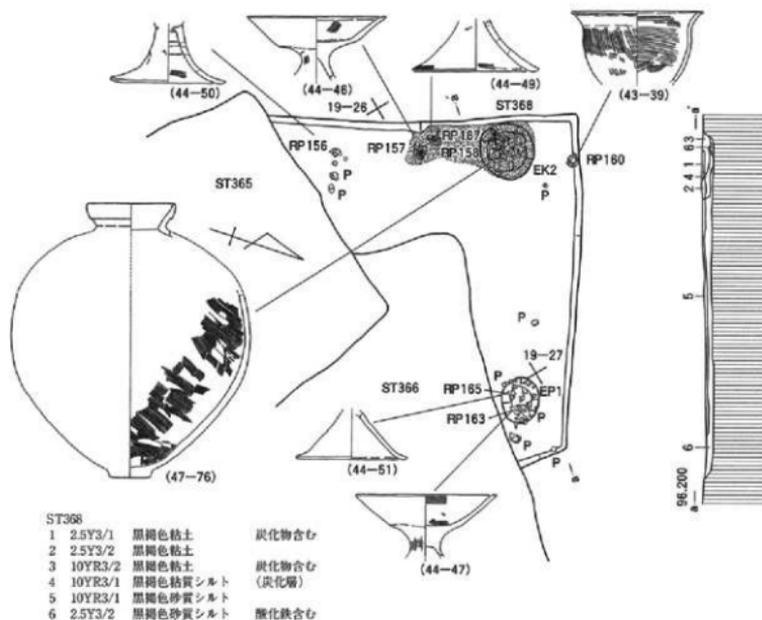
ST492はD区北側17-16Gで検出された。西側は調査区外のため未調査となった。下面の遺構である。床面は貼床で、覆土の深さは27cmを測る。壁はやや急に立ち上がる。

ST686・384(第25図) ST686はD区北側20・21-15・16Gで検出された。上面の遺構で、東側をSD22に切られる。床面は貼床で、覆土の深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。8本の柱穴を検出しており、北西隅の柱穴が中央に寄っている。出土遺物は、柱状中空の高坏の脚部や甕の破片など60点ほどである。

ST384はC区中央21-28Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。床面は貼床で、覆土の深さは10cmを測る。壁の立ち上がりは、やや急である。南西側に柱穴1本が確認された。

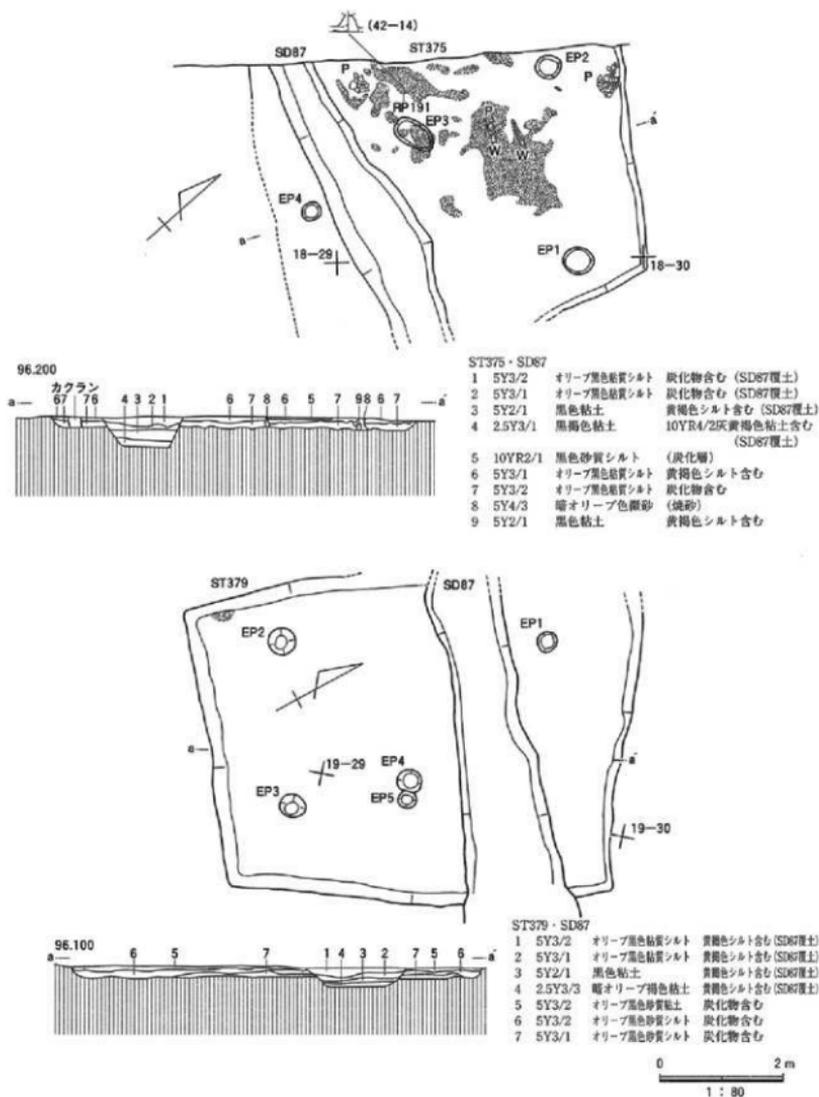
ST684・727(第26図) ST684はD区北側19・20-15・16Gで検出された。上面の遺構で、北西角をSK685が切っている。SK685の規模は長軸90cm、短軸80cmで、その中からやや扁平な直口壺が出土している。平面形は隅丸長方形である。規模は東西軸5.0m、南北軸4.6mを測る。長軸方向はN-21°-Eである。床面は貼床で、覆土の深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは急である。壁面から等間隔に柱穴を4本確認した。坏は、口縁部にかけて内湾するもの、直線的に立つものが出土している。その他、砲弾形で無底の甔など150点ほどである。

ST727はD区北側19-15・16Gで検出された。上面の遺構で、東側をST684に切られている。規模は、南北軸4.5mで、東西軸の全長は不明である。主軸方向は、N-69°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは20cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。西壁中央にカマドが付設

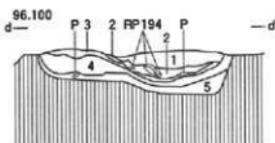
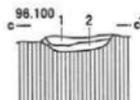
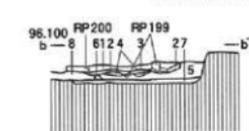
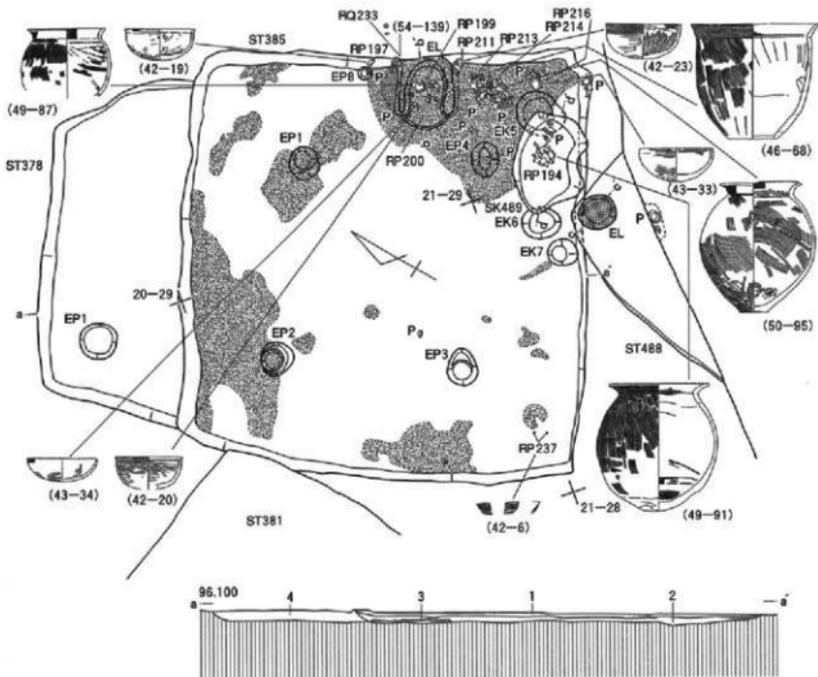


0 2 m
1 : 80

第20図 ST368・382



第21図 ST375・379



ST385-378

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト (炭化層)
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (ST378覆土)

ST385EL

- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト 焼土粒含む
- 2 10YR1.7/1 黒色微砂 焼土粒含む (炭化層)
- 3 10YR4/4 褐色シルト (焼土層か)
- 4 5YR3/5 暗赤褐色シルト (大床)

SK489

- 5 10YR4/1 暗灰色粘質シルト
- 6 2.5Y2/1 黒色砂質シルト
- 7 10YR3/2 黒褐色粘土
- 8 10YR3/2 黒褐色微粘質シルト

ST488EL

- 1 7.5YR4/4 褐色シルト (大床)
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト

SK489

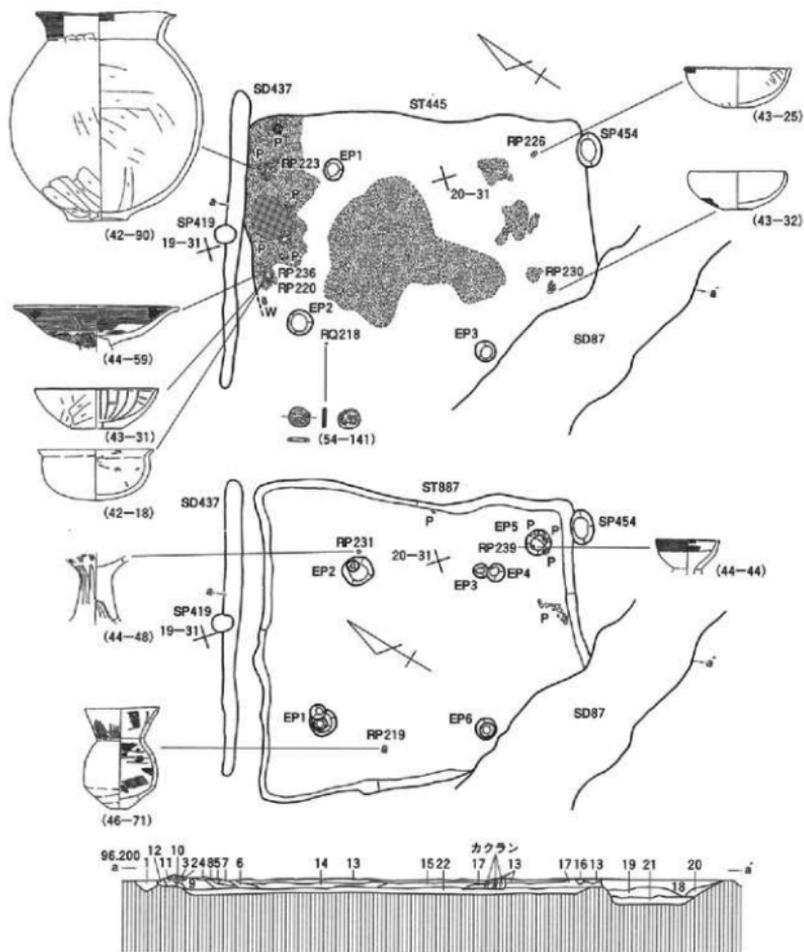
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 炭化物層状堆積 (下部)
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 10YR3/3暗褐色粘質シルト含む
- 3 10YR1.7/1 黒色微砂 焼土粒含む
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 10YR3/3暗褐色粘質シルト、焼土、炭化物含む
- 5 10YR3/1 黒褐色粘土 10R4/2赤黄褐色粘土、炭化物、焼土含む

ST385EL・ST488EL・SK489断面

0 2 m
ST385・378
1 : 80

0 1 m
1 : 40

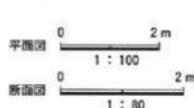
第22図 ST385・378・488



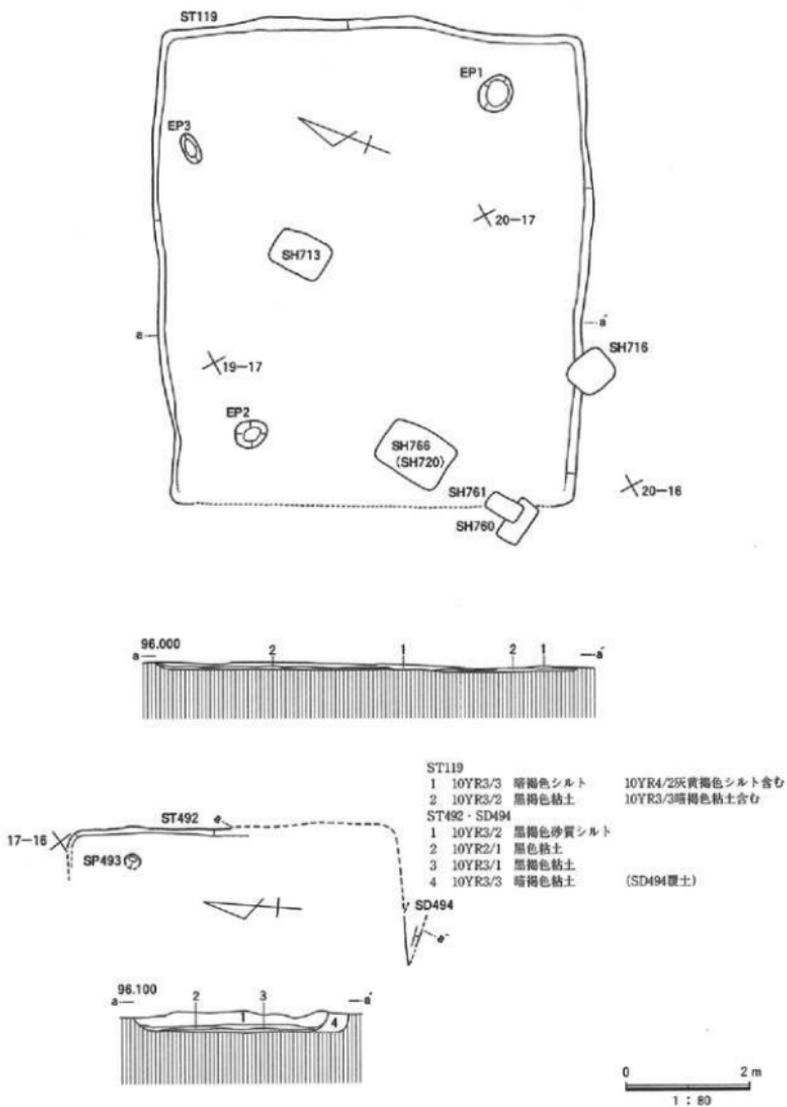
ST445・887

- 1 オリーブ黒色粘質シルト
- 2 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
- 3 10YR4/4 褐色砂質シルト (焼土層)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 6 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 炭化物含む
- 7 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 構築材含む
- 8 10YR3/3 暗褐色粘質シルト
- 9 10YR2/2 黒色粘質シルト (焼土層)
- 10 10YR2/1 黒色粘土
- 11 10YR3/3 暗褐色砂質シルト

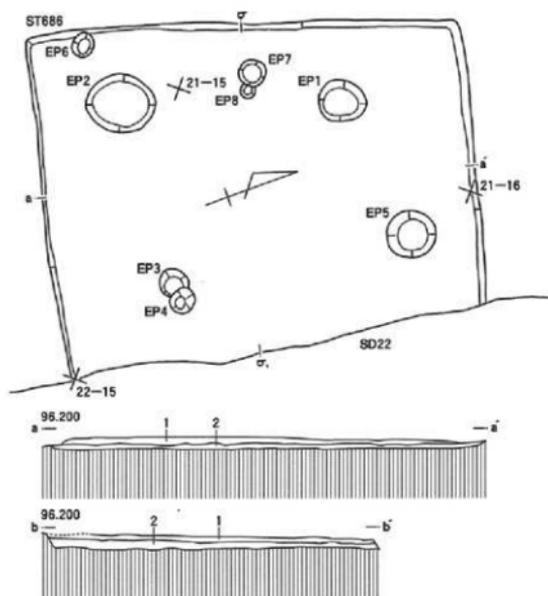
- 12 10YR3/2 黒褐色粘質シルト
- 13 10YR3/3 暗褐色シルト質砂砂
- 14 5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト 下部層状に炭化物堆積
- 15 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト 下部層状に炭化物堆積
- 16 10YR2/1 黒色粘土
- 17 5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト 炭化物含む
- 18 5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト 黄褐色シルト含む
- 19 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト
- 20 5Y2/1 黒色粘土 灰白色粘土含む
- 21 5Y2/1 黒色粘土 黄褐色シルト含む
- 22 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト (ST887覆土)



第23図 ST445・887

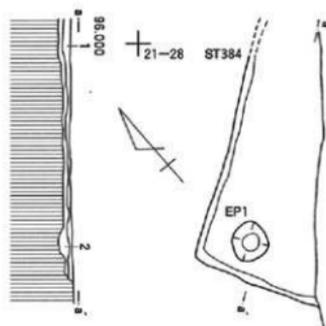


第24図 ST119・492



ST686

- 1 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト



ST384

- 1 5Y2/2 オリーブ褐色粘質シルト
- 2 5Y2/1 黒色粘土



第25図 ST686・384

されており、全体的な残存長は130cmで、袖部長が103cmを測る。中央に楕円形の燃焼部が検出された。出土遺物は、やや撫肩で長胴化した甕の破片など100点ほどである。

ST814・776・777 (第27図) ST814はD区北側19・20-15・16Gで検出された。下面の遺構である。真上からST684・727に切られている。貼床のみ検出された。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸6.5m、南北軸4.7mを測る。長軸方向はN-69°-Eである。壁面から等間隔に柱穴4本が確認された。

ST776はD区北側21-15・16Gで検出された。下面の遺構である。北側でST777を切っておりSD22・746、ST618・686に切られる。床面は貼床で、覆土の深さは8cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかである。北壁に柱穴1本を確認した。

ST777はD区北側20・21-16~18Gで検出された。下層の遺構である。SD22、ST686・776から切られている。床面は貼床で、覆土の深さは7cmを測る。壁の立ち上がりは急である。北壁に柱穴1本が確認された。

ST544・545・708・608・619 (第28図) ST544は、D区北側23-17・18Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。南側でST545を切る。床面は貼床で、覆土の深さは22cmを測る。壁の立ち上がりは急である。

ST545はD区北側23-16・17Gで検出された。上面の遺構である。東側は調査区外のため未調査である。北側でST544から切られる。床面は貼床で、覆土の深さは23cmを測る。壁の立ち上がりはやや緩やかである。

ST708は、D区北側22-16Gで検出された。上面の遺構である。西側でSD22に切られる。上は削平されている。床面は貼床で、覆土の深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは急である。出土遺物は中小型甕の小破片50点ほどである。

ST608は中央D区21・22-14・15Gで検出された。上面の遺構で、直上からST619に切られ、西側でST615に切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸5.4m、東西軸5.0mを測る。長軸方向はN-38°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは28cmを測る。壁はやや垂直に立ち上がる。柱穴は、主柱穴を含め、壁面に沿って8本確認している。出土遺物は、坏の体部、柱状中空の高坏の脚部、甕の小破片50点ほどである。

ST619はD区中央21・22-14・15Gで検出された。上面の遺構である。焼土域や遺構内土坑が検出された。焼土域はST608覆土上層に堆積しており、長軸40cmの楕円形である。地床炉の可能性ある。遺構内土坑は長軸150cm、短軸140cmで、覆土の深さが15cmの楕円形である。出土遺物は高坏の坏部や口縁部が僅かに外反する坏など50点ほどである。

ST659・816・820 (第29図) ST659はD区中央21・22-11・12Gで検出された。下面の遺構である。北側をSD658から切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸5.2m、南北軸4.6mを測る。主軸方向は、N-50°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは35cmを測る。壁の立ち上がりは急である。床面直上に焼土を含む炭化層が堆積し焼失住居と考えられる。

焼土域を3箇所検出したが、西壁中央の焼土域は、カマドが破壊されたものと思われ、焼土塊が散乱していた。柱穴は主柱穴を含めて10本検出されている。坏は、平底の底部から直線的

に立ち上がり、口縁部にかけて屈曲するものや、口縁部が内湾するものがある。高坏は脚部中位に貫通しない支孔のあるもの、裾部に段のあるものを含めて200点ほど出土している。

ST816は、D区中央22-13Gで検出された。下面の遺構である。東側半分をSD22から、南側をSD818から切られている。床面は貼床で、覆土の深さは19cmを測る。壁の立ち上がりは急である。北西壁寄りに柱穴1本が確認された。

ST820はD区中央19-14Gで検出された。下面の遺構である。南側が削平により検出できなかった。床面は直床で、覆土の深さは8cmを測る。二重口縁の壺の破片が出土している。

ST832 (第30図) ST832はD区中央20-12・13Gで検出された。下面の遺構である。西側は調査区外のため未調査である。主軸方向はN-105°-Eである。規模は南北軸が5.0mで、東西軸の全長は不明である。床面は貼床で、覆土の深さは19cmを測る。東壁中央に焼土域を確認した。カマド跡と推定される。床面直上に炭化層が検出されたため焼失住居と考えられる。高坏は坏部・裾部中位に段のある大型のものがある。その他、坏、壺、甕の破片100点ほどである。

ST747・748・615 (第31図) ST747はD区南側23-6・7Gで検出された。下面の遺構で、西側は調査区外のため未調査である。床面は直床で覆土の深さは39cmを測る。壁の立ち上がりは急である。出土遺物は、直立する口縁部を持つ坏、坏部・裾部中位が屈曲する大型の高坏や坏部中位に段のある高坏、中小型甕の小破片など150点ほどである。

ST748は、D区南側22-8Gで検出された。下面の遺構である。西側は調査区外のため未調査である。床面は直床で、覆土の深さは22cmを測る。壁の立ち上がりは急である。東壁寄りに柱穴を2本確認した。甕形で無底の甔、壺、甕など100点ほど出土している。

ST615は、D区中央20・21-13・14Gで検出された。下面の遺構である。平面形は隅丸長方形だが、多少西壁が広い。規模は南北軸5.9m、東西軸5.6mを測る。床面は貼床で、覆土の深さは30cmを測る。壁の立ち上がりは、やや垂直である。北壁寄りに円形の焼土域を検出した。壁面に沿って柱穴が7本確認された。出土遺物は、坏部に弱い稜がある高坏、甕の小破片60点ほどである。

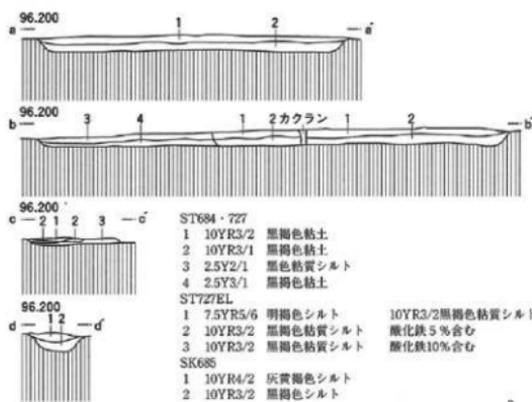
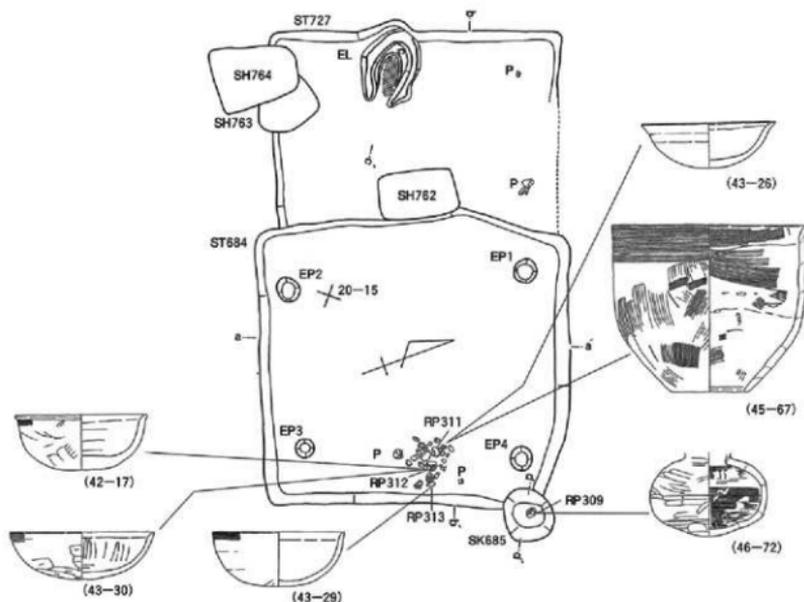
ST664・789・745 (第32図) ST664はD区中央20・21-12・13Gで検出されている。上面の遺構でSD663に南側を切られる。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸5.1m、南北軸4.5mを測る。長軸方向は、N-72°-Wである。床面は貼床で、覆土の深さは25cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。壁面に沿って柱穴が7本確認された。また南側に焼土域を確認した。出土遺物は、内面に稜が残る坏、段のある裾部を持つ高坏など100点ほどである。

ST789は、D区北側17・18-15・16Gで検出された。上面の遺構である。西側は調査区外のため未調査である。規模は南北軸が5.1mである。床面は貼床で、覆土の深さ10cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。南壁寄りに柱穴3本を確認した。

ST745は、D区中央21・22-14・15Gで検出された。下面の遺構である。東側をSD22から切れ、上層からST608に切られる。床面は貼床で、覆土の深さは18cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。

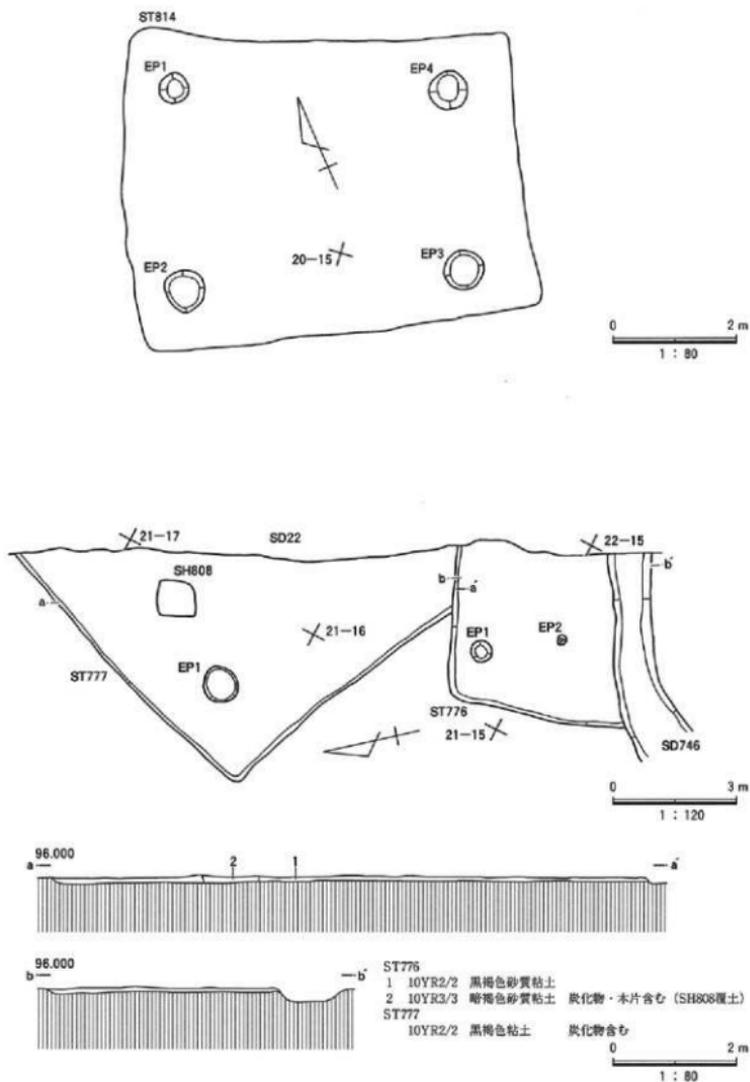
主軸・長軸方位を集計してみると以下の方位に密集している。

N-10°~23°-E: 16棟 N-27°~46°-E: 12棟 N-16°~31°-W: 17棟

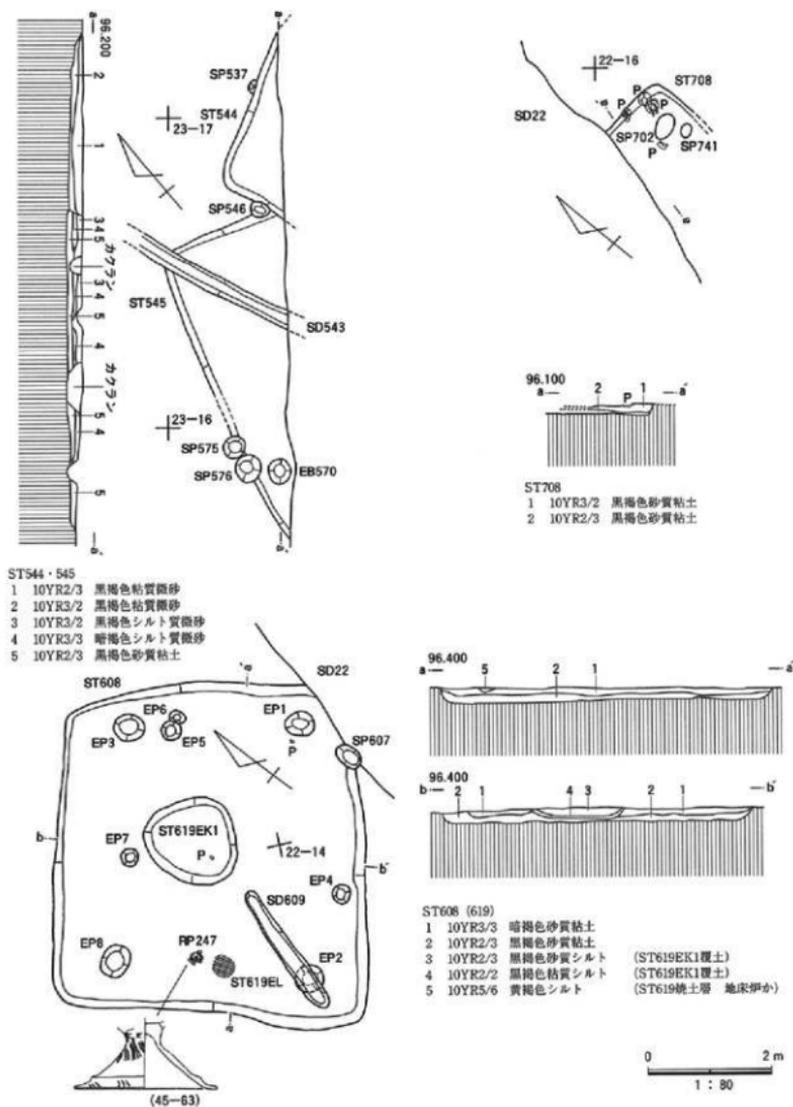


0 2 m
1 : 80

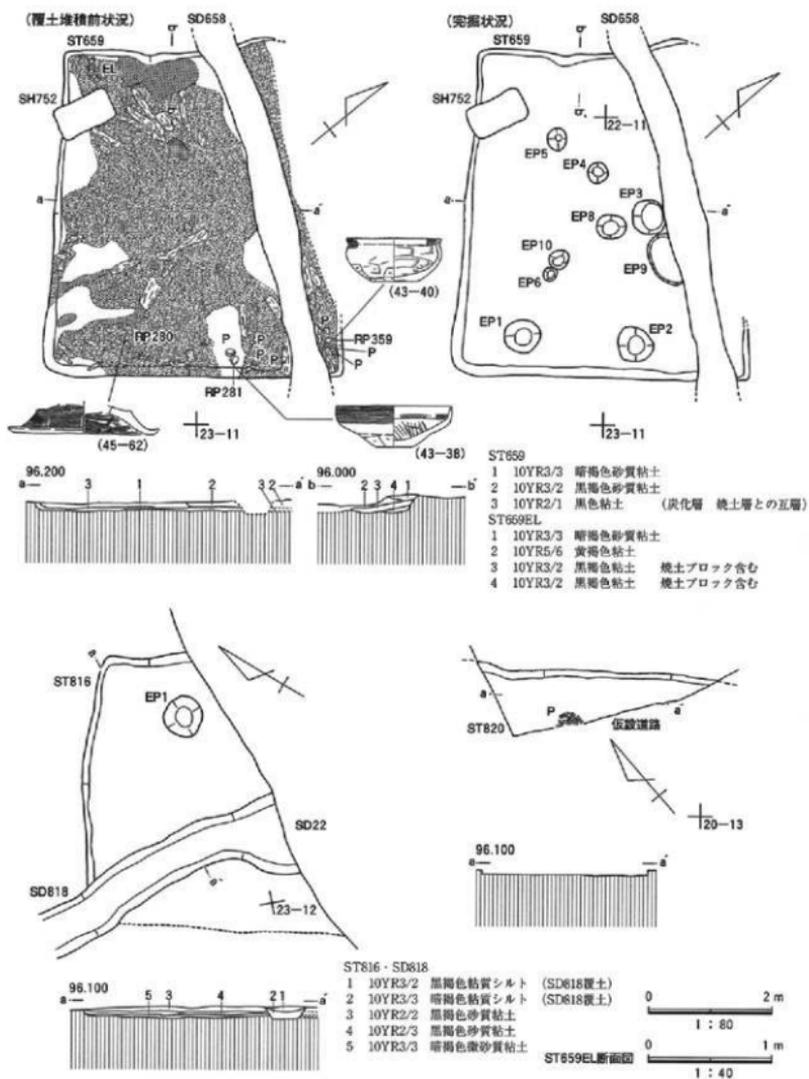
第26図 ST684・727



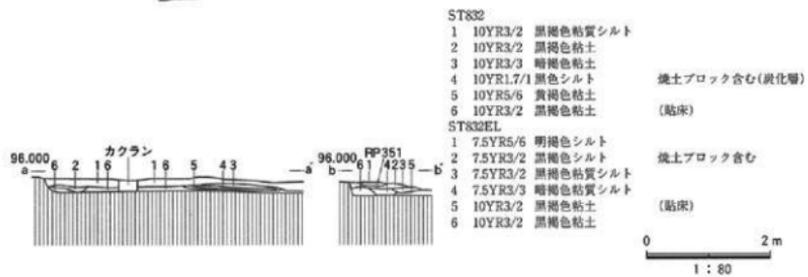
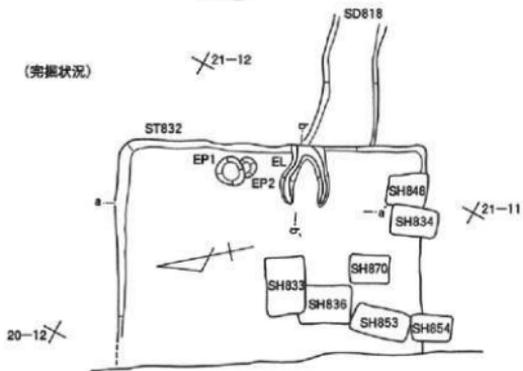
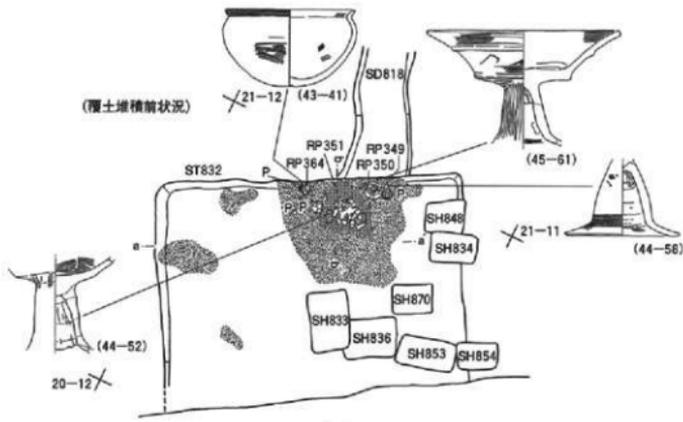
第27図 ST814・776・777



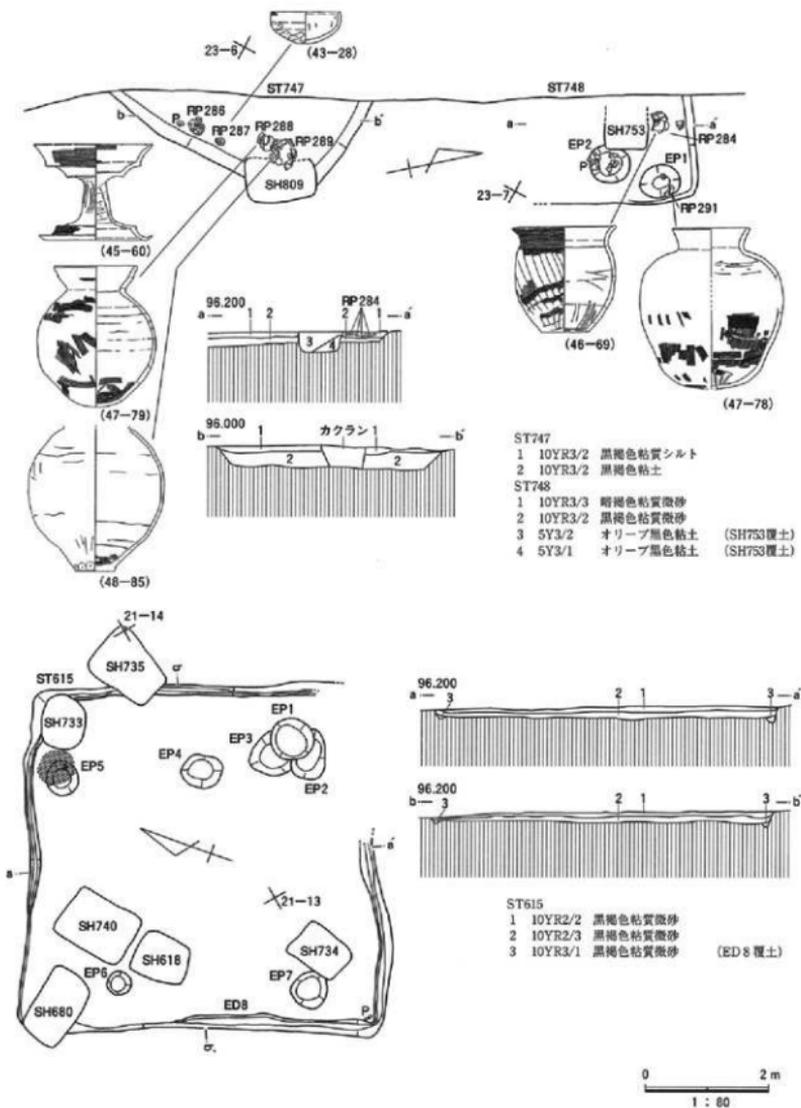
第28図 ST544・545・708・608・619



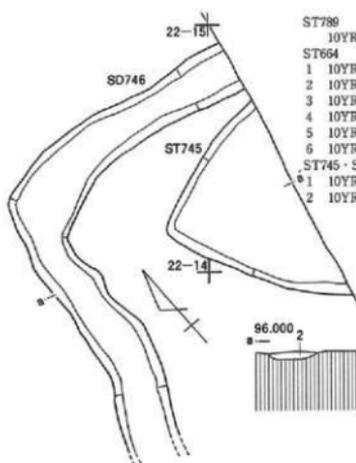
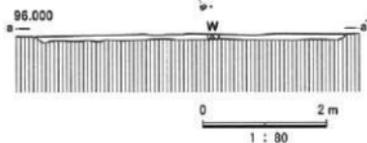
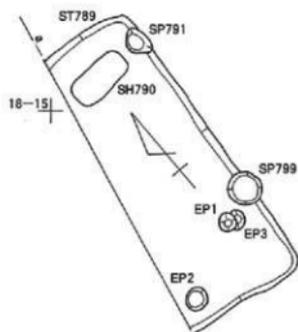
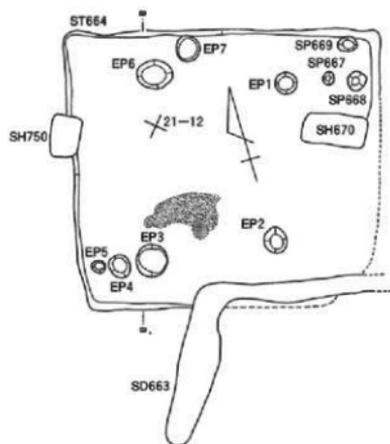
第29図 ST659・816・820



第30図 ST832



第31図 ST747・748・615



- ST789
10YR3/2 黒褐色粘質シルト 酸化鉄、炭化物を含む
- ST664
1 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
2 10YR3/1 黒褐色砂質粘土
3 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
4 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
5 10YR2/2 黒褐色砂質粘土
6 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
- ST745・SD746
1 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
2 10YR2/2 黒褐色砂質粘土



第32図 ST664・789・745

2 掘立柱建物跡

SB181・479 (第33図) SB181はA・B区東側21・22-19~21Gで検出された。中央をSD22に切られる。建物は2×3間で、規模は梁行6.8m(約23尺)、桁行7.1m(約24尺)を測る。主軸方向はN-70°-Wである。柱間距離は240cm(約8尺)~340cm(約11尺)である。柱穴の掘り方は、円形または楕円形を呈する。柱穴の直径は60~70cmを測る。覆土は黒褐色または黒色で、アタリは明確ではなかったが、柱穴底面に礎板を確認した。なお礎板の確認された柱穴はEB30・122・162・168であり、その中でも柱根も出土したものはEB162のみである。中世のものと思われる。

SB479はC区南側20・21-25・26Gで検出された。ST360・364を切る。建物は1×4間で、梁行2.7m(9尺)、桁行5.2m(約17尺)を測る。主軸方向はN-32°-Eである。柱間距離は、180cm(6尺)~270cm(9尺)である。柱穴の掘り方は、円形または楕円形を呈し、直径は30~40cmを測る。中世のものと思われる。

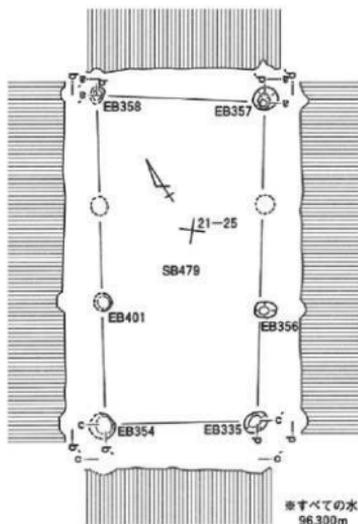
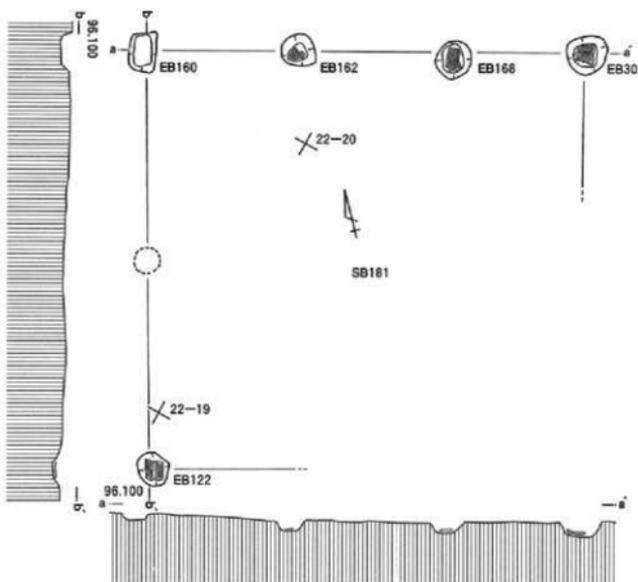
SB581・600 (第34図) SB581は、D区中央22・23-15・16Gで検出された。調査区外のため東側が未調査である。ST545を切る。梁行は2間で、桁行は2間以上あると思われる。梁行長は3.6m(12尺)で、桁行を含めた柱間距離は、150cm(5尺)~190cm(約6尺)を測る。また、その主軸方向はN-33°-Wである。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈しており、直径は40~50cmを測る。多少東側が広がる。中世のものと思われる。

SB600はD区中央22・23-15Gで検出された。西側でSD22に切られる。西側に建物域が広がるものと考えられる。梁行は2間で桁行は2間以上あると思われる。梁行長は3.2m(約11尺)で、桁行を含めた柱間距離は120cm(4尺)~190cm(約6尺)である。主軸方向はN-50°-Eである。柱穴掘り方は円形または楕円形を呈し、直径は30~48cmを測る。

3 溝跡

SD22・87 (第35図) SD22はA・B・D区20~30-11~23Gで検出された。B区北東からA区中央で90度南側に屈曲し、D区東側に向けて貫流する。人工的な流路であることから区画溝と考えられる。幅は3.0~7.0mであるが、凡そ5.0mほどの長さで推移する。確認面から深さは62cm~75cmを測る。壁の立ち上がりは、B区でやや緩やかで、D区でやや急になる。基本的に3層で、概ね黒色の泥炭層である。遺物は、主に古式土師器や平安時代の須恵器であるが、いずれも上層から出土しており、中世陶器が、下層から出土していることから中世のものと思われる。

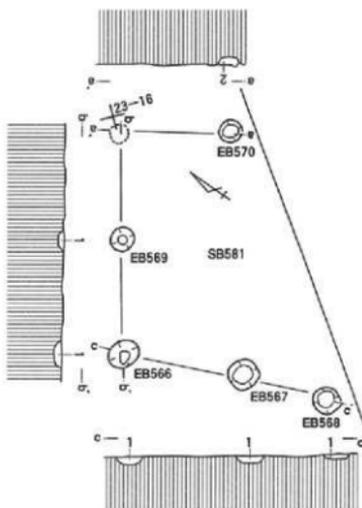
SD87はC区南側17~21-29~32Gで検出された。昨年度まで行われた西側の東北中央道関連の発掘調査で屈曲する区画溝が確認されたが、本調査では東側の一部分が見つかった。幅は0.7m~1.6mで、確認面からの深さは50cmを測る。壁の立ち上がりはやや急である。覆土の層位は4層が基本であり、下層になるほど砂が混入する。出土遺物は上層から14世紀代の青磁碗片や15世紀後半の信楽焼甕の破片などである。遺構は中世のものと考えられる。



※すべての水表レベルは
96.300m



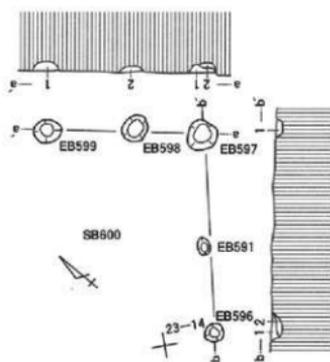
第33図 SB181・479



※すべての水糸レベルは 96.200m

SB581

- 1 10YR3/2 黒褐色砂質粘土
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト



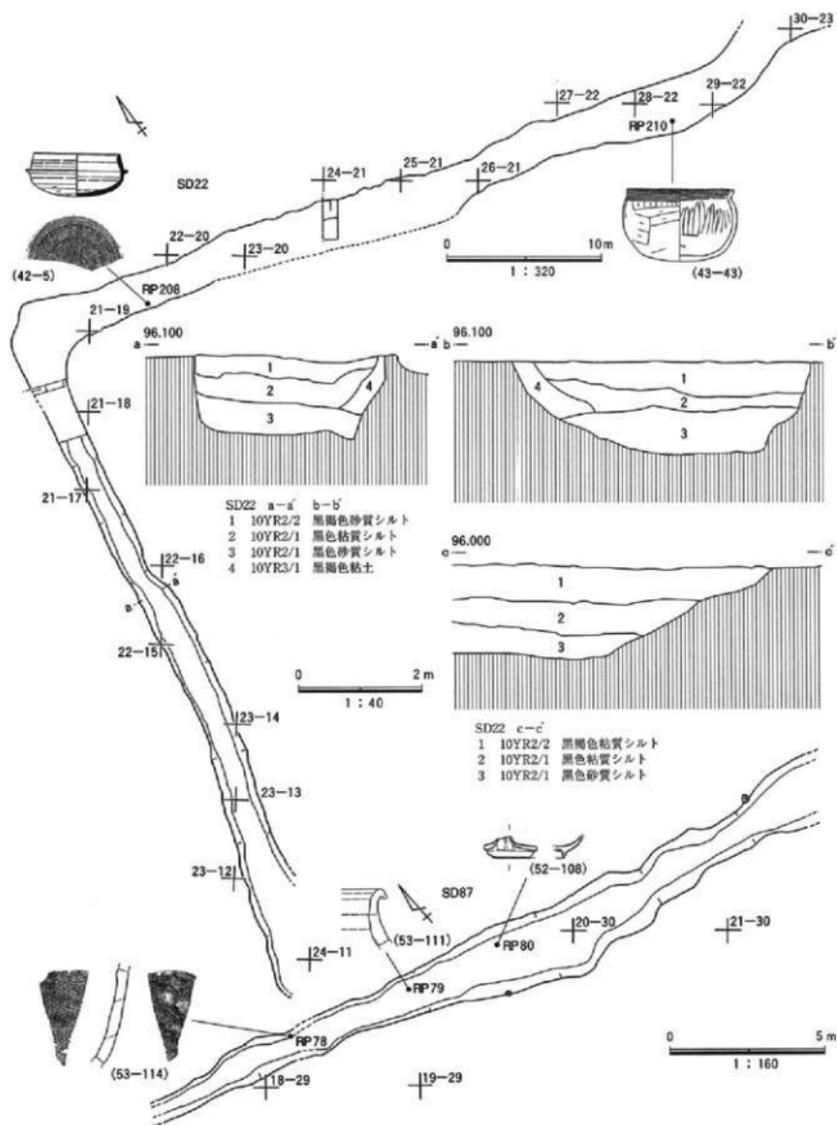
※すべての水糸レベルは 96.100m

SB600

- 1 10YR3/2 黒褐色砂質粘土
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質粘土



第34図 SB581・600



第35図 SD22・87

4 墓坑

墓坑は、A～C区から26基、D区から143基検出された。また、その一部がX軸16～21、Y軸23～24にかけて東西直線上に並んで配置され、また、数箇所の領域に集中して埋葬されていることが確認できた。

葬法は、一部土葬の墓坑があったが、ほとんどは火葬であった。火葬である場合でも、火力が弱いために人骨の部位がそのまま出土することもあった。また埋葬施設の種類の、立方体・直方体箱形木棺、早桶、直葬に分けられ、箱形木棺はさらに、底部に横木を渡して固定し、その上に葎を敷いているもの（箱形A）と、板材や角材で全体を囲み、釘で固定しているもの（箱形B）に分けられる。しかし、中には木棺が腐食のために形状を保てないものや消失した墓坑も数多くあった（箱形C）。早桶は円筒形の木棺で、一部立たせた状態で埋葬されている墓坑もあったが、そのほとんどは上部を真北に倒された状態で検出している。直葬は棺に入れず直接遺体を土坑に埋葬したものである。

また、検出された墓坑の内訳は以下の通りである。

箱形A 52 早桶 12 箱形B 17 直葬 64 箱形C 24

SH108（第36図）SH108はA区西側18-19Gで検出された。木棺規模が長軸85cm、短軸58cmの箱形Aである。遺体は土葬で、保存状態は比較的良好である。埋葬姿勢は横臥屈葬で、頭部は真北を向いていた。副葬品は六道銭が出土している。六道銭は、古寛永2枚、新寛永3枚、不明1枚である。掘り方から肥前系佐見産の「くらわんか碗」が2個体出土しており、掘り方の北側底面から逆位で出土したものもあった。そして、多賀城市の大日北遺跡から出土した陶器碗と出土状況が類似しており、箸は出土しなかったが、葬送儀礼としての「一杯飯」として供されていたと思われる。出土状況から墓の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH46・47・48・49・50・96（第36図）B区東側29-22・23Gで検出されており、SH46がSH96を切る。SH47の木棺は、長軸55cm、短軸26cmの箱形Aで、横木は2本である。上部からはSH96のものと思われる早桶の底部が出土しており、遺体は火葬であった。副葬品は六道銭で、古寛永1枚、新寛永5枚である。

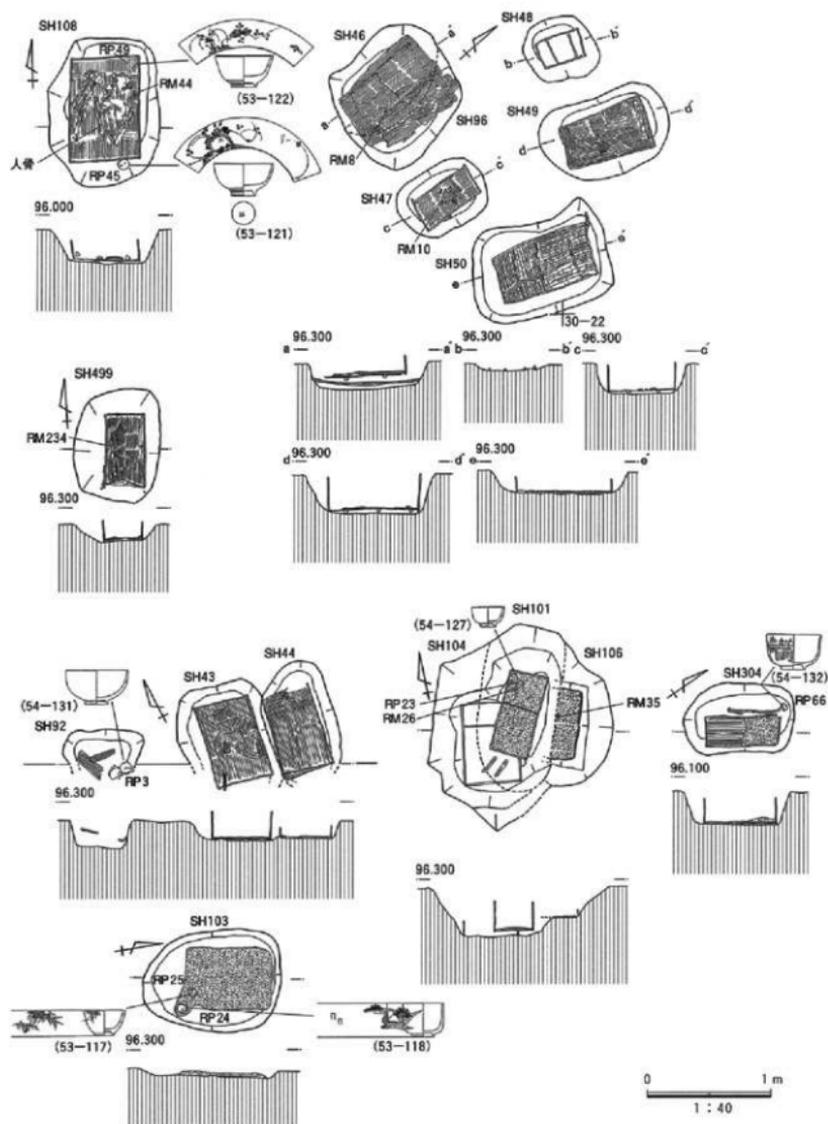
SH96は底部の直径67cm、高さ90cmの早桶で、横に倒された状態で検出された。副葬品は六道銭で、古寛永1枚、文銭1枚、新寛永1枚である。また、SH46、SH48、SH49、SH50はいずれも箱形Aで、SH50以外副葬品は出土しなかった。

SH499（第36図）SH499はB区東側28-22Gで検出された。木棺規模が長軸60cm、短軸35cmの箱形Aで、保存状態は良好である。副葬品は六道銭で、新寛永2枚である。

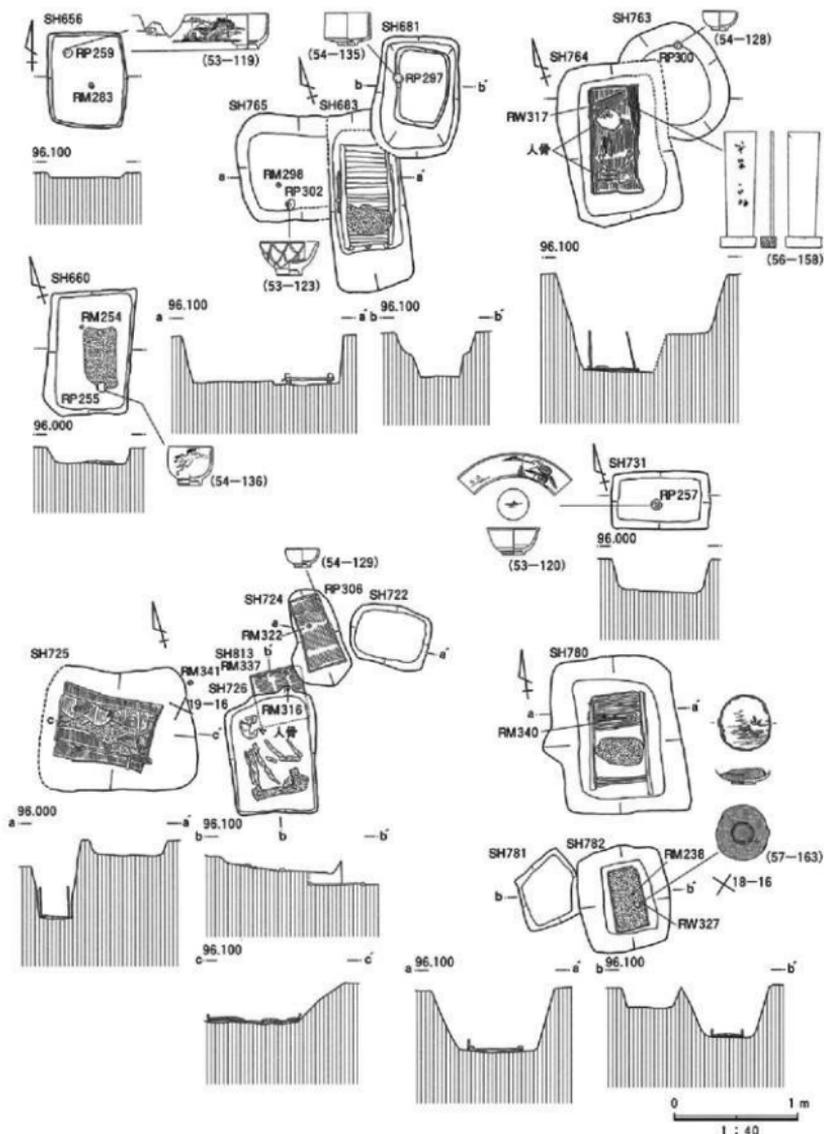
SH43・44・92（第36図）B区東側28・29-22Gで検出されており、SH44がSH43を切る。SH43の木棺は長軸70cm、短軸45cmの箱形Aで、葎の上から木棺の蓋と思われる板材が出土した。また内部から長さ40cmほどの棒状木製品が出土している。

SH44の木棺は長軸70cm、短軸40cmの箱形Aで、蓋も検出された。しかし一部破壊されており、保存状態は悪い。

SH92の埋葬施設は箱形Cである。副葬品は大堀相馬焼の丸碗である。墓の埋葬年代は文化・



第36图 A~C区墓坑



第37图 D区墓坑(1)

文政期（1804～1829年）以降と考えられる。

SH103（第36図）SH103はC区南側18-23Gで検出された。木棺規模が長軸70cm、短軸52cmの大きさで、底部に炭化物や遺灰のみが残っていた。埋葬施設は箱形Cである。副葬品は山形平清水焼の小碗と会津本郷焼の小碗が出土している。墓の埋葬年代は近代以降と考えられる。

SH101・104・106（第36図）C区南側19-23Gで検出されており、SH106→SH104→SH101と切り合っている。SH101の木棺は長軸68cm、短軸32cmの箱形Aである。副葬品は六道銭と大堀相馬焼の小碗で、六道銭は新寛永1枚である。小碗に紅が付着していることから紅皿として使用したと考えられ、埋葬者が女性であったと思われる。墓の埋葬年代は19世紀前半以降と考えられる。

SH104、SH106いずれも箱形Aである。SH104からは火葬骨が出土している。SH106の副葬品として六道銭が出土している。

SH304（第36図）SH304はC区南側19-23Gで検出された。木棺規模が長軸60cm、短軸40cmの箱形Aである。掘り方内から大堀相馬焼の腰張碗が出土している。墓の埋葬年代は19世紀前半以降と考えられる。

SH656（第37図）SH656は、D区南側22-11Gで検出された。埋葬施設は直葬で、長軸78cm、短軸65cmの掘り方である。副葬品は六道銭と会津本郷焼の小碗である。六道銭は古寛永1枚、新寛永2枚である。墓の埋葬年代は19世紀前半以降と考えられる。

SH660（第37図）SH660はD区南側22-11Gで検出された。底部に炭化物が残っており、埋葬施設は箱形Cであるが、木棺は残存していなかった。副葬品は六道銭と大堀相馬焼の小碗で、六道銭は北宋銭1枚、新寛永2枚、不明1枚である。墓の埋葬年代は19世紀後半以降と考えられる。

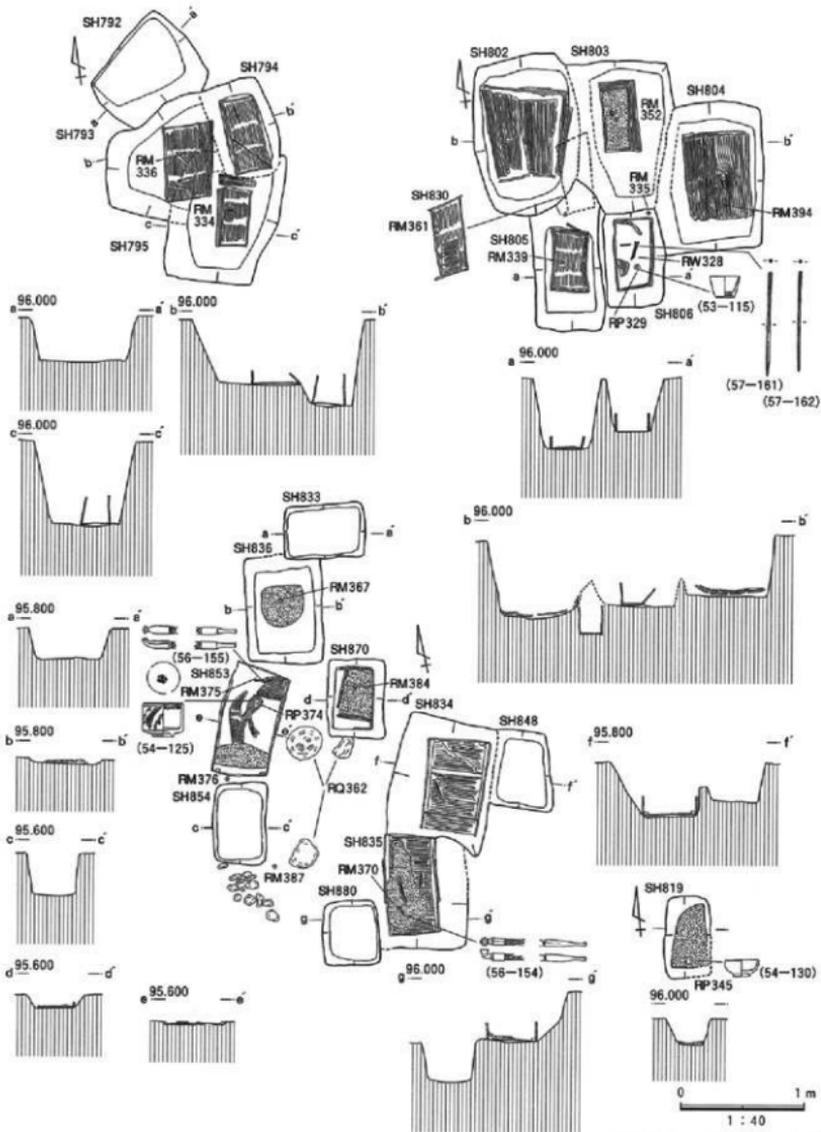
SH681・683・765（第37図）D区北側19-15Gで検出されている。新旧関係はSH765→SH683→SH681と切り合っている。SH681の埋葬施設は箱形Cである。副葬品は大堀相馬焼の半筒形碗が出土している。墓の埋葬年代は19世紀後半以降と考えられる。

SH683の木棺は長軸84cm、短軸42cmの箱形Bで、保存状態は良好である。木棺内部の南側からは、遺灰らしき炭化物のかたまりが出土している。副葬品は六道銭で、新寛永3枚出土している。

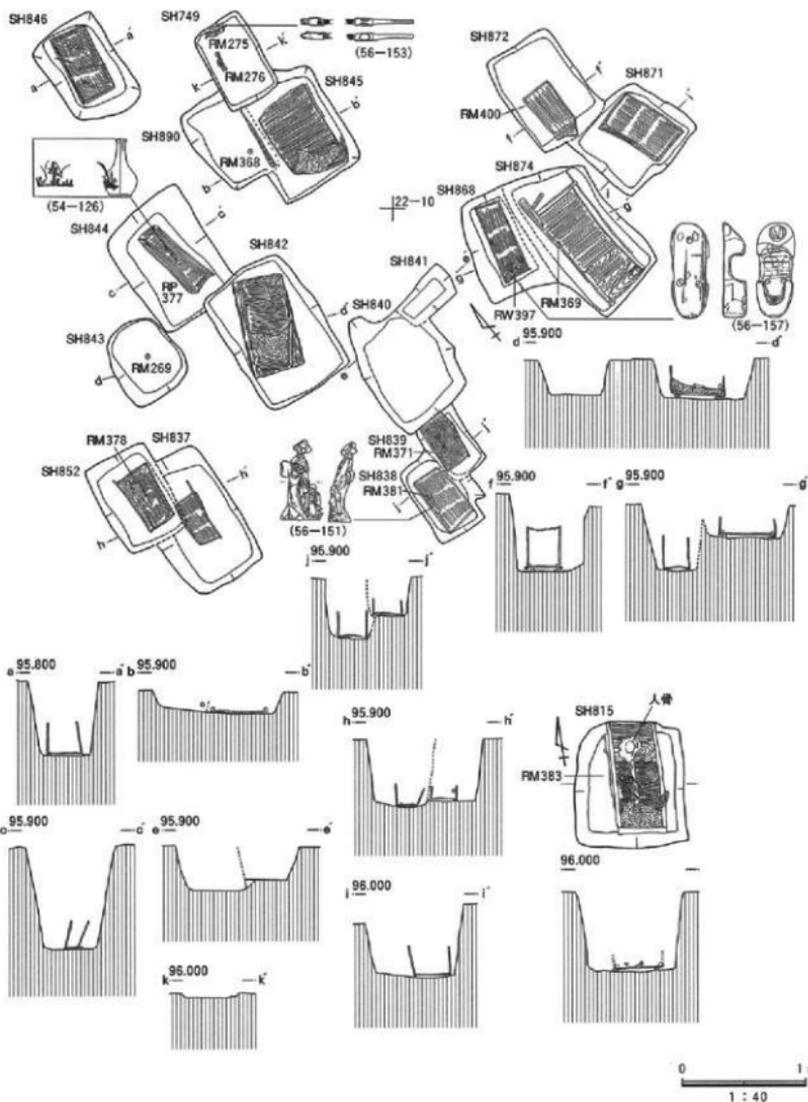
SH765は直葬で長軸85cmの掘り方である。副葬品は六道銭と肥前系波佐見産の「くらわんか碗」である。六道銭は新寛永6枚である。墓の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH763・SH764（第37図）D区北側19-15Gで検出され、SH764がSH763を切っている。SH763は直径96cm、深さ48cmの円筒状の掘り方で、中には早桶が入っていたと推定される。副葬品は六道銭と大堀相馬焼の小碗である。六道銭は不明1枚である。墓の埋葬年代は19世紀前半以降と考えられる。

SH764の木棺は長軸88cm、短軸38cmの箱形Bで、木棺の側板の端に「五」と墨書されており、内部からは大腿骨や頭蓋骨などの火葬骨が出土した。副葬品は六道銭と墨書痕のある位牌で、六道銭は新寛永3枚である。



第38图 D区墓坑(2)



第39图 D区墓坑(3)

SH722・724・725・726・813（第37図）D区北側18・19-17Gで検出された。新旧関係は、SH813→SH724・SH726で切り合う。SH722は直葬、SH724は箱形A、SH725は箱形Bである。いずれも副葬品は出土しなかった。

SH726は直葬で、長軸102cm、短軸75cmの掘り方である。遺体は土葬で、保存状態は比較的良好である。埋葬姿勢は横臥屈葬で、頭部は真北を向いている。副葬品は出土しなかった。SH813の木棺は長軸44cm、短軸42cmの箱形Bである。副葬品は六道銭で、新寛永2枚が出土している。

SH780・781・782（第37図）D区北側17・18-16・17Gで検出され、SH782がSH781を切る。SH780の木棺は長軸85cm、短軸50cmの箱形Bで、副葬品は出土しなかった。またSH781は直葬で、副葬品は出土しなかった。

SH782の木棺は、長軸50cm、短軸25cmの箱形Aである。副葬品は六道銭と漆器皿で、六道銭は古寛永1枚、新寛永5枚である。

SH792・793・794・795（第38図）D区北側18-16Gで検出されており、その新旧関係はSH792→SH793→SH795→SH794と切り合っている。SH792は直葬、SH794は箱形Aで副葬品は出土しなかった。

SH793の木棺は長軸60cm、短軸36cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、古寛永1枚、新寛永1枚である。SH795の木棺は長軸47cm、短軸30cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、新寛永6枚である。

SH802・803・804・805・806・830（第38図）D区北側18-15Gで検出されSH830・SH806→SH805→SH803→SH804・SH802と切り合っている。SH802・804以外は、箱形Aである。特にSH806では副葬品として漆塗りの箸や白磁猪口が出土している。そのことからSH806の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH833・836・853・854・870（第38図）D区南側20-11・12Gで検出されSH833がSH836を切っている。SH833は直葬で長軸63cm、短軸43cm掘り方をもつ。副葬品は出土しなかった。SH836は底部に炭化物が広がっており、埋葬施設は箱形Cである。副葬品は六道銭で、新寛永6枚である。

SH853の木棺は長軸90cm、短軸50cmの箱形Bである。副葬品は六道銭、肥前系の湯呑、煙管である。墓の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH854は直葬で、長軸70cm、短軸42cmの掘り方である。副葬品は六道銭が出土し、古寛永1枚、文銭1枚、新寛永1枚、不明1枚である。SH870の木棺は長軸50cm、短軸30cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、新寛永6枚である。

SH834・835・848・880（第38図）D区20-11・12Gで検出されている。その新旧関係はSH835・SH848→SH834と切り合っている。埋葬方法は、SH834・835が箱形B、SH848・880が直葬である。SH835から銅製の煙管が出土した以外、副葬品は出土しなかった。

SH819（第38図）SH819はD区南側17-17Gで検出された。底部に炭化物が広がっていることから箱形Cである。副葬品は大塚相馬焼の小碗が出土している。墓の埋葬年代は19世紀前半

以降と考えられる。

SH846 (第39図) SH846はD区南側21-11Gで検出された。木棺規模が長軸55cm、短軸30cmの箱形Aで、副葬品は出土しなかった。

SH749・845・890 (第39図) D区南側21-11Gで検出されている。新旧関係はSH845→SH890→SH749と切り合っている。SH749の埋葬施設は箱形Cである。副葬品は六道銭と銅製の煙管である。六道銭は古寛永2枚、新寛永4枚である。

SH845の木棺は長軸72cm、短軸48cmの箱形Bである。SH890は木棺の木片が出土しており、箱形Cである。副葬品は六道銭で、新寛永1枚、不明1枚である。

SH842・843・844 (第39図) D区南側21-10・11Gから検出され、SH842がSH844を切る。SH842の木棺は長軸78cm、短軸43cmの箱形Bである。底板は残存せず、腐食した布が付着していた。副葬品は出土しなかった。

SH843は直葬で、長軸65cm、短軸58cmの方形の掘り方を持つ。副葬品は六道銭で、新寛永6枚である。

SH844の木棺は長軸63cm、短軸22cmの箱形Aである。木棺の側板には「□」と墨書されていた。副葬品は位牌と肥前系の仏花瓶が出土している。墓の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH837・852 (第39図) D区南側21-10Gで検出されており、SH852がSH837を切っている。SH837の木棺は長軸45cm、短軸20cmの箱形Aで、副葬品は出土しなかった。SH852の木棺は長軸50cm、短軸30cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、新寛永2枚である。

SH838・839・840・841 (第39図) D区南側21・22-10Gから検出されている。新旧関係はSH838→SH839→SH840→SH841と切り合っている。SH838の木棺は長軸50cm、短軸28cmの箱形Aである。副葬品は、六道銭と土製の母子像である。六道銭は古寛永2枚、新寛永4枚である。

SH839の木棺は長軸42cm、短軸30cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、古寛永1枚、新寛永5枚である。SH840は直葬で、SH841は箱形Cと思われる。

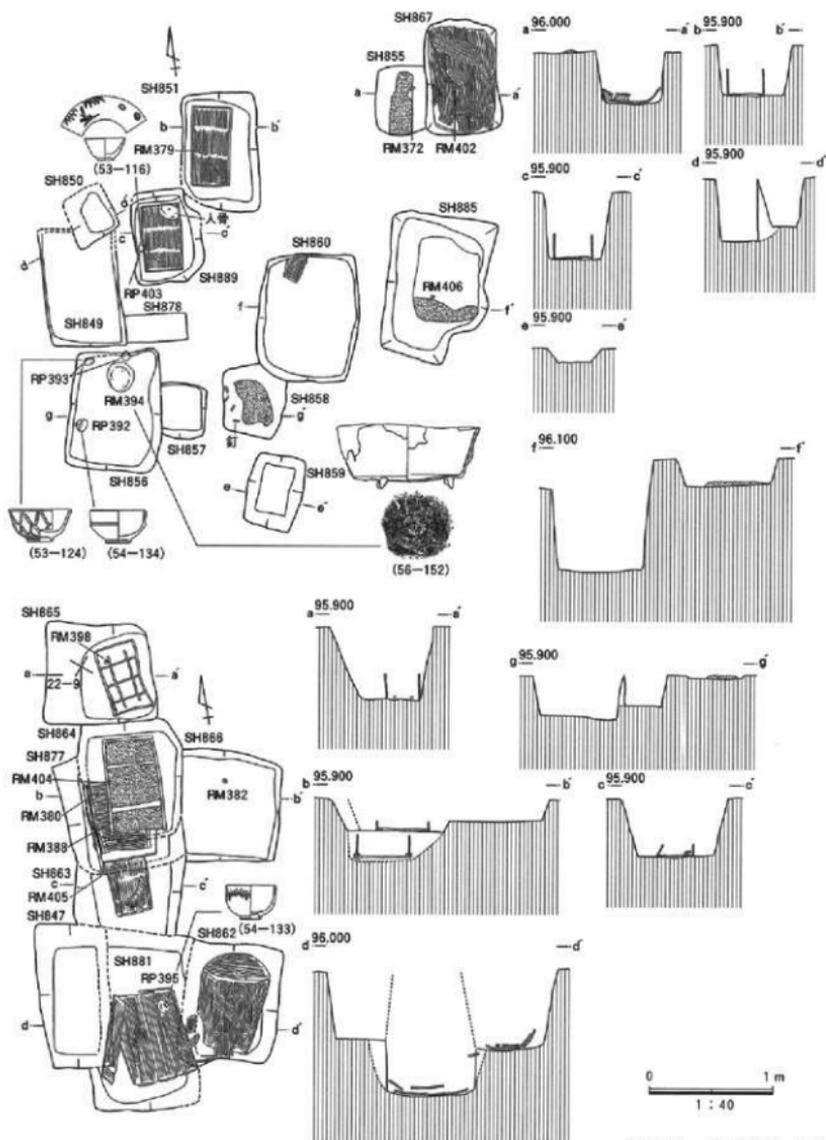
SH868・871・872・874 (第39図) D区南側22-11Gから検出されている。その新旧関係はSH872がSH871を切り、SH874がSH868を切っている。SH868の木棺は長軸65cm短軸22cmの箱形Aである。副葬品として子供用の連歯下駄と墨書痕のある位牌が出土した。

SH871の木棺は長軸55cm、短軸35cmの箱形Aで、副葬品は出土されなかった。

SH872の木棺は長軸40cm、短軸25cmの小型の箱形Bである。副葬品は六道銭で、新寛永1枚である。

SH874の木棺は長軸113cm、短軸42cmの箱形B、副葬品は六道銭で、北宋銭1枚、古寛永6枚、新寛永3枚である。

SH815 (第39図) SH815はD区南側17-18Gから検出されている。木棺規模が長軸92cm、短軸43cmの箱形Bで、底部から炭化物と遺灰が出土している。副葬品は六道銭と生米が出土している。生米はD区が湿地であるため、保存状態は良好であった。また六道銭は古寛永1枚、文



第40图 D区墓坑(4)

表4 墓坑観察表(1)

地区	遺構番号	グリップ	形状	掘方規模(cm)			本構規模(cm)			出土遺物	備考
				長さ	幅	深さ	長軸	短軸	深さ		
36	S H43	28-22	箱形A	(86)	78	24	70	45	25		S H43-44
	S H44	29-22	箱形A	(90)	58	15	(70)	40	15		S H43-44
	S H46	28-22	箱形A	100	(60)	20	75	32	15		S H96-46
	S H47	29-22	箱形A	75	52	45	55	26	44	寛水通寶(古+新)	
	S H48	29-23	箱形A	57	54	5	38	25	4		
	S H49	29-23	箱形A	107	65	34	72	45	30		
	S H50	29-23	箱形A	114	80	18	80	48	15	寛水通寶(不)	
	S H62	18-23	箱形A	83	57	12	65	35	10		
	S H65	18-23	直葬	90	60	17	-	-	-	寛水通寶(不)	S H103-65
	S H66	19-24	直葬	72	52	16	-	-	-	寛水通寶(古+文+新)	
36	S H68	19-24	箱形A	125	78	32	65	35	12		S H303-68
	S H70	19-23	直葬	62	50	21	-	-	-		
	S H72	19-23	箱形A	85	60	15	56	30	8	寛水通寶(不)	
	S H92	28-22	箱形C	(30)	63	23	-	-	-	大甕相馬焼中碗	
	S H96	29-22	早輪	98	(50)	20	90	67	17	寛水通寶(古+文+新)	S H96-46
	S H101	19-23	箱形A	(135)	(62)	37	68	32	22	寛水通寶(新)-大甕相馬焼小碗	S H106-104→101
	S H103	18-23	箱形C	112	85	6	(70)	(52)	5	会津本郷焼小碗・平清水焼小碗	S H103-65
	S H104	19-23	箱形A	(156)	(102)	42	68	46	10		S H106-104→101
	S H106	19-23	箱形A	105	(45)	25	58	(20)	25	寛水通寶(不)	S H106-104→101
	S H107	17-18	直葬	75	60	18	-	-	-	寛水通寶(新+不)	S T 2-95→S H107
36	S H108	18-19	箱形A	129	90	30	85	58	28	寛水通寶(古+新+不) 肥前系液注瓦唐中碗	S T 2-134→S H108
	S H303	19-23	箱形A	84	50	40	(70)	30	17		S H303-68
36	S H304	19-23	箱形A	90	57	25	60	40	20	大甕相馬焼小碗	
	S H310	18-24	箱形A	80	55	25	58	32	15		
36	S H312	18-24	直葬	78	50	15	-	-	-	寛水通寶(文+不)	
	S H499	28-22	箱形A	92	70	18	60	35	15	寛水通寶(新)	
	S H513	22-19	箱形A	98	56	12	60	35	7		S H514→513
	S H514	22-19	箱形A	92	63	12	60	34	6		S H514→513
	S H617	20-15	直葬	122	82	28	-	-	-	寛水通寶(新+不)	
	S H618	20-14	直葬	87	75	16	-	-	-	磁器小片・寛水通寶(古+新+不)	S T 615→S H618
	S H652	23-9	直葬	(100)	70	69	-	-	-		
	S H656	22-11	直葬	78	65	4	-	-	-	会津本郷焼小碗・寛水通寶(古+新)	
	S H660	22-11	箱形C	100	67	12	-	-	-	大甕相馬焼小碗・寛水通寶(北+新+不)	S H871→872→660
	S H662	20-11	直葬	54	42	25	-	-	-	磁器小片・散珠・寛水通寶(古+新)	
37	S H670	21-13	直葬	105	53	12	-	-	-		S T 644→S H670
	S H680	20-14	直葬	120	72	10	-	-	-	寛水通寶(新+不)	S T 615→S H680
	S H681	19-15	箱形C	98	72	36	(62)	(44)	(16)	大甕相馬焼小碗	S H765-683→681
	S H683	19-15	箱形B	148	62	40	84	42	-	寛水通寶(新)	S H765-683→681
	S H707	20-18	箱形C	92	70	13	(55)	(32)	(13)	寛水通寶(古+新+不)	S D 22→S H707
	S H713	19-18	直葬	92	65	9	-	-	-	寛水通寶(新)	S T 711→S H713
	S H715	20-17	箱形C	70	60	8	-	-	-	寛水通寶(新)	S H873-875-876→731
	S H716	20-17	直葬	72	58	14	-	-	-	寛水通寶(古+新+不)	
	S H720	19-17	箱形C	(60)	82	33	-	-	-	磁器小片・寛水通寶(新)	S T 711→S H720→766
	S H722	19-17	直葬	65	50	12	-	-	-	寛水通寶(古+新)	S T 711→S H722
37	S H724	19-17	箱形A	85	45	65	62	30	25	寛水通寶(不)	S T 711→S H813→724-726
	S H725	18-17	箱形B	(128)	96	32	80	40	7		S H811→725
	S H726	19-17	直葬	102	75	12	-	-	-	寛水通寶(不)	S T 711→S H813→724-726
	S H731	21-10	直葬	80	48	26	-	-	-	肥前系小碗	
	S H732	22-11	直葬	70	62	16	-	-	-	大甕相馬焼湯呑・寛水通寶(新)	
	S H733	20-14	直葬	106	92	17	-	-	-	寛水通寶(新)	S T 615→S H733
	S H734	20-13	直葬	90	65	22	-	-	-	寛水通寶(古+新)	S T 615→S H734
	S H735	20-15	早輪	120	92	38	94	60	12	寛水通寶(不)	S T 615→S H735
	S H736	21-18	箱形B	146	84	10	86	50	5		S H737→736
	S H737	21-18	直葬	95	82	8	-	-	-		S H737→736
38	S H738	22-18	箱形A	114	75	10	82	46	6	寛水通寶(新+不)	
	S H740	20-14	直葬	118	90	18	-	-	-		S T 615→S H740
	S H749	21-11	箱形C	72	45	4	-	-	-	寛水通寶(古+新)・キセル	S H845→890→749
	S H750	20-12	直葬	73	48	7	-	-	-	寛水通寶(古+新)	S T 664→S H750
	S H751	21-11	直葬	65	45	6	-	-	-		

表5 墓坑観察表(2)

群	遺構番号	グリッド	形態	掘方規模(cm)			木棺規模(cm)			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ		
	S H 752	21-11	箱形B	-	-	-	91	50	27	寛永通寶(新)	
	S H 753	22-8	直葬	(100)	74	20	-	-	-	寛永通寶(古)	S T 748→S H 753
	S H 755	23-6	直葬	64	52	14	-	-	-	寛永通寶(文+新)	S X 754→S H 755
	S H 756	23-7	直葬	50	38	15	-	-	-	寛永通寶(新+不)	
	S H 757	23-7	箱形A	77	28	23	70	45	9	寛永通寶(新)	
	S H 758	23-7	直葬	53	42	12	-	-	-		
	S H 759	23-7	直葬	58	45	24	-	-	-		
	S H 760	19-17	箱形C	105	103	27	(73)	(33)	(27)	寛永通寶(新)	S T 711→S H 760→761
	S H 761	19-17	箱形C	(70)	(60)	25	(58)	(30)	(20)	寛永通寶(不)	S T 711→S H 760→761
	S H 762	19-16	箱形B	120	70	38	75	35	-	平清水袋小碗・急須・牛七・硯(加藤勇作)の銘あり・寛永通寶(古+新+不)	S T 724→S H 762
	S H 763	19-15	早輪	96	(66)	48	-	-	-	大瀬粗馬焼小碗・寛永通寶(不)	S T 727→S H 763→764
37	S H 764	19-15	箱形B	130	88	80	88	38	30	位牌(陽儀有り)・寛永通寶(新)	S T 727→S H 763→764 備取に「五通毒有り
	S H 765	19-15	直葬	85	(70)	36	-	-	-	肥前赤波佐見産中輪・寛永通寶(新)	S H 765→683→681
	S H 766	19-17	箱形C	(60)	80	10	(45)	(40)	(10)	寛永通寶(新)	S T 711→S H 720→766
	S H 768	19-14	箱形A	75	(65)	48	50	26	18		S H 768→769
	S H 769	19-14	直葬	80	52	30	-	-	-	寛永通寶(新+不)	S H 768→769
	S H 770	20-14	直葬	92	52	38	-	-	-		
	S H 771	23-7	箱形C	-	-	-	60	35	17	寛永通寶(古+不)	
	S H 772	20-14	箱形A	90	55	30	70	50	-	寛永通寶(新+不)	
	S H 774	23-19	箱形A	100	60	12	54	30	15	寛永通寶(新)	
	S H 779	17-17	直葬	57	47	26	-	-	-		
37	S H 780	17-17	箱形B	130	110	52	85	50	8	寛永通寶(新+不)	
	S H 781	18-16	直葬	55	50	15	-	-	-		S H 781→782
	S H 782	18-16	箱形A	85	75	42	50	25	5	漆器類・寛永通寶(古+新)	S H 781→782
	S H 783	17-16	直葬	90	82	46	-	-	-		
	S H 784	18-16	直葬	66	46	11	-	-	-	寛永通寶(不)	S H 786→784
	S H 785	18-17	直葬	70	52	28	-	-	-	寛永通寶(新+不)	
	S H 786	18-16	箱形C	102	100	12	60	35	-	寛永通寶(不)	S H 786→784
	S H 788	18-16	直葬	67	50	28	-	-	-	寛永通寶(古+新)	
	S H 790	18-16	直葬	98	48	16	-	-	-		S H 789→S H 790
	S H 792	18-16	直葬	85	75	36	-	-	-		S H 792→793→795→794
	S H 793	18-16	箱形A	(90)	100	52	60	36	12	寛永通寶(古+新)	S H 792→793→795→794
	S H 794	18-16	箱形A	(80)	(52)	70	60	30	25		S H 792→793→795→794
	S H 795	18-16	箱形A	110	85	68	47	30	24	寛永通寶(新)	S H 792→793→795→794
	S H 800	18-15	早輪	80	72	15	-	-	-	寛永通寶(北+古+新)	
	S H 802	18-15	早輪	130	75	62	77	70	-		S H 830-806→805→803→804→802
	S H 803	18-15	箱形A	124	(80)	57	57	30	18	寛永通寶(古+新)	S H 830-806→805→803→804→802
	S H 804	18-15	早輪	123	87	50	70	55	-	寛永通寶(古+新)	S H 830-806→805→803→804→802
	S H 805	18-15	箱形A	(122)	55	60	50	30	10	寛永通寶(新)	S H 830-806→805→803→804→802
	S H 806	18-15	箱形A	(75)	50	44	58	33	15	牛七・肥前赤白銀掛口・菅 寛永通寶(古+文+新)	S H 830-806→805→803→804→802
	S H 807	19-14	早輪	75	74	28	-	-	-		
	S H 808	20-17	早輪	90	88	18	75	57	15	寛永通寶(古+文+新)	S T 777→S H 808
	S H 809	23-7	直葬	110	-	25	-	-	-	寛永通寶(新+不)	S T 747→S H 809
	S H 810	23-9	直葬	72	52	40	-	-	-		
	S H 811	18-17	箱形C	-	-	-	55	27	22	寛永通寶(文+不)	S H 811→725
	S H 812	22-8	箱形C	98	50	18	-	-	-	寛永通寶(古+新)	
37	S H 813	19-17	箱形B	-	-	-	44	42	10	寛永通寶(新)	S T 711→S H 813→724→726
39	S H 815	17-18	箱形B	104	90	64	92	43	20	寛永通寶(古+文+新)・米	S T 1→S H 815
38	S H 819	17-17	箱形C	66	38	20	-	-	-	大瀬粗馬焼小碗	S T 1→S H 819
	S H 822	23-9	直葬	80	50	79	-	-	-		
	S H 825	21-10	箱形A	115	112	54	75	35	-		
	S H 826	23-9	直葬	50	30	28	-	-	-		
	S H 827	23-8	直葬	93	(80)	32	-	-	-	寛永通寶(新+不)	S H 828→827
	S H 828	23-8	直葬	70	60	42	-	-	-		S H 828→827
	S H 829	20-10	直葬	108	(70)	23	-	-	-		
38	S H 830	18-15	箱形A	-	-	-	60	30	24	寛永通寶(古+新)	S H 830-806→805→803→804→802
	S H 831	23-9	直葬	64	40	20	-	-	-	寛永通寶(不)	

表6 墓坑観察表(3)

構 図	遺構 番号	グリッド	形態	掘方規模(cm)			本館規模(cm)			出土遺物	備 考
				長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ		
38	S H833	20-12	直葬	65	43	35	-	-	-		S H836-833
	S H834	20-12	箱形B	95	82	44	75	48	16		S H835-848-834
	S H835	20-12	箱形B	-	-	-	80	42	13	キセツル	S H835-848-834
	S H836	20-12	箱形C	90	63	5	-	-	-	寛永通寶(新)	S H836-833
	S H837	21-10	箱形A	112	72	52	45	20	12		S H837-852
	S H838	22-10	箱形A	70	48	50	50	28	23	土人形・寛永通寶(古+新)	S H838-839-840-841
	S H839	22-10	箱形A	(54)	36	30	42	30	10	寛永通寶(古+新)	S H838-839-840-841
	S H840	21-10	直葬	110	72	35	-	-	-		S H838-839-840-841
	S H841	22-10	箱形C	(40)	30	28	-	-	-		S H838-839-840-841
	39	S H842	21-10	箱形B	115	85	34	78	43	22	
S H843		21-10	直葬	65	58	28	-	-	-	寛永通寶(新)	
S H844		21-11	箱形A	100	75	82	63	22	22	肥前系弘花瓶・位牌	S H844-842 銅板に「〇」墨書有り
S H845		21-11	箱形B	100	74	18	72	48	-		S T845-850-749
S H846		21-11	箱形A	86	56	60	55	30	25		
40	S H847	22-9	直葬	116	(60)	54	-	-	-		S H881-847-862
	S H848	20-12	直葬	64	(45)	32	-	-	-		S H835-848-834
38	S H849	22-10	直葬	(96)	62	52	-	-	-		S H878-849-850
	S H850	22-10	直葬	(42)	37	40	-	-	-		S H878-849-850
40	S H851	22-10	箱形A	95	60	42	63	30	20	寛永通寶(新)	S H889-851
	S H852	21-10	箱形A	80	56	55	50	30	17	寛永通寶(新)	S H837-852
38	S H853	20-12	箱形B	-	-	-	90	50	-	肥前系函存・キセツル	
	S H854	20-11	直葬	70	42	35	-	-	-	寛永通寶(古+文+新+不)	
38	S H855	22-11	箱形C	56	(44)	-	-	-	-	寛永通寶(新+不)	S H855-867
	S H856	22-10	直葬	100	75	34	-	-	-	大船相馬焼小碗・肥前系波佐見産中碗 三足鉢	S H857-856
40	S H857	22-10	直葬	45	(35)	25	-	-	-		S H857-856
	S H858	22-10	箱形C	60	90	-	-	-	-	鉄釘多数	S H858-860
	S H859	22-10	直葬	60	45	10	-	-	-		
	S H860	22-10	早稲	104	82	90	-	-	-		S H858-860
	S H862	22-9	早稲	95	(78)	64	65	55	15		S H881-847-862
	S H863	22-9	箱形A	(58)	86	47	-	30	8	寛永通寶(新)	S H866-863-877-864-865
	S H864	22-9	箱形B	(96)	86	27	76	44	25	数珠・寛永通寶(古+文+新)	S H866-863-877-864-865
	S H865	21-10	箱形A	85	80	60	57	32	17	寛永通寶(文+新)	S H866-863-877-864-865
	S H866	22-10	直葬	92	(80)	18	-	-	-	寛永通寶(新)	S H866-863-877-864-865
	S H867	22-11	早稲	95	62	42	85	52	13	寛永通寶(古+新)	S H855-867
38	S H868	22-11	箱形A	85	(54)	53	66	22	25	透徹下駄・位牌(墨紙有り)	S H868-874
	S H870	20-12	箱形A	65	47	12	50	30	10	寛永通寶(新)	
30	S H871	22-11	箱形A	80	72	60	55	35	24		S H871-872-660
	S H872	22-11	箱形B	90	64	64	40	25	32	寛永通寶(新)	S H871-872-660
	S H873	21-10	直葬	58	38	2	-	-	-	寛永通寶(新)	S H873-875-876-731
39	S H874	22-11	箱形B	136	72	50	113	42	12	寛永通寶(北+古+新)	S H868-874
	S H875	21-10	直葬	76	54	5	-	-	-	寛永通寶(新)	S H873-875-876-731
40	S H876	21-10	箱形C	72	42	27	-	-	-		S H873-875-876-731
	S H877	22-9	箱形B	(96)	90	52	72	47	18	寛永通寶(新+不)	S H866-863-877-864-865
40	S H878	22-10	箱形C	-	-	-	(50)	(22)	-	寛永通寶(文+新)	S H878-849-850
	S H879	21-10	箱形A	75	38	27	57	25	5	寛永通寶(新)	S H879-873
38	S H880	20-11	直葬	54	45	35	-	-	-		
	S H881	22-9	早稲	140	90	102	74	60	12	大船相馬焼小碗	S H881-847-862
40	S H882	22-8	直葬	90	44	35	-	-	-		
	S H883	22-9	箱形A	92	56	43	55	38	14	寛永通寶(文)	
	S H884	23-10	箱形A	145	95	75	57	32	28	寛永通寶(古+文+新)	
	S H885	22-10	箱形C	120	85	22	-	-	-	寛永通寶(新)	
40	S H889	22-10	箱形A	75	54	54	54	33	21	肥前系小碗	S H889-851
	S H890	21-11	箱形C	77	(52)	16	-	-	-	寛永通寶(新+不)	S H845-870-749

※流れ込み等で入り込んだ遺物は掲載していない。

※箱形でも、底部に横木を渡し蓋し蓋を効いたのみものを箱形A、板材や角材で全体を囲んでいるものを箱形Bとした。

また、木棺が高倉しているものや、覆土内にその痕跡がある場合は、箱形Cを付した。

※覆土に骨片を含んだ人為堆積の場合に限り墓坑とした。

銭1枚、新寛永4枚である。

SH849・850・851・878・889（第40図）D区南側22-10Gから検出されている。その新旧関係はSH878→SH849→SH850と切り合っており、またSH851がSH889を切る。埋葬施設は、SH849・SH850が直葬で、SH878は箱形Cである。SH878のみ副葬品として文銭1枚、新寛永2枚が出土している。

SH851の木棺は長軸63cm、短軸30cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、新寛永6枚である。SH889の木棺は長軸54cm、短軸33cmの箱形Aで、底部からは炭化物と遺灰が出土している。副葬品は肥前系の小碗である。墓の埋葬年代は18世紀後半以降と考えられる。

SH858・859・860（第40図）D区南側22-10Gから検出されている。SH860がSH858を切る。SH860の埋葬施設は早桶と思われる。また、SH858は箱形Cで、多量の鉄釘が出土している。

SH855・867・885（第40図）D区南側22-10・11Gから検出され、SH867がSH855を切っている。SH855は底部に炭化物が残存しており、箱形Cである。副葬品は六道銭で、新寛永2枚、不明4枚である。SH867は直径52cm、深さ85cmの早桶である。副葬品は六道銭で、古寛永1枚、新寛永3枚である。SH885は箱形Cで、底部に炭化物が残存している。そして副葬品は六道銭で、新寛永3枚である。

SH856・857（第40図）D区南側22-10Gから検出されている。SH856が、SH857を切る。SH856は直葬で、長軸100cm、短軸75cmの掘り方を持つ。副葬品は、大堀相馬焼腰折碗、肥前系波佐見産「くらわんか碗」、鉄製の三足鉢が出土している。三足鉢は、北側から逆位に出土している。伝染病などで隔離されて死去した遺体の頭部に鉢や鍋をかぶせて埋葬する例もあり、埋葬状況から埋葬者の死後の取り扱いが想起できる。

SH857は直葬で、長軸45cmの掘り方を持つ。副葬品は出土しなかった。

SH847・862・864・865・866・877・881（第40図）D区南側21・22-9・10Gから検出されている。新旧関係は、SH866→SH863→SH877→SH864→SH865、SH881→SH847・SH862と切り合っている。SH864の木棺は長軸76cm、短軸44cmの箱形Bである。副葬品は六道銭とガラス製の数珠である。銭貨は古寛永5枚、文銭1枚、新寛永1枚である。

SH865の木棺は長軸57cm、短軸32cmの箱形Aである。副葬品は六道銭で、文銭1枚、新寛永5枚である。SH866の埋葬施設は直葬である。副葬品は六道銭で、新寛永2枚である。SH877の木棺は長軸72cm、短軸47cmの箱形Bである。副葬品は六道銭で、新寛永2枚、不明1枚出土している。

SH881の木棺は、直径60cm、高さ74cmの早桶である。副葬品は大堀相馬焼の腰張碗である。墓の埋葬年代は19世紀前半以降と考えられる。

5 井戸跡・土坑

井戸跡

井戸跡は、概ね中世以降のものと思われ、A類：素掘りのもの・B類：曲物を積み重ねた上に未加工の石材を積み上げたもの・C類：植物編物を用いているものに大別される。

SE80・84・478・821（第41図）SE80はC区21-24Gで検出されている。井戸跡A類である。平面形はやや長方形に近い楕円形を呈している。規模は、長軸145cm、短軸135cmである。長軸方向はN-25°-Eである。壁の立ち上がりは、やや急で、断面形は楯鉢状になっていた。

SE84はB区21-22Gで検出された。井戸跡B類である。平面形は、やや長方形に近い楕円形である。規模は、掘り方上部で長軸128cm、短軸115cmを測り、下部で直径45cmのほぼ円形になる。長軸方向はN-25°-Eである。断面形はロート状を呈し、下部に曲物を3重に埋設している。上部の使用石材は河原石を野積みした状態で、加工材による頑丈な構造ではない。出土遺物は、産地不明の近世陶器小片1点のみである。

SE478はC区21-24Gで検出された。井戸跡C類である。平面形は楕円形で、規模は長軸120cmで、短軸115cmを測る。長軸方向は、N-65°-Eである。断面形はほぼ筒状を呈し、壁の立ち上がりは垂直に近い。上位面に莖状の植物編物が壁面に付着していた。土留め用に敷いた可能性がある。

SE821はD区22-12Gで検出された。井戸跡A類である。平面形は楕円形で、規模は長軸178cmで、短軸145cmを測る。長軸方向は、N-70°-Wである。壁の立ち上がりはやや急で、断面形は台形であった。

土坑

SK143・673・744・336（第41図）

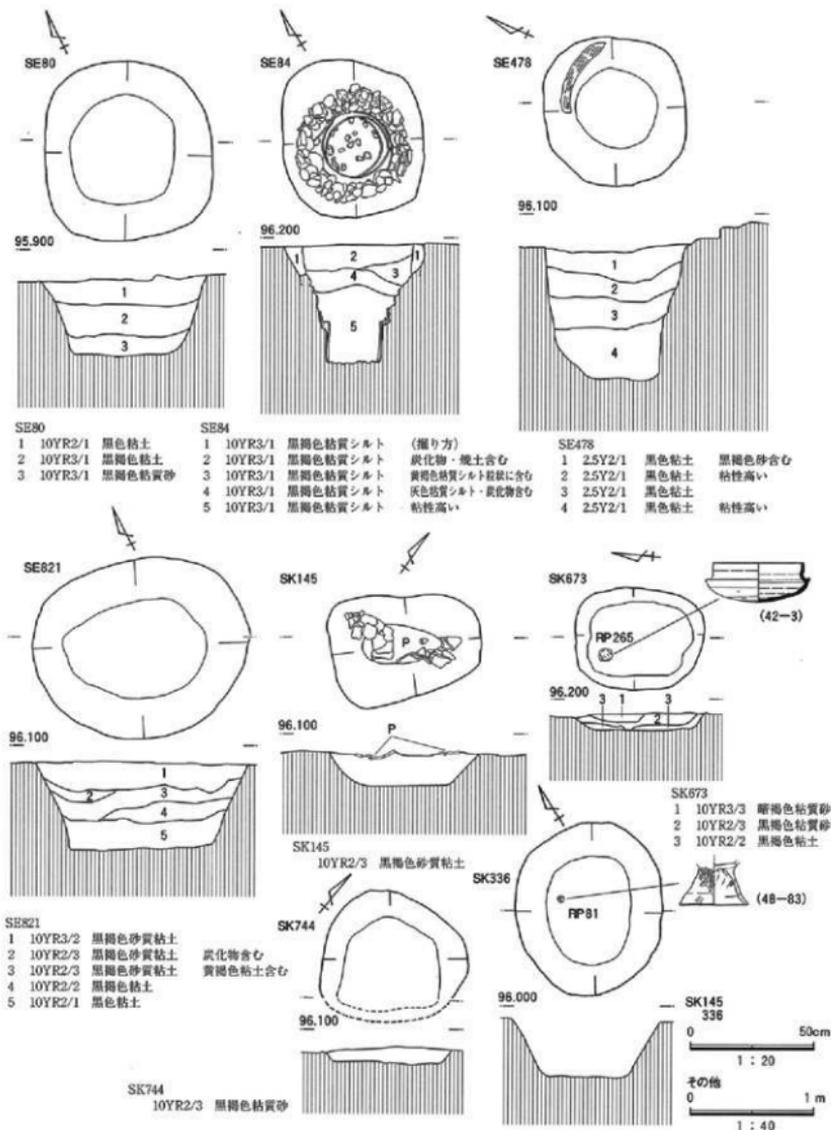
SK145はB区18-20Gで検出された。上面の遺構である。平面形は不整形で、北側がやや狭い。規模は長軸60cm、短軸45cmを測る。長軸方向はN-45°-Eである。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形はレンズ状であった。遺物は、2個体以上ある甕の破片で、頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲する器形である。

SK673はD区22-13Gで検出された。上面の遺構である。平面形は長方形に近い楕円形で、規模は長軸105cm、短軸85cmを測る。長軸方向はN-5°-Wである。壁の立ち上がりはやや緩やかで、断面形はレンズ状であった。上層からTK23形式並行と考えられる須恵器坏身が出土している。

SK744はD区21-14・15Gで検出された。上面の遺構である。平面形は不整形で、北側と東側に張り出す。規模は長軸115cm、短軸110cmを測る。長軸方向はN-50°-Eである。壁の立ち上がりはやや緩やかである。出土遺物は、やや長胴の小型甕である。

SK336はC区17-24Gで検出された。下面の遺構である。平面形は楕円形で、断面形は台形である。規模は長軸70cm、短軸60cmを測る。長軸方向はN-30°-Eである。台付甕の台部のみ出土している。

遺構



第41図 井戸跡・土坑

V 遺物

1 須恵器 (42-1~6)

須恵器の器形としては、坏蓋・坏身・甕がある。総点数は6点で、堅穴住居跡・溝跡・土坑から出土している。概ね陶器編年のTK208~23形式に並行する時期に比定され、5世紀後半~末の様相を呈する。以下詳しく述べることとする。

42-1は坏蓋である。天井部は、ほぼ平坦で、外面にケズリ調整を施す。口縁部は、ほぼ直線的に垂下し、口唇部にシャープな段が付く。端部の形状や外面の調整からTK208形式に相当する。陶器窯跡群でも一般的な形である。

坏身は4点出土しており、口唇部に段を持つもの(42-2)、斜状に成形しているもの(42-3)、丸いもの(42-4・5)がある。

42-2は、底部が窪み、口縁部が直線的に立ち、口唇部にシャープな段が付く。全体的な形状から42-1と同様のTK208形式に当たり、陶器窯跡群でも一般的な形である。42-3は、口縁部が内側に屈曲した後に直線的に立つ。また口唇部が斜状に成形されている。また、2つの焼台に置いてから焼成しており、底部に2つの窪みがある。火元の方が硬く焼けている。42-4は、体部に丸みを帯びており、法量が小さくなってきている。口唇部が丸い。42-5は、体部・底部が丸く、口縁部が直線的に立ち、口唇部も丸い。底部に「×」の線刻がある。42-3~5は、ケズリの単位が粗く42-2より新しい様相を示しており、少し新しいTK23形式に相当する。

42-6は甕である。口縁部が、内弯気味に開き、中位に段が付く。口縁部外面に細かい波状文を巡らしている。口唇部にシャープな段を持ち、42-1・2と同時期と考えられる。

2 土師器 (42-7~52-107)

ミニチュア土器(42-7~15)の器形は、坏・高坏・甕がある。坏は、体部がほぼ直線的に立つもの(42-7~9)、内弯気味に立つもの(42-10~12)に分けられる。42-12は法量がやや大きく、口径が8cmを越える。高坏は、脚部のみで円錐状の外形を呈している。甕は、ヘラナデで調整をしており、全体的にナデ調整を施す。口径が8.4cmと推定される。ミニチュア土器全体として、すべて粗製であり、坏は手捏ねのものが多い。

坏(42-16~43-43)は、器形の特徴から以下のように分類できる。

A類：有段坏(42-16)

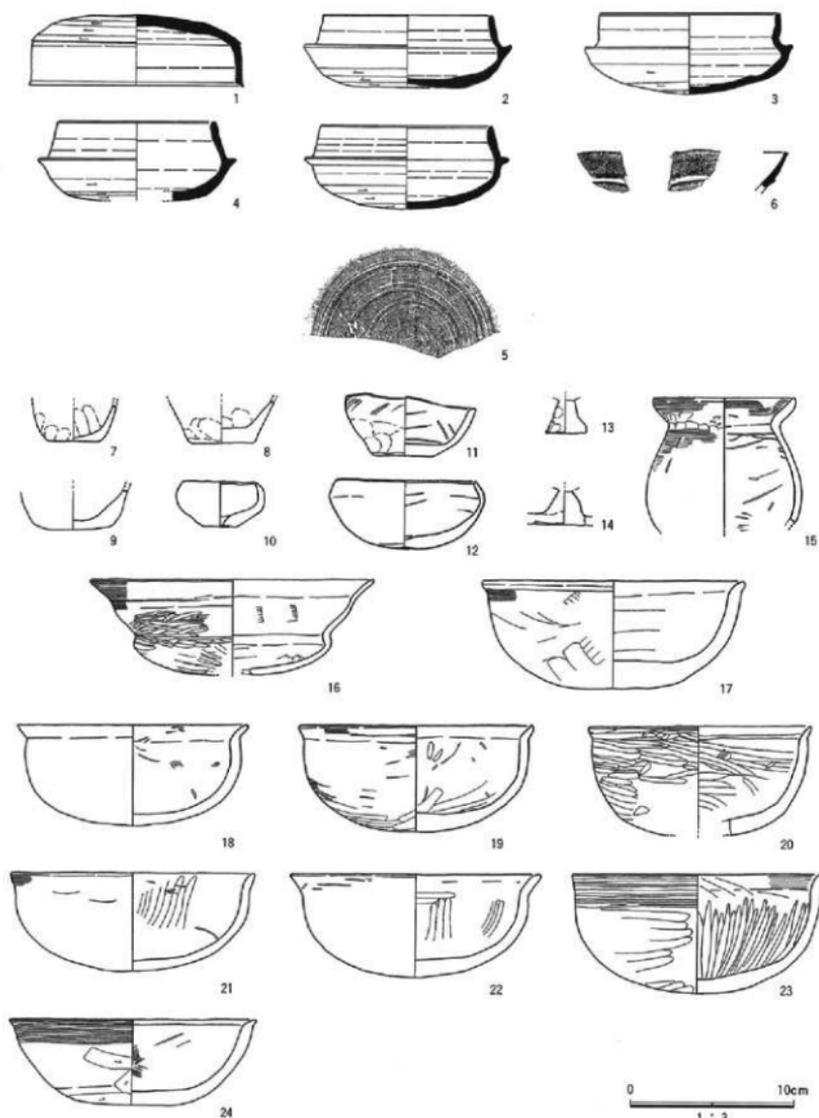
B類：口縁部が、体部上位で屈曲し外反するもの。口唇部が外傾するB1類(42-17~43-26)と内面のみ稜を残すB2類(43-27~30)に分けられる。

C類：体部から口縁部にかけて大きな変化がなく立ち上がるもので、口縁部が直立・内弯するもの(43-31~37)

D類：口縁部が体部上位で屈曲し、直立するもの(43-38)

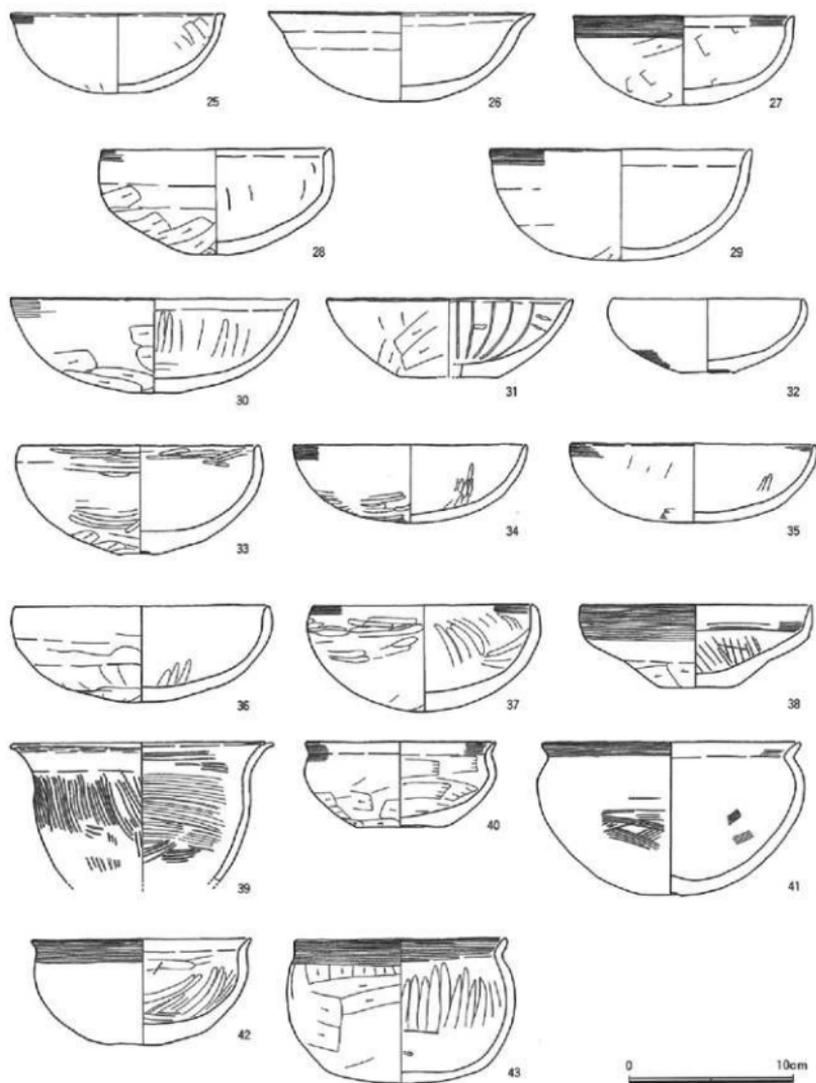
E類：口縁部と体部の境がくびれるもので、口縁部が外反する鉢形のもの(43-39~43)

下面の住居跡の様相として、A類からE類まで確認できるが、E類が主体的で、B類が客体的

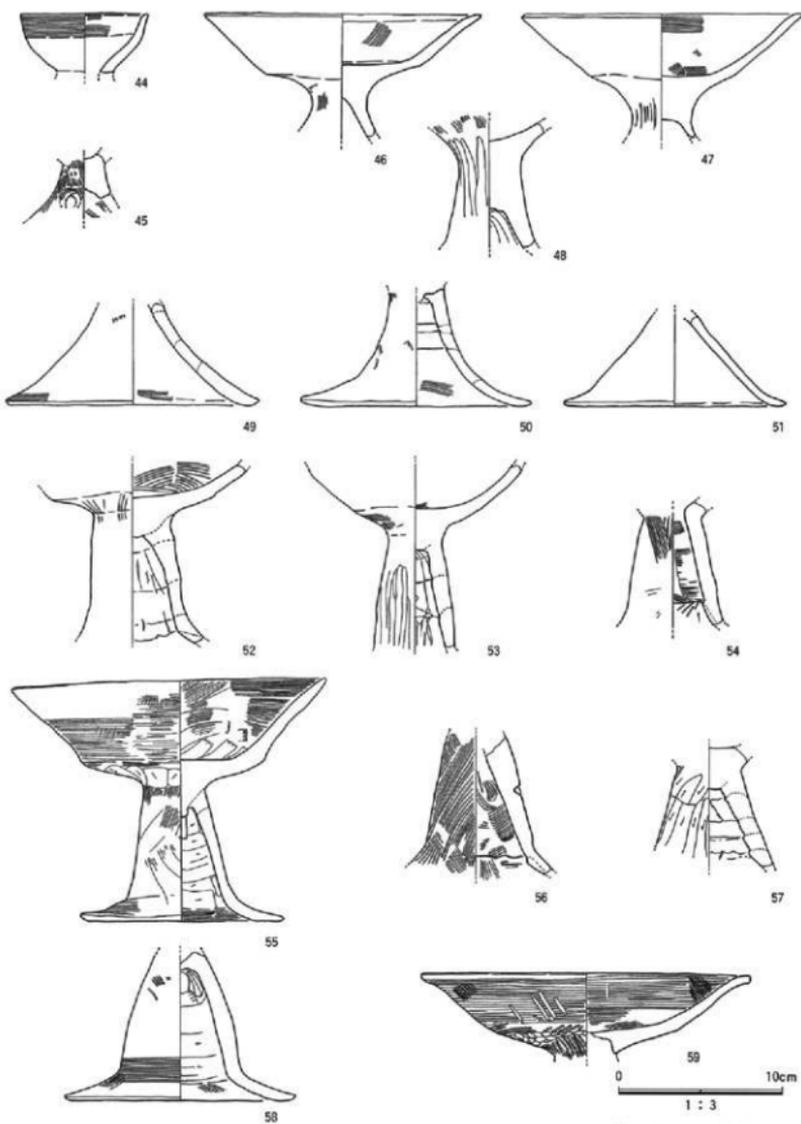


0 10cm
1 : 3

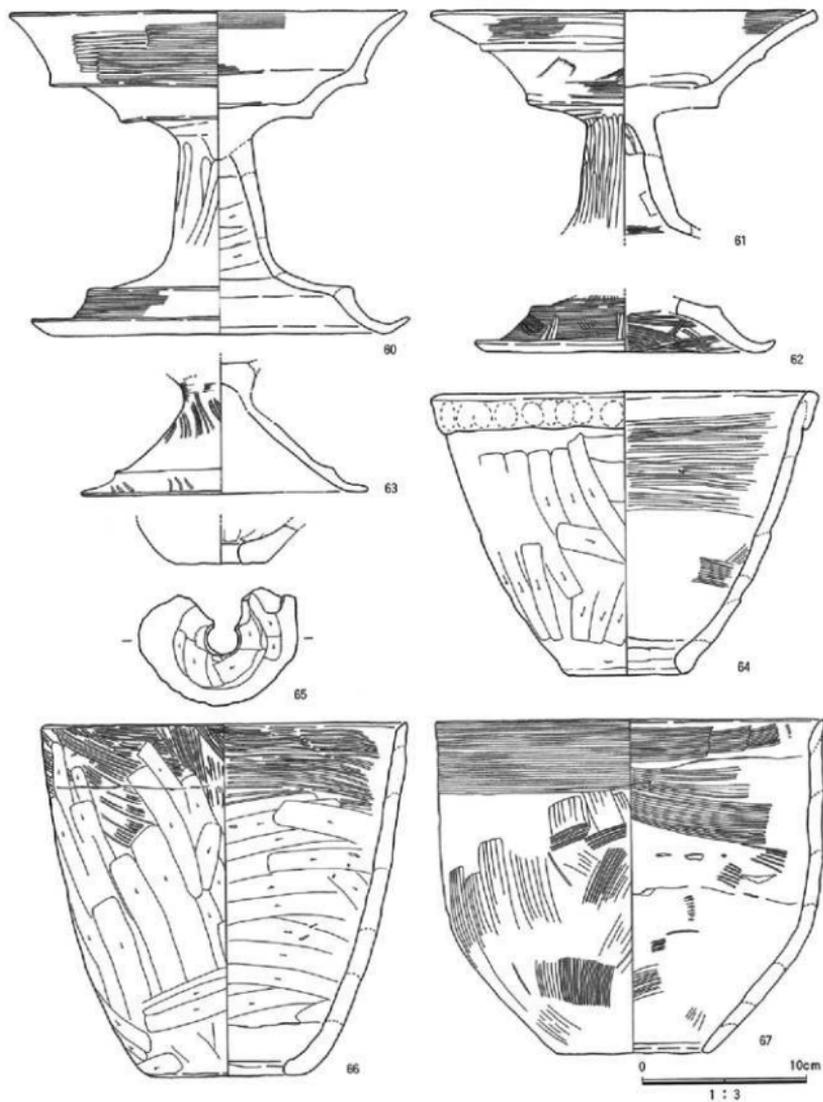
第42図 出土遺物(1)



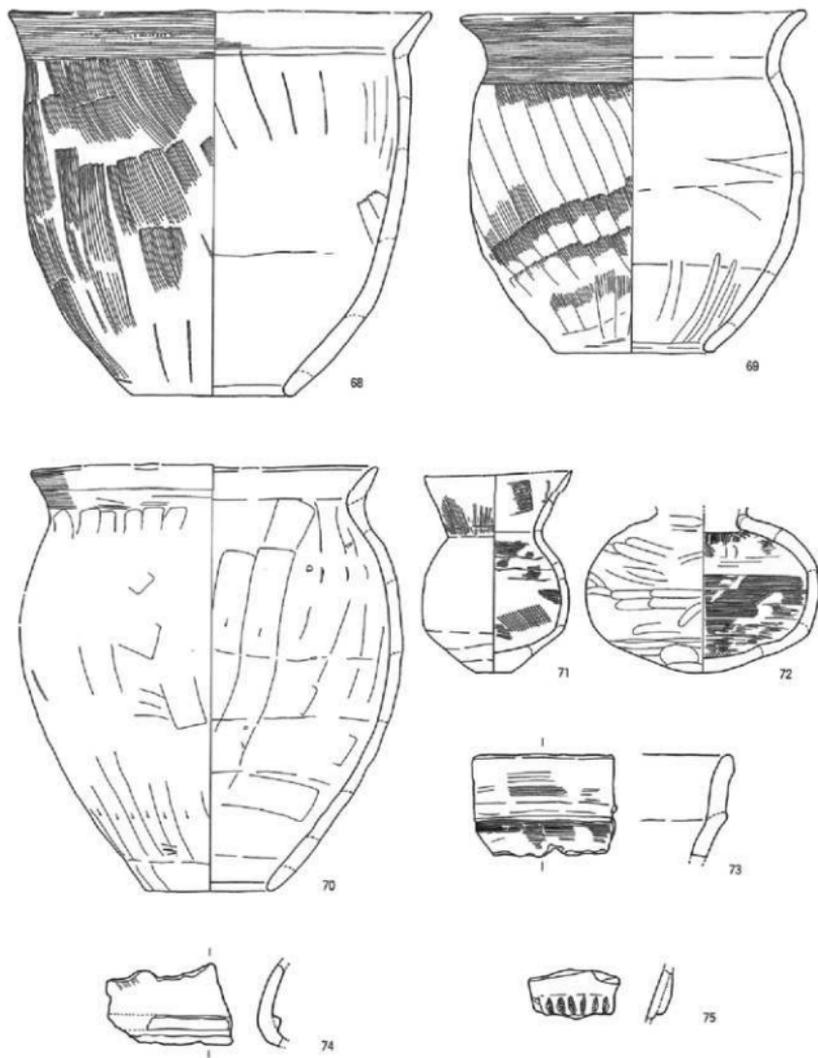
第43図 出土遺物(2)



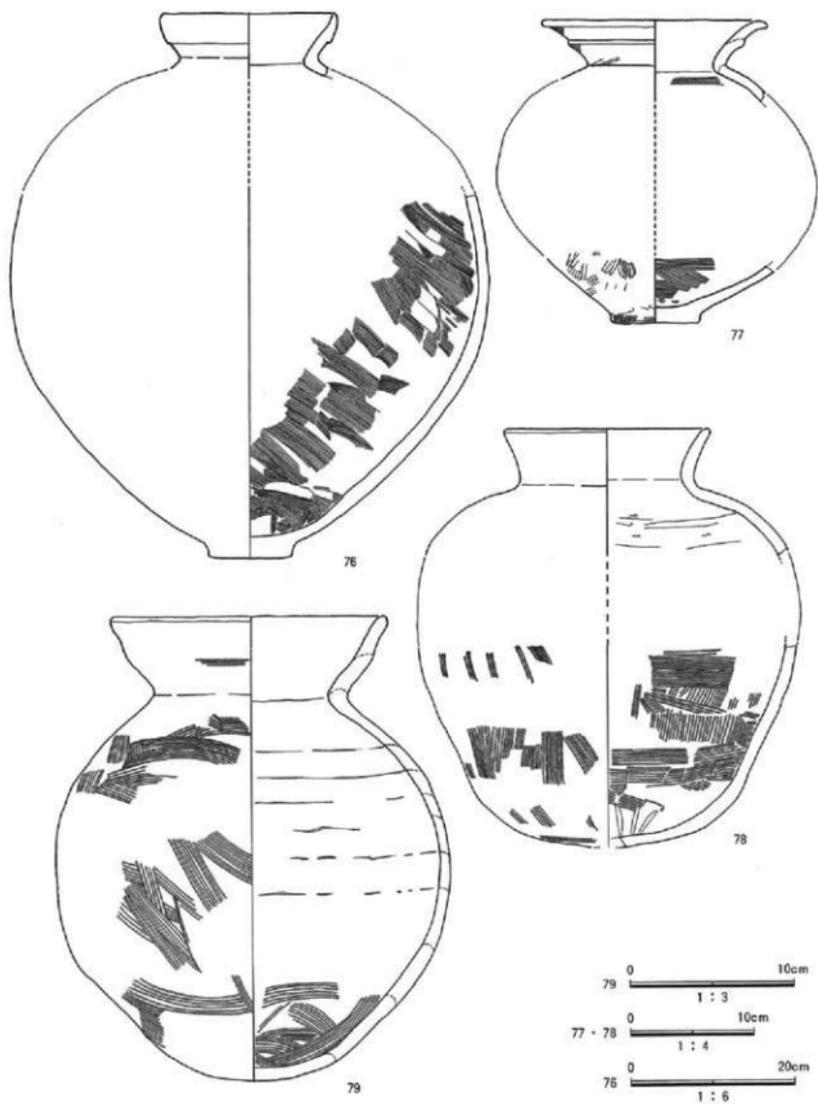
第44図 出土遺物 (3)



第45図 出土遺物(4)



第46図 出土遺物(5)



第47図 出土遺物(6)

であるようである。上面の住居跡では、B1類が主体的である。

器台(44-44・45)は受部と脚部のそれぞれが出土している。(44-44)は受部のみで、やや身が深くなっている。(44-45)は脚部のみで、3つの円孔がある。受部中央に穿孔がないタイプである。

高坏(44-46~45-63)は、器形の特徴から以下のように分類できる。

A類：脚部と裾部の境が認められないもので、脚部が円錐状を呈する(44-46~51)

B類：脚部が屈折し裾部を作るもので、柱状中空のB1類(44-52~54)と、脚部中空で中央部が膨らむエンタシス型のB2類(44-55~58)に分けられる。

C類：坏部や裾部に段や突帯が巡るもの(45-60~63)

44-59は坏部のみのため脚部の構造は不明であるが、体部の屈曲が退化してくる時期のもので、B類のいずれかにあたるものと思われる。

下面の住居跡の様相としてA類とC類が挙げられるが、A類が主体的である。また、上面の住居跡では、B類が主体的である。

甌(45-64~46-70)は、器形の特徴から以下のように分類される。

A類：有孔鉢で、折り返し口縁のもの(45-64・65)

B類：砲弾形で無底のもの(45-66~68)

C類：壺形で無底のもの(46-69・70)

壺(46-71~48-81)は、器形の特徴から以下のように分類される。

A類：小型壺で口縁部高が体部高より低く、口径と体部径が等しいA1類(46-71)と、体部が横長の直口壺A2類(46-72)に分けられる。

B類：屈曲する口縁をもつもの(46-73)

C類：頸部に突帯が巡るもの(46-74)

D類：二重口縁をもつもの(46-75・47-76)

E類：有段口縁で胴部が球状を呈するもの(47-77)

F類：素口縁で口縁部が直線的ないし内弯して立つもの(47-78~48-80)

G類：口縁部中位で軽い段を持ち端部にかけて内弯するもの(48-81)

下面の住居跡の様相として、大型製品も含めて口縁部に特徴があるものが多く出土している。上面の住居跡ではB・E・G類が挙げられるが、E類が主体的である。形状として、上面出土のものが頸部の縮まりがなくなる傾向にある。

甕(48-82~52-107)は、器形の特徴から以下のように分類される。

A類：S字口縁をもつもの(48-82)

B類：台付甕(48-83)

C類：肩部から口縁に至る断面が「く」の字状のもので、胴部の最大径が上位にあるC1類(48-84・85)、胴部の最大径が中位にある球胴形のC2類(48-86~49-89)、胴部径が底部から頸部までの高さよりも小さい長胴のC3類(49-90~52-105)に分けられる。

D類：直立する口縁部をもつもの(52-106)

E類：内弯する口縁部をもつもの(52-107)

下面の住居跡の様相としてC1・D・E類が挙げられるが、多くの破片資料から類推してみると、C1類またはC2類に当たるものが多いようである。上面では、C3類が主体的である。時代が下るにつれて長胴化する傾向が見られる。

3 陶磁器 (52-108~54-136)

青磁 (52-108) は、碗の高台から体部にかけての破片のみ出土した。外面に幅の広い鎊蓮弁文を施している。14世紀の所産で、龍泉窯産と考えられる。

瀬戸系陶器 (52-109) は、器形が平碗で口縁部のみ出土した。器面には灰釉が施され、胎土は黄灰色を呈する。藤澤編年で中皿期に当たり、14世紀中頃と考えられる。

中世陶器としては、珠洲系か壺器系か判別がつかないものを挙げた。52-110は片口鉢である。口唇部が嘴状につままれている。口縁部まで直線的に立ち上がる器形である。

信楽焼 (53-111) は、肩部から内傾しながら立ち上がり、口縁部で外反して口唇部にかけて垂下する甕が出土した。口縁部の外形から15世紀後半の所産であると考えられる。

壺器系陶器 (53-112) は、体部のみ出土した。大型の甕の破片と考えられる。外面は、水挽きロクロで成形した後にケズリ調整している。産地・時期などは不明である。

須恵器系陶器 (53-113・114) は、SD22・87のみ出土した。53-113は、甕の口縁部破片で、肩の張る器形と思われる。全体的に生焼け気味で、焼成は不良である。53-114は甕の体部破片で大型の甕を想定できる。外面に条線状のタタキを施し、内面に楕円形の押圧痕が施されている。

近世・近代磁器 (53-115~54-126) は、主に墓域から出土した。

53-115は、白磁猪口で、釉薬は灰白色の白磁釉である。腰輪高台で、口唇部にかけて直線的に立ち上がる。畳付が露胎である。肥前系磁器で、18世紀後半の所産である。

53-116は、染付小碗で口縁部にかけて直線的に立ち上がる。外面にのみ文様があり、若松の上から竹葉が下って、反対側に梅文が描かれている。砂底である。肥前系磁器で18世紀後半の所産である。

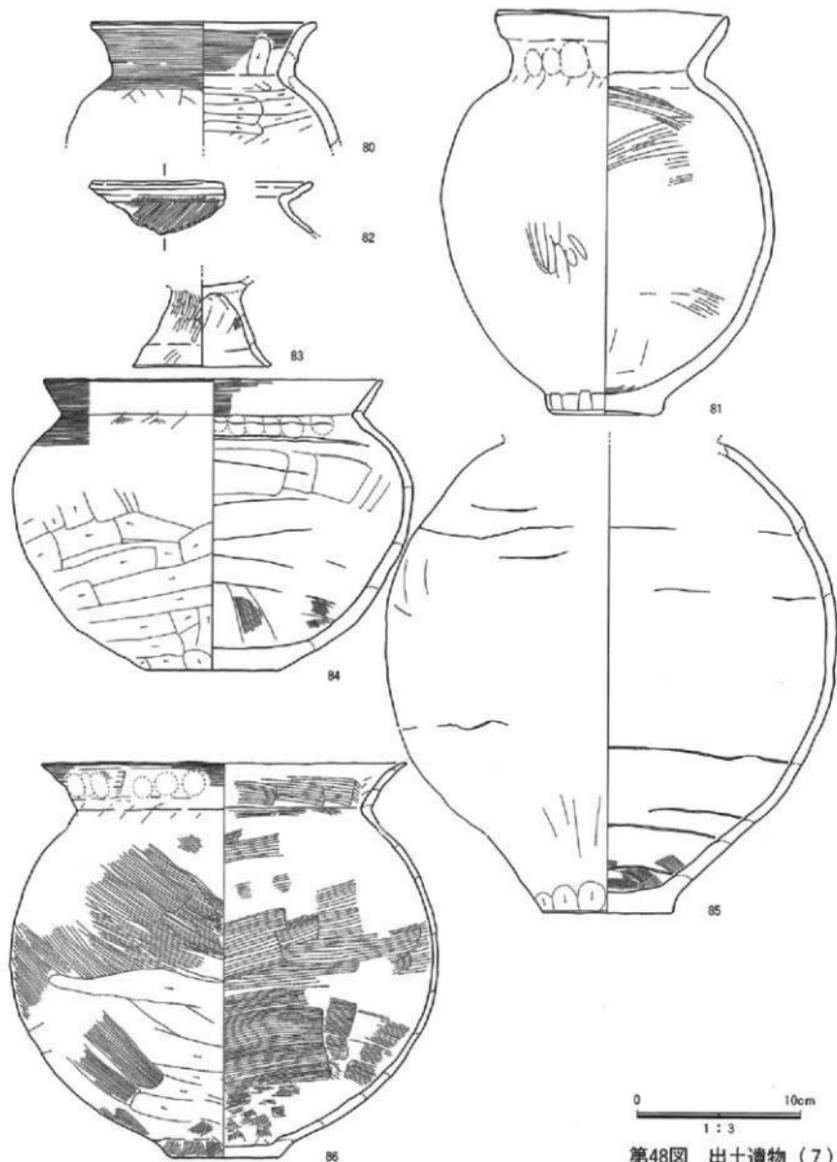
53-117は、染付小碗で外形が端反形である。外面にのみ文様があり、竹と竹葉が描かれている。畳付が露胎である。平清水焼の磁器で19世紀後半の所産である。

53-118・119は、染付小碗である。胎土に微量に黒砂が混入し、焼成も不良である。外面にのみ文様があり、一屋山水文と帆掛け船が描かれている。畳付が露胎である。会津本郷焼の磁器で19世紀前半の所産である。

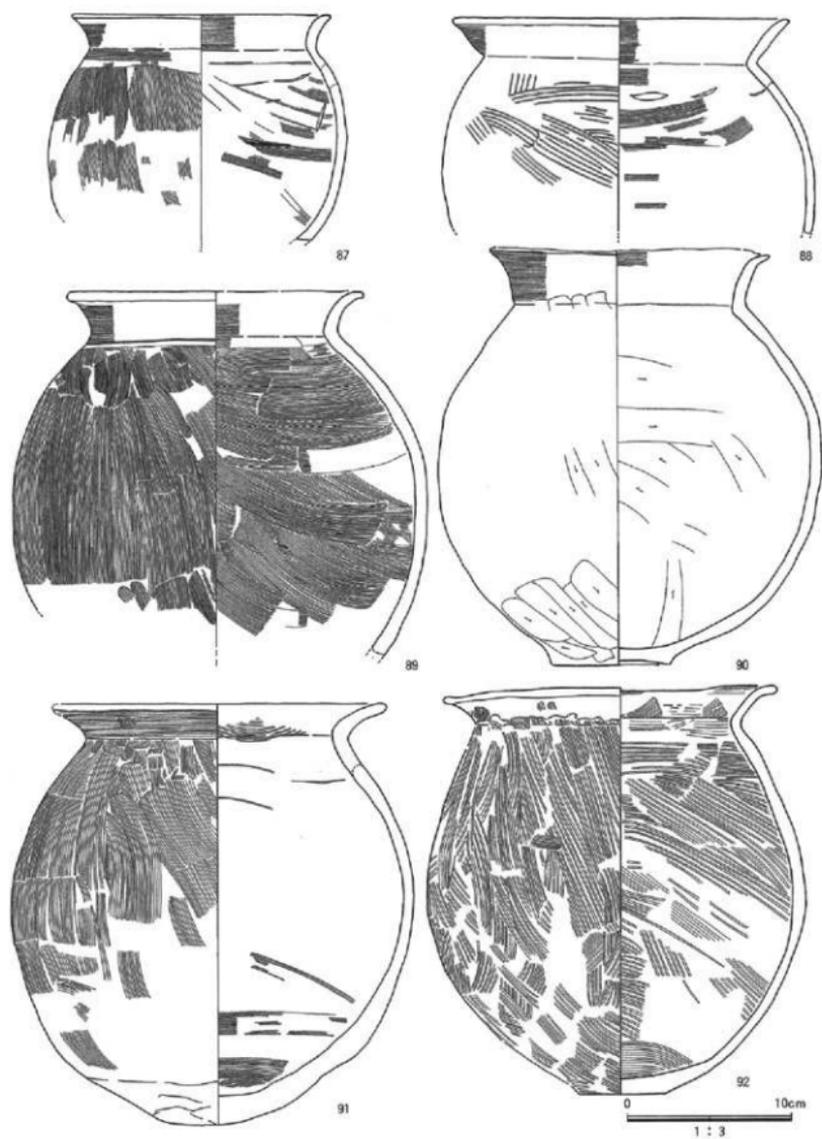
53-120は、染付小碗で、外形が端反形を呈している。焼成が不良である。内外面に文様が描かれている。外面は、上下を圏線で仕切られ、体部中位に山水文を施す。内面に圏線を口唇部直下と見込み周辺に圏線を引き、見込みに岩波文と思われるものを施文している。畳付が露胎である。肥前系磁器で、19世紀前半の所産である。

53-121は染付中碗で、外形がくわんか形を呈している。外面にのみ文様があり、高台部から体部にかけて圏線を引かれ、雪草草花文を施している。高台内側に「大明年製」銘が入っている。砂底である。肥前系波佐見産の磁器で18世紀後半の所産である。

53-122は染付中碗で、外形がくわんか形を呈している。外面にのみ文様があり、高台部か



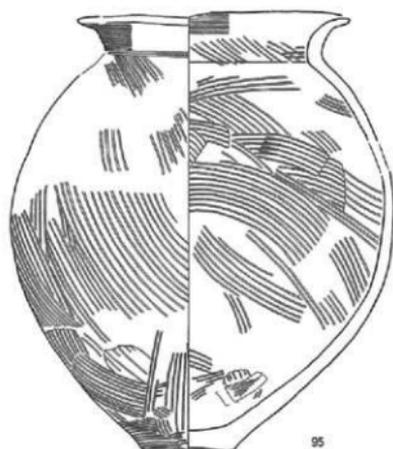
第48図 出土遺物(7)



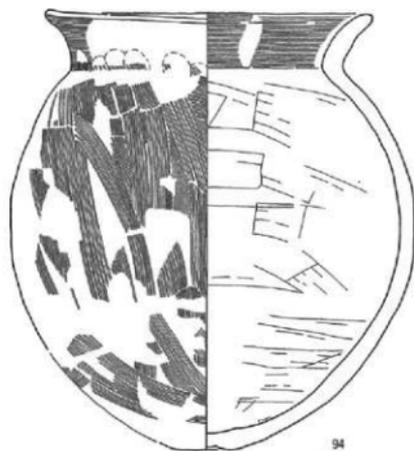
第49図 出土遺物(8)



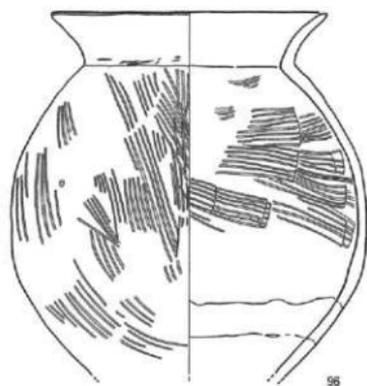
93



95



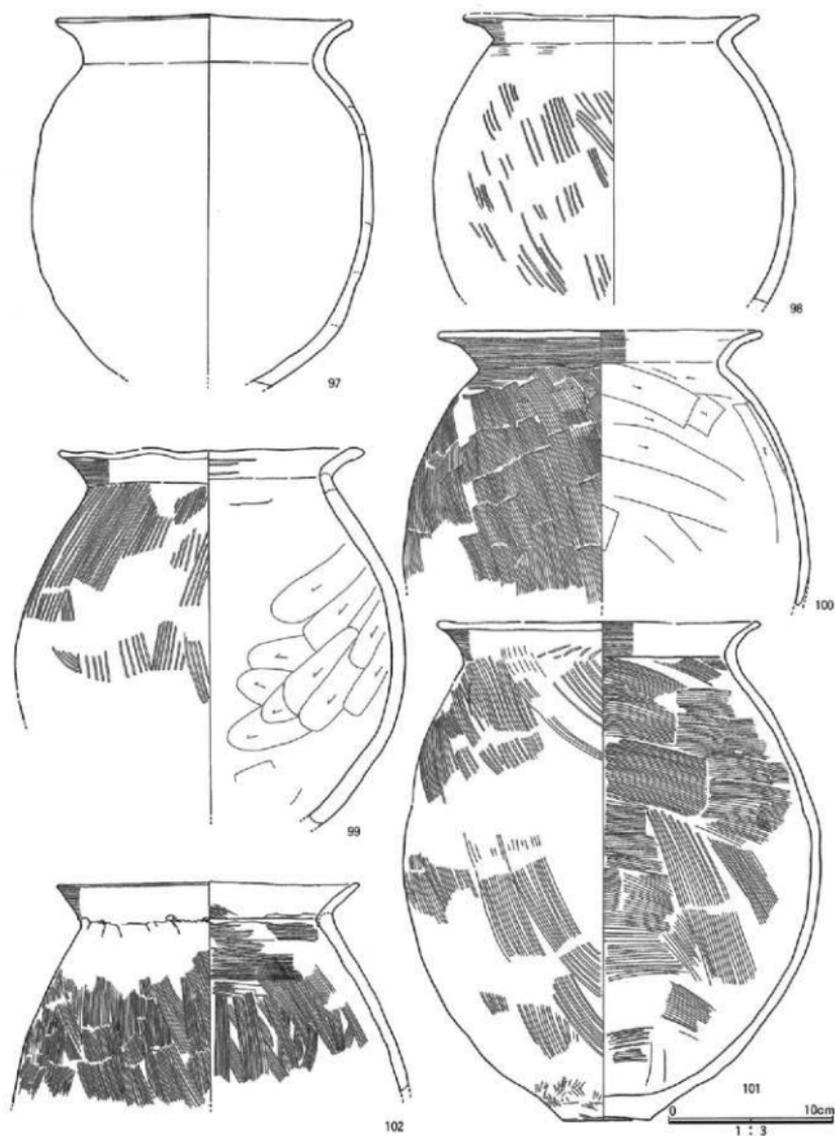
94



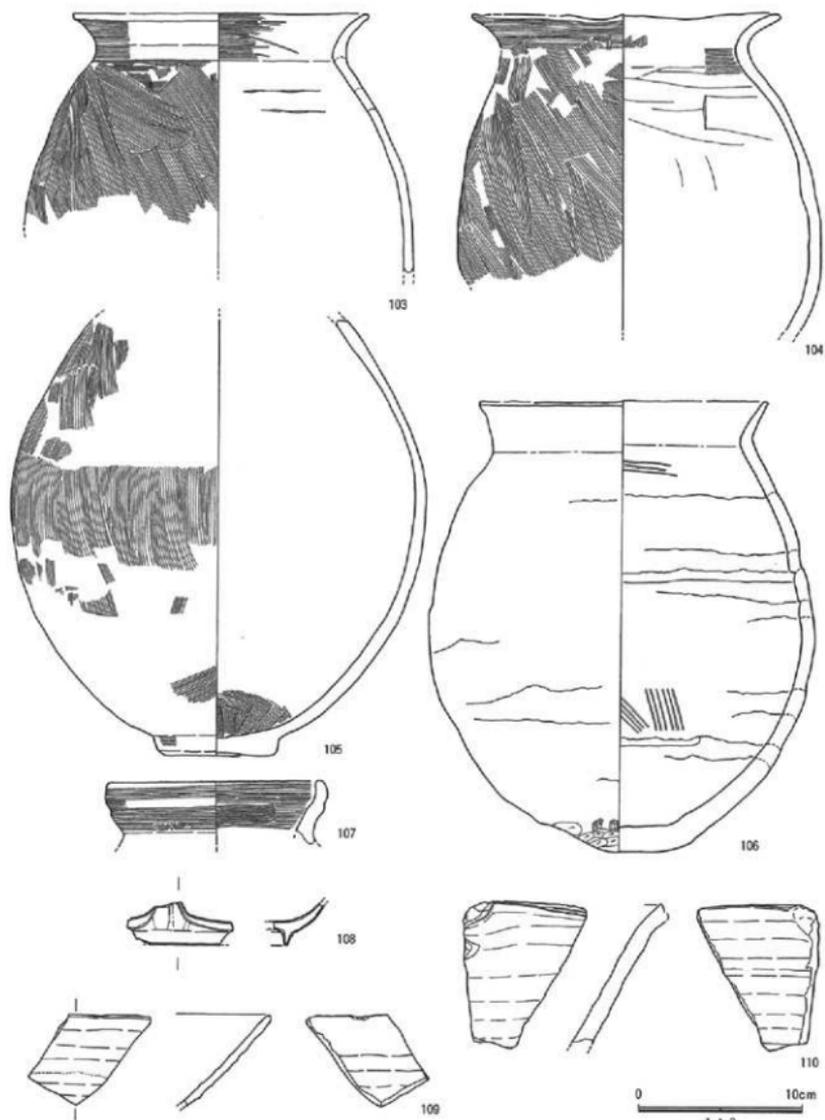
96

0 10cm
1 : 3

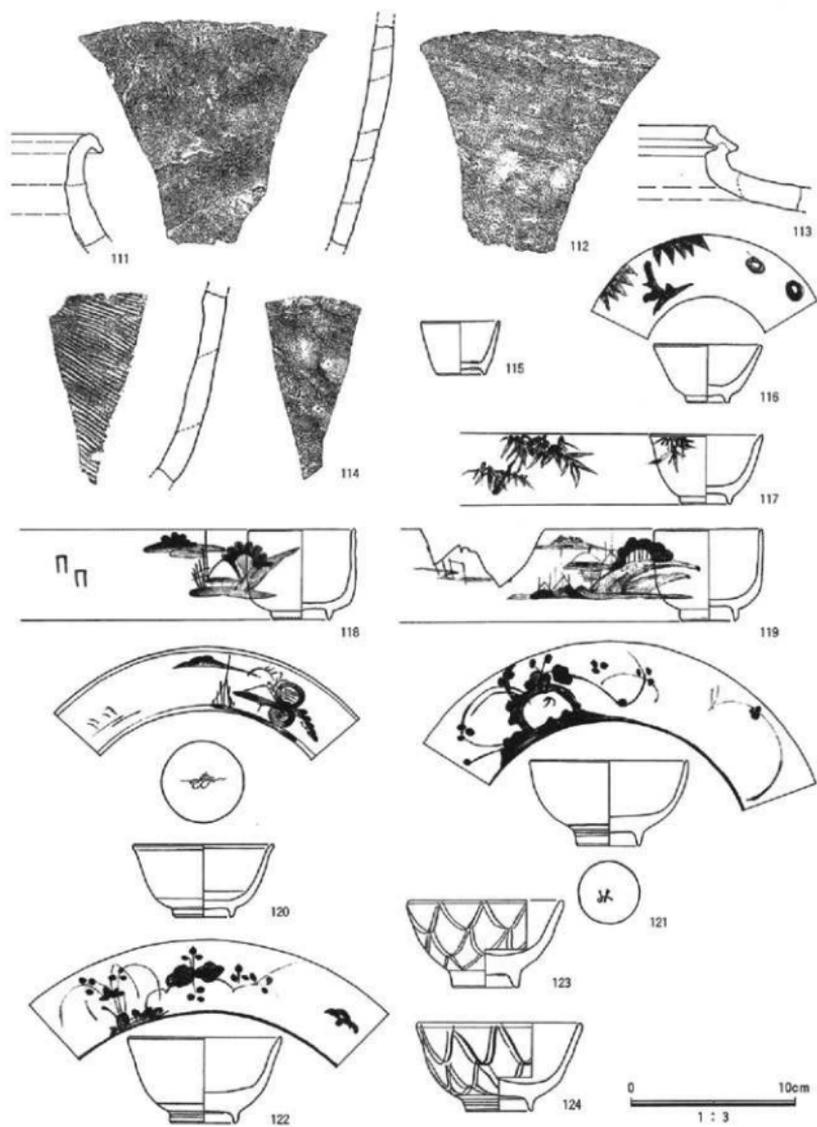
第50図 出土遺物(9)



第51図 出土遺物 (10)



第52図 出土遺物 (11)



第53図 出土遺物 (12)

ら体部にかけて圏線を引き、体部から口縁部にかけて千鳥・草が描かれている。砂底である。肥前系佐波見産の磁器で18世紀前半の所産である。

53-123・124は染付中碗で、外形がくらわんか形を呈している。外面にのみ文様があり、二重網目文を施している。53-124のみ高台部から体部にかけて圏線を引いている。両者とも砂底である。肥前系佐波見産の磁器で、18世紀後半の所産である。

54-125は染付湯呑で、外形が半筒形を呈している。内外面ともに文様がある。外面は、上下に圏線を引き、中位に羊歯文を施す。内面は口唇部直下に四方禪文を施し、見込みにはこんにやく印判で五弁花が施されている。畳付が露胎である。肥前系磁器で18世紀後半の所産である。

54-126は染付仏花瓶である。外面にのみ文様があり略した若松と草が描かれている。畳付が露胎である。肥前系磁器で18世紀後半の所産である。昨年度文化財課が行った調査でも同じ器形のもので出土しているが、本調査で出土したものより小さい。

近世・近代陶器(54-127~136)は、主に墓域から出土している。

54-127~130は小碗で、高台内・畳付が露胎である。54-127のみ底部が、他のものより小さい。54-127・128・130は糠白釉である。また、54-127に紅が付着していることから紅皿として使用されていたと思われる。4個体すべて大堀相馬焼で、19世紀前半の所産である。

54-131は中碗で、外形は丸形を呈している。高台内・畳付が露胎である。灰釉碗で釉薬は明オリブ灰色(失透)である。大堀相馬焼の陶器で文化・文政期(1804~1829年)の所産である。

54-132・133は小碗で、外形は腰張形を呈している。高台内・畳付が露胎である。灰釉碗で灰白色の釉薬に黒褐色の鉄釉を流し掛けている。大堀相馬焼の陶器で、19世紀前半の所産である。

54-134は小碗で外形は腰折形を呈している。高台内・畳付が露胎である。灰釉碗で、青灰色の釉薬を施している。大堀相馬焼の陶器で、18世紀末葉の所産である。54-135は小碗で、外形は半筒形を呈している。高台内・畳付が露胎である。糠白釉で灰白色の釉薬を施している。大堀相馬焼の陶器で、19世紀前半の所産である。

54-135は小碗である。高台内・畳付が露胎である。焼成が不良で、釉薬も薄く掛けられている。体部には鉄絵走馬文が描かれている。大堀相馬焼の陶器で、19世紀後半の所産である。

4 その他の遺物(54-137~62-624)

石器(54-137)はアメリカ型石鏃である。基部に両側から挟り込みを施し、形状はやや湾曲したT字を呈している。材質は黒色頁岩である。

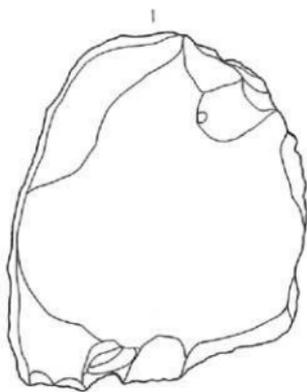
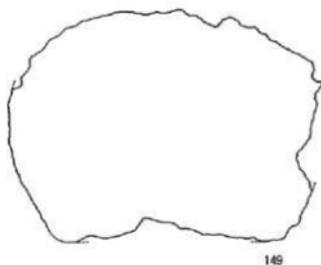
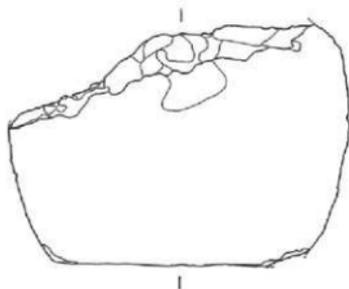
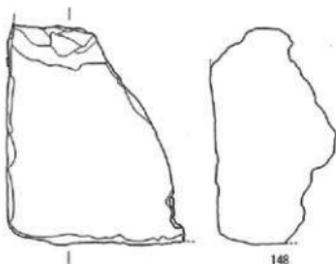
古墳時代の石製品・石製模造品(51-138~144)は、ほとんど住居跡内から出土している。

45-138は管玉で、一部欠損している。表面は丁寧に研磨されている。孔の径は2.5mmで両側から穿たれている。材質は碧玉である。45-139は白玉で、側面に稜が見られず直線的で丁寧に研磨されている。材質は碧玉である。45-138と幅が同様なことから、管玉状のものを切って作成されたものと思われる。碧玉製の製品は時代が下るにつれて使用が希薄になることから古い段階の要素を多分に残していると言える。45-140は勾玉で、両面ともに丁寧に研磨されている。下端部が鋭く三日月型を呈す。上端部が一部欠損しており、円孔も半分欠けて



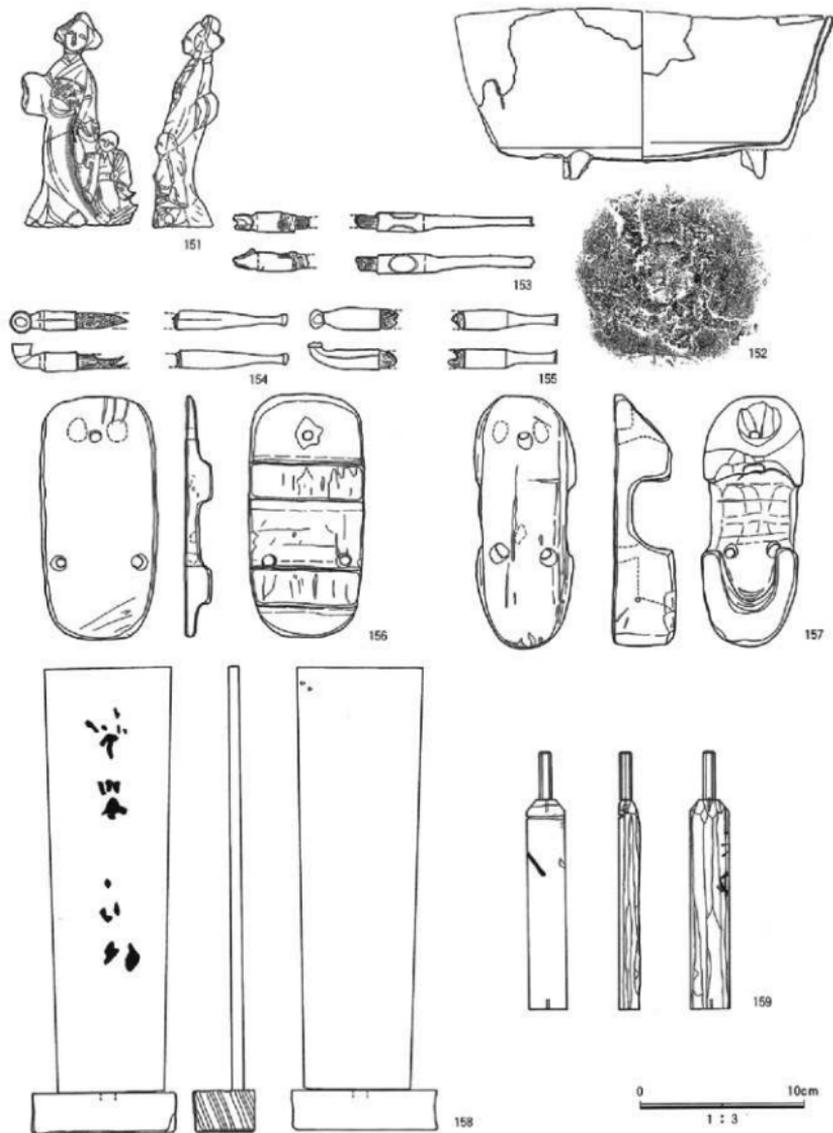
第54図 出土遺物 (13)

銅板



0 10cm
1 : 4

第55図 出土遺物 (14)



第56図 出土遺物 (15)

いる。材質は黒色頁岩である。

45-141~143は、有孔円板である。3点とも双孔円板で、比較的調整は粗雑になってきている。孔径は3点とも左右1.5mmで、大きさは45-143が半分欠損しているものの若干大きい。材質は45-141が流紋岩、45-142が緑泥片岩、45-143が黒色頁岩である。

45-144は、紡錘車である。計測値は、上端径32mm、下端径47mm、高さ19mm、孔径8mmである。断面形が台形を呈している。三角形の幾何学模様を側面に2段、上端面に1段施す。材質はガラス質を含む緑泥岩である。

中世以後の石製品 (54-145~55-150)

54-145・146は砥石である。両者ともキリ状工具研磨痕が残り、5面で研磨している。共伴する遺物から前者は中世、後者は近世の所産である可能性が高い。

54-147は、五輪塔空風輪である。先端部が主頭で一節が11cmほどの2段に層をなす。先端部が尖っており、下端は、はめ込み用に細くなっている。荒谷原遺跡出土の五輪塔と類似している。材質は凝灰岩である。55-148は、墓標と考えられ、左下角のみの出土である。前面は平坦で他の部位が崩落のため不明である。材質は凝灰岩である。55-149は五輪塔水輪である。下端部に少し窪みがある。上端部が欠損しているが、臼状の形になると推定される。材質は凝灰岩である。55-150は宝珠形石製品である。先端部が丸く突き出しており、中位は平坦な部分と膨らんだ部分がある。下端部は平坦になるか、はめ込み部があるか不明である。材質は凝灰岩である。

土製品 (56-151)

56-151は母子像で、長さが130mmと比較的大きい。素地は粘土を使用し、前後型合わせで中空である。雑ぎ目をへら調整している。比較的大きいことから東北地方産の土人形と考えられる。

金属製品 (56-152~155) は、鉢、煙管などが出土した。なお、大量の銭貨については後述する。

56-152は、鉄製の三足鉢である。SH856の北側から逆位で出土しており、18世紀代のくらわんか碗や相馬産腰折碗と共伴している。全体的に錆が付着しているが、底部に丸湯口が確認できる。

56-153~155は煙管である。56-153は首部に肩が付き、脂返しの弯曲が少ないもので補強帯が巡る。吸口部に楕円形の線刻がある。56-154は脂返しが弯曲するが、補強帯が巡らないものである。肩が付く形状である。羅字部に炭化物が付着している。56-155は脂返しが弯曲するが、補強帯が巡らない。微妙だが肩が付く形状である。3個体とも脂返しの弯曲が少なく19世紀以降の特徴を表わしていると思われる。

木製品 (56-156~57-166)

56-156・157は、連歯下駄である。両者とも長さが15cm前後であることから子供用と考えられる。56-156は前後の歯が台の裏から台形状に削り出されている。形状は隅丸長方形で、台表が板目になる木取りであり、材質は檜を使用している。56-157は、いわゆる「くり下駄」と言われるものである。歯が独立せず先端部が斜めに切られているタイプで、材質は桐を使用している。

56-158~57-160は、いずれも墓坑内から出土しており位牌と考えられる。56-158は上端部がやや幅広い縦長の板状のサオ部と、ノコギリ状工具で切られた角材の台座部で構成されている。サオの下端にはめ込み部があり、台座のホゾ穴にはめ込まれている。サオに墨痕があっ

たが判読できなかった。56-159・57-160は、6ないし8角のサオの上端に穿孔のある棒を木釘で組ませ、下端に長方形の板材を木釘で組ませている。56-159のサオに墨痕があったが判読不明であった。サオの上端に黒漆が付着していた。また、57-160の台座の裏側に「戸山口」という墨書があった。これらの位牌の材質は、杉と柳を使用されている。中世の例であるが元興寺奉納の資料に6角のサオを持つ位牌がある。しかし、台座との接続部に違いがある。

57-161・162は2本で1組の漆塗りの箸である。両者とも先端部を削り出している。形状は片口形で、断面形は楕円である。朱漆を塗っており、材質は竹を使用している。

57-163は漆器皿で口辺部が欠損しているが、ほぼ外形を推定できる程に残存している。内外に朱漆を塗り、見込みに金色と黒色の漆を使い山水文を描いている。材質は、ブナを使用している。

57-164-166は、箱形木管の側板で墨書のあるものである。57-164はSH764の北側側板であり、下方角に「五」という墨書がある。中央に穿孔があり、材質は松を使用している。57-165はSH834の北側側板にあたり、中央西寄りに「祀」の墨書がある。材質は松の可能性が高い。57-166は、SH844の北側側板にあたり、中央東寄りに「〇」の墨書があった。材質は杉の可能性が高い。

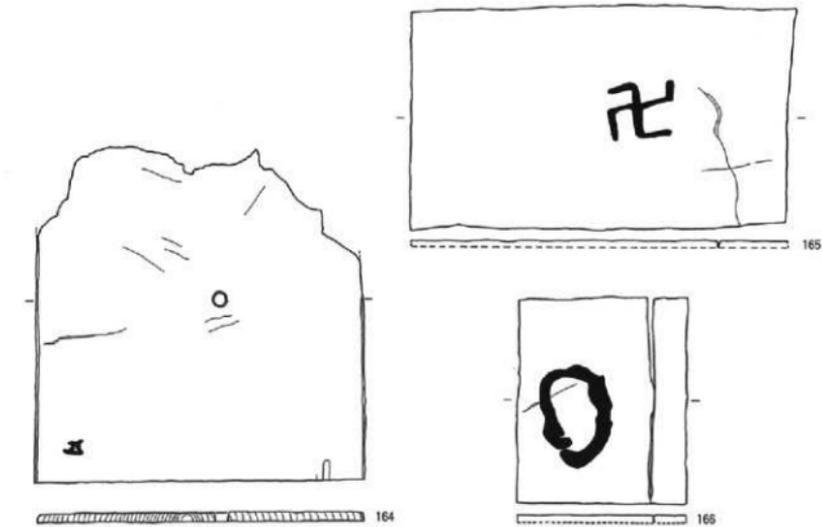
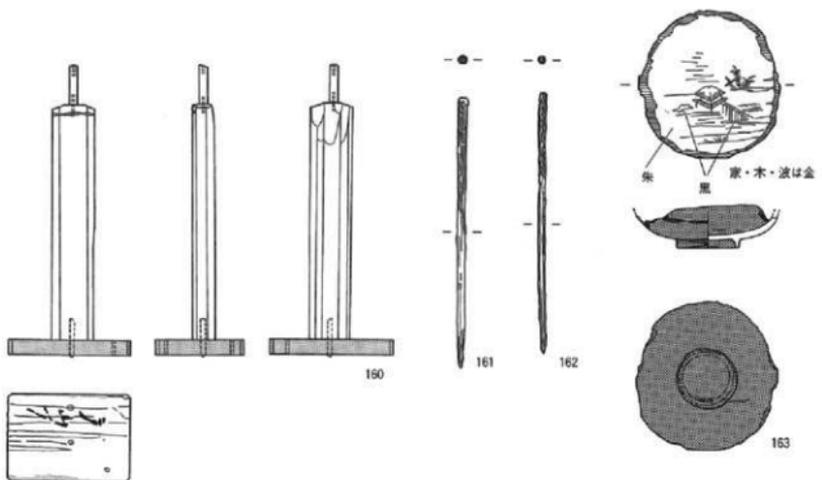
銭貨 (58-167-62-624)

93基の墓とSD・遺構外から530枚を越える銭貨が出土しており、墓域から出土したものだけでも460枚を越える。銭貨の種類別では、渡来銭として北宋銭6枚、本邦銭の内古寛永は62枚、新寛永は335枚(内文銭27枚)、鏽の付着や癒着により不明の銭貨は120枚を越える。これらの銭貨は「六道銭」として墓内に埋土するものである。なお1つの墓坑に10枚以上ある場合があるが、下層の遺構から流れ込んだ可能性も考えられる。出土状況は、墓内の北西部または中央部に集中して埋めているものが多い。

渡来銭は、表土と遺構外から併せて3枚、墓坑から3枚出土している。いずれも北宋銭である。渡来銭が出土した墓坑の相伴状況を見ると、SH660：元豊通寶(1)・新寛永(2)・不明銭・大堀相馬焼小碗、SH800：皇宋元寶(1)・古寛永(1)・新寛永(4) SH874：景德元寶(1)・古寛永(6)・新寛永(3)である。なお、()内は枚数を表わす。

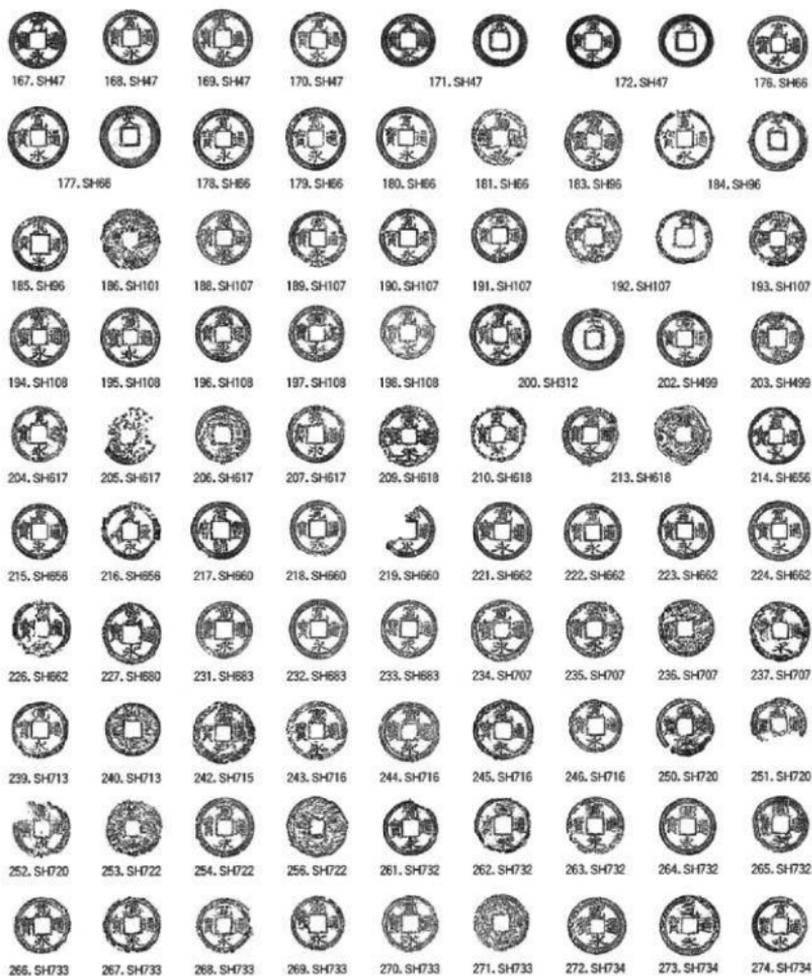
本邦銭は、古寛永・新寛永があり、新寛永が本邦銭の8割以上を占める。

古寛永(いわゆる「ス宝銭」)は、寛永3(1626)年に鑄造が開始され、寛文8(1668)年に新寛永としての文銭が鑄造されるまで造られた銭貨である。古寛永の出土する墓坑からは新寛永が必ず相伴する傾向がある。新寛永(いわゆる「ハ宝銭」)は、寛文8(1668)年から明治2(1869)年まで庶民の貨幣として流通していた。文銭は、寛文8(1668)年から天和3(1683)年に鑄造された銭貨である。本調査出土の新寛永は、元禄10(1697)年に江戸亀戸村で鑄造のものから明和8(1771)年に佐渡川で鑄造されたものまでが確認できる。また背部部に文字のある銭貨も多く出土した。寛保元(1741)年に大坂高津新地で鑄造したものに見られる「元」、同年の下野国足尾銅山産の「足」、寛文4(1739)年の陸奥国石巻産の「千」がある。1つの墓坑に6枚の銭貨をいれているものは33基あるが、その他1枚から13枚まで埋納したものもあった。



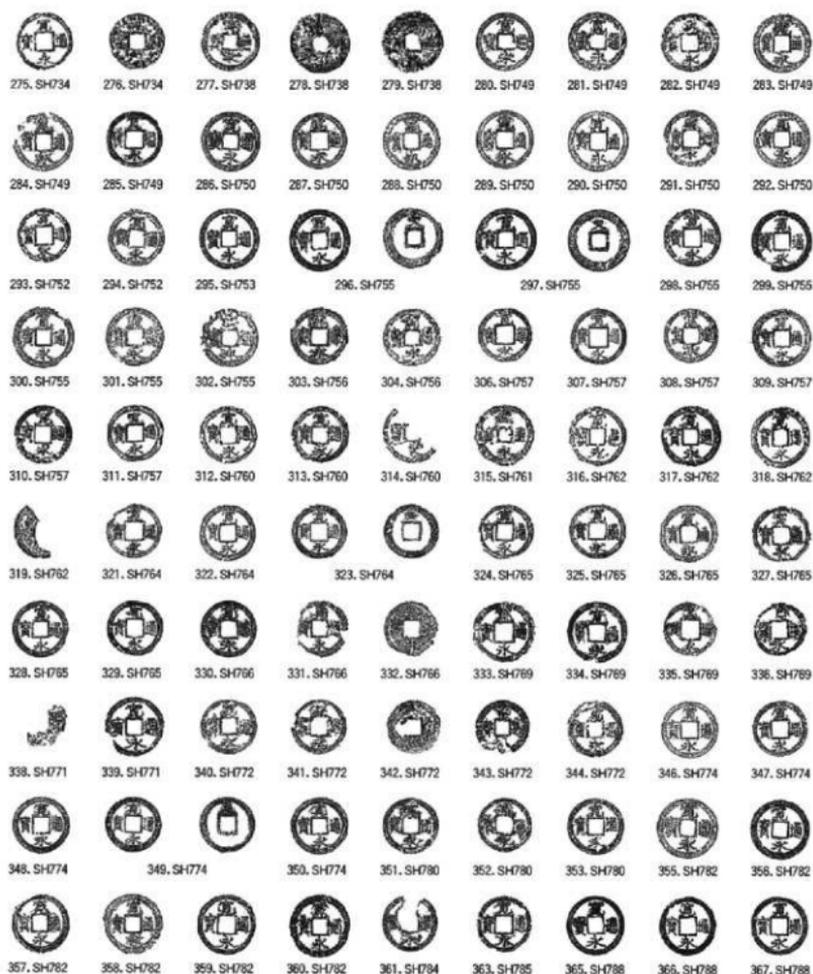
160 ~ 163 0 10cm
1 : 3
164 ~ 166 0 20cm
1 : 6

第57図 出土遺物 (16)



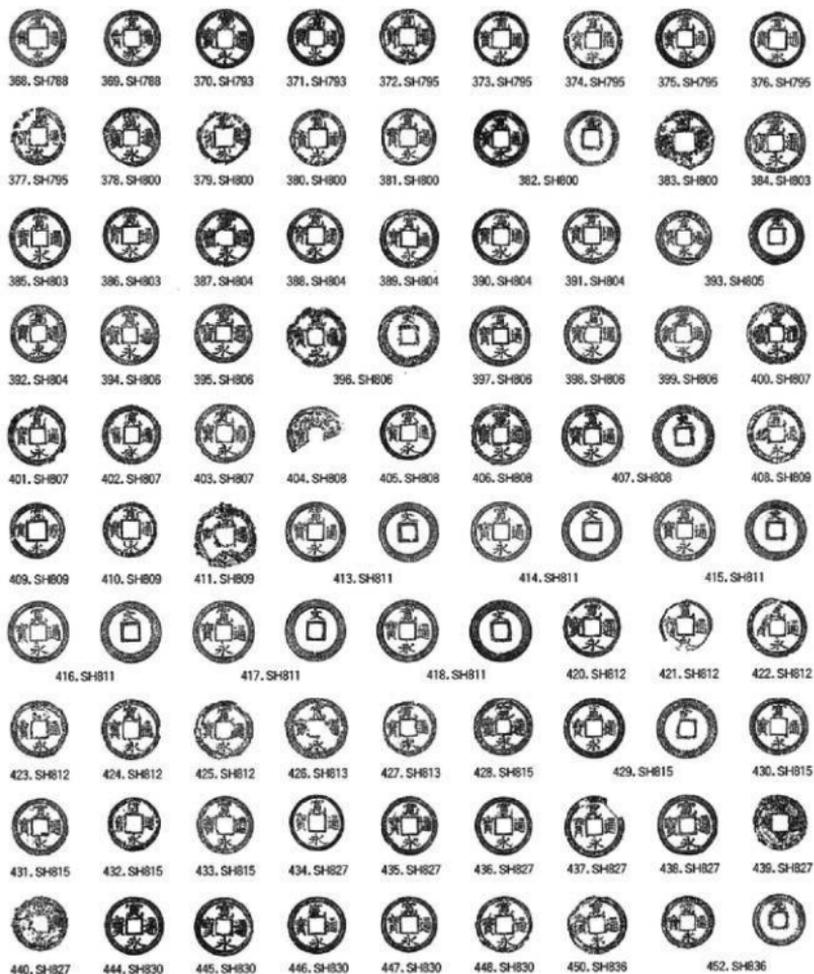
0 5 cm
1 : 2

第58図 出土遺物 (17)



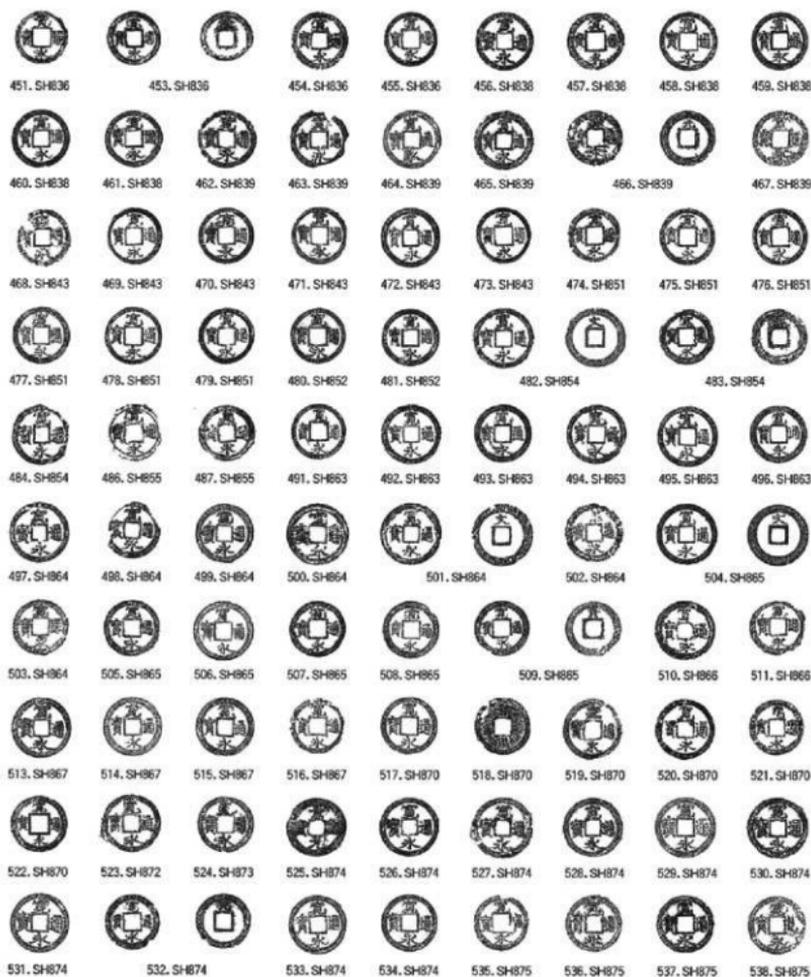
0 5 cm
1 : 2

第59図 出土遺物 (18)

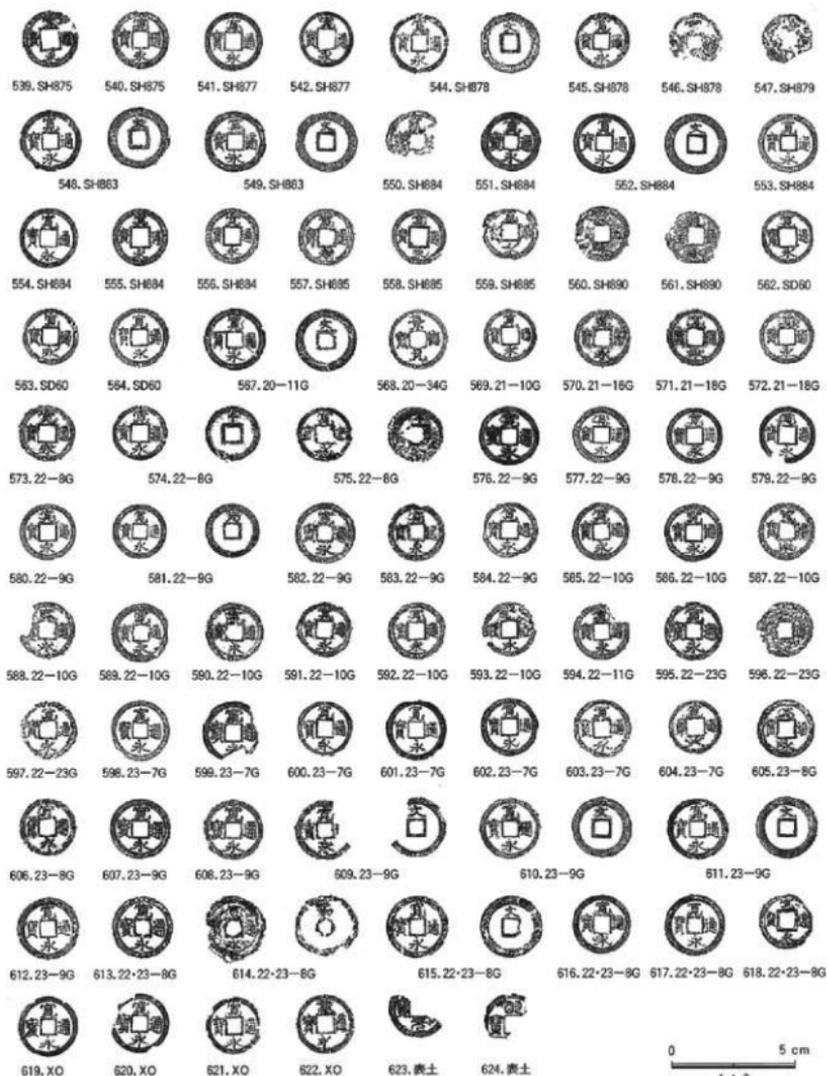


0 5 cm
1 : 2

第60圖 出土遺物 (19)



第61図 出土遺物 (20)



第62図 出土遺物 (21)

表7 出土土器観察表(1)

埋 附	番 号	種 別	器 形	計 測 値 (mm)					胎 土	残 存	色 調	調 整 ほ 小			出 土 地 点	備 考	
				口径	胴径	胴深	底径	器高				器厚	外 面	内 面			底 部
	1	須恵器	坏蓋	130	-	-	43	5	緻密	3/4	灰N6/0	ケズリ ロクロ	ロクロ		ST366	RP138 陶器産地	
	2	須恵器	坏身	(102)	-	-	60	43	4	緻密	1/2	ケズリ ロクロ	ロクロ	平底	ST307	RP93 陶器産地	
	3	須恵器	坏身	109	-	-	48	4	緻密	9/10	ケズリ ロクロ	ロクロ	丸底	SK673	RP265 地方産地		
	4	須恵器	坏身	(94)	-	-	-	4	緻密	1/3	灰N6/0	ケズリ ロクロ	ロクロ		ST366	RP152 陶器産地	
	5	須恵器	坏身	(104)	-	-	-	51	5	緻密	1/2	紫灰SPR5/1	ケズリ ロクロ	丸底	SD22	RP208 産地不明 地方産地	
	6	須恵器	皿	-	-	-	-	3	緻密	口縁部	灰N6/0	ロクロ 指押え	ロクロ		ST385	RP237 陶器産地	
	7	土師器	坏	-	-	32	-	3	粗砂混	3/4	浅黄橙7.5YR8/6	ナデ 指押え	ナデ	平底	ST 3	RP5 手捏ね ミニチュア土器	
	8	土師器	坏	-	-	40	-	4	粗砂混	3/4	灰白7.5YR8/2	ナデ 指押え	ナデ	平底	ST288	RP33 手捏ね ミニチュア土器	
	9	土師器	坏	-	-	(40)	-	5	粗砂混	1/4	灰白10YR8/2	ナデ	ナデ	平底	ST288	RP34 手捏ね ミニチュア土器	
	10	土師器	坏	44	-	-	(20)	(27)	4	粗砂混	1/2	浅黄橙10YR8/3	ナデ	ナデ	平底	ST366	RP76 手捏ね ミニチュア土器
	11	土師器	坏	78	-	-	36	36	4	粗砂混	完形	橙5YR7/8	ハケ目 ケズリ	ケズリ	平底	21-21G	RP191 手捏ね ミニチュア土器
	12	土師器	坏	84	-	-	-	41	3	粗砂混	4/5	浅黄橙7.5YR8/6	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	丸底	ST366	RP142 ミニチュア土器
	13	土師器	高坏	-	-	-	24	-	-	粗砂混	1/2	灰白5YR8/2	ナデ 指押え		ST360	RP113 手捏ね ミニチュア土器	
	14	土師器	高坏	-	-	-	-	-	-	粗砂混	1/3	にぶい橙7.5YR6/4	マメツ		ST375	RP151 手捏ね ミニチュア土器	
	15	土師器	甕 (84)	-	-	-	-	4	粗砂混	1/3	浅黄橙7.5YR8/3	ヘラナデ ケズリ	ヘラナデ		ST288	RP22 ミニチュア土器	
	16	土師器	坏 (172)	-	-	(40)	(58)	3	粗砂混	1/3	灰白10YR8/1	ナデ ミガキ	ナデ ケズリ	窪底	ST351	RP75 有段片 A類	
	17	土師器	坏 (160)	-	-	60	66	8	粗砂混	1/3	灰白10YR8/2	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	平底	ST684	RP312 B1類	
	18	土師器	坏 (140)	-	-	-	61	6	粗砂混	1/3	浅黄橙7.5YR8/4	マメツ	ナデ ハケ目	丸底	ST445	RP220 B1類	
	19	土師器	坏 (142)	-	-	-	64	5	粗砂混	1/4	にぶい橙7.5YR6/4	ハケ目 ケズリ	ナデ ケズリ	丸底	ST385	RP197 B1類	
	20	土師器	坏 136	-	-	-	-	7	緻密	3/4	橙5YR7/6	ナデ ミガキ	ミガキ	丸底	ST385	RP200 B1類	
	21	土師器	坏 (148)	-	-	-	60	5	粗砂混	1/3	橙5YR6/8	ナデ	ミガキ	丸底	ST307	RP87 B1類	
	22	土師器	坏 (150)	-	-	-	63	5	粗砂混	1/3	橙2.5YR6/8	ナデ	ナデ ミガキ	丸底	ST105EL	B1類	
	23	土師器	坏 151	-	-	-	72	6	粗砂混	9/10	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	丸底	ST385	RP211 B1類	
	24	土師器	坏 150	-	-	69	48	7	粗砂混	4/5	浅黄橙7.5YR8/3	ナデ ケズリ	ナデ ハケ目	平底	ST61	RP46 B1類	
	25	土師器	坏 (130)	-	-	-	48	4	粗砂混	1/2	灰白10YR8/2	ナデ ケズリ	ケズリ	丸底	ST445	RP226 B1類	
	26	土師器	坏 (162)	-	-	-	54	6	粗砂混	1/3	橙2.5YR6/8	マメツ	マメツ	丸底	ST684	RP311 B1類	
	27	土師器	坏 134	-	-	-	54	6	粗砂混	9/10	灰白10YR8/2	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	丸底	ST61EL	RP96 B2類	
	28	土師器	坏 (140)	-	-	-	63	6	粗砂混	1/2	灰白10YR8/2	ケズリ	ナデ	丸底	ST747	RP287 B2類	
	29	土師器	坏 (160)	-	-	-	67	6	粗砂混	1/3	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ ケズリ	マメツ	丸底	ST684	RP313 B2類	
	30	土師器	坏 178	-	-	-	57	5	粗砂混	1/2	橙2.5YR7/8	ナデ ケズリ	ナデ ミガキ	丸底	ST684	RP312 B2類	
	31	土師器	坏 (150)	-	-	(60)	48	5	粗砂混	1/3	灰白2.5YR8/2	ナデ ケズリ	ナデ ミガキ	平底	ST445	RP220 産地不明 C類	
	32	土師器	坏 (116)	-	-	34	44	5	粗砂混	1/3	橙2.5YR6/6	ナデ	マメツ	平底	ST445	RP230 C類	
	33	土師器	坏 144	-	-	22	65	6	粗砂混	2/3	橙7.5YR6/6	ケズリ ミガキ	ミガキ	窪底	ST385	RP216 C類	
	34	土師器	坏 (144)	-	-	-	47	5	粗砂混	1/3	橙2.5YR6/8	ナデ ミガキ	ミガキ	丸底	ST385EL	RP200 C類	
	35	土師器	坏 148	-	-	-	47	5	粗砂混	9/10	橙5YR7/6	ナデ ケズリ	ナデ ミガキ	丸底	ST105	RP87 C類	
	36	土師器	坏 155	-	-	-	57	5	粗砂混	1/2	浅黄橙7.5YR8/4	ナデ ケズリ	ミガキ	丸底	ST105	RP114 C類	
	37	土師器	坏 134	-	-	-	64	7	粗砂混	3/2	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	丸底	ST105	RP74 C類	
	38	土師器	坏 140	-	-	42	49	6	粗砂混	1/3	橙7.5YR7/6	ナデ ケズリ	ハケ目	平底	ST669	RP281 D類	
	39	土師器	坏 160	132	-	-	-	4	粗砂混	1/2	灰ナリ-7Y6/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST368	RP160 二次加熱 E類	
	40	土師器	坏 (116)	-	-	50	52	5	粗砂混	4/5	橙5YR7/8	ナデ	ヘラナデ	平底	ST659	RP359 E類	
	41	土師器	坏 (158)	-	-	18	93	6	粗砂混	1/3	浅黄橙10YR8/3	ナデ ハケ目	ハケ目	窪底	ST832	RP364 E類	
	42	土師器	坏 135	-	-	35	64	5	粗砂混	9/10	浅黄橙7.5YR8/3	ナデ	ナデ ミガキ	平底	ST61	RP17 E類	

表8 出土土器観察表(2)

排別	番号	種類	器形	計測値(mm)				胎土	残存	色調	調整仕立			出土地点	備考				
				口径	頸部	胴径	底径				器高	器厚	外面			内面	底部		
43	43	土師器	坏	(128)	-	-	-	88	5	細砂混	4/5	にぶい	黄7.5YR7/4	ハケ目 ミガキ	丸底	SD22	RP210	E類	
	44	土師器	器台	78	-	-	-	-	6	細砂混	1/2	灰白10YR8/2	ナデ	ナデ		ST887	RP239		
	45	土師器	器台	-	-	-	-	-	-	細砂混	1/2	赤褐10R5/4	ハケ目	ハケ目		B区東側	RP206	円底あり	
	46	土師器	高坏	168	-	-	-	-	6	粗砂混	1/2	橙2.5YR6/6	ハケ目	ハケ目		ST368	RP157	A類	
	47	土師器	高坏	(170)	-	-	-	-	5	粗砂混	1/6	浅黄橙7.5YR8/6	ハケ目	ハケ目		ST368	RP163	A類	
	48	土師器	高坏	-	-	-	-	-	7	細砂混	1/8	橙2.5YR7/8	ハケ目 ミガキ	ミガキ		ST887	RP231	A類	
	49	土師器	高坏	-	-	-	-	153	-	7	粗砂混	1/2	橙5YR6/8	ナデ ハケ目	ハケ目		ST368	RP187	A類
	50	土師器	高坏	-	-	-	-	140	-	7	粗砂混	1/3	橙5YR7/8	ハケ目	ハケ目		ST368	RP156	A類
	51	土師器	高坏	-	-	-	-	(134)	-	5	粗砂混	1/4	橙5YR7/6	マメツ	マメツ		ST368	RP165	A類
	52	土師器	高坏	-	-	-	-	-	7	粗砂混	1/2	橙2.5YR6/8	ハケ目	ハケ目 ヘラミガキ		ST832	RP351	B1類	
44	53	土師器	高坏	-	-	-	-	-	6	粗砂混	1/2	橙2.5YR7/6	ハケ目 ミガキ	ハケ目 ヘラミガキ		ST295	RP65	B1類	
	54	土師器	高坏	-	-	-	-	-	9	粗砂混	1/4	浅黄5Y7/3	ハケ目	ハケ目		ST366	RP186	B1類	
	55	土師器	高坏	191	-	-	-	123	146	7	細砂混	2/3	橙5YR7/6	ナデ ハケ目 ケズリ	ナデ ハケ目 ケズリ		ST306	RP77	B2類
	56	土師器	高坏	-	-	-	-	-	12	粗砂混	1/3	橙2.5YR7/8	ハケ目	ハケ目		ST659EL	支孔あり	B2類	
	57	土師器	高坏	-	-	-	-	-	10	粗砂混	1/4	橙5YR7/6	ケズリ	マメツ		ST360	RP109	B2類	
	58	土師器	高坏	-	-	-	-	(140)	-	11	細砂混	1/3	浅黄橙7.5YR8/4	ハケ目	ナデ ハケ目		ST832	RP349	B2類
	59	土師器	高坏	199	-	-	-	-	6	細砂混	1/2	橙2.5YR6/6	ナデ ハケ目 ミガキ	ナデ ハケ目		ST445	RP236	B類	
	60	土師器	高坏	242	-	-	-	230	196	8	細砂混	4/5	灰白10YR8/2	ハケ目 ケズリ ミガキ	ナデ ハケ目 ミガキ		ST747	RP286	C類
	61	土師器	高坏	234	-	-	-	-	8	粗砂混	3/4	橙2.5YR6/6	ハケ目 ミガキ	ナデ ケズリ		ST832	RP350	C類	
	62	土師器	高坏	-	-	-	-	(182)	-	10	細砂混	1/8	赤10R5/6	ナデ ハケ目 ミガキ	ハケ目		ST659	RP280	C類
	63	土師器	高坏	-	-	-	-	176	-	7	細砂混	1/2	赤橙10R6/6	ハケ目 ケズリ	マメツ		ST608	RP247	C類
	64	土師器	瓶	236	-	孔径 63	70	172	8	粗砂混	2/3	淡黄5Y8/3	ナデ ケズリ 指挿	ヘラナデ ケズリ		ST295	RP62	A類	
	65	土師器	瓶	-	-	孔径 28	55	-	12	粗砂混	底部	灰白5Y8/1	ケズリ	ケズリ		ST105	RP71	A類	
	66	土師器	瓶	223	-	孔径 70	90	214	10	細砂混	2/3	にぶい橙5Y7/3	ハケ目 ケズリ	ハケ目 ケズリ		ST95	RP43	酸化物付着 B類	
	67	土師器	瓶	(234)	-	孔径 (82)	(91)	203	8	緻密	1/4	黄5Y7/6	ナデ ケズリ ハケ目	ナデ ケズリ ハケ目		ST884	RP311	酸化物付着 B類	
	68	土師器	瓶	255	231	孔径 90	94	233	10	細砂混	9/10	灰白5Y8/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST385	RP213	B類	
	69	土師器	瓶	210	172	202 孔径	93	208	10	粗砂混	4/5	灰白5Y8/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目 ミガキ		ST748	RP284	C類	
46	70	土師器	瓶	210	190	231 孔径	75	290	8	粗砂混	完形	灰白5Y8/2	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ		ST61EK5	RP58	C類	
	71	土師器	壺	89	57	88	20	123	5	粗砂混	9/10	橙2.5YR6/6	ハケ目	ハケ目	平底	ST887	RP219	A1類	
	72	土師器	壺	-	-	141	-	-	8	細砂混	1/2	淡黄5YR8/4	ミガキ	ハケ目 ケズリ	丸底	SK685	RP309	A2類	
	73	土師器	壺	-	-	-	-	-	10	粗砂混	口縁部	灰黄褐10YR6/2	ナデ	マメツ		ST480	RP188	B類	

表9 出土土器観察表(3)

採掘区	番号	種類	器形	計測値(mm)						胎土	残存	色調	調整ほか			出土地点	備考
				口径	頸部	胴径	底径	器高	器厚				外面	内面	底部		
46	74	土師器	壺	-	-	-	-	-	8	粗砂泥	頸部	淡黄橙10YR8/4	ハケ目	マメツ		20-14G	C類
	75	土師器	壺	-	-	-	-	-	5	粗砂泥	口縁部	淡黄5Y8/4	ハケ目	ハケ目		ST471	RP192 D類
47	76	土師器	壺	208	166	576	120	-	13	粗砂泥	2/3	橙2.5YR6/8	マメツ	ハケ目 ヘラナダ	平底	ST368E2	RP158 D類
	77	土師器	壺	182	112	-	68	-	7	粗砂泥	1/5	淡赤橙2.5YR7/4	ナデ ハケ目 ケズリ ミガキ	ナデ ハケ目	平底	ST296	RP203 E類
	78	土師器	壺	166	140	-	-	-	9	粗砂泥	1/4	橙7.5YR7/6	ハケ目	ハケ目 ケズリ ミガキ	丸底	ST748E2	RP291 F類
48	79	土師器	壺	169	117	238	238	-	7	粗砂泥	9/10	灰白10YR8/2	ハケ目	ハケ目	丸底	ST747	RP288 F類
	80	土師器	壺(137)	110	-	-	-	-	7	粗砂泥	1/10	橙5YR6/6	ハケ目 ケズリ	ハケ目 ケズリ		21-19G	F類
49	81	土師器	壺	139	118	200	62	243	5	粗砂泥	9/10	にぶい橙5YR7/4	ケズリ ミガキ 指押え	ハケ目 ミガキ	丸底	ST105	G類
	82	土師器	壺	-	-	-	-	-	4	粗砂泥	口縁部	淡黄5Y7/4	ハケ目	マメツ		22-15G	A類
	83	土師器	壺	-	-	-	84	-	4	粗砂泥	台部	灰ナリ-7.5Y5/2	ミガキ	ハケ目		SK336	RP81 二次加熱 B類
	84	土師器	壺(240)	(182)	-	(76)	176	6	粗砂泥	1/3	ナリ-7.5Y6/3	ナデ ハケ目 ケズリ	ハケ目 ケズリ ヘラナダ 指押え	平底	31-22G	RP204	C1類
	85	土師器	壺	-	-	-	80	-	6	粗砂泥	4/5	淡黄5Y8/3	ケズリ	ハケ目	平底	ST747	RP289 C1類
	86	土師器	壺(220)	(178)	259	64	(239)	4	粗砂泥	2/3	淡黄5Y8/3	ナデ ハケ目 ケズリ 指押え	ナデ ハケ目	平底	ST365	RP128 C2類	
50	87	土師器	壺	156	137	180	-	-	7	粗砂泥	2/3	赤橙10R5/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST385	RP199 C2類
	88	土師器	壺	203	164	(225)	-	-	5	粗砂泥	1/2	明輪9.7.5YR7/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST105	RP68 C2類
	89	土師器	壺	180	149	250	-	-	7	粗砂泥	1/2	橙2.5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST95	RP38 C2類
	90	土師器	壺	188	138	251	70	252	7	粗砂泥	3/4	赤橙10R5/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	平底	ST445	RP223 C3類
	91	土師器	壺	203	158	243	-	254	6	粗砂泥	9/10	赤橙10R5/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	丸底	SK489	RP194 C3類
	92	土師器	壺	210	160	228	51	246	6	粗砂泥	4/5	淡黄5Y8/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	平底	ST61	RP53 C3類
51	93	土師器	壺	181	149	222	48	258	8	粗砂泥	完形	橙2.5YR6/8	ナデ ハケ目 ケズリ	ナデ ハケ目 ケズリ	平底	ST61	RP55 C3類
	94	土師器	壺	198	164	243	36	267	10	粗砂泥	4/5	淡黄5Y8/3	ナデ ハケ目 指押え	ナデ ハケ目 ヘラナダ	平底	ST61	RP48 C3類
	95	土師器	壺	165	130	232	54	263	6	粗砂泥	9/10	橙2.5YR6/8	ナデ ハケ目	ハケ目	平底	ST365	RP214 C3類
52	96	土師器	壺(166)	(127)	(215)	-	-	-	6	粗砂泥	1/3	淡黄5Y8/4	ハケ目	ハケ目		ST307E2	RP62 C3類
	97	土師器	壺(180)	(146)	(206)	-	-	-	7	粗砂泥	3/4	淡黄5Y7/4	マメツ	マメツ		ST61	RP47 C3類
	98	土師器	壺	180	145	218	151	-	7	粗砂泥	2/3	灰白5Y8/2	ナデ ハケ目	マメツ		ST61	RP16 C3類
	99	土師器	壺	188	151	236	-	-	7	粗砂泥	3/5	淡黄5Y8/4	ナデ ハケ目	ハケ目 ケズリ		ST2EK4	RP4 C3類
	100	土師器	壺	194	149	246	-	-	5	粗砂泥	1/2	淡黄5Y8/3	ナデ ハケ目	ハケ目 ケズリ		ST105	RP70 C3類
	101	土師器	壺	195	165	252	50	32	6	粗砂泥	4/5	淡黄5Y8/3	ナデ ハケ目	ハケ目	平底	ST95	RP37 C3類
	102	土師器	壺	183	153	-	-	-	6	粗砂泥	1/2	淡黄5Y8/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST95	RP40 C3類
53	103	土師器	壺	178	151	-	-	-	6	粗砂泥	1/2	淡黄5Y7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST61EL	RP54 C3類
	104	土師器	壺	187	150	220	-	-	8	粗砂泥	1/2	淡黄5Y7/3	ナデ ハケ目	ハケ目 ケズリ ヘラナダ		ST385	ST385 C3類
	105	土師器	壺	-	-	(250)	64	-	6	粗砂泥	1/3	橙2.5YR6/6	ハケ目	ハケ目	平底	ST105	RP73 C3類
	106	土師器	壺	173	157	233	35	273	8	粗砂泥	9/10	灰白5Y8/2	ハケ目 ケズリ	ハケ目	平底	ST95	RP342 D類
	107	土師器	壺	130	114	-	-	-	8	粗砂泥	1/10	橙5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目		ST61	RP55 E類

表10 出土陶磁器観察表

種別 番号	器形	形状特徴	計測値(mm)				胎土色調 釉薬色調	胎土	残存	洗滌 印 銘 文様など			出土地点	製作地 製作年代
			口径	底径	器高	器厚				外面	内面	底部		
52	青磁碗		-	-	-	5	灰白N7/0 灰5Y6/1	緻密	高台部	頸裏舟文 青磁軸	青磁軸	墨付露胎	SD87 RP80	中国龍泉 14世紀
	陶磁碗	平形	-	-	-	5	黄灰2.5Y6/1 オリーブ黄5Y6/3	緻密	口縁部	灰軸	灰軸		SD22	瀬戸 14世紀中
	陶磁鉢	片口形	-	-	-	10	褐灰10YR5/1	緻密	口縁部				C区北側	中世陶器 中世
	陶磁甕		-	-	-	14	灰5Y5/1	緻密	口縁部				SD87 RP79	信濃 15世紀後半
53	陶磁甕		-	-	-	11	灰オリーブ5Y4/2	緻密	体部				19-19G	安曇系 中世
	陶磁甕		-	-	-	14	褐灰7.5Y8/1	粗砂質	口縁部				SD22	信濃系 中世
	陶磁甕		-	-	-	12	褐灰7.5YR6/1	粗砂質	体部				SD87 RP78	須恵系 中世
	白磁 開口		48	31	32	3	灰白5Y8/1 灰白2.5GY8/1	緻密	定形	白磁軸	白磁軸	墨付露胎	SH806 RP329	肥前 18世紀後半
	染付 小瓶		66	26	35	5	不明 明緑灰7.5GY8/1	緻密	定形	松竹梅文 透明軸、貫入	透明軸	砂底	SH889 RP403	肥前 18世紀後半
	染付 小瓶	罐反形	68	32	42	4	灰白5Y8/1 灰白5GY8/1	緻密	定形	竹文 透明軸	透明軸	墨付露胎	SH103 RP25	平清水 19世紀後半
	染付 小瓶		66	35	55	3	灰白7.5Y8/1 灰白5Y8/1	緻密	定形	一層山水・船 透明軸	透明軸	墨付露胎	SH103 RP24	津津本郡 19世紀前半
	染付 小瓶		66	35	56	3	灰白2.5Y8/1 灰白5Y8/1	粗砂質	3/4	一層山水・船 透明軸	透明軸	墨付露胎	SH656 RP259	津津本郡 19世紀後半
	染付 小瓶	罐反形	86	36	43	4	灰白2.5Y8/1 灰白5GY8/1	緻密	定形	山水文、團縁 透明軸	見込みに岩波? 透明軸	墨付露胎	SH731 RP257	肥前 19世紀前半
	染付 小瓶	ぐわんか形	96	39	52	4	灰白5Y8/1 明緑灰7.5GY7/1	緻密	定形	雪輪草花文 團縁 透明軸	透明軸	砂底 大明年製銘	SH108 RP45	肥前波佐見 18世紀後半
	染付 小瓶	ぐわんか形	93	42	51	4	灰白5Y8/1 明オリーブ灰5GY7/1	緻密	定形	千鳥・草文 團縁 透明軸	透明軸	砂底	SH108 RP49	肥前波佐見 18世紀前半
	染付 中瓶	ぐわんか形	96	41	54	5	灰白N8/0 灰白5GY8/1	緻密	定形	二重網目文 透明軸	透明軸	砂底	SH765 RP302	肥前波佐見 18世紀後半
染付 中瓶	ぐわんか形	100	41	53	5	灰白N8/0 灰白5GY8/1	緻密	定形	二重網目文 團縁 透明軸	透明軸	砂底	SH856 RP393	肥前波佐見 18世紀後半	
54	染付 香呑	半筒形	73	35	53	4	灰白5Y8/1 明オリーブ灰5GY7/1	緻密	定形	シダ文、團縁 透明軸	因方博文、團縁 五弁花ニヤイ印 透明軸	墨付露胎	SH833 RP374	肥前 18世紀後半
	染付 仏花瓶		17	36	92	4	灰白2.5Y8/2 明オリーブ灰5GY7/1	緻密	定形	若松・草文 透明軸	透明軸	墨付露胎	SH844 RP377	肥前 18世紀後半
	陶磁 小瓶		54	24	32	3	灰白5Y8/1 灰白5GY8/1	緻密	定形	赭白軸	赭白軸	高台内墨付 露胎	SH101 RP23	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 小瓶		56	26	30	3	灰白10YR8/1 灰白5GY8/2	緻密	定形	赭白軸	赭白軸	高台内墨付 露胎	SH763 RP500	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 小瓶		54	26	30	3	灰白2.5Y7/1 明オリーブ灰5GY7/1	緻密	定形	灰軸	灰軸	高台内墨付 露胎	SH724 RP306	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 小瓶		55	27	26	3	灰白10YR8/1 明オリーブ灰5GY7/1	緻密	定形	赭白軸	赭白軸	高台内墨付 露胎	SH819 RP345	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 中瓶	丸形	(100)	(38)	56	4	灰白2.5Y8/1 明オリーブ灰5GY7/2	緻密	2/3	灰軸(失速)	灰軸(失速)	高台内墨付 露胎	SH82 RP3	大瀬相馬 文化文政期
	陶磁 小瓶	腰張形	87	38	56	3	灰白2.5Y8/1 灰白5GY8/1	緻密	定形	鉄軸流し墨付 灰軸	灰軸	高台内墨付 露胎	SH304 RP66	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 小瓶	腰張形	80	35	54	3	黄赤黄10YR8/3 灰白5Y8/1	緻密	9/10	鉄軸流し墨付 灰軸	灰軸	高台内墨付 露胎	SH881 RP386	大瀬相馬 19世紀前半
	陶磁 小瓶	腰張形	90	40	53	4	灰白2.5Y8/1 青灰10B6/6	緻密	定形	灰軸	灰軸	高台内墨付 露胎	SH856 RP382	大瀬相馬 18世紀末
陶磁 小瓶	半筒形	72	30	52	4	灰白5Y8/1 灰白5GY8/1	緻密	定形	赭白軸	赭白軸	高台内墨付 露胎	SH681 RP297	大瀬相馬 19世紀前半	
陶磁 小瓶		70	38	62	4	灰白5Y8/1 灰白5Y7/2	緻密	定形	鉄絵走馬文 灰軸	灰軸	高台内墨付 露胎	SH660 RP255	大瀬相馬 19世紀後半	

表11 出土石器・石製品・土製品・金属製品・木製品観察表

標号	番号	種別	器形	計測値 (mm・g)				破損	素材	調査ほか	出土地点	登録番号	
				長さ	幅	厚さ	重量						
54	137	石器	アメリカ型石鏃	31	16	4	1.46	無	黒色頁岩		ST349	RQ111	
	138	石製品	管玉	24	5	1.5	0.87	有	碧玉		ST381	RQ181	
	139	石製品	白玉	2	5	1~1.5	0.07	無	碧玉		ST385	RQ233	
	140	石製品	勾玉	(41.5)	24	4	5.55	有	黒色頁岩		17-27G		
	141	石製品	有孔円板	24	27	4	3.7	有	流紋岩		ST445	RQ218	
	142	石製品	有孔円板	25	29	4	4.6	無	緑泥片岩		ST61	RQ 9	
	143	石製品	有孔円板	(30)	(19)	3	2.25	有	黒色頁岩		20-33G		
	144	石製品	紡錘車	上端径 32 下端径 47		高さ 19	44.8	無	緑泥岩	表面に刻削あり (発向学文)		ST95	RQ343
	145	石製品	砥石	(50)	39	31	108.1	有	凝灰岩	キリ状工具研磨直 5面に使用痕		SD22	
	146	石製品	砥石	(87)	56	33	219.14	有	凝灰岩	キリ状工具研磨直 5面に使用痕		SH780	
	147	石製品	五輪塔(空風輪)	(326)	185	-	5600	有	凝灰岩	上部欠損		23-8 G	RQ290
	55	148	石製品	墓標?	(179)	(140)	(100)	1600	有	凝灰岩		21-12G	RQ362
		149	石製品	五輪塔(水輪)	(195)	275	252	9000	有	凝灰岩		21-12G	RQ362
		150	石製品	宝珠形石製品	(285)	232	182	10200	有	凝灰岩		21-12G	RQ362
56	151	土製品	人形(母子像)	130	63	24~37	56.85	無	粘土	前後型合せ、 ヘラケスリ、中空		SH838	
	152	金属製品	三足鉢	口径(230)	底径 167	高さ 104	572.9	有	鉄	三足、丸湯口		SH856	RM364
	153	金属製品	煙管 煙音 吸口	45 107	11 11	火重径 13 吸口径 6	3.99 11.76	有	銅	吸口部に二つの楕円形 の縦割		SH749	RM275
	154	金属製品	煙管 煙音 吸口	71 70	11 11	火重径 12 吸口径 7	5.15 6.83	有	銅	扉字に炭化物付着		SH835	RM370
	155	金属製品	煙管 煙音 吸口	53 65	12 12	火重径 11 吸口径 9	7.24 6.37	有	銅			SH853	RM375
	156	木製品	下駄	147	70	9~16	-	無	ヒノキ	通直下駄 ノコギリ状工具調整痕		28-22G	RW 2
	157	木製品	下駄	152	58	11~38	-	無	キリ	通直下駄 ノコギリ状工具調整痕		SH868	RW367
	158	木製品	位牌 サオ部 台座部	255 25	77 87	7 37	- -	無	スギ	ノコギリ状工具加工痕 ノコギリ状工具加工痕		SH764	RW317
	159	木製品	位牌 先端部 サオ部	29 127	7 23	7 12	- -	無	ヤナギ スギ	ノミ状工具加工痕 ノミ状工具加工痕		SH844	
	57	160	木製品	位牌 先端部 サオ部 台座部	24 143 74	5 25 53	5 13 9	- - -	無	ヤナギ スギ スギ?	ノミ状工具加工痕 ノミ状工具加工痕 ノミ状工具加工痕 台座裏に墨書		SH868
161		木製品	箸	163	5	4.5	-	無	タケ	ナイフ状工具加工痕 朱漆付着		SH806	RW326
162		木製品	箸	157	4	4.5	-	無	タケ	ナイフ状工具加工痕 朱漆付着			
163		木製品	漆器皿	口径(86)	底径 37	高さ(26)	厚さ 3	有	ブナ	くり物 内外面朱漆 内面に黒漆・金で山水文		SH782	RW327
164		木製品	木棺側板	(450)	400	12	-	有	マツ	ノコギリ状工具加工痕 隣に墨書		SH764	
165		木製品	木棺側板	(270)	465	(12)	-	有	マツ?	中央に「正」の墨書		SH834	
166	木製品	木棺側板	249	207	(12)	-	有	スギ?	中央に「〇」の墨書		SH844		

表12 出土銭貨計測表(1)

種別 番号	出土地点	登録 番号	銭 類	分類	鋳造地・名称	鋳造年代	計測値(mm・g)				備 考	
							外径	孔径	厚さ	重量		
58	167	S H47	R M10	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	23.1	6.5	0.4	2.5	
	168	S H47	R M10	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	22.5	6.5	0.4	2	
	169	S H47	R M10	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.9	6.5	0.5	3.1	
	170	S H47	R M10	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.8	6.3	0.5	2.3	
	171	S H47	R M10	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.1	6.2	0.6	2	背に「元」
	172	S H47	R M10	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.2	6.3	0.5	2.2	背に「元」
	173	S H66		寛永通寶				26.5	-	4.1	9.3	数枚重着・錆付着
	174	S H66		寛永通寶				25.1	-	4.4	2.5	2枚重着・錆付着
	175	S H66		寛永通寶				33.5	-	7	5.3	数枚重着・錆付着
	176	S H66	R M20	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	23.8	6	0.8	3.5	
177	S H66	R M20	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	24.5	6.2	0.8	3.5		
178	S H66	R M20	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	24.2	6.3	0.8	3.2		
179	S H66	R M10	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.4	5.8	0.7	3.6		
180	S H66	R M20	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.5	6	0.8	2.6		
181	S H66	R M20	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23	6.3	0.3	2		
182	S H72	R M21	寛永通寶				23.9	5	3.5	2.1	2枚重着・錆付着	
183	S H96	R M 8	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	24	5	2.3	5.1	2枚重着・錆付着	
184	S H96	R M 8	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	23.9	5.8	0.8	1.9		
185	S H96	R M 8	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	22.4	7	0.4	1.7		
186	S H101	R M26	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	25.3	6	1.9	2.5	錆付着	
187	S H106		寛永通寶				23	6.4	6	6.5	5枚重着・錆付着	
188	S H107	R M36	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.7	5	0.9	2.3	錆付着	
189	S H107	R M36	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.4	5.5	1.2	2.6	錆付着	
190	S H107	R M36	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	享保11年(1726)	23.8	6	1.1	2.9	錆付着	
191	S H107	R M36	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.2	6	1.5	3	錆付着	
192	S H107	R M36	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	23.1	6.5	1.1	2.3	錆付着・背に「元」	
193	S H107	R M36	寛永通寶				23.2	6	0.8	2	錆付着	
194	S H108	R M44	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.1	5.8	1	3.2	錆付着	
195	S H108	R M44	寛永通寶	古寛永	高田銭	寛永14年(1637)	24.3	5.5	0.9	3.8	錆付着	
196	S H108	R M44	寛永通寶	古寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.5	6	0.5	1.9	錆付着	
197	S H108	R M44	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.8	5.8	0.8	3.3	錆付着	
198	S H108	R M44	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.7	6.2	0.5	1.5	錆付着	
199	S H108	R M44	寛永通寶				22	6	0.5	0.9	錆付着・残存率1/2	
58	200	S H312	R M82	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	24.5	5.5	0.6	3.3	
201	S H312	R M82	寛永通寶				26.5	6.5	9	13.5	5枚重着・錆付着	
202	S H499	R M234	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.3	6.2	0.4	2.3	錆付着	
203	S H499	R M234	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.1	7	0.7	2.1		
204	S H617	R M273	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄13年(1700)	22.4	6.3	1.1	2.1	錆付着・一部欠損	
205	S H617	R M273					23.7	6	1.2	1.3	錆付着・残存率3/4	
206	S H617	R M273					26.6	6	5.2	11.9	4枚重着・錆付着	
207	S H617	R M274	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23	6.2	1	2.6	錆付着	
208	S H617	R M274	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	25.5	5.5	11.2	5	5枚重着・錆付着	
58	209	S H618	R M245	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.3	5.3	1	3.1	錆付着
210	S H618	R M245	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄13年(1700)	23	6	0.7	2.6	錆付着	
211	S H618	R M245	寛永通寶				30.5	6	8.2	15.1	4枚重着・錆付着	
212	S H618	R M246	寛永通寶	古寛永		寛永3年(1626)~寛永8年(1668)	24	5.5	1.5	3.6	錆付着・残存率2/3	
213	S H618	R M246	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	23.2	5	1	2.4	錆付着・背に「元」	
214	S H656	R M283	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	22.7	5.8	0.6	2.3	錆付着	
215	S H656	R M283	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.8	6	0.5	2.8	錆付着	
216	S H656	R M283	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.7	6.4	0.7	1.6	錆付着・一部欠損	
217	S H660	R M254	元皇通寶	北宗銭		1078年初鑄	23.9	6.8	0.9	3.2		
218	S H660	R M254	寛永通寶	新寛永	依佐相川	明和8年(1771)	23	6	0.9	2.3	錆付着	
219	S H660	R M254	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.2	6.5	0.6	1.3	錆付着・残存率2/3	
220	S H660						38	-	10	22.3	数枚重着・錆付着	
221	S H662	R M296	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	寛永14年(1637)	24	6	1	3.4	錆付着	
222	S H662	R M296	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.2	6	1	3.2	錆付着	
223	S H662	R M296	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄13年(1700)	23.6	5.5	1	2.2	錆付着	
224	S H662	R M296	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.9	6	1	3.2	錆付着	

表13 出土銭貨計測表(2)

種別	番号	出土地点	登録番号	銭銘	分類	鑄造地・名称	鑄造年代	計測値(mm・g)				備考
								外径	厚径	厚さ	重量	
58	225	S H662	R M256	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23	6.5	1	1.7	一部欠損
	226	S H662	R M256	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	25	6	1.5	2.9	鑄付着・一部欠損
	227	S H680	R M251	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.8	6.5	1.2	3.7	鑄付着
	228	S H680	R M251					22	6	0.7	3	鑄付着
	229	S H680	R M251					23.5	5.6	3.2	10.5	数枚癒着・鑄付着
	230	S H680	R M250					38	-	12.5	17.8	数枚癒着・鑄付着
	231	S H683		寛永通寶	新寛永	因ッ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.6	6.4	0.5	2.3	
	232	S H683		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.6	6	0.5	2.8	
	233	S H683		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.5	6	0.5	2.4	
	234	S H707	R M262	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮鏡	寛永16年(1639)	34.2	6	1	2.4	
235	S H707	R M262	寛永通寶	新寛永	因ッ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.5	6	0.5	2.7	鑄付着	
236	S H707	R M262	寛永通寶	新寛永			22.6	6	1	2.3	鑄付着	
237	S H707		寛永通寶	新寛永	因ッ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.3	5.3	1.4	2	鑄付着	
238	S H707		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.6	5.5	0.7	2.4	鑄付着・残存率1/2	
239	S H713		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.8	6.5	1.5	2.6	鑄付着	
240	S H713		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.7	6.4	1.4	2.3	鑄付着	
241	S H713		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	24.3	6.4	4.8	6.5	3枚癒着・鑄付着	
242	S H715	R M256	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	26.2	5	3	6.2	2枚癒着・鑄付着	
243	S H716		寛永通寶	古寛永	芝鏡	寛永13年(1636)	24.4	5	0.8	3.4	鑄付着	
244	S H716		寛永通寶	古寛永	京都建仁寺鏡	享保12年(1663)	24.5	5.5	0.7	2.9	鑄付着	
245	S H716		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.5	6.2	0.8	2.6	鑄付着	
246	S H716		寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	21.4	6.4	0.6	1.8	鑄付着	
247	S H716						23.5	6	0.8	2.2	鑄付着・一部欠損	
248	S H716						24.2	5.5	0.4	2.8	鑄付着・残存率2/3	
249	S H716						25.5	5.3	0.8	2.5	鑄付着・一部欠損	
250	S H720		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.5	6	0.8	2.1	鑄付着	
251	S H720		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.8	5.5	0.5	1	鑄付着・残存率2/3	
252	S H720		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.8	5.8	0.8	1.5	鑄付着・一部欠損	
253	S H722		寛永通寶	古寛永		寛永13年(1636)~寛永8年(1668)	23.2	5.2	1.2	3.4	鑄付着	
254	S H722		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.8	5.8	1	3.5	鑄付着	
255	S H722		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.1	5	2.2	3.2	2枚癒着・鑄付着	
256	S H722		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	24	6	1.2	4.1	鑄付着	
257	S H722						25	5	1	1.3	鑄付着・一部欠損	
258	S H724	R M322					27.3	-	10.7	10.9	数枚癒着・鑄付着	
259	S H726	R M316					22.7	5.4	0.7	1.9	鑄付着	
260	S H726	R M316					29	6	7	11.6	5枚癒着・鑄付着	
261	S H732	R M346	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文2年(1737)	21.8	6.5	0.4	2.2	鑄付着・一部欠損	
262	S H732	R M346	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	22.4	6.7	0.7	1.8	鑄付着	
263	S H732	R M346	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23	6	0.5	1.8	鑄付着	
264	S H732	R M346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.6	6	0.5	2.8	鑄付着	
265	S H732	R M346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.6	6.5	0.7	2.6	鑄付着	
266	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23	6	1	2.8	鑄付着	
267	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.5	5.8	0.8	2.7	鑄付着	
268	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.4	5.2	0.7	1.9	鑄付着	
269	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.7	6.5	0.8	2.1	鑄付着	
270	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.7	6.3	0.8	3	鑄付着	
271	S H733	R M267	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.8	6.3	0.5	2	鑄付着	
272	S H734	R M252	寛永通寶	古寛永	高田鏡	寛永14年(1637)	24.4	5.5	1.9	3.1	鑄付着	
273	S H734	R M252	寛永通寶	新寛永	因ッ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	25.6	5.5	1.8	2.5	鑄付着	
274	S H734	R M252	寛永通寶	新寛永	江戸徳川十万理	享保11年(1726)	23.5	6	1.9	2.9	鑄付着	
275	S H734	R M252	寛永通寶	新寛永	紀伊国中ノ島	元文2年(1737)	23.8	6.5	1.3	2	鑄付着	
276	S H734	R M252	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.4	6	1.5	2	鑄付着	
277	S H738	R M298	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	5.4	1	3.3	鑄付着	
278	S H738	R M298					23.8	5.3	1	3.6	鑄付着	
279	S H738	R M298					25.1	5	3	5.4	2枚癒着・鑄付着	
280	S H749	R M276	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮鏡	寛永16年(1639)	23.2	6	0.6	2.5	鑄付着	
281	S H749	R M276	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮鏡	寛永16年(1639)	23.3	5.5	0.8	3	鑄付着	
282	S H749	R M276	寛永通寶	新寛永	因ッ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	23	6	0.5	2.6	鑄付着	

表14 出土銭貨計測表(3)

品目	番号	出土地点	登録番号	銭貨	分類	製造地・名称	製造年代	計測値(mm・g)			備考	
								外径	孔径	重量		
59	283	S H749	RM276	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.5	5.5	1.33	鑄付着	
	284	S H749	RM276	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.2	6	0.7	2.7	鑄付着
	285	S H749	RM276	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	22.7	6.5	0.5	2.7	鑄付着
	286	S H750	RM277	寛永通寶	古寛永	水戸縣	寛永14年(1637)	23.9	6	0.4	2.5	鑄付着
	287	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.3	6.3	1.4	2.1	鑄付着
	288	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.2	6	0.8	2.1	鑄付着
	289	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.3	6.5	0.5	2.1	鑄付着
	290	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.2	6.5	0.6	3	鑄付着
	291	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	23	6.2	0.4	2.3	鑄付着
	292	S H750	RM277	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.5	6.5	0.5	2.1	鑄付着
	293	S H752	RM285	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(座寛)	宝永5年(1708)	22.5	6	0.4	2	鑄付着
	294	S H752	RM285	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	21.5	6.7	0.5	1.8	鑄付着
	295	S H753		寛永通寶	古寛永	芝鏡	寛永13年(1636)	24.2	6	1.1	2.2	
	296	S H755	RM320	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	24.5	6	0.8	3.5	鑄付着
	297	S H755	RM320	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	24.6	5.8	0.6	3	鑄付着
	298	S H755	RM320	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.5	6.8	0.4	2.4	鑄付着
	299	S H755	RM320	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.4	5.5	0.7	3.7	鑄付着
	300	S H755	RM320	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.5	6	1	3.7	鑄付着
	301	S H755	RM320	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.9	5.8	0.8	2.5	鑄付着
	302	S H755	RM320	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.2	6	0.4	2.2	鑄付着
	303	S H756		寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	31.4	6.5	7	14.9	5枚履着・鑄付着
	304	S H756		寛永通寶				23.1	5.2	0.6	2.4	鑄付着
	305	S H756		寛永通寶				24.5	—	1.2	2.3	鑄付着・残存率1/2
	306	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(座寛)	宝永5年(1708)	22	6.5	0.5	2.5	
	307	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(座寛)	宝永5年(1708)	22.3	7	0.6	3.1	
	308	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.6	5.4	1.1	2.6	鑄付着
	309	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.5	6.5	0.5	2.2	
	310	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.9	5.5	0.5	2.5	鑄付着
	311	S H757	RM325	寛永通寶	新寛永	摂津国加島村	元文4年(1739)	22.6	6	1	3.1	
	312	S H760	RM294	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.9	6.5	0.8	2.4	鑄付着
313	S H760	RM294	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.2	6	0.7	2.4	鑄付着	
314	S H760	RM294	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.5	5.5	0.8	1.1	鑄付着・残存率1/2	
315	S H761	RM293	寛永通寶				27.1	6	6.7	12.8	4枚履着・鑄付着	
316	S H762	RM299	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮鏡	寛永16年(1639)	24.7	6	1.8	3.7	鑄付着	
317	S H762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.8	5.5	1.8	3.2	鑄付着	
318	S H762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	25	5.7	1.8	3.1	鑄付着	
319	S H762	RM299					24.5	5.5	2.6	5.2	2枚履着(浴那)	
320	S H763		寛永通寶				—	—	0.6	3.2	鑄付着・残存率1/3	
321	S H764		寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	21.5	7	0.4	1.9		
322	S H764		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.8	6.5	0.5	1.8		
323	S H764		寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	21.8	7	0.3	2.7	臂に「元」	
324	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄13年(1700)	22	6.5	0.4	1.8	鑄付着	
325	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.5	6.3	0.7	1.9	鑄付着	
326	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23	6.5	0.6	2	鑄付着	
327	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.5	6.5	0.5	2.7	鑄付着	
328	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	享保11年(1726)	22.1	6	0.6	2.9	鑄付着	
329	S H765	RM298	寛永通寶	新寛永	江戸深川平野新田	元文4年(1739)	22.2	7	0.5	2.8	鑄付着	
330	S H766	RM296	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.4	6.4	0.7	2.5	鑄付着	
331	S H766	RM296	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	21.8	6.5	0.6	1.9	鑄付着・一部欠損	
332	S H766	RM296	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.3	5.8	0.7	1.6	鑄付着・一部欠損	
333	S H769	RM307	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.4	7	1.2	3	鑄付着	
334	S H769	RM307	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6	0.8	3.1	鑄付着	
335	S H769	RM307	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	22	7.5	0.8	2.2	鑄付着	
336	S H769	RM307	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.5	7	0.4	1.5	鑄付着	
337	S H769	RM307					20.5	7	0.5	2.5	鑄付着	
338	S H771	RM319	寛永通寶				—	—	3.9	1.4	2枚履着・残存率1/2	
339	S H771		寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮鏡	寛永16年(1639)	24.3	5.5	1.8	2.7	鑄付着・一部欠損	
340	S H772	RM308	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.1	5.8	1.6	2.1	鑄付着	

表15 出土銭貨計測表(4)

種別	番号	出土地点	登録番号	銭 銘	分類	鑄造地・名称	鑄造年代	計測値(mm・g)				備 考
								外径	厚さ	重量	備 考	
50	341	S H772	R M308	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.3	6.5	1.4	1.8	鑄付着
	342	S H772	R M308	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.1	6.3	1.4	2	鑄付着・一部欠損
	343	S H772	R M308	寛永通寶				21.1	5.3	1.4	1.6	鑄付着
	344	S H772	R M308	寛永通寶				23.4	5.9	1.2	1	鑄付着・残存率2/3
	345	S H772	R M308					28.7	-	8	8.9	数枚重着・鑄付着
	346	S H774		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.8	6	1.4	2.8	鑄付着
	347	S H774		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(座寛)	宝永5年(1708)	21.8	6.7	1.3	1.9	鑄付着
	348	S H774		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.5	6.2	1.3	2.6	鑄付着
	349	S H774		寛永通寶	新寛永	下野国足尾御山	寛保元年(1741)	21.9	6.2	1.1	2.5	鑄付着・背に「足」
	350	S H774		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	22.6	6.5	1.6	2.6	鑄付着
50	351	S H780	R M340	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	24	5.1	1.6	2.3	鑄付着
	352	S H780	R M340	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.5	6.4	1.5	1.8	鑄付着
	353	S H780	R M340	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.8	5.2	1.3	2.5	鑄付着
	354	S H780	R M340					23.3	5.7	1.7	2	鑄付着
	355	S H782	R M338	寛永通寶	古寛永	京都建仁寺銭	承応2年(1653)	24.8	6.1	1.6	2.5	鑄付着
	356	S H782	R M338	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.8	5.7	1.7	3.7	鑄付着
	357	S H782	R M338	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.3	5.8	1.3	1.9	鑄付着
	358	S H782	R M338	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.3	5.6	1.5	2.6	鑄付着
	359	S H782	R M338	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	24.2	6.6	1.2	2.4	鑄付着
	360	S H782	R M338	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	26.2	6	1.6	3.5	鑄付着・一部欠損
50	361	S H784	R M331	寛永通寶				22.8	6.3	1.5	1.8	
	362	S H785	R M323					34	-	13	14.6	数枚重着・鑄付着
	363	S H785		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	22.3	7	0.7	2	一部欠損
	364	S H786	R M326					49	-	20	26.2	数枚重着・鑄付着
	365	S H788		寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	23.7	5.6	1.4	3.8	
	366	S H788		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.3	6.4	1.1	2.4	
	367	S H788		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.6	5.7	1.5	3.7	
	368	S H788		寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	23.2	7.2	1.2	2.5	
	369	S H788		寛永通寶	新寛永	摂津国加島村	元文4年(1739)	23	6.1	1.1	2.4	
	370	S H793	R M336	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	23.9	6.5	0.9	2.6	
60	371	S H793	R M336	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	23	6	0.7	2.2	
	372	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	22.8	6.3	1	2.3	
	373	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	22.9	6.5	0.9	2	
	374	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6.1	1	1.7	
	375	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.1	6.1	1.3	2.5	
	376	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	相模国藤沢村	元文4年(1739)	22.7	6.5	1.2	2.8	
	377	S H795	R M334	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	22.5	6.9	1.1	1.9	
	378	S H800	R M324	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	23.7	5.6	1.5	3	鑄付着
	379	S H800	R M324	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(座寛)	宝永5年(1708)	22.3	7.2	1.3	1.6	鑄付着
	380	S H800	R M324	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(座寛)	宝永5年(1708)	22.5	7.2	1.1	2.1	鑄付着
60	381	S H800	R M324	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	22.6	5.8	1.4	2.9	鑄付着
	382	S H800	R M324	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.6	6.3	1.4	1.9	鑄付着・背に「元」
	383	S H800	R M324	寛永通寶	古寛永	北条銭	1039年初鑄	24.2	8	1.5	3.1	鑄付着・一部欠損
	384	S H803	R M352	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.5	6	0.5	2	
	385	S H803	R M352	寛永通寶	新寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	26.2	7	1	3.2	
	386	S H803	R M352	寛永通寶	新寛永	京都七条山原	元禄13年(1700)	22.8	6	1	2.4	一部欠損
	387	S H804	R M344	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	23.5	6	0.9	2.2	
	388	S H804	R M344	寛永通寶	新寛永	京都七条山原	元禄13年(1700)	22.7	6.2	0.9	2.7	
	389	S H804	R M344	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6	0.9	2.6	
	390	S H804	R M344	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.2	6	0.8	2.5	
60	391	S H804	R M344	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.5	6	0.5	2.2	
	392	S H804	R M344	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	23	6	0.9	2.9	
	393	S H805	R M339	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.8	6	1.2	2	背に「元」
	394	S H806	R M335	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.6	5.5	1.5	2.8	鑄付着
	395	S H806	R M335	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	24.2	5.5	1.4	2.2	鑄付着
	396	S H806	R M335	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	25	5.5	1.4	2.3	鑄付着
	397	S H806	R M335	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.8	5.4	1.3	2.9	鑄付着
	398	S H806	R M335	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.7	6	1.4	3	鑄付着

表16 出土銭貨計測表(5)

群	番号	出土地点	登録番号	銭貨	分類	鋳造地・名称	鋳造年代	計測値(mm・g)			備考	
								外径	穿径	厚さ		重量
60	399	S H806	R M335	寛永通寶	新寛永	摂津国加島村	元文4年(1739)	23.6	6.5	1.1	2.3	鑄付着
	400	S H807	R M332	寛永通寶	古寛永		寛永3年(1626)~寛永8年(1668)	24.9	5.2	1.7	3.6	鑄付着
	401	S H807	R M332	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.5	5.5	1	2.3	鑄付着
	402	S H807	R M332	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6	1	2.7	鑄付着
	403	S H807	R M332	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6	1	3.3	鑄付着
	404	S H808	R M321	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.6	6.1	1.4	1.3	鑄付着・残存率1/2
	405	S H808	R M321	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	24.9	5.3	3.6	4	2枚破着・鑄付着
	406	S H808		寛永通寶	古寛永		寛永3年(1626)~寛永8年(1668)	25.3	5.7	3.1	4.5	2枚破着・鑄付着
	407	S H808		寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25.8	5.7	1.3	2.9	
	408	S H809	R M318	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23	6.5	1	1.8	
	409	S H809	R M318	寛永通寶	新寛永	摂津国吉田島	元文4年(1739)	22	6.5	1	2.5	
	410	S H809	R M318	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.9	5.5	1	1.6	鑄付着
	411	S H809	R M318	寛永通寶				23.2	-	7.7	8.8	5枚破着・鑄付着
	412	S H809	R M318	寛永通寶				27	6	6	12.6	5枚破着・鑄付着
	413	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	24.7	5.6	1.3	3.6	
	414	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	24.7	6	1.1	3.1	
	415	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25	5.1	1.3	3.8	
	416	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25	5.5	1.3	4.3	
	417	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25.1	5.8	1.2	3.4	
418	S H811	R M333	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25.1	5.9	1.1	3.5		
419	S H811	R M341	寛永通寶				-	-	4.1	1.7	鑄付着・残存率1/3	
420	S H812		寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	明暦2年(1656)	24.6	6	1.1	2	鑄付着	
421	S H812		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	25	6	1.5	1.8	鑄付着・一部欠損	
422	S H812		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.4	5.7	1.3	2.2	鑄付着・一部欠損	
423	S H812		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.8	5.9	1.3	2.3	鑄付着・一部欠損	
424	S H812		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.5	6.1	1.3	2.2	鑄付着	
425	S H812		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	26	6.2	1.3	2.4	鑄付着	
426	S H813	R M337	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	25.8	5.5	1.5	2.3	鑄付着・一部欠損	
427	S H813	R M337	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	22.3	5.3	1.2	1.5	鑄付着	
428	S H815	R M383	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	24.1	5.2	1.3	3.2	鑄付着	
429	S H815	R M383	寛永通寶	文銭	正字文	寛永8年(1668)~天和3年(1683)	25.1	6	1.2	3.1	鑄付着	
430	S H815	R M383	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.9	5.9	1	1.8	鑄付着・一部欠損	
431	S H815	R M383	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.2	5.8	1	2	鑄付着	
432	S H815	R M383	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	21.5	6.4	1	1.7	鑄付着	
433	S H815	R M383	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.2	6.7	1	2.4	鑄付着	
434	S H827	R M389	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	22.6	6.3	1.1	2.5		
435	S H827	R M389	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.4	6	1	2.5		
436	S H827	R M389	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.5	6.1	1.1	3		
437	S H827	R M347	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.6	5.7	1.4	2.7	鑄付着・一部欠損	
438	S H827	R M347	寛永通寶	新寛永	摂津国吉田島	元文4年(1739)	23.4	7.1	1.4	2.2	鑄付着	
439	S H827	R M347	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23	6.1	1.4	1.8	鑄付着	
440	S H827	R M347	寛永通寶				22.8	5.9	1.9	2.2	鑄付着	
441	S H827	R M347					22.9	-	1.2	0.7	鑄付着・残存率1/2	
442	S H827	R M347					23.8	5.8	1.6	1.9	鑄付着・一部欠損	
443	S H827	R M347					24.4	6.7	1.2	2	鑄付着・一部欠損	
444	S H830	R M361	寛永通寶	古寛永	駿河四井之宮銭	寛永16年(1639)	24.1	5.2	1.3	3.5		
445	S H830	R M361	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	24.2	5.9	1.2	2.8		
446	S H830	R M361	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.7	6.4	1	2.4		
447	S H830	R M361	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文2年(1737)	23.4	6.1	1.3	3		
448	S H830	R M361	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.9	7.1	1.2	2.3		
449	S H831	R M353					27.3	6.1	12.8	16.9	6枚破着・鑄付着	
60	450	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.4	5	1.4	2.6	
61	451	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永	肥前国長崎	元文2年(1737)	21.5	6.9	1.3	1.5	
60	452	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	21.6	5.4	1.4	2.5	背に「元」
60	453	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永	下野国足尾山	寛保元年(1741)	21.6	6.6	1.1	1.9	背に「足」
61	454	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.2	6	1.3	2.1	
61	455	S H836	R M367	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.8	6.9	0.9	1.1	
61	456	S H838	R M381	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永16年(1639)	23.7	5.7	1.2	2.8	

表17 出土銭貨計測表(6)

種別	番号	出土地点	登録番号	銭名	分類	鋳造地・名称	鋳造年代	計測値(mm・g)				備考
								外径	厚径	厚径	重量	
61	457	S H838	R M381	寛永通寶	古寛永	駿河國香谷銭	明暦2年(1656)	24.8	5.5	1.2	3.6	
	458	S H838	R M381	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.4	5.8	1.4	3.3	
	459	S H838	R M381	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.4	5.9	1.3	2.7	
	460	S H838	R M381	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	25.9	5.8	1.5	2.6	
	461	S H838	R M381	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.9	6	1.2	3	
	462	S H839	R M371	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.5	6	1.3	2.7	鑄付着
	463	S H839	R M371	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.6	5.1	1.9	1.6	鑄付着・一部欠損
	464	S H839	R M371	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.8	5.6	1.3	2.8	鑄付着
	465	S H839	R M371	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.3	5.6	1.1	2.5	鑄付着
	466	S H839	R M371	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	23	6.3	1.3	1.7	鑄付着・背に「元」
	467	S H839	R M371	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	22.8	6.5	1.5	2.4	鑄付着
	468	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	22.7	5.8	1.1	1.8	一部欠損
	469	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.6	6.1	1.2	2.3	
	470	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.7	6.2	1.1	2.8	
	471	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	22.9	6.3	0.9	1.7	
	472	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	橋津因加島村	元文4年(1739)	23.3	6.4	1.6	2.9	
	473	S H843	R M369	寛永通寶	新寛永	松波相川	明和8年(1771)	22.7	6.1	1.3	2.7	
	474	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	21.5	6.5	1.2	1.8	
	475	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	22.6	6.5	1.3	3	
	476	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	22.8	6.8	1.9	1.9	
	477	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.4	6	1	2	
	478	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.5	6.5	1.3	2.6	
	479	S H851	R M379	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23	6.4	1.1	2.4	
	480	S H852	R M378	寛永通寶	新寛永	京都七条山極	元禄13年(1700)	22.5	6.5	1	1.8	
	481	S H852	R M378	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.5	6	1.3	2.9	
	482	S H854	R M387	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	24.3	6	1.3	2.7	
	483	S H854	R M387	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	23.1	6	1.5	2.1	背に「元」
	484	S H854	R M376	寛永通寶	古寛永	駿河国丹之宮銭	寛永16年(1639)	24.3	5	0.9	2.2	鑄付着・一部欠損
	485	S H854	R M376					23.7	6.5	1.8	3.2	2枚鑄着・鑄付着
	486	S H855	R M372	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	23.8	6.3	1.3	2.1	鑄付着
	487	S H855	R M372					23.1	5.5	1.3	1.4	鑄付着・一部欠損
	488	S H855	R M372					23.3	5.7	1.6	1.8	鑄付着
	489	S H855	R M372					23.4	5.9	1.4	2	鑄付着・一部欠損
	490	S H855	R M372					24.9	5.8	1.7	2.1	鑄付着
	491	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(原寛)	宝永5年(1708)	22.5	6.8	0.6	2.1	
	492	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.5	6	1	3	
	493	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.5	6	0.6	2.4	
	494	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.1	6	1	3.3	
	495	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.5	6	0.8	2.6	
	496	S H863	R M405	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23	6	0.9	2.8	
	497	S H864	R M380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永12年(1637)	24.5	5.6	1.5	2.2	鑄付着
	498	S H864	R M380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永12年(1637)	22.9	6	2.6	2	鑄付着・一部欠損
	499	S H864	R M380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永12年(1637)	23.9	6.3	1.7	2.5	鑄付着
	500	S H864	R M380	寛永通寶	古寛永		寛永3年(1626)~寛文8年(1668)	23.2	5.7	2.3	1.5	鑄付着
	501	S H864	R M380	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	25.2	5.9	1.5	2.5	鑄付着
	502	S H864	R M388	寛永通寶	古寛永	京都堀仁寺銭	承応2年(1653)	23.5	6.8	1.4	2.6	鑄付着
	503	S H864	R M388	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文2年(1737)	23.7	6.1	1.4	2.1	鑄付着
	504	S H865	R M398	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)~天和3年(1683)	25	5.7	1.1	2.9	
505	S H865	R M398	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	23.4	5.8	1.5	2.5		
506	S H865	R M398	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.4	6.7	0.8	2.2		
507	S H865	R M398	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	元文元年(1736)	22.9	6.5	1.4	3		
508	S H865	R M398	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	元文元年(1736)	23.5	6	1.1	3.5		
509	S H865	R M398	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.5	6.7	1.2	1.7	背に「元」	
510	S H866	R M382	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.4	6	1.6	2.7	鑄付着	
511	S H866	R M382	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文2年(1737)	23.4	6.3	1.7	2.2	鑄付着・一部欠損	
512	S H866	R M382	寛永通寶	新寛永		元禄10年~(1697~)	25.2	5.9	1.6	1.7	鑄付着・残存率1/2	
513	S H867	R M402	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.5	5.7	1.3	3.4		
514	S H867	R M402	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24	6.1	1	2.7		

表18 出土銭貨計測表(7)

種号	出土地点	登録番号	銭名	分類	製造地・名称	製造年代	計測値(mm・g)			備考	
							外径	厚さ	重量		
515	S H867	RM402	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.8	6.3	0.9	2.4	
516	S H867	RM402	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文2年(1737)	22.4	6.2	1.1	2.4	
517	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	23.1	6.7	1	2.1	錆付着
518	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	23.2	6.2	1.2	2.7	錆付着
519	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.2	6.6	1.4	2.4	錆付着
520	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.4	6	1.3	2.9	錆付着
521	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	元文元年(1736)	22.2	5.9	1.2	2.1	錆付着
522	S H870	RM384	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	23.3	6.7	1.2	2.9	錆付着
523	S H872	RM400	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24.1	6	1.3	1.5	錆付着
524	S H873	RM385	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.5	6.5	1.3	2.2	錆付着
525	S H874	RM396	崇徳元寶	北宋銭	1004年初铸		25	5.7	1.5	3.7	錆付着
526	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	芝鏡	寛永13年(1636)	24.7	5.4	1.2	2.9	錆付着
527	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	芝鏡	寛永13年(1636)	24.9	5.9	1.3	2.4	錆付着
528	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	竹田鏡	寛永14年(1637)	24.4	5.4	1.6	2.9	錆付着
529	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	京都建仁寺鏡	承応2年(1653)	24.9	6	1.3	3.1	錆付着
530	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	京都建仁寺鏡	承応2年(1653)	25.2	6.7	1.5	2.5	錆付着
531	S H874	RM396	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷鏡	明暦2年(1656)	24.6	6	1.2	2.5	錆付着
532	S H874	RM396	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.4	6.5	1.3	1.7	錆付着・背に「元」
533	S H874	RM396	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.8	5.9	1.3	2	錆付着
534	S H874		寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	23.8	5.8	1.2	2.7	錆付着
535	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(組寛)	宝永5年(1708)	23.5	5.7	1.3	2.3	錆付着・一部欠損
536	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	22.8	6.7	1.3	1.9	錆付着・一部欠損
537	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	23.9	5.9	1.6	2.8	錆付着
538	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.3	5.6	1.6	3.1	錆付着
539	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	22.2	6.7	1.1	1.5	錆付着
540	S H875	RM390	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	明和8年(1771)	23.4	5.9	1.7	2.6	錆付着
541	S H877	RM404	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄13年(1701)	23.7	6.2	1	2.2	
542	S H877	RM404	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(組寛)	宝永5年(1708)	21.9	7.1	0.7	1.2	
543	S H877	RM404					25.9	5.8	4.7	3.4	4枚腐着・錆付着
544	S H878		寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	24.4	5.6	1.5	2.2	錆付着
545	S H878		寛永通寶	新寛永	江戸深川十万坪	享保11年(1726)	22	5.7	1.6	2.7	錆付着
546	S H878		寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	22.3	5.9	1.1	0.9	錆付着・残存率2/3
547	S H879	RM391	寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	26	5.5	7	5.8	5枚腐着・錆付着
548	S H883	RM258	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25.5	5.8	1.5	2.5	錆付着
549	S H883	RM258	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25.2	5.8	1.5	2.5	錆付着
550	S H884	RM407	寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	25.9	5.7	1.7	1.8	錆付着・残存率3/4
551	S H884	RM408	寛永通寶	古寛永	水戸鏡	寛永14年(1637)	24.1	5.6	1.2	3.7	
552	S H884	RM408	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25.2	5.7	1.1	3.2	
553	S H884	RM408	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24.6	5.8	1	2.7	
554	S H884	RM408	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.8	6.2	1.2	2.9	
555	S H884	RM408	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	22.8	6.8	1	2.3	
556	S H884	RM408	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.6	6.2	1.1	1.5	背に「元」
557	S H885	RM406	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	23.6	5.9	1.3	2.3	錆付着
558	S H885	RM406	寛永通寶	新寛永	相模国吉田島	元文4年(1739)	23	6.7	1.2	2.3	錆付着
559	S H885	RM406	寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	24.9	5.2	4.9	9	4枚腐着
560	S H890	RM368	寛永通寶				24.6	5.7	3.3	5.9	3枚腐着・錆付着
561	S H890	RM368	寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	-	6.6	1.4	1.3	一部欠損
562	S D60	RM1	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(組寛)	宝永5年(1708)	24.1	6.3	0.7	2	錆付着
563	S D60	RM1	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(組寛)	宝永5年(1708)	22.7	6	1	2.6	錆付着
564	S D60	RM1	寛永通寶	新寛永	四ツ宝鏡(広永)	宝永5年(1708)	24	6	1.1	3.3	錆付着
565	S P604		寛永通寶				11.5	-	12	0.5	残存率1/5
566	18-17G	RM301					36.9	-	20.5	26.3	4枚腐着・錆付着
567	20-11G	RM399	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25	5.5	1.5	2.6	
568	20-34G		崇徳元寶	北宋銭	1004年初铸		24.3	6.5	0.9	2.9	
569	21-10G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	21.6	6.5	0.9	1.7	
570	21-16G		寛永通寶	新寛永		元禄10年(1697)	23.9	5.3	4.6	8.2	4枚腐着・錆付着
571	21-18G		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23	6.4	0.5	1.6	錆付着
572	21-18G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	22.4	6.2	0.7	1.3	錆付着

表19 出土銭貨計測表(8)

種別	番号	出土地点	登録番号	銭路	分類	鋳造地・名称	鋳造年代	計測値(mm・g)				備考	
								外径	孔径	厚さ	重量		
	573	22-8 G		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	23.4	6.5	1.3	2	鑄付着	
	574	22-8 G		寛永通寶	新寛永	仙台石巻	元文4年(1730)	22.5	6.2	1.8	2.1	鑄付着・背に「干」	
	575	22-8 G		寛永通寶	新寛永	仙台石巻	元文4年(1730)	22.4	5.6	1.9	2.4	鑄付着・背に「干」	
	576	22-9 G	R M242	寛永通寶	古寛永	駿河国春谷銭	明暦2年(1656)	24.2	6	1.3	3.2		
	577	22-9 G		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	23.7	5.1	1.6	3		
	578	22-9 G		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	23.5	6.4	1.4	1.6		
	579	22-9 G	R M242	寛永通寶	新寛永	江戸津川十万坪	元文元年(1736)	23.5	6	1	1.7	一部破損	
	580	22-9 G	R M242	寛永通寶	新寛永	摂津国加島村	元文4年(1739)	23.4	6.2	1	1.7		
	581	22-9 G	R M242	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年(1741)	22.1	5.3	1.1	2	背に「元」	
	582	22-9 G	R M242	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.2	6.2	1.3	3.1	鑄付着	
	583	22-9 G	R M242	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.2	6.2	1.1	2.2	鑄付着・一部欠損	
	584	22-9 G		寛永通寶	古寛永	浅草橋場銭	寛永13年(1636)	24.4	5.7	1.6	3.1	鑄付着	
	585	22-10 G	R M243	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.1	5.7	1.2	2.1	鑄付着	
	586	22-10 G	R M243	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.6	5.9	1.2	1.9	鑄付着	
	587	22-10 G	R M243	寛永通寶	新寛永		元禄10年～(1697～)	23.2	5.8	1.6	3.1	鑄付着	
	588	22-10 G		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	23.1	6	1.9	2	鑄付着・一部欠損	
	589	22-10 G		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	5.3	1.7	2.2	鑄付着	
	590	22-10 G		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	24	6.4	1.3	2.1	鑄付着	
	591	22-10 G		寛永通寶	新寛永	摂津国加島村	元文4年(1739)	22.9	5.2	1.5	2.5	鑄付着	
	592	22-10 G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.8	5.9	1.6	3	鑄付着	
	593	22-10 G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	元禄10年～(1697～)	23.2	5.8	1.2	1.3	鑄付着・一部欠損	
	594	22-11 G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.1	5.8	0.8	1.3	残存率3/4	
	595	22-23 G		寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	24.2	5.4	1.3	2.3	鑄付着	
	596	22-23 G		寛永通寶	古寛永		寛永3年(1626)～寛文8年(1668)	23.1	5.5	1.3	1.7	鑄付着	
	597	22-23 G		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	24.1	6.1	1.6	2.6	鑄付着	
	598	23-7 G		寛永通寶	古寛永	芝銭	寛永13年(1636)	24.5	5.3	1.4	2.1	鑄付着	
	599	23-7 G		寛永通寶	古寛永	京都藤仁寺銭	承応2年(1653)	24.6	6.2	1.2	1.6	鑄付着・一部欠損	
	600	23-7 G		寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄10年(1697)	22.7	6.1	1.1	1.9	鑄付着	
	601	23-7 G		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	24.6	5.7	1.5	3.1	鑄付着	
	602	23-7 G		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.3	6.1	1.2	2.7	鑄付着	
	603	23-7 G		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	23.9	5.9	1.3	2.5	鑄付着	
	604	23-7 G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	21.7	6.7	1.3	1.3	鑄付着	
	605	23-8 G		寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年(1741)	23.4	5.6	1.9	2.9	鑄付着	
	606	23-8 G		寛永通寶	新寛永		元禄10年～(1697～)	23.2	5.6	1.8	2.2	鑄付着	
	607	23-9 G	R M241	寛永通寶	古寛永	駿河国春谷銭	明暦2年(1656)	24.8	5.2	1.7	3.1	鑄付着	
	608	23-9 G	R M241	寛永通寶	古寛永	駿河国春谷銭	明暦2年(1656)	25	5.7	1.5	3.4	鑄付着	
	609	23-9 G	R M241	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	24.9	5.2	1.5	1.8	鑄付着・残存率2/3	
	610	23-9 G	R M241	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	24.9	6	1.6	3.2	鑄付着	
	611	23-9 G	R M241	寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25.5	5.5	1.4	3.4	鑄付着	
	612	23-9 G	R M241	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	25.7	5.5	1.7	4.5	鑄付着	
	613	22-23-8 G		寛永通寶	古寛永	駿河国春谷銭	明暦2年(1656)	24.9	5.1	1.8	3.6	鑄付着	
	614	22-23-8 G		寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25	5.4	2.3	2	鑄付着・一部欠損	
	615	22-23-8 G		寛永通寶	文銭	正字文	寛文8年(1668)～天和3年(1683)	25.3	5.5	1.8	2.7	鑄付着	
	616	22-23-8 G		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	24.1	6.4	1.1	2.4	鑄付着	
	617	22-23-8 G		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文2年(1737)	24.9	4.8	1.7	3.7	鑄付着	
	618	22-23-8 G		寛永通寶	新寛永	根根岡吉田島	元文4年(1739)	22.7	5.4	1.5	2.3	鑄付着	
	619	X O		寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永14年(1637)	23.4	6.5	1	2.4		
	620	X O		寛永通寶	古寛永	駿河国春谷銭	明暦2年(1656)	24.2	5.5	1	2	鑄付着	
	621	X O		寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭(広永)	宝永5年(1708)	23	6	1	1.8	鑄付着	
	622	X O		寛永通寶	新寛永	京都七条	享保11年(1726)	23.6	6.8	0.8	2.2	鑄付着	
	623	表土				□口元寶	北宋銭	24.5	6.5	1	0.9	残存率1/2	
	624	表土				熙寧元寶	北宋銭	1068年初鑄	-	-	1	1.2	残存率1/3

※ S H50、735出土銭貨は腐蝕が著しく、神岡・国版には掲載しなかった。

※古銭の鋳造地・名称・鋳造年代の判別は、

- 小川浩編 「日本の古銭」(人物往來社)
 日本貨幣協同組合 「日本貨幣カタログ」
 武田健市 1998『大日本通貨』(多賀城市教育委員会)を参照した。

VI まとめ

1 主な竪穴住居跡の土器組成について

今回の調査で78棟の竪穴住居跡が検出されたが、上面と下面の主な住居跡出土の土器組成を見ながら所属時期の検討を加える。なお第6図竪穴住居跡相関図を参照されたい。

ST480から出土したものはB類の壺の口縁部がある。ST346からは、B2類やC類の高坏が出土している。埴釜式期末段階から南小泉式期古段階への移行が窺える。これらは、下面の遺構である。またその上面にあるST345からは、B1類の高坏破片やC2・C3類の甕破片が出土している。

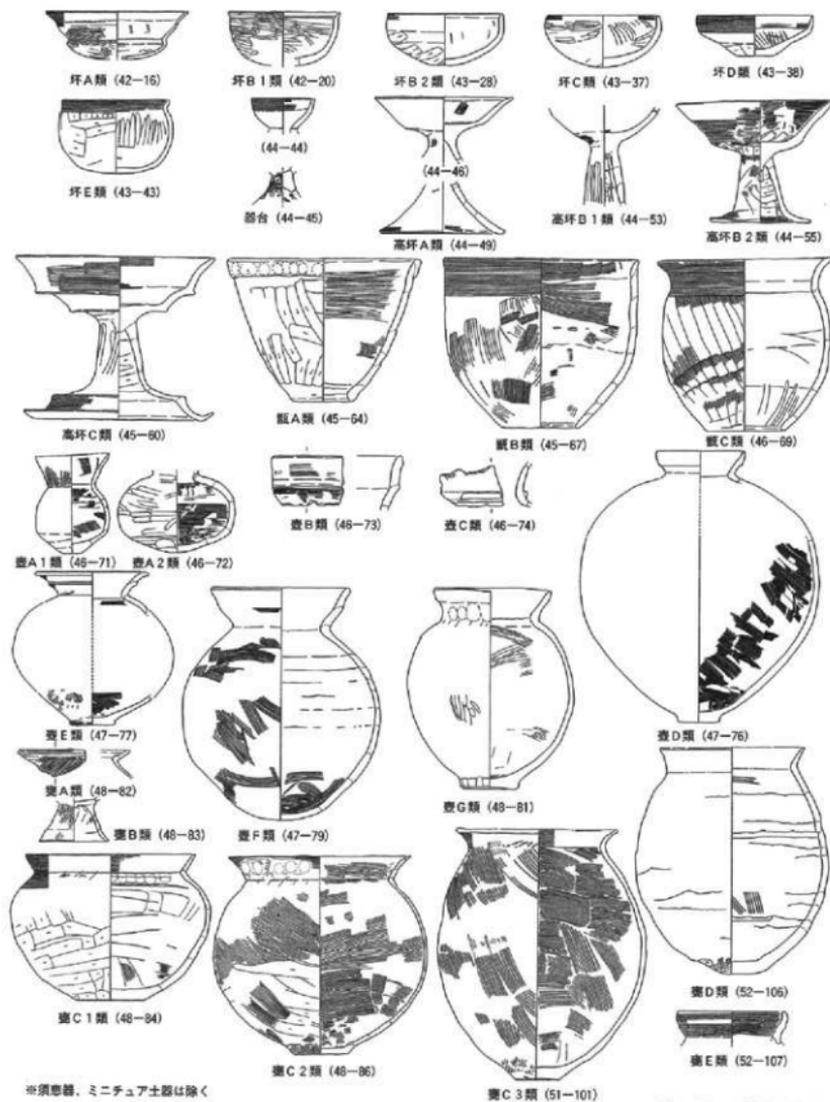
下面のST351からは、A類の坏が出土している。周辺の今塚遺跡から類似する器形の坏が出土している。埴釜式期末段階の特徴を有している。上面のST367からは、C類の坏、B1類の高坏、C3類の甕が確認されている。ST352からも同じ様相の土器片がある。

下面のST368からは、E類の坏、A・C類の高坏やB・D類の壺が出土している。上面のST366出土のものとして、須恵器ではTK208形式の坏蓋やTK23形式の坏身、土師器ではB1類の坏、B1・B2類の高坏などがあり、出土した須恵器から陶邑編年により5世紀末葉の所属時期を想定できる。上面のST307からはTK208形式に並行する須恵器坏身が出土しており、5世紀後半に比定できる。上面のST365からは、B1類の高坏、C2類の甕が確認された。上面のST385からは、須恵器ではTK208形式並行の甕の口縁部、土師器ではB1・C類の坏、B・C類の甕、B2類の壺、C2・C3類の甕があり、出土した須恵器から陶邑編年により、5世紀後半の所属時期を想定できる。ST381出土のものは、C類の坏、A類・B2類の高坏である。ST382ではB1類の高坏が出土している。

上面のST61からは、B1・B2・E類の坏、C2・C3類の甕を確認できる。E類坏は客体的である。ST105は、B1・C類の坏、A類の甕、G類の壺、C2・C3類の甕が出土している。A類甕は客体的である。ST95出土のものは、C類の坏、B・C類の甕、D類の甕などである。これらの住居から高坏は確認されてなかった。このことから、食膳具として坏の使用が主体的となった時期と考えられる。

下面のST306は、B2類の高坏、A類の甕が出土した。高坏の坏部はL字に屈曲して立ち上がる。上面のST295出土のものは、B1類の高坏、A・C類の甕がある。高坏の坏部は稜が退化している。ST146では、D類の甕が出土している。

下面のST887では、A類の高坏や器台、A1類・D類の壺が確認された。壺に関しては粗製化が進んでいる。上面のST445からは、B1・B2・C類の坏、B2類や坏部の稜が退化した高坏、B2類の甕が出土している。また、上面のST727はC3類の甕が、ST684はB1・B2・C類の坏、B2類の高坏、B類の甕が出土している。下面のST659出土のものはC・D・E類の坏、B2・C類の高坏、B類の壺がある。同じく下面のST832ではE類の坏、B1・B2・C類の高坏、A類の甕、E・G類の壺、C2・C3・E類の甕などがある。ST747ではB2類の坏、B2・C類の高坏、F類の壺やC1類の甕があり、ST748からはB1類の高坏、C類の甕、C・F類の壺、



※須恵器、ミニチュア土器は除く

第63図 土器分類図

年代	18世紀後半	19世紀前半	19世紀後半～ 平清水ほか
出土 陶磁器	肥前	会津・相馬	
	SH108 → SH765 → SH668 → SH844 → SH868 → SH889 → SH851	SH92 → SH105 → SH104 → SH681 → SH304 → SH842 → SH731 → SH763 → SH806 → SH830 → SH874 → SH875	SH103 → SH65 SH871 → SH872 → SH660 → SH732 → SH865 SH866 → SH863 → SH877 → SH864 → SH865 SH711 → SH720 → SH766 SH724 → SH762 SH618 → SH662
		SH835 → SH848 → SH834 → SH835 → SH848 → SH43 → SH44 → SH46 → SH47 → SH48 → SH49 → SH50 → SH792 → SH845 → SH890 → SH749	SH866 SH834 → SH834 SH881 → SH862 SH875 → SH866 SH834 → SH834 SH781 → SH782 SH793 → SH795 → SH794
箱式A	●		●
箱式B	●		●
箱式C	●		●
草履	●		●
直葬	●		●

※蓋坑の所属年代については、切り合いや出土遺物の生産年代などから推定した。

第64図 墓坑相関図

C2・C3類の甕が出土した。

以上のことから本調査検出の集落の所属時期として辻編年のⅡ-2段階を上限とし、下面から上面への転換期が高橋編年のⅠ-3～Ⅱ-1段階または柳沼編年のⅡ期、そして上面の主体となるのが高橋編年のⅡ-1・2段階または柳沼編年のⅢ期と考えられる。しかし、今回の調査では、後続する時期（高橋編年でⅡ-3、柳沼編年Ⅳ期）の遺物が出土しておらず、隣接する向河原遺跡の古墳時代の土器様相が、当該遺跡に後続する時期であることから集落の変遷など考慮する必要がある。なお、昨年度の3次調査において朱彩の器台などが出土しており、集落全体の所属時期の上限が上がると思われる。また、本調査区外の東側にて山形市教育委員会が行った調査では、焼失住居跡内で南小泉式期古段階の土師器が出土している。

2 近世・近代墓について

今回の調査では、江戸時代後期から近代までの墓域を検出した。ほとんどが火葬であったが特に江戸時代後期又は近代の墓について土葬も確認できた。また、地元の老翁の話では、部落最後の土葬が70年前に行われたということであった。

埋葬方法については直葬・早桶・箱形A・箱形Bに分類できる（詳細は「4 墓坑」）。

棺内、棺外から出土した実年代が分かる遺物から埋葬方法を述べると、以下のようになる。なお、「:」の後の数字は墓数を示す。

18世紀後半の遺物が出土するものは、箱形A:5・箱形B:1・直葬:1である。18世紀末の遺物が出土するものは、直葬:1である。19世紀前半の遺物が出土するものは、箱形A:2・箱形C:5・直葬:2・早桶:2である。19世紀後半は箱形C:2・直葬:1である。埋葬形態の時代的変遷はほとんどなく、一般的に早桶のタイプが早くから見られる傾向があるが、今回の調査では差異はなかった。なお早桶使用の墓坑の特徴として、北向きに倒した横桶の状態で出土する例が多数見られた。棺内からは火葬骨が出土している。

また、不明銭を含まない出土銭の組み合わせ分類を以下に示した。なお、「:」の後の数字は墓数を示す。

①寛永のみ:1、②文銭+新寛永:3、③新寛永のみ:29、④古寛永+新寛永:18、

⑤古寛永+文銭+新寛永:7、⑥北宋銭+古寛永+新寛永:2、⑦文銭のみ:1

この中で6枚セットのものは、②文銭+新寛永:1、③新寛永のみ:10、④古寛永+新寛永:8、⑥北宋銭+古寛永+新寛永:1である。北宋銭と新寛永が共存する墓を3基（不明銭と組み合わせられるもの1基あり）確認している。他県の北宋銭との組み合わせのある遺跡を見ると、大日北遺跡（宮城）で6基、南諏訪原遺跡、宮脇遺跡、早稲田遺跡（以上福島）で1基ずつ確認するのみである。

他に県内での近世墓の発掘例は、県教育委員会による「郡之神遺跡」（飯豊町）発掘調査における土坑内の古銭（古寛永4枚・新寛永9枚・文銭1枚）や、昨年度県教育庁文化財課による渋江遺跡発掘調査における30基ほどの近世墓の検出例等がある。

《引用・参考文献》

- 阿子島 功 「自然堤防の発達程度と形成時間観」『日本地理学会予稿集』2000
- 阿部明彦他 「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)」山形県埋蔵文化財調査報告書第107集1987
- 上田 秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982
- 尾形典典他 「下柳A遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書38集1996
- 小川 浩編 「日本の古銭」人物往来社1966
- 小俣 悟 「池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)」台東区池之端七軒町遺跡調査会1997
- 工藤信一郎他 「南小泉遺跡第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第226集1998
- 黒坂 雅人 「城南一丁目遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第69集1999
- 須賀井新入他 「郡之神遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第191集1993
- 須賀井新入他 「今塚遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集1994
- 鈴木公雄他 「芝一丁目増上寺寺院群」東京都港区教育委員会1988
- 鈴木 孝之 「古代～中近世の井戸跡について(1)」『埼玉考古研究紀要7号』1990
- 清喜 裕二 「関東・東北地方の石製品」『第3回東北前方後円墳研究大会シンポジウム-前期古墳から中期古墳へ発表要旨資料』1998
- 関根 達人 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』1998
- 関根達人他 「東北大学埋蔵文化財調査年報11」1999
- 高桑 登他 「米沢城跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化センター調査報告書第66集1999
- 高橋 誠明 「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究第5号』1999
- 竹内俊之他 「東叡山寛永寺護国院Ⅰ」都立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書1990
- 武田健市他 「大日北遺跡-近世墓の調査報告書-」多賀城市文化財調査報告書第49集1998
- 田辺 昭三 「須恵器大成」角川書店1986
- 辻 秀人 「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集歴史・地理学第27号』1995
- 野尻 侃他 「荒谷原遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第90集1985
- 藤澤 良祐 「中近世瀬戸焼の編年」『東北地方の在出土器・陶磁器Ⅰ』東北中世考古学会第3回研究大会1997
- 柳沼 賢治 「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器研究第5号』1999
- 吉岡恭平他 「富沢遺跡・泉崎浦遺跡」仙台市文化財調査報告書第126集1989
- 「九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-」九州近世陶磁学会2000
- 「細工町遺跡別冊1 江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)」新宿区厚生部遺跡調査会1992
- 「中世庶民信仰資料」元興寺・(財)元興寺文化財研究所1994
- 「日本貨幣カタログ」日本貨幣商協同組合2002
- 「馬見ヶ崎川扇状地における地下水人工涵養施設建設にかかわる敵地及び水源基礎調査」山形市・山形地域地下水利用対策協議会1988

報告書抄録

ふりがな	しぶえいせきだいよじはくつちようさほうこくしょ
書名	渋江遺跡第4次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第106集
編著者名	押切智紀 多田和弘 西田明日香
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地名	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301
発行年月日	西暦2002年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しぶえいせき 渋江遺跡	やまがたけんやまがたし 山形県山形市 おほあざしぶえ 大字渋江 あざなか 子田中・ てらこうじ 寺小路	6201	160	38度 18分 81秒	140度 18分 84秒	20010416 ～ 20010914	8,000	特定道路山形羽入線道路改築事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古墳時代	竪穴住居 土坑 溝 柱穴	78 4 須恵器・土師器 石製品・石製模造品	古墳時代では、上下2面の集落跡が確認され、多数の住居跡が検出された。
	中世	掘立柱建物 井戸 溝 土坑 柱穴	4 4 2 中世陶器、青磁 石製品	中世では、礎板作業が施された掘立柱建物跡を含む集落を検出した。区画溝を2条確認した。
墓域	近世・近代	墓 井戸 溝 土坑 柱穴	169 1 近世・近代陶磁器 石製品・木製品・ 金属製品・土製品	近世・近代では、江戸時代後期以降の墓域を検出し、169基の墓を確認した。 (総出土箱数：110)

图 版



重機稼動状況 (東から)



面整理 (南から)



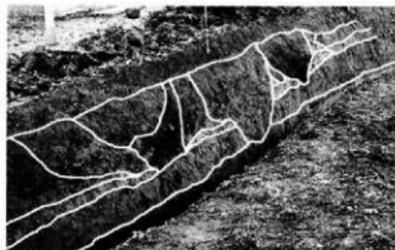
遺構精査 (南から)



記録作業 (北から)



調査風景 (南から)



D区東壁基本層序（北から）



A区西側上面完掘状況（南から）



A区下面完掘状況（西から）



B区完掘状況（西から）



ST 5 EL 断面 (南から)



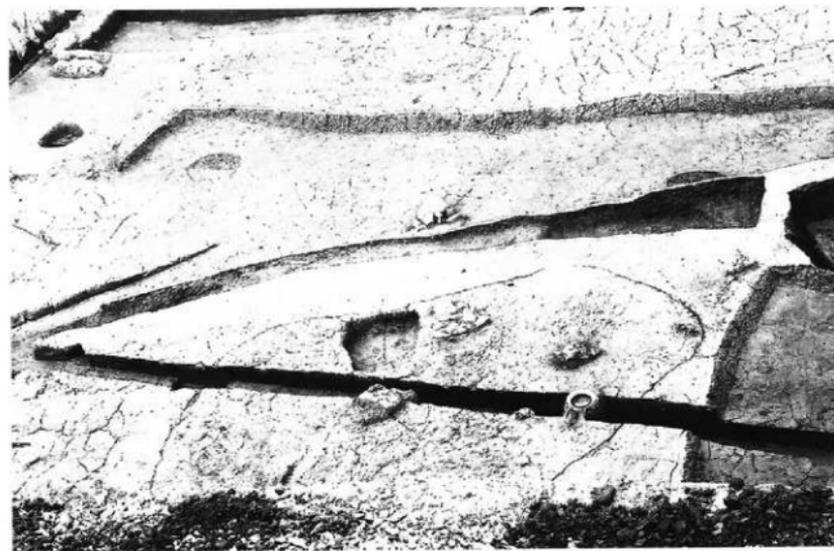
ST 2 壺出土状況 (北から)



ST 3 断面 (南から)



ST 3 ミニチュア土器出土状況 (南から)



ST95遺物出土状況 (南から)



ST1 断面 (南から)



ST95甗出土状況 (北から)



ST95甗出土状況 (北から)



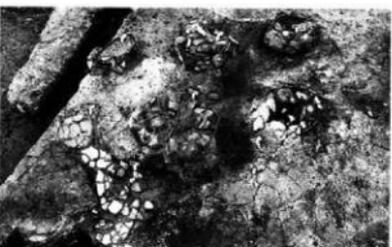
ST95紡錘車出土状況 (西から)



ST61EL 断面 (西から)



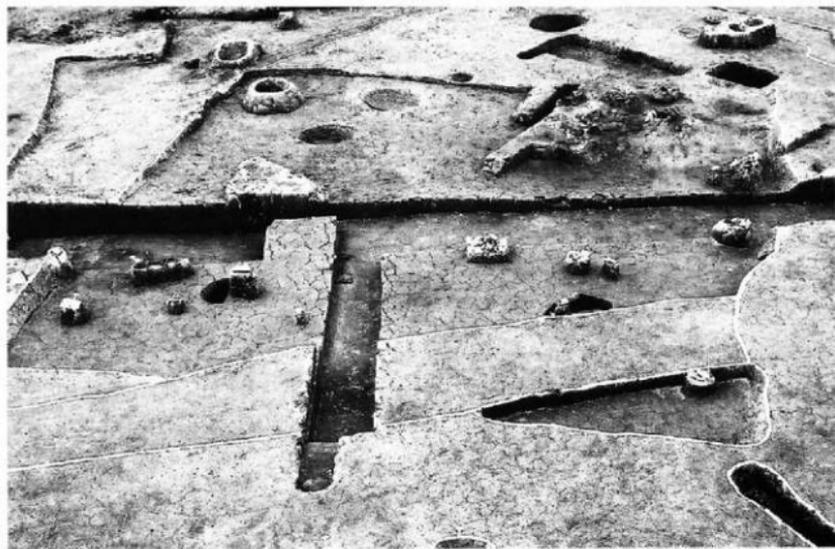
ST61断面 (西から)



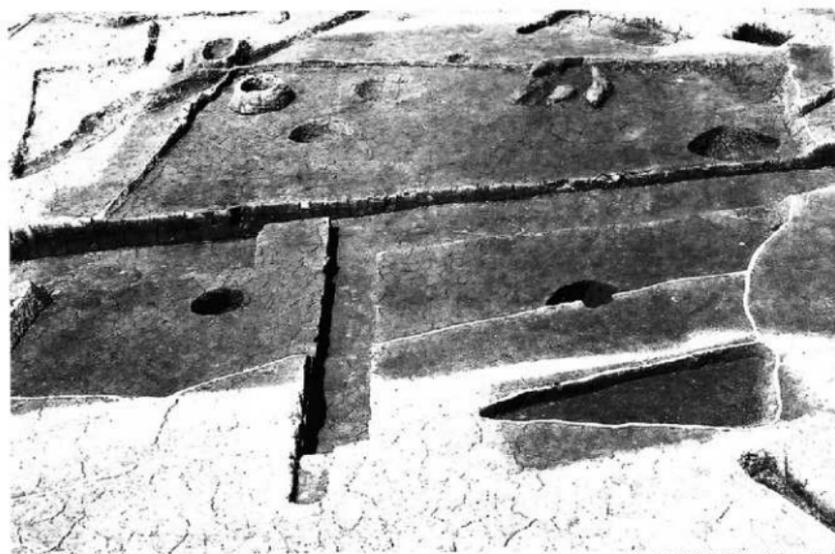
ST61EL 周辺遺物出土状況 (南から)



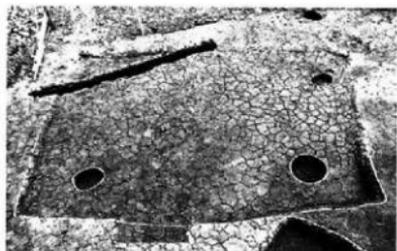
ST61EL 完掘状況 (南から)



ST61遺物出土状況（南から）



ST61完掘状況（南から）



ST120完掘状況 (南から)



ST38覆土堆積前状況 (南から)



ST83断面 (西から)



ST83覆土堆積前状況 (南から)



ST295覆土堆積前状況 (南から)



ST306完掘状況 (東から)



ST295EL 断面 (東から)



ST295高環出土状況 (西から)



ST307断面 (東から)



ST307覆土堆積前状況 (東から)



ST307EP 2 周辺遺物出土状況 (西から)



ST307須恵器坏出土状況 (北から)



ST105断面 (西から)



ST105・891遺物出土状況 (南から)



ST105EL 周辺遺物出土状況 (南から)



ST105坏・甕出土状況 (西から)



C区完掘状況（北から）



ST345覆土堆積前状況（南から）



ST472完掘状況（南から）



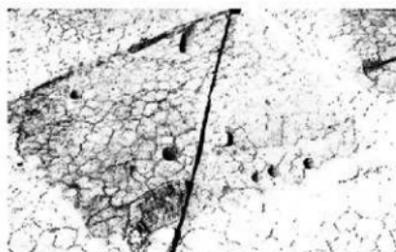
ST345高坏・甕出土状況（南から）



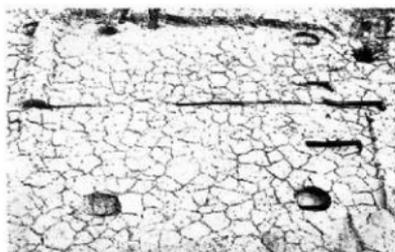
ST345甕出土状況（東から）



ST349遺物出土状況（南から）



ST351覆土堆積前状況（南から）



ST352完掘状況（南から）



ST349アメリカ型石鍬出土状況（西から）



ST352遺物出土状況（南から）



ST367遺物出土状況 (北から)



ST367EL断面 (南から)



ST367甕出土状況 (西から)



ST480遺物出土状況 (南から)



ST368遺物出土状況 (南から)



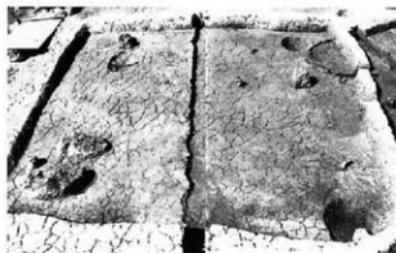
ST368完掘状況 (南から)



ST368二重口緑壺出土状況 (北から)



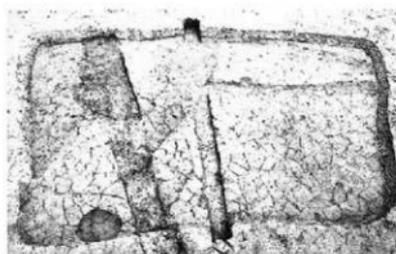
ST368高坏・坏・甕出土状況 (西から)



ST360覆土堆積前状況 (南から)



ST364覆土堆積前状況 (南から)



ST376完掘状況 (南から)



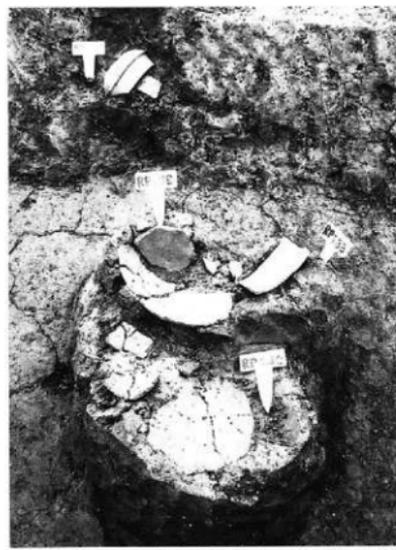
ST365遺物出土状況 (南から)



ST366遺物出土状況 (南から)



ST382遺物出土状況 (南から)



ST366須恵器・土師器坏出土状況 (東から)



ST381遺物出土状況 (南から)



ST381管玉出土状況 (西から)



ST375覆土堆積前状況 (南から)



ST379完掘状況 (南から)



ST385EL 周辺遺物出土状況 (西から)



ST385EL 断面 (東から)



ST385壺出土状況 (南から)



ST385覆土堆積前状況（南から）



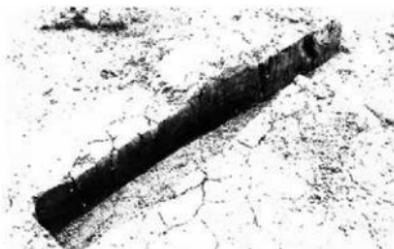
ST385完掘状況（南から）



ST378完掘状況 (南から)



ST384完掘状況 (南から)



ST445EL 断面 (西から)



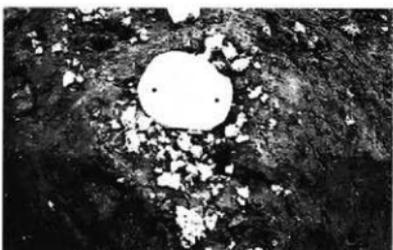
ST887壺出土状況 (南から)



ST445EL 周辺遺物出土状況 (南から)



ST445環・壺出土状況 (西から)



ST445有孔円板出土状況 (南から)



ST445覆土堆積前状況（南から）



ST887完掘状況（南から）



ST471・490完掘状況（西から）



ST475遺物出土状況（西から）



ST495完掘状況（東から）



ST492完掘状況（北から）



D区北東部完掘状況（南から）



D区北側下面完掘状況（南から）



D区南側下面完掘状況（北から）



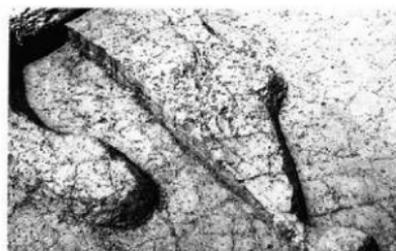
D区全景 (南から)



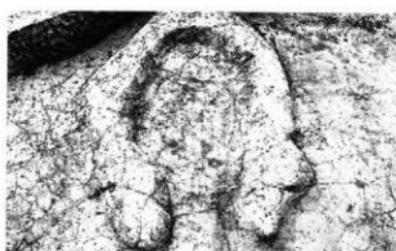
ST684RP311~314出土状況 (東から)



ST727RP315出土状況 (西から)



ST727EL 断面 (南から)



ST727EL 出土状況 (東から)



ST776完掘状況 (北から)



ST777完掘状況 (西から)



ST544・545断面 (北から)



ST608完掘状況 (南から)



ST619EK1 断面 (西から)



ST619EK1 遺物出土状況 (西から)



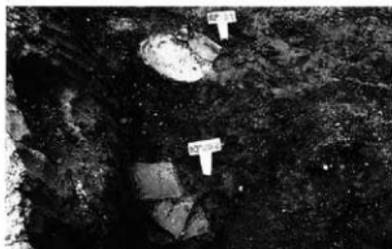
ST615完掘状況 (南から)



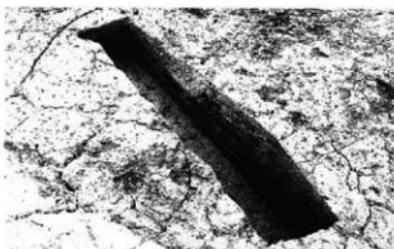
ST708断面 (東から)



ST659断面 (西から)



ST659環・壺出土状況 (北から)



ST659EL 断面 (北から)



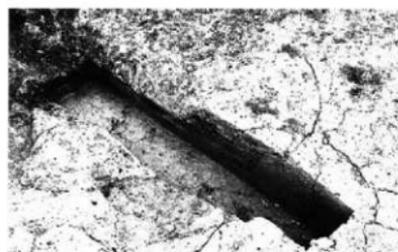
ST659環出土状況 (北から)



ST659完掘状況 (東から)



ST664遺物出土状況（北から）



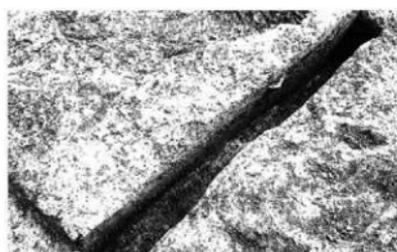
ST664焼土域断面（西から）



ST832断面（西から）



ST832完掘状況（北から）



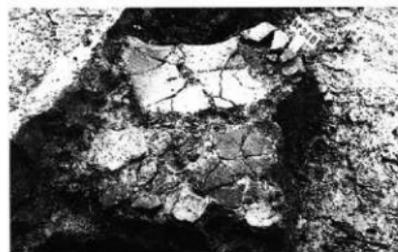
ST832EL 断面（西から）



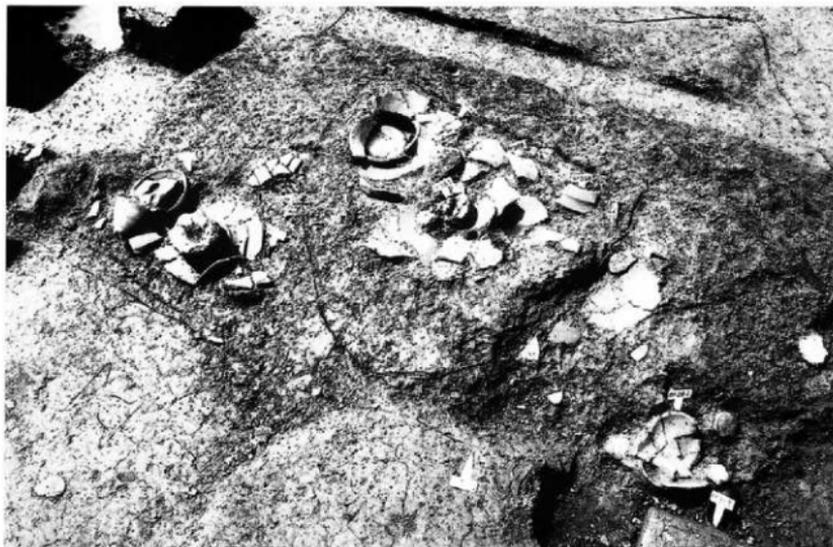
ST832EL 出土状況（西から）



ST832高環・環出土状況（東から）



ST832壺出土状況（北から）



ST832EL 周辺遺物出土状況 (東から)



ST747遺物出土状況 (東から)



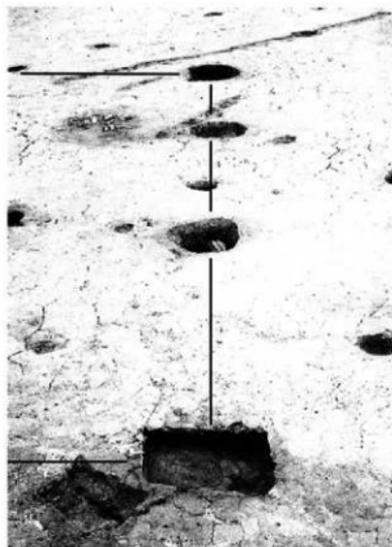
ST747壺・甕出土状況 (北から)



ST748遺物出土状況 (東から)



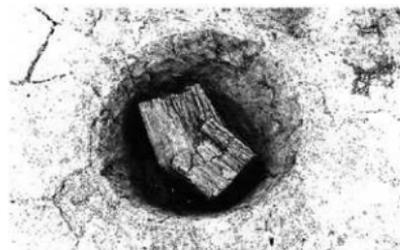
ST748壺出土状況 (北から)



SB181完掘状況（西から）



SB181EB30礎板出土状況（南から）



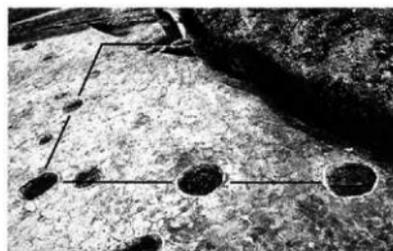
SB181EB163礎板出土状況（南から）



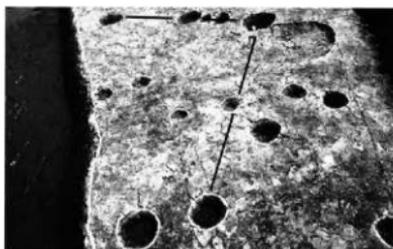
SB479完掘状況（西から）



SB581・600完掘状況（南から）



SB581完掘状況（南から）



SB600完掘状況（南から）



SD22完掘状況（北から）



SD87完掘状況（北から）



SD22断面 (南から)



SD87断面 (北から)



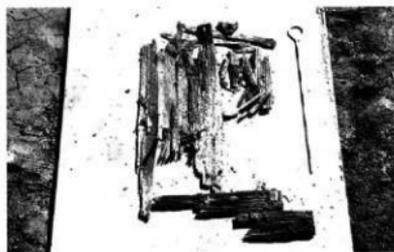
SD87甕破片出土状況 (南から)



SD87青磁碗破片出土状況 (南から)



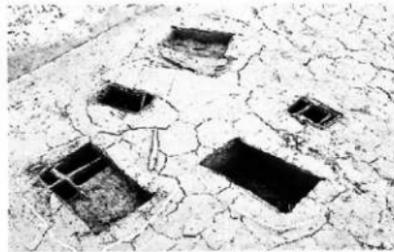
SH43・44木棺出土状況 (北から)



SH43木棺展開状況 (北から)



SH44木棺展開状況 (北から)



SH46~50木棺出土状況 (東から)



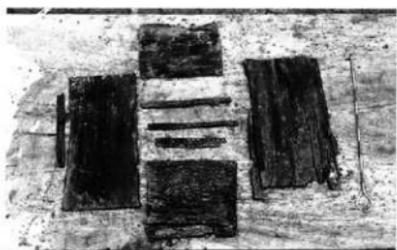
SH46木棺出土状況（北から）



SH46木棺展開状況（北から）



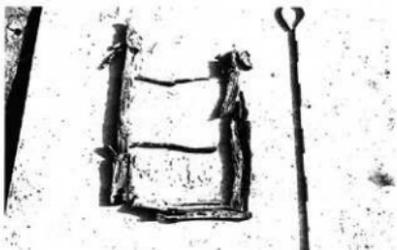
SH47木棺出土状況（東から）



SH47木棺展開状況（北から）



SH48木棺出土状況（北から）



SH48木棺展開状況（北から）



SH49木棺出土状況（東から）



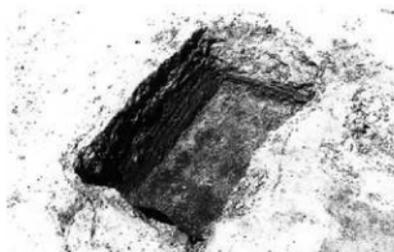
SH49木棺展開状況（北から）



SH50木棺出土状況（東から）



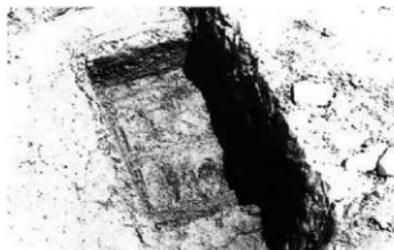
SH50木棺展開状況（北から）



SH62木棺出土状況（南から）



SH62木棺展開状況（西から）



SH68木棺出土状況（南から）



SH68木棺展開状況（西から）



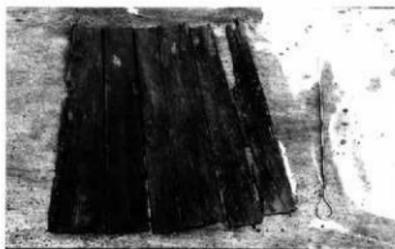
SH72木棺出土状況（東から）



SH72木棺展開状況（東から）



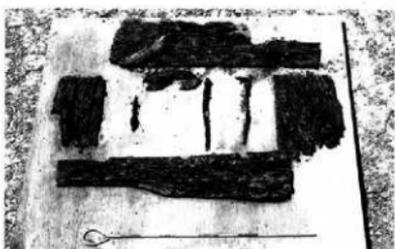
SH96木棺出土状況（北から）



SH96木棺展開状況（北から）



SH101・104木棺出土状況（南から）



SH101木棺展開状況（西から）



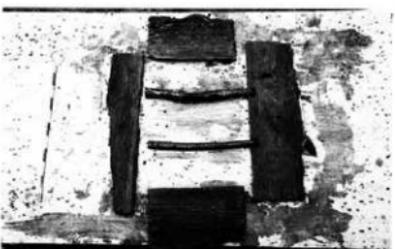
SH106木棺出土状況（南西から）



SH106木棺展開状況（南から）



SH303木棺出土状況（南から）



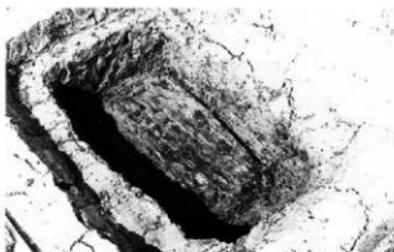
SH303木棺展開状況（南から）



SH304木棺出土状況（南から）



SH304木棺展開状況（南から）



SH310木棺出土状況（南から）



SH310木棺展開状況（南から）



SH499木棺出土状況（北から）



SH499木棺展開状況（北から）



SH683木棺出土状況（南から）



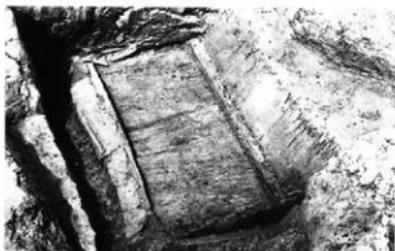
SH683木棺展開状況（南から）



SH724木棺出土状況（南から）



SH724木棺展開状況（南から）



SH725木棺出土状況（東から）



SH725木棺展開状況（東から）



SH735木棺出土状況（南から）



SH735木棺展開状況（南から）



SH738木棺出土状況（南から）



SH738木棺展開状況（南から）



SH752木棺出土状況（南から）



SH752木棺展開状況（南から）



SH757木棺出土状況（南から）



SH757木棺展開状況（北から）



SH764木棺出土状況（南から）



SH764木棺展開状況（北から）



SH768木棺出土状況（南から）



SH768木棺展開状況（北から）



SH771木棺出土状況（北から）



SH771木棺展開状況（北から）



SH774木棺出土状況（南から）



SH774木棺展開状況（南から）



SH782木棺出土状況（西から）



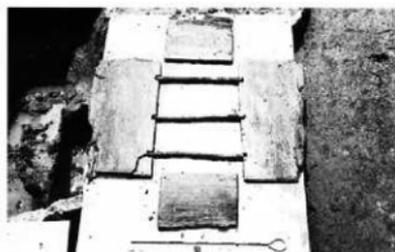
SH782木棺展開状況（南から）



SH793~795木棺出土状況（南から）



SH793木棺展開状況（南から）



SH794木棺展開状況（北から）



SH795木棺展開状況（北から）



SH802木棺出土状況（南から）



SH802木棺展開状況（南から）



SH804木棺出土状況（北から）



SH804木棺展開状況（南から）



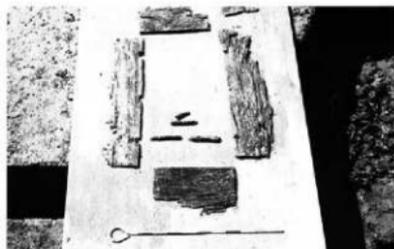
SH805木棺出土状況（南から）



SH805木棺展開状況（北から）



SH806木棺出土状況 (南から)



SH806木棺展開状況 (北から)



SH808木棺出土状況 (南から)



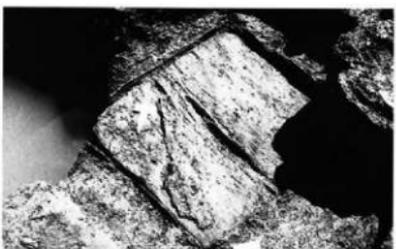
SH808木棺展開状況 (南から)



SH811木棺出土状況 (北から)



SH811木棺展開状況 (南から)



SH813木棺出土状況 (南から)



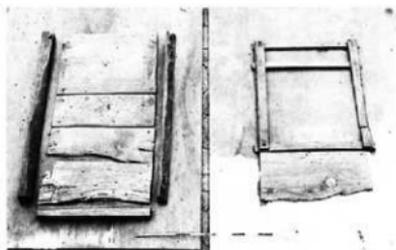
SH813木棺展開状況 (南から)



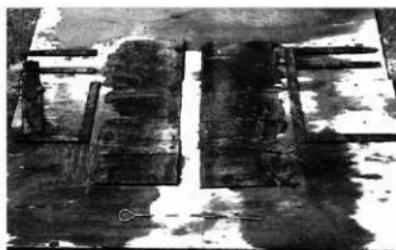
SH815木棺出土状況（南から）



SH815人骨出土状況（南から）



SH815木棺底部展開状況（南から）



SH815木棺側板展開状況（南から）



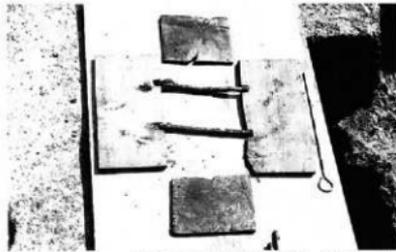
SH825木棺出土状況（南から）



SH825木棺展開状況（南から）



SH830木棺出土状況（南から）



SH830木棺展開状況（北から）



SH834木棺出土状況（南から）



SH834木棺展開状況（南から）



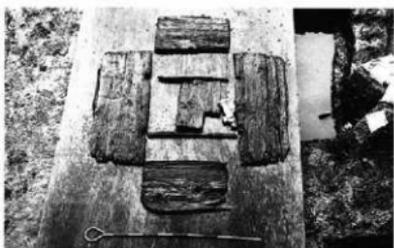
SH835木棺出土状況（南から）



SH835木棺展開状況（西から）



SH838木棺出土状況（南から）



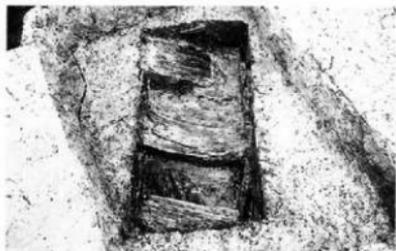
SH838木棺展開状況（北から）



SH839木棺出土状況（南から）



SH839木棺展開状況（北から）



SH842木棺出土状況（南から）



SH842木棺展開状況（北から）



SH844木棺出土状況（南から）



SH844木棺展開状況（北から）



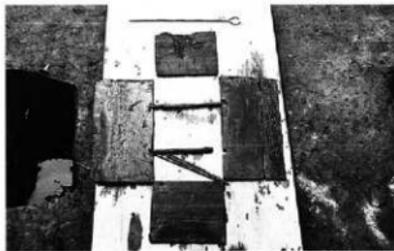
SH845木棺出土状況（南から）



SH845木棺展開状況（北から）



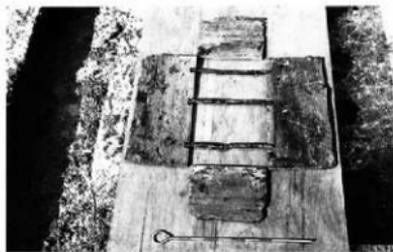
SH846木棺出土状況（南から）



SH846木棺展開状況（北から）



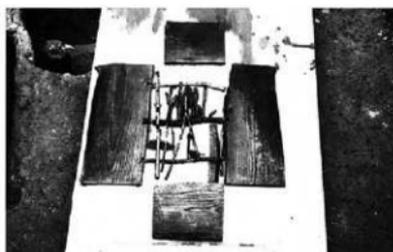
SH851木棺出土状況（南から）



SH851木棺展開状況（南から）



SH852木棺出土状況（南から）



SH852木棺展開状況（北から）



SH853木棺出土状況（南から）



SH853木棺展開状況（南から）



SH868木棺出土状況（南から）



SH868木棺展開状況（北から）



SH869木棺出土状況（南から）



SH869木棺展開状況（南から）



SH871木棺出土状況（南から）



SH871木棺展開状況（北から）



SH872木棺出土状況（南から）



SH872木棺展開状況（南から）



SH874木棺出土状況（南から）



SH874木棺展開状況（北から）



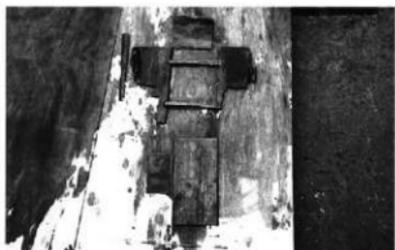
SH881木棺出土状況（北から）



SH881木棺展開状況（南から）



SH812木棺展開状況（北から）



SH837木棺展開状況（北から）



SH847木棺展開状況（北から）



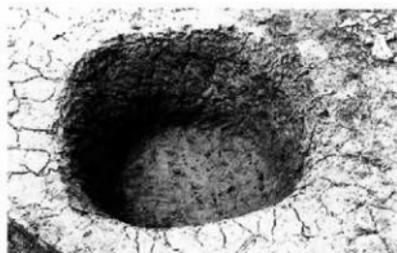
SH865木棺展開状況（南から）



SH867木棺展開状況（南から）



SH877木棺展開状況（南から）



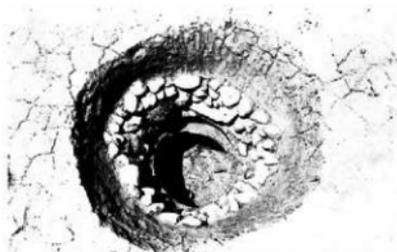
SE80完掘状況 (南から)



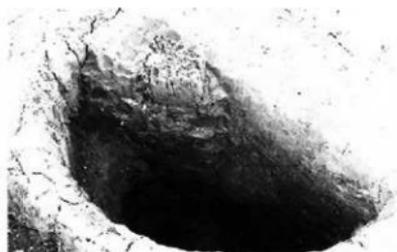
SE821断面 (西から)



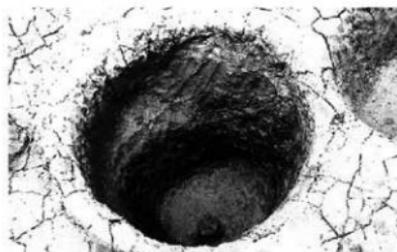
SE84断面 (南から)



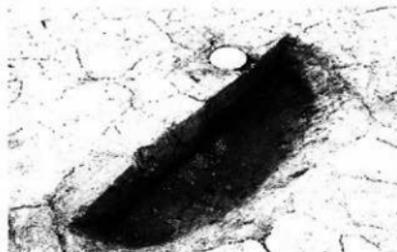
SE84完掘状況 (東から)



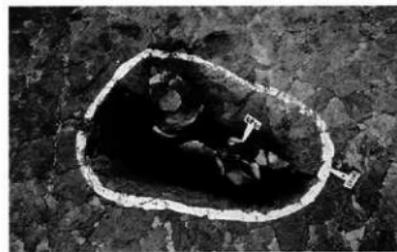
SE478断面 (南から)



SE478完掘状況 (東から)



SK673断面 (東から)



SK145断面 (東から)



1



2



3



4



6



7



8



5



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



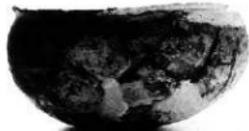
38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



59



58



62



63



65





67



68



69



70



71



73



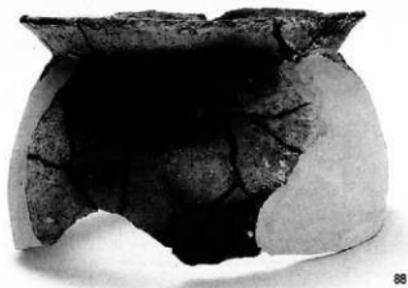
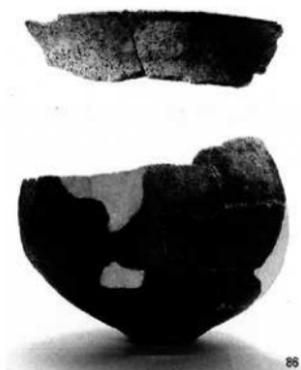
74



75









89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



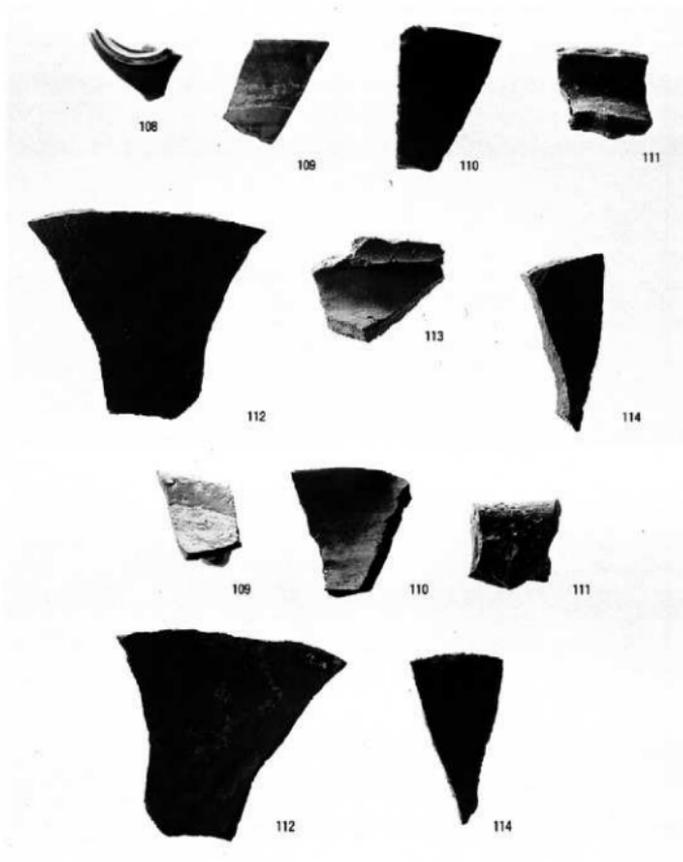
99



100

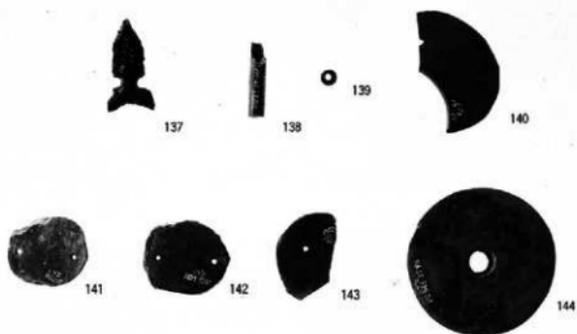
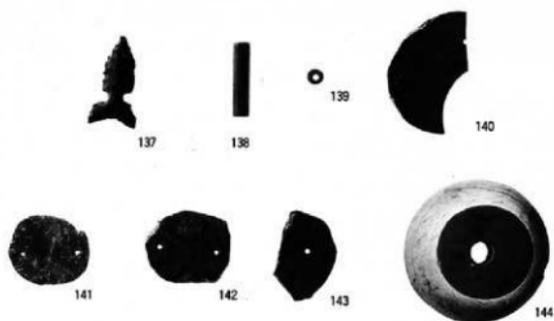






出土遺物 (14)







145



146



145



146



153



153



154



154



155



155



147



148



149



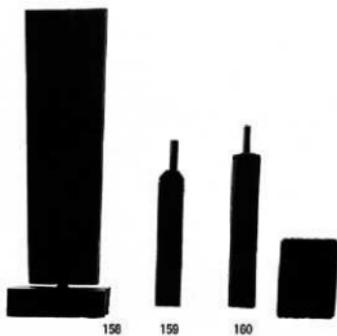
151



150



152



150

159

100



156



157



163



163



161

162



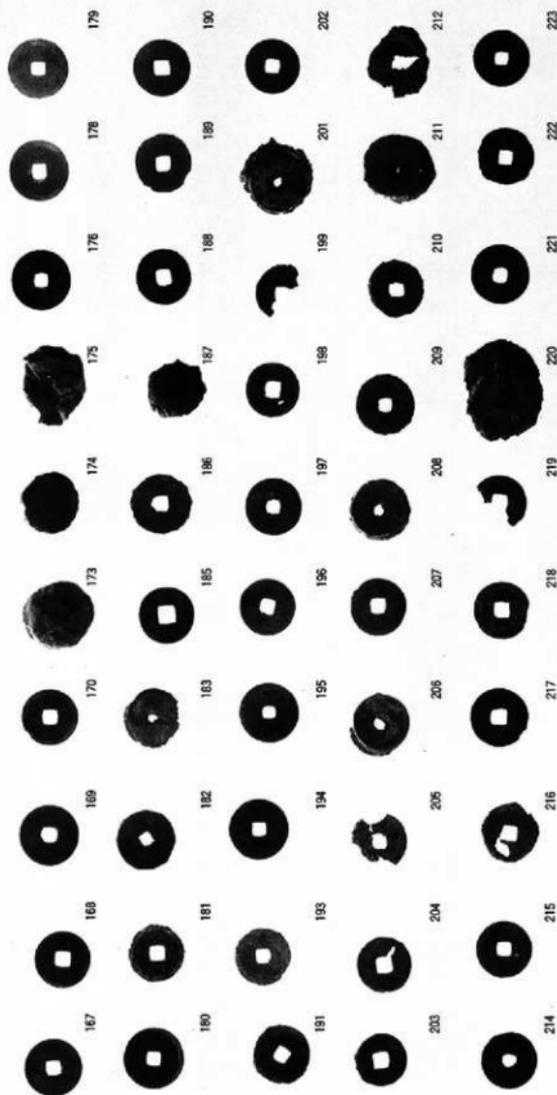
156

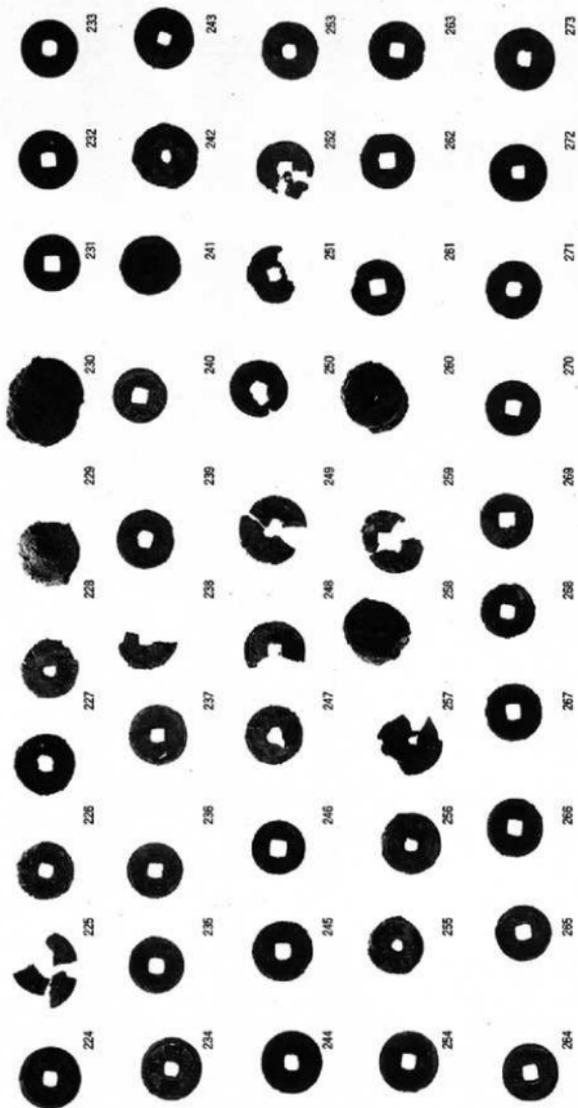


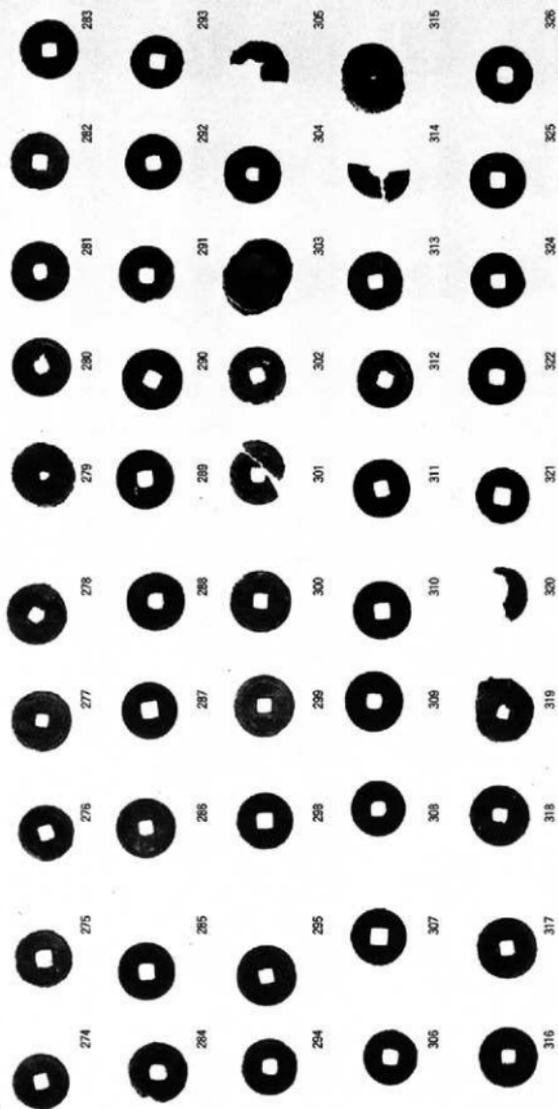
157

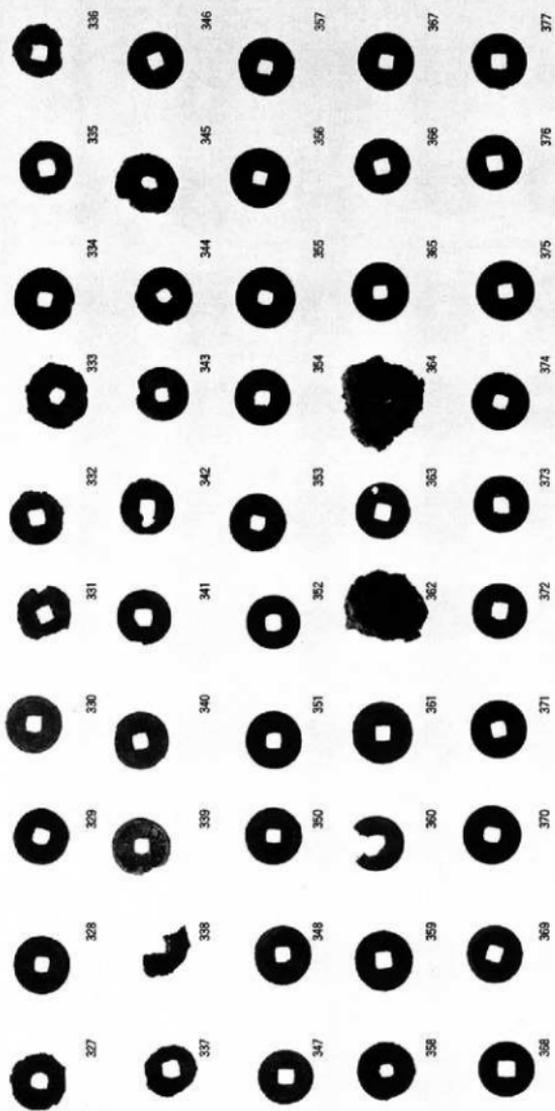


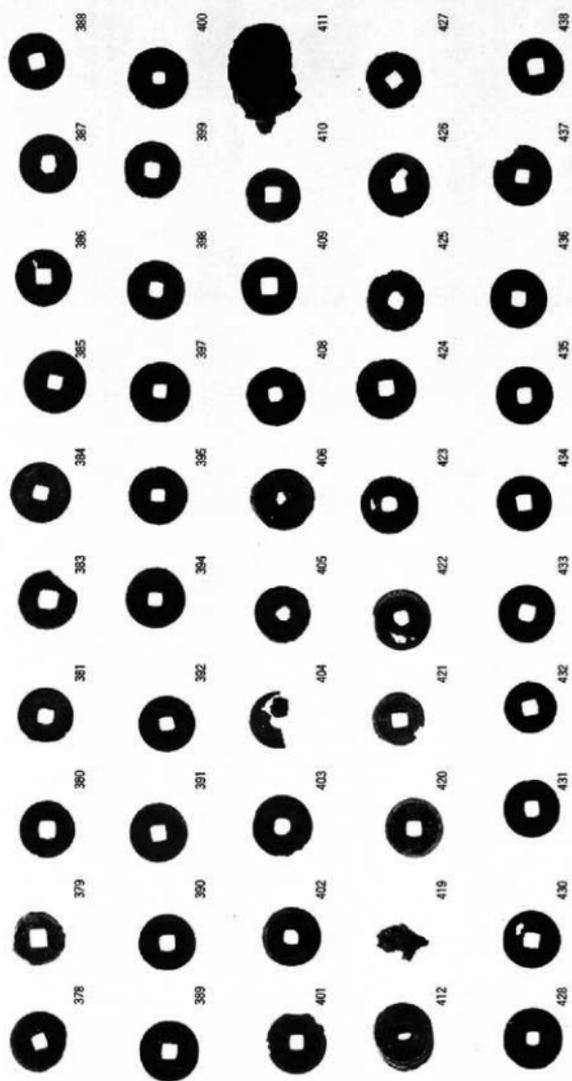
156

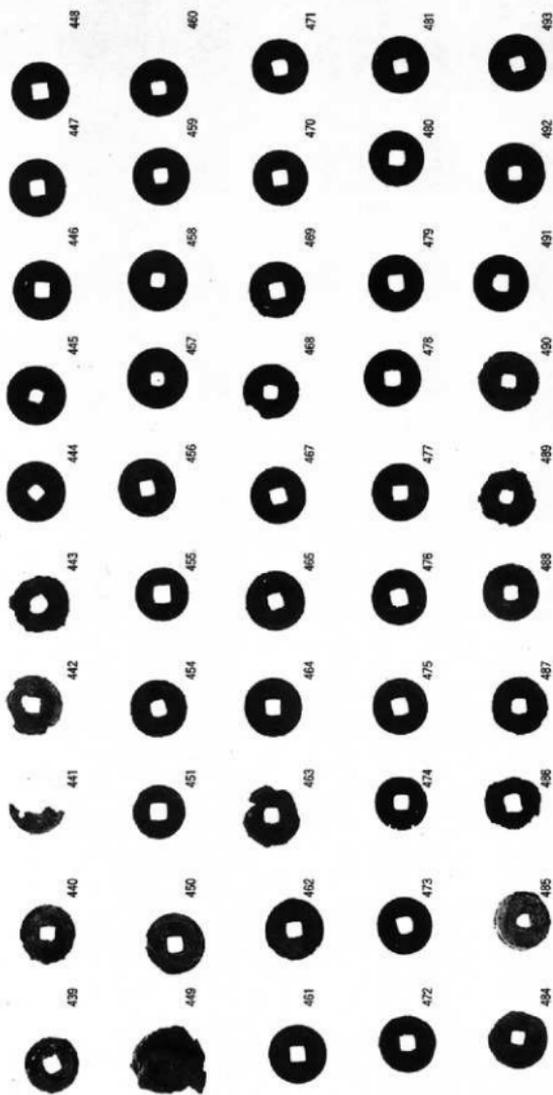


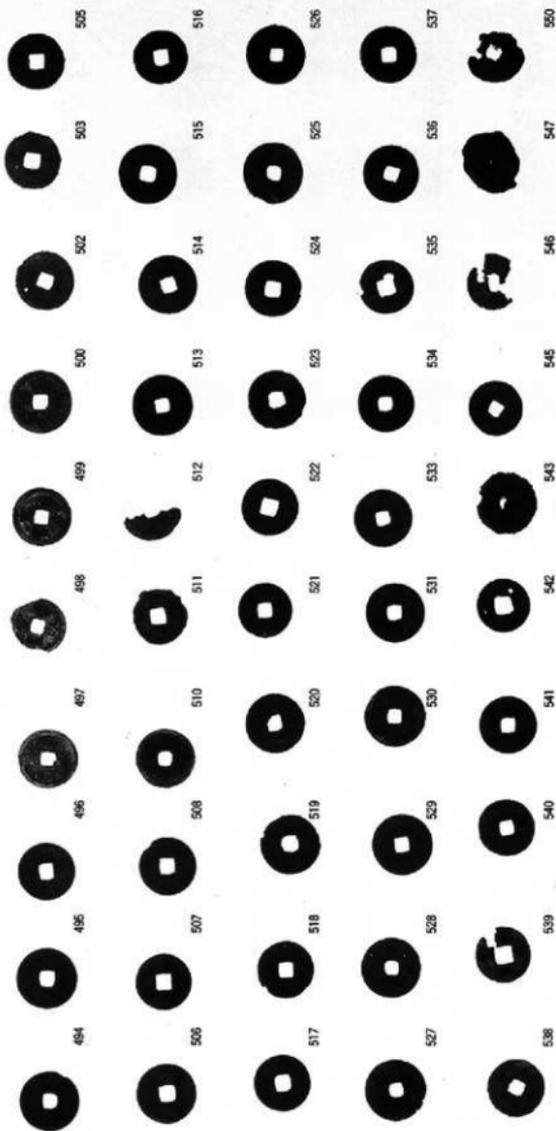


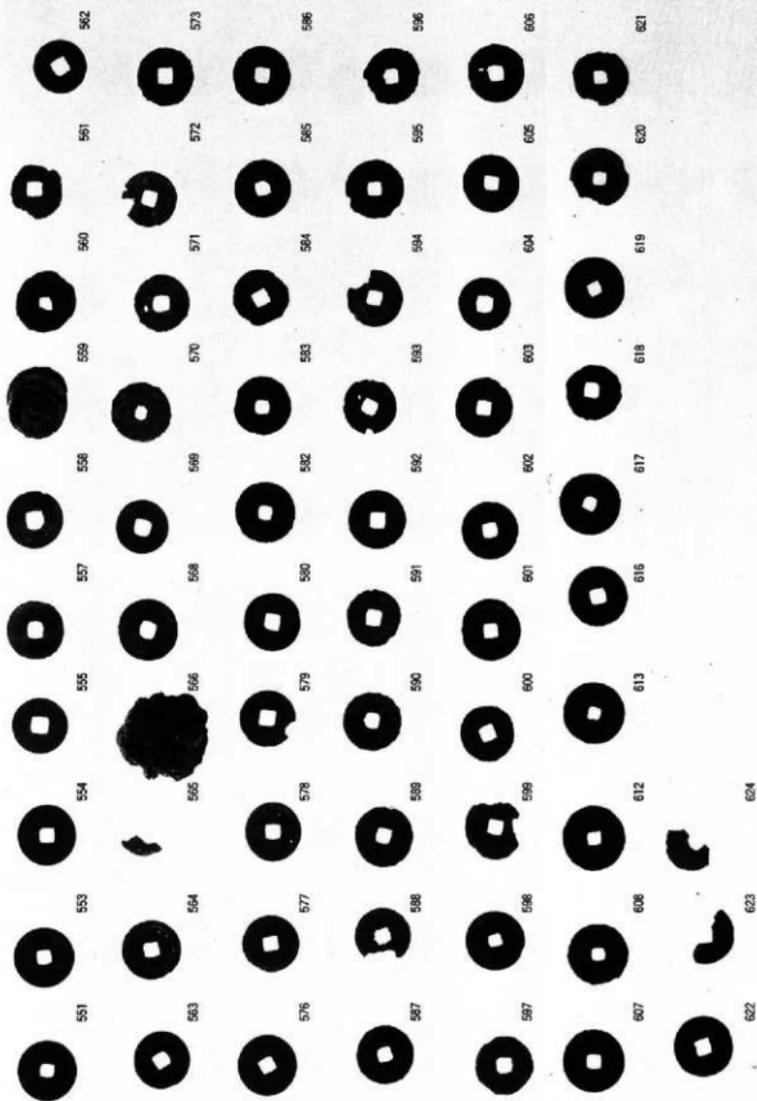


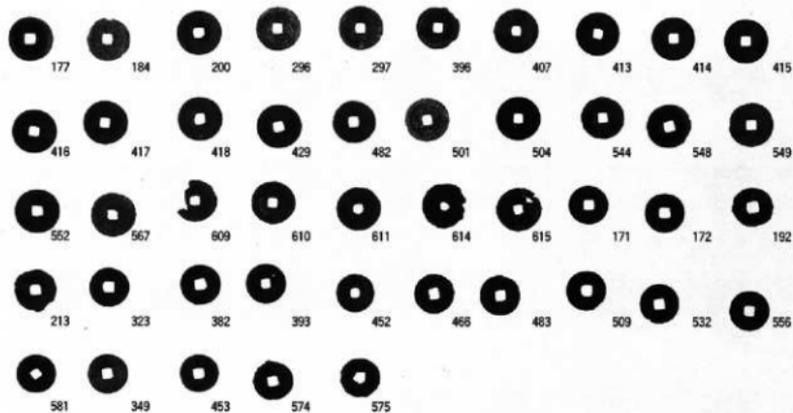
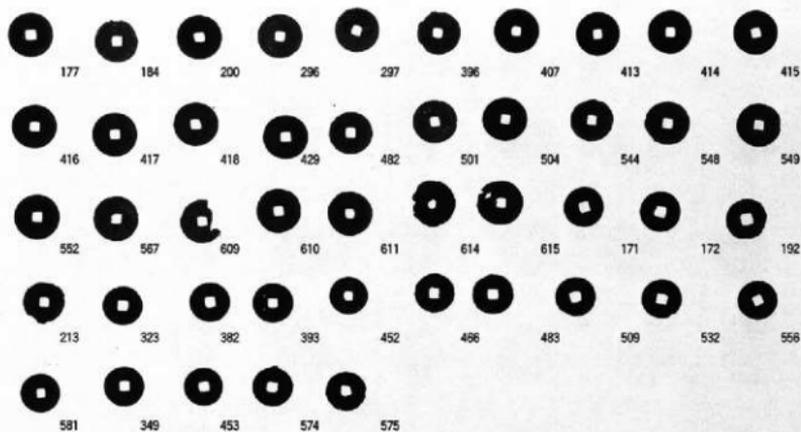












付 編

渋江遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

渋江遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡や近世の墓が検出されている。このうち、近世の墓は多くが板材を箱形に組んだものであり、板材の一部が残存していた。また、内部からは、人骨片と共に、下駄、箸、皿等の木製品を含む生活用品や、位牌などが出土している。一方、古墳時代の竪穴住居跡では、カマド内から1cm程度の骨片が出土している。

本報告では、近世の墓の部材や木製品の樹種同定を行い、用材選択を明らかにする。また、古墳時代のカマドから出土した骨の同定を行い、動物食等に関する資料を得る。

1. カマドから出土した骨片の同定

(1) 試料

試料は、古墳時代の竪穴住居跡ST385で検出された骨片1点である。

(2) 方法

筆により付着土壌を除去する。肉眼観察し、現生動物標本との比較により種と部位を同定する。

(3) 結果

同定の結果骨片はニホンジカ (*Cervus Nippon*) の末節骨近位端である。ニホンジカには幾つかの亜種があり、本州に分布するホンシュウジカは常緑広葉樹林、落葉樹林などに生息する(阿部ほか, 1994)。ホンシュウジカは体高83~86cm、体重40~80kgである(林, 1968)。

本試料は白色を呈し、火を受けている。近位端の高径は18.4mmであるが、被熱により収縮していることを考慮すれば、成獣と推測される。解体痕跡、加工痕跡は見られない。

(4) 考察

古墳時代の竪穴住居跡ST385で検出された骨片は、ニホンジカの骨であった。骨片は、被熱の痕跡が認められる。ニホンジカはイノシシと並び主要な狩猟動物であり、古墳時代においても各地で食肉や骨角製品素材として広く利用されていたことが知られる(金子, 1993)。渋江遺跡においてもニホンジカの捕獲、利用が行なわれていたことが推定される。本試料は肉の付いていない肢端の骨であり、食糧としての価値の低い部分である。調理のために焼かれたのではなく、残滓処理のため、あるいはカマドに混入して焼けた可能性がある。

2. 近世墓から出土した木材の樹種

(1) 試料

試料は、各墓(SH)から出土した、桶、木組み、下駄、位牌、漆塗箸、漆器皿16点と、遺構外から出土した下駄1点である。このうち、第844号墓から出土した位牌は、2つの部品で構成されていたため、それぞれについて樹種同定を行う。また、漆塗箸は2本1組であったため、2本について樹種の確認を行う。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木材は全て針葉樹で、4種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ）、広葉樹3種類（ヤナギ属・ブナ属・キリ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表1 樹種同定結果

遺構名・地点	遺物番号	用途	樹種
X28-Y22G	R W 2	下駄(漆塗)	ヒノキ
第82号墓(S H 92)		木組み片	マツ属複維管束亜属
第96号墓(S H 96)		楠木片	スギ
第101号墓(S H 101)		木組み片	マツ属複維管束亜属
第108号墓(S H 108)		木組み片	マツ属複維管束亜属
第304号墓(S H 304)		木組み片	スギ
第499号墓(S H 499)		木組み片	スギ
第683号墓(S H 683)		木組み片	マツ属複維管束亜属
第725号墓(S H 725)		木組み片	スギ
第749号墓(S H 749)		木片	モミ属
第764号墓(S H 764)		木組み片	マツ属複維管束亜属
	R W 317	位牌	スギ
第782号墓(S H 782)	R W 327	漆器皿	ブナ属
第806号墓(S H 806)	R W 328	漆塗箸	イネ科タケ亜科 イネ科タケ亜科
第844号墓(S H 844)		位牌	スギ
		本体 先端部	ヤナギ属
第868号墓(S H 868)	R W 397	下駄(漆塗)	キリ
		位牌	スギ

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属 (Abies) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

試料は年輪界が観察できなかった。散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在し、年輪全体にはほぼ一様に分布する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。

・ブナ属 (Fagus) ブナ科

試料は小片で保存状態が悪い。散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単

列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

- ・キリ (*Paulownia tomentosa*) ゴマノハグサ科キリ属

環孔材であるが孔圏部はやや不明瞭、孔圏外で緩やかに管径を漸減させ、単独または2～3個が放射方向に複合して存在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は翼状～連合翼状となる。

- ・イネ科タケ亜科 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

(4) 考察

同定を行った木材は、墓から出土した木組み片や木箱片などの部材と、下駄や皿などの木製品に大別される。墓から出土した木組み片、木箱片は、全て針葉樹材で、複雑管束亜属5点、スギ4点、モミ属1点であった。この結果から、スギや複雑管束亜属(ニヨウウマツ類)等の針葉樹材を主として利用していたことが推定される。

「木材ノ工藝的利用」(農商務省山林局, 1912)に記された事例によれば、葬祭具はモミが最も多く利用され、スギ、ヒノキ、マツがこれに次ぐとされる。このうち、ヒノキが最も上等品とされる。いずれも白木のまま使用し、塗料は施さない。これは、白木が清浄無垢で神聖厳肅な印象を与えるからと考えられている。

江戸時代の葬祭具のうち、棺材については、ヒノキとモミが高級品で、普通はスギとマツが多かったらしいとの指摘がある(満久, 1983)。実際に、東京都台東区東区東叡山寛永寺護国院の調査では、棺の蓋にスギ3点とヒノキ属1点が確認されている(橋本・辻本, 1990)。これらの例は、「木材の工藝的利用」に記されている事例ともほぼ一致しており、同様の用材選択が行われていたことがうかがえる。今回の結果は、棺材に利用される種類と一致しており、同様の用材選択が指摘できる。また、複雑管束亜属やスギが多いことから、最も一般的な種類を利用していたことが推定される。モミ属については、他の試料よりも高級品とされることから、SH749の埋葬者の地位や金銭的な状況等が他の埋葬者とは異なっていた可能性がある。しかし、現時点では詳細は不明であり、今後副葬品等との比較も含めた検討が必要である。

木製品は、下駄、位牌、箸、皿がある。下駄は、グリッドから出土したものと、墓内から出土したものが各1点ある。いずれも小型の下駄であり、子供用と考えられている。樹脂は、RW2がヒノキ、RW397がキリであった。このうち、RW2は台表が板目になる木取りであった。いずれも小型の連歯下駄であるが、形状が異なる。市田(1992)による近世の下駄の形態分類と比較すると、RW2はI-1-A類、RW397はI-5-B類に相当する。

I-1-A類は、東京都の江戸遺跡などでも多数出土している。これらの下駄の樹種同定結果では、多くの種類が認められている。このうち、飯田町遺跡では、高松藩上屋敷の時代にヒノキの下駄が多い傾向があることが指摘されている(高橋, 1995)。様々な民俗事例では、ヒノキの木材は高価であったことがうかがえることから、使用者は相応の生活水準を備えていたことが推定される。今回のRW2についても、使用者の生活水準が比較的高かった可能性がある。一方、I-5-B類は、一般に小町と呼ばれる女性用の下駄であり、使用され

ているキリは民俗事例では下駄の材として最上の樹種とされる(農商務省山林局, 1912)。このことから第868号墓には、比較的生活水準が高かった女子が埋葬された可能性がある。

下駄については、江戸の近世遺跡を中心に各地で多くの樹種同定が行われている。それらの結果をみると、針葉樹・広葉樹が混在し、種類数も多い(能城・高橋, 1996)。これまでの調査から、階級、性別、年齢、使用目的、地域差などにより樹種が異なっている可能性が指摘されている(田中, 1990; 高橋, 1995) また、民俗事例では、天候に応じて差歯下駄の歯の用材選択が異なっていた例がある(農商務省山林局, 1912)。このような様々な事情により、用材選択が異なっていた可能性があるが、今後の資料蓄積が課題である。

近世の下駄にキリが認められた例は東京都の細工町遺跡、溜池遺跡、千駄ヶ谷五丁目遺跡で比較的多く出土した例がある(能城, 1992; 松葉, 1997; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997)。しかし、江戸遺跡における下駄の調査例全体のなかでは、キリが認められた例は少ない。その他にはいわき市戸田条里遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991)と、香川県東山崎・木田遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992)で各1点出土している程度で、出土例は少ない。安永年間(1772~1781年)の文献史料には、「下駄は桐のまさがよし」との記述があり(市田, 1992)、利用されていたことは明らかである。出土例が少ない背景には、江戸の木製品の調査の多くは廃棄されたものを対象としていること、キリの下駄が高価な品物であるために日常的に利用することがなく、廃棄の機会も少なかったこと等が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997)。今回の下駄も、副葬という日常とは異なった特殊な状況により残存している。キリの下駄の使用状況については、今後さらに多くの資料を蓄積していく必要がある。

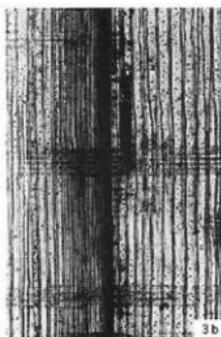
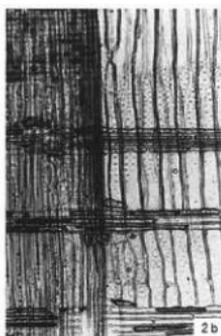
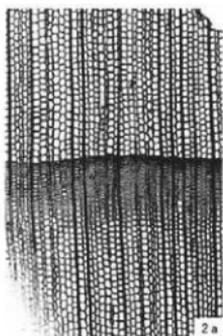
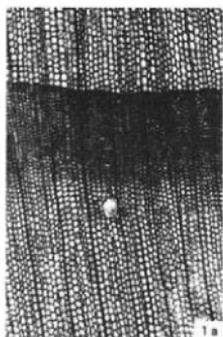
位牌は、第764号墓、第844号墓、第868号墓から出土した合計3点がある。このうち、第764号墓の位牌のみ形状が異なるが、同じ墓域から出土していることから、時期差に起因すると考えられている。これらの位牌の本体は、いずれも針葉樹のスギであり、共通の用材選択が行われていたことが推定される。スギの利用は、木組み等の葬送具の用材選択と一致しており、選択的な利用が考えられる。また、第844号墓と第868号墓の位牌は、本体の上部に円柱状の部品(先端部)が付けられている。このうち第844号墓の先端部は、広葉樹のヤナギ属であった。柳が神聖な植物として利用されていたことを示す記録(和歌・古事記等)があること(井口, 1990; 柳下, 1995)を考慮すると、意図的に利用された可能性がある。しかし、第868号墓の先端部の樹種同定を行っていないため、ヤナギ属の利用が一般的であったのかは不明である。

漆塗箸は2本で1組であり、いずれもタケ亜科であった。これは、民俗事例で塗箸に竹類を利用すること(農商務省山林局, 1912)と一致しており、江戸時代から同様の用材選択が続いていたことがうかがえる。一方、漆器皿は広葉樹のブナ属であった。ブナ属は、漆器の木材としてよく利用される種類であり、遺跡からの出土例も多い(能城・高橋, 1996)。民俗事例では、トチノキなどと共に、利用量の多い種類の一つとされる(橋本, 1979)。このような漆器木材は、木地屋により伐採と加工が行われていたことが指摘されている(中川, 1985)。本地域の山地にブナ属が多く生育していること(宮脇, 1987)を考慮すると、遺跡周辺の山林で活動していた木地屋により伐採と加工が行われた皿が本地域にもたらされた可能性がある。

引用文献

- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四郎・三浦慎吾・米田政明 (1994) 日本の哺乳類, 195 p., 東大学出版会.
- 橋本真紀夫・辻本崇夫 (1990) テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎土分析. 「東叡山寛永寺護国院 I 都立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書」, p. 349-368, 都立学校遺跡調査会.
- 橋本鉄男 (1979) ものと人間の文化史31 ろくろ, 444p., 法政大学出版局.
- 林 壽郎 (1968) 標準原色図鑑全集20 動物Ⅱ, 228p., 保育社
- 市田京子 (1992) 江戸時代の下駄. 江戸遺跡研究会第5回大会 考古学と江戸文化 発表要旨, p. 237-255.
- 井口樹生 (1990) 古典の中の植物誌, 261p., 三省堂.
- 金子浩昌 (1993) 動物遺体. 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太郎編「古墳時代の研究 1 総論・研究史」, p. 113-123, 雄山閣.
- 松葉礼子 (1997) 溜池遺跡出土木製品の樹種同定. 「一地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書 7-2-溜池遺跡 第Ⅱ分冊」, p. 1-30, 帝都高速度交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会.
- 満久崇麿 (1983) 木のはなし, 238p., 思文閣.
- 宮脇昭編 (1987) 日本植生誌 東北, 605p., 至文堂.
- 中川重年 (1985) 木地屋の世界 その移動と森林の変化. 「フナ帯文化」, p. 165-184, 思泉社.
- 能城修一 (1992) 新宿区細工町遺跡から出土した木製品の樹種. 「東京都新宿区 細工町遺跡 - (仮称) 新宿区立細工町高齢者住宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書 -」, p. 174-187, 新宿区厚生部遺跡調査会.
- 能城修一・高橋 敦 (1996) 中・近世における木材利用. 第11回植生史学会大会シンポジウム 中世・近世の植生史 発表要旨, p. 7-11.
- 農商務省山林局編 (1912) 木材ノ工藝的利用, 1308p., 大日本山林會.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 自然科学分析. いわき市埋蔵文化財調査報告第29冊「戸田条里遺跡 -水田跡の調査-」, p. 177-190, 福島県いわき市農地事務所・福島県いわき市教育委員・財団法人いわき市教育文化事業団.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 木製品の樹種. 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡 第1分冊」, p. 358-368, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1997) 木製品の用材と製作技法. 「東京都渋谷区 千駄ヶ谷五丁目遺跡新宿新南口RCビル (高島屋タイムズスクエアほか) の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書 - 本文編 (第1分冊)」, p. 326-366, 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会.
- 高橋 敦 (1995) 木製品の樹種について. 「飯田町遺跡」, p. 419-420, 飯田町遺跡調査会.
- 田中真貴 (1990) 木製品. 「白鷗2」, p. 134-144, 都立学校遺跡調査会.
- 柳下貞一 (1995) 柳の文化誌, 249p., 淡交社.

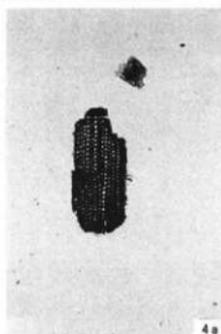
図版1 木材



1. マツ属様維管束近属 (SH764)
 2. モミ属 (SH749)
 3. スギ (SH490)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版2 木材(2)



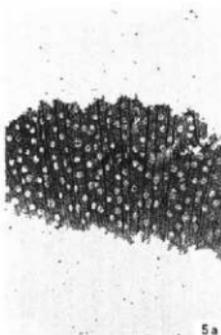
4a



4b



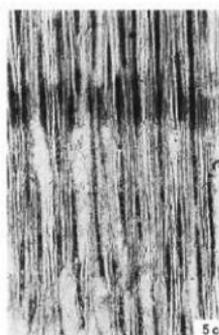
4c



5a



5b



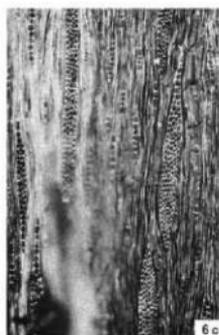
5c



6a



6b

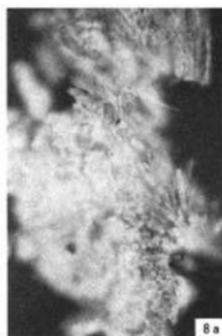
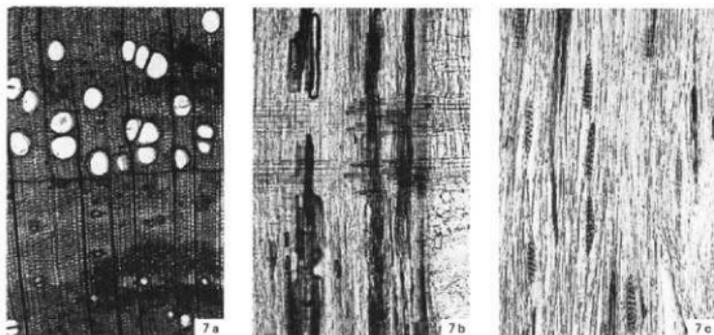


6c

4. ヒノキ (RW2)
 5. キナギ属 (SH944 位牌)
 6. ブナ属 (SH782 RW327)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版3 木材(3)



200 μ m : a
200 μ m : b, c

7. キリ (SH868 RW397) a: 木口, b: 径目, c: 板目
8. イネ科クダシ科 (SH806 RW328) a: 横断面, b: 放射断面

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集

渋江^{しほえ}遺跡第4次発掘調査報告書

2002年3月25日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上市市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301

印刷 アベ印刷株式会社
